

はしがき

本研究は、今日における小学生・中学生・高校生のコミュニケーションに関する意識・能力の実態とその問題点とを明らかにすることを目的としている。そのためには、現場教師および大学院生の協力を得て、小学生・中学生・高校生を対象とする調査の観点について検討し、以下のような観点からアンケート調査問題を作成し、実施した。

- ア、自分の聞く・話す活動に関する意識、および人間関係。
- イ、授業中の発言に関する意識。および聞く話す能力に関する意識。
- ウ、授業以外での友達との相互関係・相互交流に関する実態と意識。

得られたデーターについては現場教師および大学院生の協力を得て分析・検討し、その結果を本報告書にまとめた。小学生・中学生・高校生のコミュニケーションに関する研究は今後もさまざまな観点からなされるべきであり、本研究はその基礎研究として位置づけられるものである。

本研究は平成11年度～平成12年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)（課題番号 11680281）として実施したものである。これだけの調査・研究は助成を受けることなしではまとめることが出来なかつたであろう。助成について心から感謝したい。また、本研究は多くの方の協力によつたものであり、その方々に感謝し、その方々の今後の教育活動にも役立つ報告であることを願つてゐる。

平成13年3月

研究代表者

田 近 淳一（早稲田大学教育学部教授）

研究組織

1 . 研究代表者 田近 淳一 早稲田大学教育学部教授

2 . 研究協力者 (50音順 所属は研究協力時のもの)

浅見 優子	千代田区立お茶の水小学校教諭
石毛 慎一	県立神奈川工業高等学校教諭
今井 亮仁	早稲田大学大学院生
岩崎 淳	学習院中等科教諭
牛山 恵	都留文科大学教授
内田 剛	早稲田実業学校講師
大屋敷 全	学習院中等科教諭
小原 俊	本郷学園講師・学習院高等科教諭
北林 敬	都立久留米高等学校教諭
喜多見 真弓	中央区日本橋中学校教諭
工藤 哲夫	東京学芸大学附属大泉中学校教諭
黒川 孝広	吉祥女子中学・高等学校教諭
小林 塑青	早稲田大学大学院生
坂口 京子	荒川区立第四中学校教諭
高山 実佐	都立足立工業高校教諭
前田 健太郎	早稲田実業学校講師・都立目黒高校講師
渡辺 通子	茨城県立多賀高等学校教諭

共同討議者

桑原 利夫	千代田区立お茶の水小学校 校長
高木 二三子	江戸川区立鹿本小学校 校長
中村 龍一	習志野市立第七中学校 教頭

(その他多くのアンケート協力者による)

3 . 研究経費

平成11年度 1,700千円

平成12年度 1,300千円

計 3,000千円

4 . 研究発表

口頭発表 (田近淳一、「小学生・中学生・高校生のコミュニケーション意識の実態」、全国大学国語教育学会、平成13年5月13日)

5 . 英文研究課題名

The investigation of the actual condition of school child's, junior high school student's and high school student's communication ability, and develop the new method of class to make it train communication ability.

(Grant-in-Aid for Scientific Research (C)(2), 1999-2000, Project Number 11680281)

目 次

はしがき	1
研究組織	2
児童・生徒のコミュニケーション意識	5
1 研究の目的	6
児童・生徒のコミュニケーション意識と言語活動	
アンケート調査結果に対する総合的分析	9
1 好き嫌い意識を軸として捉えたコミュニケーション意識の実態 ...	10
2 孤独感を軸として捉えたコミュニケーション意識の実態	14
小学生・中学生・高校生のコミュニケーション実態の分析と 教育実践への提言	19
1 話すことに関する自己意識	20
2 話す相手に関する意識 - 話すことをどう思っているか -	29
3 相互理解に関する意識 - わかりあえる人はいるか -	38
4 教師の指名に関する意識 - 指名されてどう思ったか -	48
5 授業中の発言に関する意識 - 発言することについてどう思うか -	57
6 表現能力に関する自己意識 - 具体的にどんなことができるか -	65
7 コミュニケーションの手段 - 何を使ってコミュニケーションをとっているか -	74
8 抵抗感のある内容に関する伝達意識 - 親しい友達に注意をすることができるか -	82
9 抵抗感のある内容に関する受容意識 - 友達の意見を受け止めることができるか -	89
10 コミュニケーション不成立に関する意識 - 「わかつてもらえない」ということをどう意識しているか -	98
11 相談への応対に関する意識 - 友達の相談にうまく応じることができると思っているか -	110
12 コミュニケーションのあり方に関する意識 - どのように話したり聞いたりしたいか -	121
調査資料	131
1 質問用紙	132
2 学年・男女別集計表(人数)	136
3 学年・男女別集計表(%)	144

児童・生徒のコミュニケーション意識

1 研究の目的

研究代表者 田近 淳一

今日、小学生・中学生・高校生（以下「子ども」とよぶ）のさまざまな問題行動が、社会的な問題ともなり、教育界でも、学校を初め多くの研究機関や団体がその問題と真剣に取り組んできている。しかし、いじめや不登校などの問題を、単に現象面でとらえて対症療法的に対応していただけでは、問題の本質的な解決にはならないであろう。多様な人間関係の中で、人に依存することなく自分の責任において思考し判断する「自立」の能力と、自分とは価値観やコンテクストの違う異質な他者を受容し相互に理解し合い啓発し合う「共生」の能力とが、十分に育ってきていないのである。今日必要なことは、社会状況との関わりの中で変質・変容してきた子どもの生活、あるいは対人関係や対人意識の実態を正確に把握し、その上で改めて「自立と共生」の教育のあり方を見極めていくことではないだろうか。特に現代の子どもの人間関係に関する問題については、ことばにかかる問題としてコミュニケーションの側面から検討していく必要がある。人間関係のひずみの問題は、コミュニケーションの問題だからである。また、今日、子どもの授業への参加がきわめて低調になってきていると言われるが、これも学級・学校という場（状況）におけるコミュニケーションの問題である。そのことは既に指摘されていることなのであるが、しかし、コミュニケーションに関する意識・能力の変質・変容についての検討は、未だ十分とは言えないのが実状である。

本研究は、ア、今日の子どものコミュニケーション活動の実態を、意識と能力の面からとらえて、その問題点を明らかにするとともに、イ、この問題と取り組んですぐれた成果をあげている現場の教師などの実践を掘り起こし、ウ、それらをふまえて、「自立と共生」の行為としてのコミュニケーションを回復するための糸口を、具体的な国語の授業のあり方の上に見出そうとすることを当初の目標とした。子どもの生活にコミュニケーションを取り戻すことは、それ自体、個として自立しつつ多様な人間関係を生きる能力を育成する鍵であって、それは、子どもの問題行動を克服することにもつながるであろう。

今日の子どもの問題は、彼らの人と人とのかかわりの問題、つまりはコミュニケーションの問題としてとらえるべきことについては、ようやく注目されるようになってきた。しかし、コミュニケーションの意識と能力に関する言語生活の問題としての検討は十分ではない。本研究は、この点に注目し、コミュニケーション活動を中心に、子どもの言語生活の実態をとらえ、どこに問題があるのかを明らかにすることを第一の目標とする。もしその点が明らかになつたら、特に小学生から高校生までの子どものコミュニケーション意識の変質・変容の調査としては画期的なものになるであろうし、それは小学校・中学校・高等学段の教育に資するところも大きいであろう。この調査は書面による無記名アンケートを実施し、東京近郊の小・中・高校の協力により5566件の回答を得ることができた。この結果を次の観点から分析した。

話すことに関する自己意識

- 話すことをどう思っているか -

話す相手に関する意識

- 話すことをどう思っているか -

相互理解に関する意識

- わかりあえる人はいるか -

教師の指名に関する意識

- 指名されてどう思ったか -

授業中の発言に関する意識

- 発言することについてどう思うか -
- 表現能力に関する自己意識
- 具体的にどんなことができるか -
- コミュニケーションの手段

抵抗感のある内容に関する伝達意識

- 親しい友だちに注意をすることができますか -
- 抵抗感のある内容に関する受容意識

- 友だちの意見を受け止めることができますか -

コミュニケーション不成立に関する意識

- 「わかつてもらえない」ということをどう意識しているか -
- 相談への応対に関する意識
- 友だちの相談にうまく応じることができますか -
- コミュニケーションのあり方に関する意識
- どのように話したり聞いたりしたいか -

これらの分析は で研究報告する。

また、本研究は、子どものコミュニケーションを活性化したすぐれた実践事例を集め、その分析によって、学級の人間固体の中で個の生きる授業はいかにして可能かを明らかにすることを第二の目標とした。授業における子どもの学習活動をコミュニケーションの視点からとらえる立場と方法とを確立することは、全数科における授業改革を一步進めることにつながるであるからである。

最後に、以上の調査・分析を基礎に、子どものコミュニケーションに関する意識と能力とを育む授業のモデルについて考察し、提案していくことを目標とした。

本研究はこれらの目標の第一段階である。

子どもを対象としてコミュニケーション調査を実施し、それをカリキュラムの開発に結びつけた研究として、国立教育研究所の「国際化の進展に対応したコミュニケーション能力の育成を目指す、カリキュラムの開発研究」(1993 - 1996)がある。この調査研究は、これまで各方面でなされてきたものの中でも、その規模の上で、また調査内容の上で群を抜く成果だと思われる。また、同類の研究としては、早稲田大学総合教育研究所の「表現学習指導の研究」(1997 - 1998)がある。

本研究は、それらの先行研究をふまえ、さらに状況論を視野に入れて、子どものコミュニケーションの実態をとらえ、そこに見られる子どもの疎外要因を明らかにして、教育に何ができるか、また何をするべきかを明らかにしようとするものである。特に、多様な人間関係の中でのひとり立ち(自立)とかかわり合い(共生)の能力を育成する具体的な手立てを、国語科の授業実践のあり方として見出していきたい。それは今日の子どもの問題状況と関わりつつ、コミュニケーションの視点から授業改善の課題に応える研究として重要な研究だと考えている。

児童・生徒のコミュニケーション意識と言語活動

——アンケート調査結果に対する総合的分析——

1 好き嫌い意識を軸として捉えたコミュニケーション意識の実態

分析担当 黒川 孝広

1. 調査の意図

子どものコミュニケーションの意識を好き嫌い意識を軸として総体的に捉えることにした。そのため、本研究が行ったアンケートでは「が話すことに関してどのような自己意識を持っているかを探るために、「2 同じクラスの人たちと話すことについてどう思いますか。」の質問的回答を軸にして検討した。なお、同質問についての詳細な分析は本報告の浅見優子氏があるので参照されたい。

2 同じクラスの人たちと話すことについてどう思いますか。		
ア 好き	3302	59.3%
イ まあまあ好き	1584	28.5%
ウ あまり好きではない	225	4.0%
エ 嫌い	71	1.3%
オ どちらとも言えない	358	6.4%

この「好き／まあまあ好き」と「あまり好きでない／嫌い」とに分けてそれぞれ「好き」「嫌い」グループとした。（以下グループを指す場合は「好き」「嫌い」とし、一般的な意味の好き嫌いは「」ではない表記と分ける）

「好き」	「嫌い」
87.8%	5.3%

特にこの「嫌い」グループを取り上げることにした。5.3%という数は、40人学級で2人となる。1970年代後半に全国の学校では校内暴力が問題となり、各学校では「5%の攻防」ということが言われていた。この5%はクラスに1人問題行動を起こす子どもがいても、担任が対応できる数である。しかし、5%を超えると問題行動を起こす子どもが2人以上いることになり、その対応に関わる教員が不足し、学校全体の問題となるという意味である。それゆえこの5.3%という数は軽視できない。ただし嫌いである理由についてはそのクラスの固有の問題などさまざまな要因があるので、厳密な数値として扱うことはできない。しかしそこから傾向と問題を読みとることはできると判断した。

2. 調査

「好き」「嫌い」グループについて以下の関係から意識の実態と原因を探ることにした。

話す・聞くの能力との関係

話す・聞く能力については、「2 同じクラスの人たちと話すことについてどう思いますか。」の「(b)」と、「7 あなたができるものに をつけてください。」から伺うことができる。

まず「同じクラスの人たちと話すことについてどう思いますか。」では、次のように得意、不得意の意識と相関関係があることがわかった。得意・不得意によって好き・嫌いの意識ができるのか、好き・嫌いの意識が得意・不得意を生じさせるかは不明であるが、少なくとも得意・不得意、好き・嫌いのどちらかが原因となっているのは明白であり、どちらかを改善することが話すことの問題を解決できることにつながると考えられる。

2 (b)得意・不得意

	「好き」	「嫌い」
得意	75.7%	21.7%
不得意	15.3%	64.8%

その解決のヒントとして「嫌い」の子どもが嫌いである理由、または不得意である理由について見ると、「めんどう」というコミュニケーションに消極的な姿勢が多い。嫌いであることは、コミュニケーションに消極的な姿勢になりやすいという相関がみられるのである。その一方で「自分の考えていることをわかってもらえないから」の22.7%は注目してよかろう。それは、「嫌い」でありながらもわかつてもらいたいという他者とのコミュニケーションを望む意識が根底にあることになるのである。「好き」と「嫌い」の全体の比率が極端に違うのは、この項目が嫌いと不得意の意識がある場合に回答するため、「好き」はほとんどあてはまらないからである。

2.1 どうしてか。（複数回答可）

	「好き」	「嫌い」
ア 自分の考えていることをわかつてもらえないから	4.6%	22.7%
イ 相手が何を言っているのかよくわからないから	2.5%	16.9%
ウ 話をすることがめんどうだから	2.9%	43.4%
エ 自分の考えや気持ちを伝えられないから	7.2%	27.5%
オ その他	7.7%	31.2%

「嫌い」で、この回答の「その他」の記述の多くは相手に原因があるとする子どもが多い。ここに、他者との人間関係によってコミュニケーション意欲が減退したと考えられる要因がある。その中でも顕著なものが、次の記述である。

- ・いじめられるから
- ・クラスに仲の良い友達が少ないから
- ・バカとかすぐいってくるから
- ・気が合わない
- ・自分が本当に思っているようなことを話せるような友達がないから
- ・自分のことを気にかけてくれない。私なんかいてもいなくても変わらない。
- ・自分の素直な理由や意見を言うと自己中心的だと言われるから

次に「あなたができるもの」では、すべてにおいて「好き」のグループよりも「嫌い」のグループ方が意識が低いが、むしろ、この数値の比較よりも、「嫌い」のグループの意識があまり低くないと見る方が正しいであろう。そうであるならば、「嫌い」のグループの意識は能力の不足から来る嫌いというよりも、他の原因によるものが多いということになる。もし、能力が原因であれば、以下の項目については半分以下の数値となるのが妥当だからである。よって、自分の能力ではなく、他者との関係において嫌いになることが形成されたと考えてよい。

7 できるもの

	「好き」	「嫌い」
ア 声を出す	81.7%	67.5%
イ 考えを話す	53.9%	35.9%
ウ 報告する	54.3%	46.8%
エ 発表する	43.1%	31.2%
オ 話をよく聞く	73.4%	52.9%
カ 考えを深める	57.9%	31.9%
キ 他人に伝える	66.1%	48.5%
ク 司会をする	33.1%	21.4%

以上の点から、嫌いである理由には能力よりも、人間関係による影響が大きいことが明らかになった。もちろん能力として話題提供などは好き嫌いに影響すると思われるが、その話題提供も相手を想定して考えるのであり、相手を想定する以上は人間関係の問題なのである。

他者から理解されていない意識

授業中、発言したくなった時に発言したかどうかという体験から、その行動と嫌いである意識と

の相関を見ることにした。「嫌い」のグループで発言しないと回答したのは78.9%であり、その理由として多いのが「クラスの人からいろいろ言われるのがいやだから」「間違えたくない」からである。「好き」のグループに比べ「嫌い」のグループは他者とのコミュニケーションについて敏感になっている。他者がどのように自分を見ているのか、自分は理解されているかのを敏感に受け取っていると考えられるのである。

授業中発言したくても発言しなかった理由

	「好き」	「嫌い」
ア みんなの前で話すのは緊張するから	36.7%	32.8%
イ あまり目立ちたくないから	29.0%	38.8%
ウ みんなの前で間違えたくないから	39.8%	43.1%
エ クラスの人からいろいろと言われるのがいやだから	25.0%	50.0%
オ クラスの人と意見が違うから	24.0%	26.7%
カ めんどうだから	27.3%	37.1%
キ その他	12.5%	17.2%

それゆえ、理解されなかった経験というものが、このような意識を形成したと仮説を持つことができる。「11 自分の話をわかってもらえないと思ったことはありますか。」と質問した所、「嫌い」の方が若干疎外感をもっている。

11 自分の話をわかってもらえないと思ったことはありますか。

	「好き」	「嫌い」
ア はい	73.8%	82.4%
イ いいえ	25.1%	14.9%

その理由を質問すると、「嫌い」のグループは「友達が聞きたいと思っていないと感じるから」や「自分の話の中身が難しすぎて友達にはわかりにくいから」などと他者の方に原因があるとする意識があることがわかる。

11 の理由

	「好き」	「嫌い」
他者原因	56.2%	69.5%
自己原因	86.5%	88.9%

この「他者原因」と答えた中でも「「バカ」じゃんとか、文句を言われたことがあるから勇気がない」などの他者の原因がコミュニケーション意識に大きく反映されたとした指摘がある。

これらから他者から理解されなかった経験と意識がコミュニケーションに与える影響は大きいと判断できる。

社会関係を求める意識

「嫌い」のグループには他者とのコミュニケーションをとりたくないという意識がある反面、積極的なコミュニケーションを持とうとする意識がある。親しい友だちがよくないことをしていたらどうするかという質問について、「自分で言う」(ア)が「言わない」(イウエ)よりも多い。ここには、他者とのコミュニケーション関係を重視しようとする意識がうかがえる。

9 親しい友達がよくないことをしていたらどうしますか。

	「好き」	「嫌い」
ア 自分でその友達に「よくない」と言う	66.0%	44.1%
イ だれかがその友達に言うのを待つ	6.6%	11.5%
ウ 先生にそのことを言う	3.0%	4.7%
エ 他の友達に相談してみる	16.3%	14.6%
オ その他	10.5%	26.1%

また、「お互いに遠慮なく話し合いたい」などのまわりの人とどのように話したいかという意識についても、コミュニケーションを積極的に取ろうとする意識がある。

13 あなたはまわりの人とどのように話したり、聞いたりしたいですか。

	「好き」	「嫌い」
ア 言いたいことを自分が話して、相手が聞いてもらいたい	8.0%	8.8%
イ 相手のいろいろな話を、自分が聞きたい	8.0%	7.1%
ウ お互いに遠慮なく話し合いたい	62.8%	35.3%
エ 人と話はあまりしたくない	0.8%	14.2%
オ どのような形でもよい	6.7%	7.1%

カ 考えたことがない	4.9%	15.3%
キ その他	1.9%	5.4%

これら「嫌い」のグループの中でもコミュニケーションを持つとする意識があることは、コミュニケーションのひずみの問題を明らかにしている。それは、体験によって嫌いになっていても、それはそれの個である他者との関係性に影響があると考えられるのであり、すべての他者とのコミュニケーションを排除しようという意識ではない。つまり、それぞれの集団の関係においてコミュニケーションのひずみが生じ、それが「好き・嫌い」の意識を生じさせていると考えられる。それは殻に閉じこものではなく、むしろ自らを改善したいが他者との関わりで自分が傷つくことをおそれるあまりに、他者とのコミュニケーションを避けるのではないか。

11 自分の話をわかつてもらえないと思ったことはありますか。

	「好き」	「嫌い」
現状維持	32.3%	27.8%
改善	57.5%	50.2%

その一方で、話すこと好きでないのに、よくないことは良くないと言える。それは、そのクラスに話す相手がいないのか、それとも良くないことは良くないという価値観を持っているからかも知れない。友達が悪いことをしていたら、よくないというのが多いが、これは健全である。

9 親しい友達がよくないことをしていたら。

	「好き」	「嫌い」
ア 自分でその友達に「よくない」と言う	66.0%	44.1%
イ だれかがその友達に言うのを待つ	6.6%	11.5%
ウ 先生にそのことを言う	3.0%	4.7%
エ 他の友達に相談してみる	16.3%	14.6%
オ その他	10.5%	26.1%

このように多くの子どもは「同じクラスの人と話す」のが嫌いと思いつつ、他者とのコミュニケーションを持つとする意識があるのである。

3 . 考察

コミュニケーションは対人の安定感に影響する。友達と話すのが好きか嫌いかで人間関係についての意識も向上を意識したり、あるいは悪く意識したりもする。友達と話すことがいかに大切であるかが、コミュニケーションの大きな基盤となるのである。その友達と話すことを国語科の学習の中でどのように生かしていくか、これが国語科の授業の課題であり、その鍵は、生徒同士の話し合いを一方的な話ではなく、自分の話を聞いてくれる、理解してくれるという安心感、達成感を実感することができるかにかかっている。そのための授業として、国語科では意見を述べるのみならず、述べた意見についての反応があるような授業形態にしていくことが必要であろう。それは言語のみの知識操作ではなく、言語を使用する意図、姿勢、相手の意識など言語をとりまく状況についての指導も必要なのである。この態度を含めたものがコミュニケーションの重要な問題点である。

2 孤独感を軸として捉えたコミュニケーション意識の実態

分析担当 小原 俊

はじめに

質問4「自分と本当にわかりあえる人はいないと感じることがありますか。」は、子ども自身が他者との相互理解についてどのような実感を抱いているかを尋ねたものである。

この質問に対する回答を集計すると、以下のような数値が得られた。

はい	1216人	21.8%
いいえ	4275人	76.8%

「いいえ」、つまり わかりあえる人は実際に存在する あるいは わかりあえる人は存在するはずである を意味する回答が全体の4分の3強を占めていることから、圧倒的多数の子どもが、まずは自分と相互理解が可能な他者の存在について確信あるいは期待を抱いていることがわかる。この範疇に含まれる子どもに関しては、とりあえず他者とのコミュニケーションに臨む態度について健全な方向性を示していると考えてよいだろう。しかし、残る5分の1強の子どもは わかりあえる 他者の存在について悲観的、否定的である。つまりコミュニケーションに臨む際に何らかの疎外感 = 孤独感を拭いきれずにいるということである。5人に1人の割合を超える子どもが他者との相互理解に確信や期待を抱けず、孤独を感じている原因は何だろうか。

1. 孤独感と わかつてもらえなかった 体験の関連性

まず考えられることは過去の体験が及ぼす影響である。子どもは話すことの体験によって他者との通じ合い=深い相互理解を達成した実感を持った時、それが他者に対する信頼を醸成して、コミュニケーションに対する意欲を増すことができる。しかしその半面、話すことの体験により傷ついたり、理解し合えなかったりしたと感じた時、それが他者への不信感となって、他者と話すことを恐れ、コミュニケーションに対する意欲を減退させることもあり得る。

そこで、質問4で「はい」 = わかりあえる人はいないと感じる と回答した1216人について、過去に わかりあえなかった 体験があることをどの程度明確に意識しているかについて、さらに他の質問項目と関連させて分析をおこなうことにした。アンケートに設定した13項目の質問には直接的に相互理解不成立の体験を尋ねたものはない。しかし質問11「自分の話をわかつてもらえないと思ったことはありますか。」への回答から、少なくとも自分自身のことを わかつてもらえなかった という実感と現在抱く孤独感の関連性を探ることはできるはずである。有効回答の集計結果は以下の通りであった。

はい	1106人	91.0%
いいえ	102人	8.4%

わかりあえる人はいないと感じる と回答した子どもの10人中9人が過去に わかつてもら

えなかった 体験があると回答している。かなりの高率である。これについては体験と実感の間に存在する関連性の高さを検証するため、質問4で「いいえ」と回答した4275人についても質問11への回答を集計した。すると、以下のような傾向の違いがみられた。

はい	2970人	69.5%
いいえ	1245人	29.1%

わかりあえる人はいる と回答した子どもについても10人中7人近くが わかってもらえないかった 体験の存在を意識している。しかし、 わかりあえる人はいないと感じる 子どもと比較すると、その関連性は低い。両者には体験と実感の関連について20ポイントを超える差が存在するのである。

以上の分析に基づき、 わかってもらえないかった 体験と相互理解についての実感との関連性について、次のような仮説を立てることができるであろう。

他者に理解されなかった体験は、その後の相互理解に対する期待や意欲にマイナスの影響を及ぼす可能性がある

2. 体験に基づく孤独感がコミュニケーション意識にもたらす影響

話をしてもわかつてもらえないという体験は、幼児期から誰しもが折りにふれ持つものである。それが一過性の体験にとどまり、後に体験する良好なコミュニケーションによって癒され、克服されるものであるならば問題はない。しかしながらその体験が心に深い傷を与え、他者に対する不信感を固定化させてしまうならば問題は深刻である。

この点に関してさらに掘り下げた分析をおこなうため、 わかりあえる人はいない という孤独感を持ち、かつ わかってもらえないかった 体験を持つ子どもについて、以下の質問項目に関する集計をおこなった。

質問2 「同じクラスの人たちと話すことについてどう思いますか。」の
(a) 「好き・嫌い」

質問3 「なやみがあるとき、それをうちあけることのできる相手はいますか。」

質問13 「あなたはまわりの人とどのように話したり、聞いたりしたいですか。」

それぞれの項目との関連について検証を試みたのは以下の点である。

- ・質問2(a)……体験に起因すると考えられる孤独感が
友人とのコミュニケーションに臨む意識にもたらす影響
- ・質問3…………体験に起因すると考えられる孤独感が
周囲のさまざまな人間に対する信頼感にもたらす影響
- ・質問13………体験に起因すると考えられる孤独感を抱いている子どもが
今後のコミュニケーションにどのような理想像を思い描いているか

2 - 1 . 集計：孤独感が友人とのコミュニケーションに及ぼす影響

質問2「同じクラスの人たちと話すことについてどう思いますか。」の(a)は話すことに関する「好き・嫌い」の度合を選択肢によって尋ねた項目である。分析と検討をおこなうにあたり、判断の基準が曖昧になるのを回避するため、5つある選択肢のうちオ「どちらとも言えない」を選んだ218人は割愛し、残りのア～エを選んだ990人をア「好き」+イ「まあまあ好き」=「好き」のグループとウ「あまり好きではない」+エ「嫌い」=「嫌い」のグループに大別し、集計をおこなった。結果は以下の通りである。

好き	891人	82.0%
嫌い	99人	8.2%

2 - 2 . 集計：孤独感が周囲の人間に対する信頼感に及ぼす影響

質問3「なやみがあるとき、それをうちあけることのできる相手はいますか」は他者への相談を必要とする場面を想定させ、ア「いる」イ「いない」の二者択一によって相談できる他者の存在を自己の中で確認し得るかどうかを尋ねた項目である（ア「いる」の下位には対象となる人物に関する選択肢が存在するが、集計が煩雑となるためここでは割愛した）。

ア「いる」	965人	79.9%
イ「いない」	243人	20.1%

2 - 3 . 集計：孤独感がコミュニケーションの理想像に及ぼす影響

質問13「あなたはまわりの人とどのように話したり、聞いたりしたいですか。」で設定した選択肢とそれに対する回答の集計結果は以下の通りである（設問は択一式であったが複数回答をした子どもが1人いたため、回答総数は1209人となっている）。

ア 言いたいことを自分が話して、相手が聞いてもらいたい	114人	9.4%
イ 相手のいろいろな話を、自分が聞きたい	124人	10.3%
ウ お互いに遠慮なく話し合いたい	696人	57.6%
エ 人と話はあまりしたくない	37人	3.1%
オ どのような形でもよい	104人	8.6%
カ 考えたことがない	79人	6.5%
キ その他	55人	4.5%

3 . 分析と検討

集計結果が示す傾向から、以下のが認められる。

わかつてもらえなかった 体験を持ち、孤独を感じている子どもであっても

- 1 必ずしも日常のコミュニケーションに積極的な姿勢で臨まない子どもではない
- 2 必ずしも周囲を信頼しない子どもではない
- 3 必ずしもプラスのコミュニケーション像を思い描いていないわけではない

質問2で「同じクラスの人たちと話すこと」について 好き のグループに回答した子どもは82.0%、また質問3で「なやみがあるとき、それをうちあけることのできる相手」が「いる」と回答した子どもは79.9%とそれぞれ8割程度が身近な友人とのコミュニケーションに積極的な姿勢を持ち、相談できる相手も存在すると回答している。そして質問13では半数を超える子どもがウの「お互いに遠慮なく話し合いしたい」を選んでいる。これにコミュニケーションに対して自発的、積極的な理想像を求める姿勢を示す回答と考えられるア、またそれに準ずると考えられるイ、オを加えると1038人、85.9%となる。つまり、わかつてもらえなかった 体験に基づく孤独感を持っている子どもについても圧倒的多数が程度の差こそあるものの、今後のコミュニケーションのあり方に絶望しているわけではなく、期待を抱いていることがわかるのである。この子どもについては配慮あるコミュニケーション環境の保障が孤独感を癒し、解消する可能性があることは言うまでもないだろう。

これに対して深刻な問題の所在をうかがわせるのは質問2(a)で 嫌い のグループに回答した99人、質問3で「いない」と回答した243人(20.1%)、質問13で工「人と話はあまりしたくない」または力「考えたことがない」を選んだ115人(工と力の重複回答1人、9.6%)の子どもである。彼らは わかつてもらえなかった 体験を持ち、他者との相互理解にも期待することができないだけでなく、さらには身近な友人とのコミュニケーションに対して積極的な姿勢も持てず、悩みを相談し得る他者も思い浮かばず、コミュニケーションという行為自体に期待を抱くこともできずにいると回答しているのである。

この子どもたちの存在は全回答者5566人の中でみる限り小さい。しかし、たとえわずかではあっても体験によって傷つき、今後のコミュニケーションに希望を持てずにいる子どもがいることを看過するわけにはいかないだろう。

おわりに

以上に取り上げて検討した事例については、さまざまな視点から問題の軽重を測ることが可能である。たとえば回答者の総数に占める件数と割合の多寡を問題の重要度を測る尺度とするならば、コミュニケーションに疎外感を覚え孤立している子どもは圧倒的少数派であるということになる。したがってその限りにおいて、該当する子どもをめぐる問題は学校内においてさほど重要ではないと判断することもできるのである。またこのような判断に基づき、問題の原因と責任の所在を該当する子ども自身に帰する類の結論を導くのは容易であろう。しかしながら、苦境に置かれた少数者を黙殺し、多数者の状況改善ばかりを目的とした対応がなされたら、その対応は人権保障の本質をとらえた取り組みであると言えるのだろうか。現在多数の側に属している者にも、些細な出来事がきっかけとなって少数の側に身を置かざるを得なくなる可能性は存在する。つまり、苦痛を味わう少数者を放置する環境は、常に新たに苦痛を味わう少数者を生み出す構造を潜在させている

のである。このことを十分認識した上で、子どものコミュニケーションに関わる問題を正確に理解し、状況の改善を図る努力を重ねることが必要なのではないか。

小学生・中学生・高校生のコミュニケーション実態の 分析と教育実践への提言

1 話すことに関する自己意識

——話すことをどう思っているか——

分析担当 浅見 優子

1. 調査の意図

子どもたちは、学級内で友達と話すこと（学級内コミュニケーション）について、どう思っているかを、態度面（好き - 嫌い）と、能力面（得意 - 不得意）から、調査するものである。話す対象は、学校生活の中で、必ず何らかの関わりをもつ「同じクラスの友達」とする。ここで、明らかにしようとしているのは、自分の態度面、能力面で、その児童生徒自身がどう意識しているのかである。つまり、態度、能力に関する意識内容を明らかにしようとするものである。

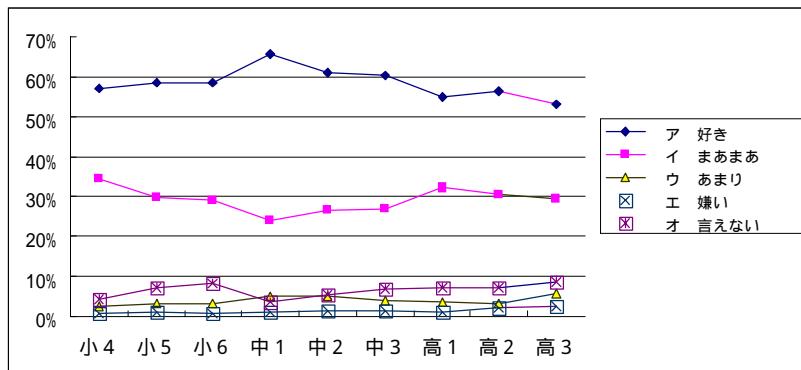
2. 調査

2-1. 調査問題とその結果

2 同じクラスの人たちと話すことについてどう思いますか。		
(a)		
ア 好き	3 3 0 2	5 9 . 3 %
イ まあまあ好き	1 5 8 4	2 8 . 5 %
ウ あまり好きではない	2 2 5	4 . 0 %
エ 嫌い	7 1	1 . 3 %
オ どちらとも言えない	3 5 8	6 . 4 %
(b)		
ア 得意（うまく話せる）	1 0 5 5	1 9 . 0 %
イ まあまあ得意	2 7 4 4	4 9 . 3 %
ウ あまり得意ではない	8 3 9	1 5 . 1 %
エ 不得意（うまく話せない）	2 0 6	3 . 7 %
オ どちらとも言えない	5 3 7	9 . 6 %

「同じクラスの人たちと話すことについて」(a) 「好き嫌い」の学年別推移

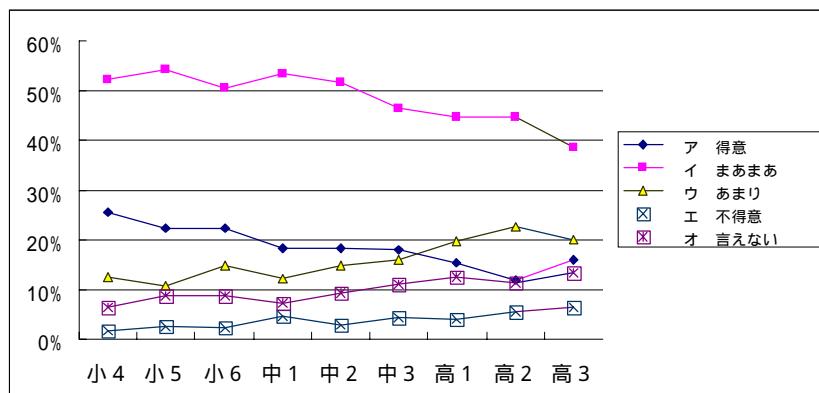
	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	全体
ア 好き	57.2%	58.5%	58.7%	65.7%	61.0%	60.4%	54.8%	56.3%	53.1%	59.3%
イ まあまあ好き	34.4%	29.6%	29.2%	24.2%	26.7%	26.9%	32.2%	30.4%	29.4%	28.5%
ウ あまり好きでない	2.7%	3.3%	3.3%	4.9%	5.1%	4.0%	3.7%	3.3%	5.6%	4.0%
エ 嫌い	0.7%	1.0%	0.6%	1.1%	1.3%	1.5%	1.2%	2.2%	2.5%	1.3%
オ どちらとも言えない	4.3%	7.1%	8.2%	3.7%	5.2%	7.0%	7.0%	7.2%	8.4%	6.4%



'同じクラスの人たちと話すことについて' (b) 「得意不得意」の学年別割合表示

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	全体
ア 得意	25.4%	22.3%	22.3%	18.3%	18.3%	18.0%	15.5%	12.0%	15.9%	19.0%
イ まあまあ得意	52.2%	54.1%	50.3%	53.2%	51.7%	46.5%	44.6%	44.6%	38.4%	49.3%
ウ あまり得意ではない	12.4%	10.6%	14.7%	12.0%	14.7%	15.9%	19.8%	22.6%	20.0%	15.1%
エ 不得意	1.7%	2.7%	2.4%	4.5%	3.0%	4.3%	3.9%	5.6%	6.3%	3.7%
オ どちらとも言えない	6.4%	8.6%	8.7%	7.3%	9.3%	11.0%	12.4%	11.4%	13.4%	9.6%

'同じクラスの人たちと話すことについて' (b) 「得意不得意」の学年別推移



2 (a) 「ウ あまり好きではない」「エ 嫌い」「オ どちらとも言えない」

2 (b) 「ウ あまり得意 ではない」「エ 不得意(うまく話せない)」「オ どちらとも言えない」の理由(複数回答可)

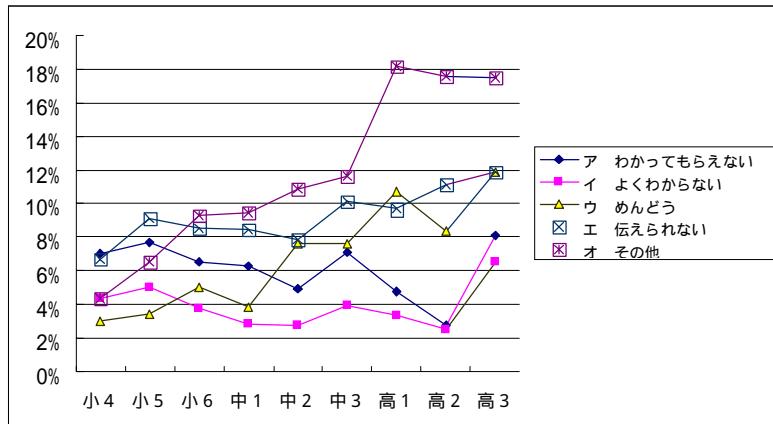
2. 1 それはどうですか。いくつ答えるてもかまいません。

ア 自分の考えていることをわかつてもらえないから	351	15.7%
イ 相手が何をいっているのかよくわからないから	212	9.5%
ウ 話をするのがめんどうだから	360	16.1%
エ 自分の考え方や気持ちを伝えられないから	512	22.9%
オ その他(記述)	615	27.5%

'どうしてできないのか' (複数回答可) の学年別割合表示

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	全体
ア わかつてもらえない	7.0%	7.7%	6.5%	6.3%	5.0%	7.1%	4.8%	2.8%	8.1%	6.3%
イ よくわからない	4.3%	5.0%	3.8%	2.9%	2.7%	3.9%	3.3%	2.5%	6.6%	3.8%
ウ めんどう	3.0%	3.4%	5.0%	3.8%	7.6%	7.6%	10.7%	8.4%	11.9%	6.5%
エ 伝えられない	6.7%	9.2%	8.5%	8.5%	7.9%	10.1%	9.7%	11.1%	11.9%	9.2%
オ その他	4.3%	6.5%	9.3%	9.4%	10.9%	11.6%	18.2%	17.5%	17.5%	11.0%

'どうしてできないのか' (複数回答可) の学年別推移



2 - 2 . 調査問題の解説

この「問い合わせ」は、子どもたちの学級内コミュニケーション意識を調査するものである。

2 (a)では、態度面（好き - 嫌い）の自己意識を、2 (b)では、能力面（得意 - 不得意）を聞き、2 . 1で、嫌い、不得意の原因を明らかにすることを目的にしている。

嫌い、不得意の原因を、「ア 自分の考えていることを分かってもらえないから（聞き手である相手に原因がある）」「イ 相手が何をいっているのか良くわからない（聞き手としての自分に原因がある）」「ウ 話すことが面倒（意欲のなさに原因がある）」「エ 自分の考え方や気持ちを伝えられないから（話す技術の不足に原因がある）」「オ その他（自由記述）」の5点と想定し、選択肢として設定した。

ただし、2 . 1の問い合わせが、態度面、能力面を合わせた回答形式になっている。そこで、(a)、(b)に分け、2 . 1の傾向を見ることで、態度面「嫌い」、能力面「不得意」意識の原因を分析する。

3 . 結果の分析

この調査で明らかになったことは以下のようない点である。

態度面（好き - 嫌い）から見た、話すことに関する自己意識

「話すことが好きと答えた子ども」は、「まあまあ好き」と答えた子どもも含めて、87.8%。これに対して、嫌いと答えている子どもは、あまり好きではないも含めても、5.3%。学年による変化はほとんど見られない。

能力面（得意 - 不得意）から見た、話すことに関する自己意識

同じクラスの人たちと「話すことが得意」と答えた子どもは、「まあまあ得意」を含めて68.3%いた。これに対して、「不得意」と答えている子どもは、「あまり得意でない」を含めて18.8%。学年があがるにつれ、「まあまあ得意」「得意」の回答は減少している。「不得意」「あまり得意ではない」の回答には、変化はほとんど見られない。「どちらとも言えない」の回答が増加している。

態度（好き - 嫌い）と能力（得意 - 不得意）との相関関係

2 (a)と2 (b)とのクロス集計結果

	ア得意	イまあまあ得意	ウあまり得意ではない	エ不得意（うまく話せない）	オどちらとも言えない
ア好き	942人/ 29.4%	1778人/ 55.5%	274人/ 8.5%	41人/ 1.3%	170人/ 5.3%
イまあまあ好き	85人/ 5.6%	888人/ 58.7%	378人/ 25.0%	47人/ 3.1%	114人/ 7.5%
ウあまり好きではない	9人/ 4.2%	37人/ 17.3%	111人/ 52.1%	31人/ 14.5%	25人/ 11.7%

工嫌い	7人 / 2.0%	5人 / 7.6%	9人 / 13.6%	34人 / 51.5%	11人 / 16.7%
才どちらとも言えない	10人 / 2.8%	23人 / 6.6%	60人 / 17.1%	46人 / 13.1%	211人 / 60.3%

2-aと2-bのクロスを見ると、「好き」と答えた子どもは、「得意」「まあまあ得意」と答え、「嫌い」と答えた子どもは「不得意」と答える傾向がみられる。このことより、態度と能力の間に相関関係があることがわかる。

「あまり好きではない」「嫌い」「どちらとも言えない」「あまり得意ではない」「不得意（うまく話ない）」「どちらとも言えない」ことの原因に関する自己意識

原因として回答率が一番高いのは「工 自分の考えや気持ちを伝えられないから」21.8%、ついで多いのが「ア 自分の考えていることを分かってもらえないから」16.0%。どちらも相手に自分を理解してもらえないところに、「嫌い」「不得意」の原因をみている。

一方、学年別の推移を見てみると、「ウ 話をするのが面倒」「工 自分の気持ちを伝えられないから」の回答者数に、わずかながら増加が見られる。

しかし、一番回答者が多かったのは、「才 その他」の28.2%であった。この回答者数は学年と共に増加の傾向も見られる。この回答は自由記述になっている。回答者としては、用意した選択肢の中から理由を選ぶ方が楽な作業なのに、わざわざ記述している。そこに記述せずにいられなかった回答者の心情を読みとっていきたい。そこで、自由記述を以下の視点から、分類整理を行った。

1 . 聞き手である相手に原因	121人
2 . 話し手である自分に原因	244人
話し手である自分の態度に原因	157人
話し手の技能に原因	87人
3 . 話題に原因	76人
4 . その他	98人
5 . 無効	35人

「話し手である自分に原因」があるとしている子どもが一番多い。その内容を、さらに態度面の原因と、技能面の原因とに分類してみると、子どもたちは、話す技能よりむしろ、自分の態度に原因を見いだしている。では、どんな原因をあげているのか、具体的に見ていきたい。

- ・ うまく自分の心を開けないから。
- ・ むなしさを感じるから。
- ・ 相手に合わせて話さないといけないので疲れる。
- ・ 気を使ってしゃべるのが疲れるから。
- ・ 気を使わなければならないから。
- ・ 嫌いな人ばかりだから。
- ・ 人それぞれ考えていることは違うから、話した内容によって、相手が自分のことを悪く思うときがあるかもしれない、ちょっと心配する。
- ・ 人の顔をうかがってしまうから。
- ・ 相手の気にさわることを言ってしまったら申し訳ない。
- ・ 相手を傷つけることが怖い。
- ・ 無視されたりするのが怖いから。
- ・ 話して嫌われるのが怖い。
- ・ うち解けてないとどうしても警戒してしまうから。
- ・ 相手に嫌われるんじゃないかって考えると、しゃべれなくなる。

- ・話したところで世界が変わるものではない。

これらの記述回答から、クラスの友達に気を使い、相手に嫌な思いをさせないように、嫌われないようにと気を使う子どもの姿が垣間見られる。87.8%もの子どもが「好き」「まあまあ好き」と回答している「同じクラスの人たちと話すこと」を、「辛い」「怖い」と感じている子どもがわずかであるが、存在していることをここで強調しておく。

その一方で、自分の態度や能力を自覚していない記述も見られる。

- ・あまり深く考えたことがないから。
- ・あまり理由はない。
- ・これといって理由はない。
- ・なんとなく。（10人）
- ・難しく考えたことがない。
- ・よくわからない。（15人）
- ・何も感じていない。
- ・別にどうも思わない。

エリクソンの発達理論によれば、13歳から22歳ころまで、アイデンティティーの確立を目指し、「私とはなにものなのか」と問い合わせ続ける。その時代に、自分の態度や能力を自覚していない、自分に感心がないともとれる記述をするこうした子ども達の存在にも注目したい。

同じクラスの人と話すことが「あまり好きではない」「嫌い」「どちらとも言えない」理由
2(a)「あまり好きではない」「嫌い」「どちらとも言えない」と2.1とのクロス集計からは
以下のような結果が得られた。

	相手に原因	聞き手の自分に原因	めんどう	技術	その他
あまり好きでない	52人/ 23.1%	33人/ 14.7%	91人/ 40.4%	66人/ 29.3%	65人/ 28.9%
嫌い	14人/ 19.7%	16人/ 22.5%	35人/ 49.2%	14人/ 19.7%	25人/ 35.2%
どちらとも言えない	59人/ 16.5%	40人/ 11.1%	88人/ 24.6%	80人/ 22.3%	145人/ 40.5%

同じクラスの人と話すことが「あまり好きでない」「嫌い」の理由としては、「話をすることがめんどう」をあげる子どもが多い。つまり、能力面と態度面の相関関係がみられる。

同じクラスの人たちと話すことが「あまり得意ではない」「不得意（うまく話せない）」「どちらとも言えない」理由

2((b))「あまり得意ではない」「不得意（うまく話せない）」「どちらとも言えない」と2.1とのクロス集計

	相手に原因	聞き手の自分に原因	めんどう	技術	その他
あまり得意ではない	153人/ 18.2%	79人/ 9.4%	144人/ 17.2%	293人/ 34.9%	235人/ 28.0%
不得意（うまく話せない）	39人/ 18.9%	25人/ 12.1%	85人/ 41.3%	91人/ 44.1%	73人/ 35.4%
どちらとも言えない	76人/ 14.2%	68人/ 12.7%	107人/ 20.0%	94人/ 17.5%	203人/ 37.8%

「あまり得意ではない」「不得意（うまく話せない）」理由としては、技術の不足をあげる子どもが多い。

4. 共同討議

高校1~3年生でクラスの人たちと話すことを「好き」「まあまあ好き」と答えた子どもが86.

7%、「得意」「まあまあ得意」と答えた子どもが59.4%という割合は、高校の教師にとっていさか予想を上回る数値であった。自分だけ目立たないように、友達に嫌われないようにと気を使うといった高校生が教室で見せる姿、つまり、教師がとらえる子どもの姿と、隔たりがある。この隔たりの原因はどこにあるのだろうか?この疑問について、以下の2つの視点から共同討議を行った。

教師の子ども理解の問題

自分に関心をもたない子ども

教師の子ども理解の問題

アンケートの結果が示すように、子ども達の多くが、同じクラスの友達と話すことを好きと意識しているのにもかかわらず、教師が授業中に目にする子ども達は、とても話すことが好きとは思えないのならば、まず教師自身の子ども理解を問題にしたい。

下村哲夫は次のような指摘をする。

特出を恐れる現在の子どもの多くは、なるべく自分を『普通の子』に見せようと懸命の努力をしている。そのカラを破って子どもたちの胸の奥のムカツキの実体を把握するには、子どもたち一人ひとりと向かい合うだけのゆとりがます必要だ。しかし、そのゆとりは時間の上でも気持ちの面でも現在の学校にはきわめて乏しい。

(『「教育ピックパン」の時代を生きる』2000年2月20日 協同出版)

下村が指摘するような「『普通の子』に見せようと懸命の努力」をしている子どもたちの気持ちを、教師はどれだけ理解しているだろうか?重く口を閉ざしている子どもの内面には、出口を求めて渦巻く熱く、激しい感情が隠れているのかもしれない。そんな可能性を数値は示唆している。

自分に関心をもたない子ども

同じクラスの人たちと話すことについて、2(a)「才 どちらとも言えない」6.4%、2(b)「才 どちらとも言えない」9.6%の回答があった。また、2.1の「才 その他(記述)」に散見される「あまり深く考えたことがない」「あまり理由はない」「なんとなく」「よくわからない」といった回答。これらの結果から、自分に関心をもたない子どもの姿が浮かんできた。

自分に関心をもたない傾向が、他の子どもにも見られるとしたら、「得意」「まあまあ得意」と回答した子どもが、教師の予想を裏切って、高率なのもうなずくことができる。

5. 考察

5-1. 現状と課題

健全な成長を遂げている子どもたち

本調査で、同じクラスの人たちと話すことを「好き」「まあまあ好き」と回答した子どもが87.8%にものぼったことは、よい意味で予想を裏切る数値であった。少子化、地域社会の崩壊など、子どもたちのコミュニケーション能力を育成する場が減少しつつある今日においても、多くの子どもたちはコミュニケーションの可能性を信じ、人々と関わろうとする態度をもち続けていることが明らかになった。

その一方で、同じクラスの人たちと話すことを「あまり好きでない4.0%」「嫌い11.3%」「どちらとも言えない6.4%」と回答した子どもたちの中にいる、人とのコミュニケーションを拒絶する子どもたちの強ばった心は、大きな問題を抱えている。多くの子どもたちが「好き」と答えている、話すことを、「辛い」「怖い」と感じる子どもの心の叫びを周囲の大人が捉え、適切に且つ積極的

に対応していくことが望まれる。

同じクラスの人と話すことが「嫌い」な原因

同じクラスの人と話すことが「嫌い」な理由として子どもが選んだものは「ウ　話をするのがめんどうだから」が33.7%とトップであった。このことから、「嫌い」と答えた子どもたちは、人間関係の形成に意欲をもてないでいることがわかる。

では、87.8%の子どもが「好き」「まあまあ好き」と答えたのはなぜなのだろうか？　残念なことに、本調査では、「好き」「まあまあ好き」な理由については触れていない。「嫌い」な子どもへの手立てを考えるとき、「好き」な子どもは重要な手がかりになる。「好き」と「嫌い」、両方から話すことに関する意識を調査することが、課題である。

話すことの能力（得意　不得意）に関する自己意識

「同じクラスの人たちと話すこと」について、「得意（うまく話せる）」「まあまあ得意」と回答した子どもの割合は68.3%であった。この数値に、違和感を抱く教師が多い。なぜなら授業中の子ども達は、口が重く、自分の考えを発表することに抵抗を感じている。本当に子どもは話すことを得意と感じているのであろうか？それとも、自分の能力を自覚していないのであろうか？この疑問を解明するために、以下の調査を坂口京子氏に依頼した。

1. あなたは自分の話し方についてどう思っていますか。（中2中3）

	うまい	少しうまい	ふつう	あまりうまくない	へた
人数	9人	7人	50人	38人	21人
割合	7%	5%	40%	30%	16%

「自分の話し方（自分の考えを多くの人に伝えることを目的としている）」については、「うまい」「少しうまい」という回答は少ない。むしろ、「あまりうまくない」「へた」という回答が多い。

この結果から坂口氏は、「子ども達は、『同じクラスの人たちと話すこと（1対1のコミュニケーション）』には『得意』意識をもっているが、『自分の話し方（自分の考えを多くの人に伝えることを目的としている）』には、不得意意識をもっていることがわかる。つまり、授業中に子どもが自分の考えを発表したがらないのは、こうした不得意意識に原因がある」と指摘している。

態度と能力の相関関係

問2(a)で同じクラスの人たちと話すことが「好き」と答えた子どもたちは、問2(b)で同じクラスの人たちと話すことが「得意」「まあまあ得意」と答える傾向が見られる。同様に、「嫌い」と答えた子どもは「不得意」と答える傾向も見られた。このことから、話すことが「好き」だから、よく話す、よく話すから「得意」になり、得意になるからもっと「好き」になるといった好循環が成立し、話すことが「嫌い」な場合は、全く逆の現象が生じていることが明らかになった。

ならば、話すことが「嫌い」、または、「不得意」な子どもには、まずは話すことが好きになるような体験をさせることから始め、少しずつ自信を付けさせていくことが有効だと考える。

心を閉ざす子ども

6. 1の自由記述の中に、相手を拒絶し、心を閉ざす表現が見られる。そうした子どもをさらに追跡してみると、以下のような姿が見えてきた。

2 (a)	2 (b)	3	3 . 1 キ	2 . 1 その他（自由記述）
工嫌い	工不得意	いいいえ		友がムカツクから
工嫌い	工不得意	いいいえ		みんなイカレているから
工嫌い	工不得意	いいいえ		嫌いだから
工嫌い	工不得意	いいいえ		まわりの人がくだらない
工嫌い	工不得意	イはい	ペット	めんどうではなく、なんかウザイ！
工嫌い	工不得意	イはい	教育相談のカードの電話番号にかけて、出てきてくれた人	いじめられるから
工嫌い	工不得意	イはい	神様、牧師さん	ばかばっかだから

「友がムカツク」「みんなイカレている」と書いている子どもは、「同じクラスの人と話すこと」を「工嫌い」「工不得意」「3悩みをうち明ける人」がいないと答えている。

また、「3悩みをうち明ける人」がいると答えているが、その相手は「ペット」「教育相談のカードの電話番号にかけて、出てきてくれた人」「神様」であり、身近な人間を挙げていない。

なぜ、ここまで心を閉ざしているのか、残念なことに本調査からは明らかにすることはできない。しかし、こうしたコミュニケーション意識をもつ子どもにこそ現代のコミュニケーションの問題が隠れていると予想される。

6 - 1 . 提言

話すことが楽しいと思える経験を

話すことに関する「好き - 嫌い（態度面）」が、「得意 - 不得意（能力面）」と相関関係を持つことが本調査から明らかになった。このことから、話すことが好きになるような経験が、話す能力を高める有効な手段と考える。

人間関係の形成

86.8%の子どもが「好き」「まあまあ好き」と回答している「同じクラスの人と話すこと」を「疲れる」「怖い」「辛い」と、人間関係の形成に大きな障害を感じている子どもがほんのわずかな人数であるが存在していることに注目したい。こうした子どもたちの回答は、特殊な子どもの特殊な反応と片付けることはできない。なぜなら、人は他者とコミュニケーションをとる際、程度に差はある、人間関係の形成に悩むものである。とすれば、この子ども達の心の叫びは、どの子どもにも共通する悩みなのである。その悩みをくみ取り、心の成長へと導くことが、家庭、地域、そして学校すべきことなのだ。

自分の考えを大勢の人々に伝える能力の育成

調査結果から、多くの子ども達は「同じクラスの人たちと話すこと」に関しては、「好き」「まあまあ好き」と回答し、健康な成長ぶりをしめしている。しかし、子ども達の意識を分析していくと、親しい友達とのおしゃべりは好きであり、得意と答えていることがわかる。それに対して、自分の考えを相手に伝えたり、授業中に発言したりすることについては、不得意な意識をもっている。

こうした実態から、子ども達のごく親しい友達との閉じられたコミュニケーションの形態が浮かび上がってくる。つまり、友達に嫌われないように気を遣い、友達以外の人間を排除する問題点をかかえているのである。

7 . 反省と課題

「ウ　あまり好きではない」「工　嫌い」「オ　どちらとも言えない」「ウ　あまり得意ではな

い」「工 不得意」「オ どちらともいえない」理由だけ聞く形式の問題

本調査では、2 (a) で「ウ あまり好きではない」「工 嫌い」「オ どちらとも言えない」、2 (b) で「ウ あまり得意ではない」「工 不得意」「オ どちらともいえない」と回答した場合のみ、2 . 1 でその理由を回答する形式になっている。「ア 好き」「イ まあまあ好き」「ア 得意」「イ まあまあ得意」の理由もあわせて聞き分析・考察の材料として検討する必要があったのではないか。一方の回答にだけ理由を求めるることは、回答者に「嫌い」「不得意」と答えることが悪いことだという先入観を与えるおそれがある。

学習には、「嫌い」「不得意」を自覚することから出発する方法もあって良いということに留意しつつ、設問を展開してもよかったですのではないか。

態度と能力の明確な区別

本調査では、話すことに関する自己意識を2 (a) 態度（好き - 嫌い）、2 (b) 能力（得意 - 不得意）の両面から調査している。にもかかわらず、2 . 1 では態度、能力一緒に理由を聞いたことにより、どちらの面に関する理由であるのか、曖昧になってしまったことが惜しまれる。

2 話す相手に関する意識

——話すことはどう思っているか——

分析担当 浅見 優子

1. 調査の意図

本問は、子どもは悩みを打ち明けることのできる相手をもっているのかどうかを問うものである。悩みを打ち明けるとは、親密で、しかも人間的な信頼下に基づくコミュニケーションである。悩みを打ち明ける相手がいるということは、人間関係が成立していることを意味している。現代の子どもが築いている人間関係を明らかにすることをねらっている。

そして、打ち明けることのできる相手がいると答えた子どもがあげる、話しやすい人物を調査することにより、子どもたちの話し相手に関する意識を明らかにすることを意図している。

2. 調査

2-1. 調査問題とその結果

3. なやみがあるとき、それをうちあけることのできる相手はいますか。

ア はい	4 5 3 8	8 1 . 5 %
イ いいえ	9 7 8	1 7 . 6 %

学年別の比率

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	全体
ア はい	79.9%	85.5%	84.0%	79.6%	77.2%	77.6%	81.6%	88.9%	86.6%	81.5%
イ いいえ	19.7%	14.0%	15.2%	18.6%	21.9%	21.5%	17.1%	10.6%	12.8%	17.6%

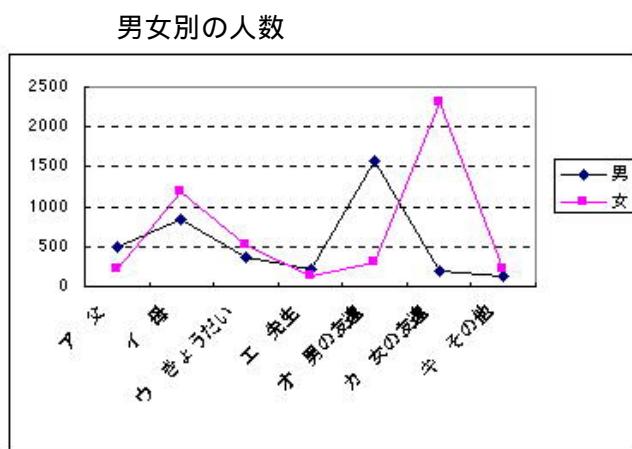
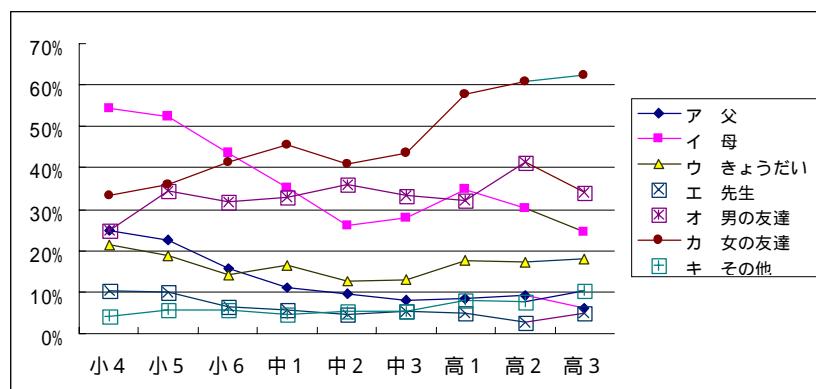
「ア はい」(なやみを打ち明けることのできる相手がいる)と答えた子どもの相手を問う

3. 1下にあげた人のうち、話しやすいのはだれですか。いくつ答えるてもかまいません。きょうだいについては人数を書いてください。そのほかにいる場合は、その他のところにどういう人か書いてください。(複数回答可)

ア 父	7 0 8	1 5 . 6 %
イ 母	2 0 1 5	4 4 . 4 %
ウ きょうだい	8 8 3	1 9 . 5 %
エ 先生	3 4 5	7 . 6 %
オ 男の友達	1 8 7 2	4 1 . 3 %
カ 女の友達	2 4 9 9	5 5 . 1 %
キ その他	3 3 4	7 . 4 %

学年別の比率

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	全体
ア 父	24.7%	22.5%	15.8%	10.9%	9.7%	8.0%	8.3%	9.2%	6.3%	15.6%
イ 母	54.2%	52.3%	43.5%	35.0%	26.2%	27.9%	34.7%	30.1%	24.4%	44.4%
ウ きょうだい	21.4%	18.6%	14.0%	16.6%	12.6%	13.2%	17.6%	17.3%	18.1%	19.5%
エ 先生	10.4%	10.1%	6.4%	5.7%	4.7%	5.2%	5.0%	2.8%	5.0%	7.6%
オ 男の友達	24.7%	34.3%	31.8%	33.0%	36.1%	33.4%	32.0%	41.2%	34.1%	41.3%
カ 女の友達	33.1%	36.0%	41.3%	45.6%	41.1%	43.6%	57.6%	60.7%	62.2%	55.1%
キ その他	4.3%	5.7%	5.8%	4.7%	5.5%	5.4%	7.9%	7.8%	10.3%	7.4%



2 - 2 . 調査問題の解説

子どもは、悩みを抱えたとき、はたして人とコミュニケーションをとることで、心の痛みを和らげたり、解決の道を模索したりしようとするのだろうか？困難な状況に陥ったときの子どものコミュニケーション意識の調査が問3の目的である。

さらに、悩みを抱えた子どもが話しやすいと感じている相手、つまり、コミュニケーションをとりやすいと意識している相手を明らかにするのが問3 - 1のねらいである。

3 . 結果の分析

この調査で明らかになったことは、以下のような点である。

悩みを打ち明ける相手がいるか

「はい」（なやみを打ち明ける相手はいる）と答えた子どもは75.5%。大抵の子どもは悩みを打ち明けることができる相手をもっていることが明らかになった。

「なやみを話しやすい相手」の学年推移

小学校5、6年生では母親が1位で、女の友達が2位である。それが中学になると逆転し、女の友達が1位、男の友達が2位、母親は3位になる。これは、親からの自立が進んだ結果、「なやみを話しやすい相手」として母親の順位が下がったと考えられる。

母親に対して、父親をあげる子どもは少なく、学年が進むに連れ、さらに減少していく。父親不在の問題が昔から指摘されているが、いまだに、その問題は解決されずにいることが、調査結果よ

りわかる。

しかし、父親より低く、最下位は先生である。これは、小学校から高校まで通して見られる傾向である。子どもは「なやみを話しやすい相手」として教師を見ていないのだろうか？この点については、中学生を対象に、再度調査を行った。その結果は、4. 共同討議で述べる。

「なやみをうちあけることのできる相手」に見られる男女差

父親を回答した男女別学年推移



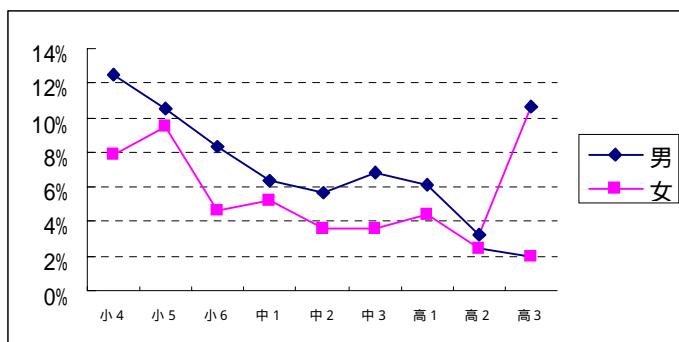
小学校では、父親をあげる男の子が女の子より多いことが指摘できる。しかし、年齢と共に減少し、中学になると男女の差はほとんど見られなくなる。

母親を回答した男女別学年推移



小学校から中学2年までは、男女差はほとんど見られず、母親をあげる数は緩やかに減少している。しかし、中学2年以降も男の子はさらに減少していくのに対し、女の子は中3以降、母親をあげる子どもの数は増加している。

先生を回答した男女別学年推移

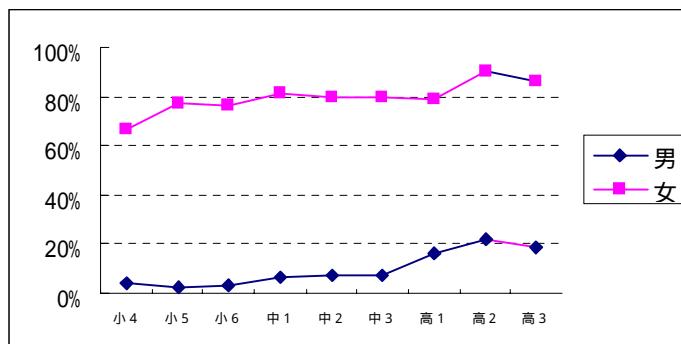


ほとんど違いは見られない。

男の友達を回答した男女別学年推移



女の友達を回答した男女別学年推移



この2つを比べると、男は男に、女は女に悩みを打ち明けている実態が明らかになる。と同時に、異性に相談する割合は、年齢の上昇と共にわずかではあるが増加している。特に、高校生の女の子は、男の子に悩みを打ち明ける割合が高くなっている。その反面、女の子に悩みを打ち明ける男の子は、年齢の上昇と共にわずかに増加しているが、あまり数はいないことがわかる。

「なやみをうち明けることのできる相手がいる、いない」と話すことに関する自己意識
18.7%と割合としては低いが、問題を抱えていると予想される「なやみを打ち明けることのできる相手がいない子ども」は、話すことに関して、どのような自己意識をもっているのであろうか？
2(a)、2(b)とのクロスを見てみよう。

2(a)と3とのクロス集計

	好き	まあまあ好き	あまり好きでない	嫌い	どちらとも言えない
相手がいる (4538)	2887人/ 63.4%	1213人/ 26.7%	147人/ 3.2%	30人/ 0.7%	245人/ 5.4%
相手がない (978)	399人/ 40.8%	356人/ 36.4%	71人/ 7.3%	38人/ 3.9%	109人/ 11.1%

「なやみをうち明ける相手がいる」と答えた子どもの方が「好き」と答える割合が高い。そして、「なやみをうち明ける相手がない」と答えた子どもの方が「嫌い」と答える割合が高い。さらに、「なやみをうち明ける相手がない」と答えた子どもでも、「好き」と答える割合は高い。

2(b)と3のクロス集計

	得意(うまく話せる)	まあまあ得意	あまり得意ではない	不得意(うまく話せない)	どちらとも言えない
相手がいる	933人/ 20.6%	2309人/ 50.9%	626人/ 13.8%	119人/ 2.6%	396人/ 8.7%
相手がない	111人/ 11.3%	421人/ 42.1%	201人/ 20.6%	81人/ 8.3%	134人/ 13.7%

「なやみを打ち明ける相手」の「いる」「いない」と、話すことに関する「得意」「不得意」意識の間には、明確な関係が見られない。

4. 共同討議

調査結果から、教師のことを、悩みを話しやすい相手と見ている子どもは7.6%と少ないことがわかった。この数値の低さは、教師に大きな衝撃を与える。教師は、子どものよき相談相手になろうと努力しているつもりである。なのに、子どもは、教師を相談相手として見ていないというのだろうか？この疑問について、以下の2つの視点から共同討議を行った。

子どもの求める教師像

子どもの悩み

子どもの求める教師像

教師は、子どものよき相談相手になろうとしている。子どもの発言や作品、教室でみせるちょっとしたしぐさ、廊下で感じるいつもと違う雰囲気、教師は子どもの発信する信号を受信しようとアンテナをたてている。しかし、こうした努力は今の子どもにとっては必要なものなのであろうか？

そこで、坂口京子氏に依頼し、補助調査を行った結果、以下のようなことが明らかになった。子ども達が教師に希望することとして、半数以上の回答があったものは、次の4つであった。

教え方が上手である。

相談にのってくれる

個人的な悩みを聞いてくれる

何でも気楽に話せる

のことから、子ども達は、教師に相談にのってもらったり、悩みを聞いてもらったりしたいと希望していることが明らかになった。

両調査を総合してみると、多くの子どもは、教師を話しやすい相手とは感じていない現実と、それにも関わらず、相談相手になって欲しい、悩みを聞いて欲しいと願うことも多いということが、実態として明らかになった。

子どもの悩み

子どもと教師の関係は、常に評価される者と評価する者との関係にある。教師がいくら話しやすい雰囲気を作ろうと努力したとしても、評価される側の子どもが不利な情報をそう簡単に打ち明けるとは思えない。だとしたら、今の子ども達の抱える悩みが、教師には対応できない内容になっているのではないかと予想される。つまり、子どもの抱える悩みの内容の検討が必要なのだ。しかし、本調査では、悩みの内容については調査の対象としていない。

石隈利紀によると、中学生が「友人によく相談することは『先生に対しての不満』『性・異性』『友達とのつきあい』などである。親に相談するのは、『進学・就職のこと』や『成績』である。

略 教師には、『進路の相談』や『勉強方法』などで相談する。また、『勉強の意欲』『家庭に悩み』『友人関係悪い』などでは誰にも相談しない（平均で38%）ようである。」（石隈利紀『学校心理学』1999年11月10日 誠心書房）といった指摘がある。

この調査から、子どもの悩みは複雑で、子どもなりに悩みの内容によって、相談相手を吟味していることがわかる。

5 . 考察

5 - 1 . 現状と課題

悩みを抱えたときの子どものコミュニケーション意識

悩みを抱えたとき、打ち明ける相手がいると回答した子どもは81.5%にのぼる。この数値から、悩みの内容は別として、悩みを抱えたときにコミュニケーションをとることによって解決の糸口を探ろうとするエネルギーを多くの子どもがもっていることが明らかになった。

その一方で存在する、打ち明ける相手がないという17.6%の子どもたちの実態は、本調査では触れていない。この子ども達が、悩みは自分で解決しようとする、自立を志向する健康な子ども達なのか、それとも、人にはとても相談できないような悩みを抱え、解決できずに悩んでいる子ども達なのかを明らかにし、後者の子ども達に対し、何らかの対策を考えることが今後の大きな課題である。

子どもが求める教師像

子どもは教師を決して話しやすい相手としては見ていないことが本調査から明らかになった。この実態は、教師が話しやすい相手にはなっていない現状を指摘している。

さらに、補助調査から、子ども達は教師に

- ア . 教え方が上手である
- イ . 相談にのってくれる
- ウ . 個人的な悩みを聞いてくれる
- エ . 何でも気楽に話せる

といったことを求めていることも明らかになった。子ども達の望む教師像にどれだけ近づけるか、各教師の努力が求められている。

コミュニケーション意識に見られる男女差

本調査において、悩みを話しやすい相手として、男は男友達をあげ、女は女友達をあげている。この実態から、悩みを話す相手を選ぶときに、性差による意識的な区別が働いていることが明らかになった。

男女混合名簿や男女共用の体操着など、目に見えた部分でのジェンダー・フリーは急速に学校では進んでいるが、本質的なところではまだ変わっていない。子ども達は、性別の囚われの中で人間関係を形成している実態がある。

今後は、目に見える部分だけではなく、コミュニケーション意識など、見えない部分でのジェンダー・フリーを進めていくこと、つまり、性別に囚われない人間関係を形成する能力の育成が、課題となるだろう。

女子と母親

悩みを話しやすい相手として母親は女の友達の55.1%に次いで、2位に位置する(44.4%)。しかし、女の友達が年齢と共に上昇していくのに反して、母親は下降していく。これは、子どもの自立が進んでいることを表している。

ところが、中学3年から母親の割合は再び増加している。この増加を、男女別に見ると、女子の割合は再び増加していることが判明する。女の子は中学3年生から高校1年生にかけ、再び母親を頼る傾向があることが明らかになる。これは、年齢があがることによる、悩みの内容が変化したり、両者の関係が変化したりするところに原因があるのではないか。

父親の性別による異なる対応

悩みを話しやすい相手として父親をあげる子どもは15.6%。これは兄弟(19.5%)に次いで、5番目、教師(7.6%)の次に低い数値である。母親の44.4%に比べると、際だって低い。さらに、この数値は年齢と共に減少していく。この結果から、多くの父親は子どもと悩みを話しやすい関係を築くことができていない実態が明らかになった。

また、男女別の推移を見ると、小学4年生から小学6年生までの間に、わずかであるが男女による差が見られる。つまり、男子の方が、女子より、話しやすい相手として父親をあげる割合がわずかに高いのである。これは、同じ時期の母親にはほとんど男女による差は見られないのに比べて特徴的である。このことから、父親は、男女によって異なる対応をしている可能性が感じられる。

5 - 2 . 提言 今後へ向けて

閉ざされた人間関係

今回の調査から、子ども達は、同世代、同性に悩みを打ち明けていることが明らかになった。このことは、子ども達が悩みを閉ざされた人間関係の中で解決をはかろうとしている実態を示している。しかし、子ども達の形成する人間関係が、果たして悩みを解決する機能をもっているのだろうか？

教師の力の限界に気づく

子ども達は、悩み事を相談できる教師、話しやすい教師を求めていた。しかし、悩み事によっては、教師には話さない、あるいは話せないこともあることが明らかになった。このことから、教師は、悩み事を相談できる、話しやすい人間関係を子どもと築くことが求められている。その一方で、教師には解決できない子どもの悩みもあることを、知っておく必要もある。教師の力にも、仕事にも限界があるのである。

6 . 反省と課題

悩みの内容

子ども達は、悩みによって、相談相手を変えている。これは、なにも子どもに限ったことではない。相談相手を選ぶこと自体が重要なコミュニケーション能力である。しかしながら、本調査では、子どもの悩みの内容を十分探求するにいたらなかったことに限界があったといえる。相談する相手により悩みの内容がどのような差異を見せるのか、その傾向を探ることが課題であるといえよう。

悩みをうちあけられない子どもの意識

本調査では、悩みを打ち明けることができる子どもが、話しやすいと感じる相手を問題にしている。むしろ、問題は少数派の悩みを打ち明けられないでいる子ども達の方にある。この子達は、なぜ、打ち明けられないのか？自分で解決しようと努力している結果なのか？それとも、コミュニケーションを拒絶しているのか？そのあたりを解明することが、現代の子どものコミュニケーションの問題解決への糸口になると考える。

[参考] 「都内中学校生徒の教師に期待するコミュニケーションの意識調査」

以下は、坂口京子氏が都内の中学校において実施したアンケートである。

調査者：坂口京子

対象者：中学校2年（男子18名・女子14名 計32名）

中学校3年（男子16名・女子14名 計30名）

質問事項	学年	とても希望する	まあ希望する	それほど望まない	全く望まない
教え方が上手である	2	20 (60%)	9 (28%)	2 (6%)	1 (3%)
	3	7 (23%)	9 (30%)	10 (33%)	4 (13%)
しつけに厳しい	2	3 (9%)	10 (31%)	13 (40%)	6 (18%)
	3	3 (10%)	8 (26%)	15 (50%)	4 (13%)
一緒に遊んでくれる	2	1 (3%)	5 (15%)	11 (34%)	15 (46%)
	3	6 (20%)	5 (16%)	12 (40%)	7 (23%)
相談にのってくれる	2	2 (6%)	18 (56%)	9 (28%)	3 (9%)
	3	4 (13%)	15 (50%)	7 (23%)	4 (13%)

以上の結果について、坂口氏は次のような分析考察を加えている。

「『相談にのってくれる』の項目に関しては、6割を超える生徒が教師とのコミュニケーションに期待し、相談にのって欲しいと答えていることが分かる。今回のアンケートに見る限り、教師への希望・期待が半数を超えている項目は『教え方が上手である』と『相談にのってくれる』であり、生徒は教え方が上手で相談にのってくれる教師像を理想としている点が伺える。

また、『相談にのってくれる』教師への期待は、2学年・3学年両者においてほぼ同一の集計結果となっている。実際、2学年と3学年は生徒の気質も教師の体制もかなり異なっている。他のアンケート項目においてはその点が顕著に表れており、例えば『教え方が上手である』『一緒に遊んでくれる』という項目においてはその差異は歴然としている。これだけの違いが見られる中、『相談にのってくれる』という項目では同様の結果となっている点には注目すべきであろう。

しかし、反面、この結果からは、教師が相談にのっていない現状が浮き彫りにされているとも言える。私自身も含めて教師は生徒達の相談としたいという気持ちを汲み取れていない。言い換えれば、相談相手として教師がこれだけの期待を持たれているのにも関わらず実現できていない現状を分析し、教師及び生徒両者にコミュニケーション上の問題がないかどうかを熟慮する必要があるのだろう。

一方、ここでは『相談の内容』も問題になる。つまり、ここで生徒が相談したいと考える内容がどれくらい内面的で重要な問題かということである。今回のアンケートの場合、生徒が『なやみ』を含む内面的で深刻な内容を教師に相談したいと考えているとは言えないのではないか。特に3年生は、進路の相談というイメージをもった生徒も多いと考える。質問項目を『なやみなどの相談にのってくれる』等にしたほうが本アンケートとの関連が見えてきたかと思う。」

対象：3年（男子30名 女子31名 計61名）

質問項目	とても希望する	まあ希望する	それほど望まない	全く望まない
教え方が上手である	28 (45.9%)	15 (24.6%)	9 (14.8%)	11 (18.0%)
しつけに厳しい	3 (4.9%)	20 (32.8%)	29 (47.5%)	9 (14.8%)
相談にのってくれる	11 (18.0%)	24 (39.3%)	16 (26.2%)	7 (11.5%)
遊びやスポーツの中に入ってくれる	8 (13.1%)	15 (24.6%)	22 (36.1%)	16 (26.2%)
真剣に怒ってくれる	8 (13.1%)	18 (26.2%)	21 (34.4%)	15 (24.6%)
個人的な悩みを聞いてくれる	12 (19.7%)	20 (32.8%)	17 (27.9%)	12 (19.7%)
人生のことを教えてくれる	7 (11.5%)	17 (27.9%)	20 (32.8%)	15 (24.6%)
何でも気楽に話せる	13 (21.3%)	17 (27.9%)	9 (14.8%)	12 (19.7%)

「3年全体の傾向として、『教師へ希望している点』すなわち『期待度がプラスの項目』（とても希望する・まあ希望する）が半数を超えている項目をあげてみると次のようになる。

- 教え方が上手である
- 相談にのってくれる
- 個人的な悩みを聞いてくれる
- 何でも気楽に話せる

この結果は前回のアンケート結果と同様である。というよりも、よりその傾向が明らかになったと考えるべきであろう。この2回の結果から見る限り、生徒たちは『教え方』と『受容的態度』を教師に期待していることがはっきりとした。しかも、何でも気楽に話せる対象、相談にのってくれる対象、ある程度個人的な悩みを聞いてもらう対象として、5割以上の生徒が教師に期待している。

前回のアンケートでは、『相談にのってくれる』という場合の『相談の内容』が問題となつた。ある高等学校の生徒の自由記述には『教師には個人的な悩みは相談したくない。学校でのつきあいだけで十分だ。』というある意味では本音とも言える意見が頻出していた。その点から、今回のアンケートでは『相談はしたいが、内面的な悩みは相談したくない』という結果につながるという仮説を立てた。しかし、結果は上表の通りであり、発達段階、対象生徒の特質などを考慮しても『内面的な悩みを相談したい』と考える生徒が半数はいることに注目すべきと考える。」

3 相互理解に関する意識 ——わかりあえる人はいるか——

分析担当 今井 亮仁

1. 調査の意図

本問は、現代の子ども（児童・生徒）の人間関係・対人関係への意識を問うものである。本問では、「わかりあえる人」の有無を問い合わせながら、その対象である「人」、つまりコミュニケーションの基盤である他者との相互理解に関して、子どもたちがどのような意識を持っているかを明らかにする。コミュニケーションを、言葉を媒体とするものだけでなく、人間関係形成における意識として調査したものである。

2. 調査

2 - 1. 調査問題とその結果

4. 「自分と本当にわかりあえる人はいない」と感じることがありますか。

ア はい	1215人	21.8%
イ いいえ	4275人	76.8%

「ア はい」を選択した人に

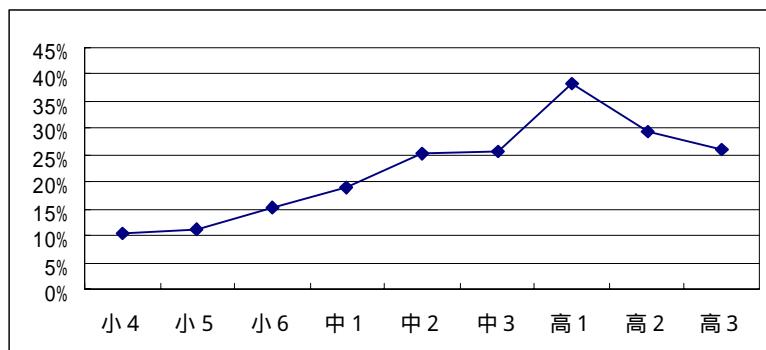
4 - 1 それはどういうときですか

(記述回答) …別記

4 「自分と本当にわかりあえる人はいない」と感じることがあるか。

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
ア はい	男	10.6%	8.9%	9.9%	15.5%	19.7%	25.2%	23.5%	23.7%	25.7%	17.3%
	女	10.1%	14.4%	20.0%	22.2%	31.9%	26.2%	46.0%	34.0%	26.1%	26.0%
	計	10.4%	11.3%	15.2%	19.0%	25.4%	25.7%	38.4%	29.5%	25.9%	21.8%
イ いいえ	男	87.5%	90.5%	88.8%	83.6%	78.6%	73.5%	75.9%	73.7%	70.8%	81.3%
	女	89.2%	85.1%	78.3%	76.8%	66.4%	72.7%	50.6%	66.0%	72.0%	72.6%
	計	88.3%	88.1%	83.3%	80.0%	72.9%	73.1%	59.1%	69.4%	71.6%	76.8%

「はい」の学年別推移



2 - 2. 調査問題の解説

本問は、「わかりあえる人」の有無に関する意識を問い合わせながら、子どもたちの人間関係における現

状を明らかにしようとしたものである。本問では、言葉を媒体とするものだけでなく、子どもたちの対人関係における意識や相互理解に関する意識をクローズアップさせることを目的とした。

選択肢「ア はい」を選択した子どもは、「自分と本当にわかりあえる人はいない」と思ったことが「ある」子どもである。つまり対人関係意識において、過去に一度でも否定的な意識を抱いたことのある子どもである。この子どもたちには、それがどういうとき（あるいは場合）であるかについて、記述回答を求めている。コミュニケーション疎外を感じたとき（場合）の具体的な姿から、子どもがどのような人間関係観を持っているかを明らかにする意図がある。

選択肢「イ いいえ」を選択した子どもは、「自分と本当にわかりあえる人はいない」と思ったことが「ない」という子どもである。これは必ずしも「自分と本当にわかりあえる人」が「いる」ということと同列ではない。が、相互理解・対人関係に関して、少なくとも否定的な意識を抱いたことが、一度もないということである。概ね肯定的な対人関係意識を持つ子どもであると考えられる。以下の考察・分析では、区別を明確にするために、便宜的に「わかりあえる人がいる」子どもとして取り扱っている。

問11は本問と類似した設問であるが、問11が具体的な場面や言葉のやりとりを想定しているのに対して、本問では、他者との人間関係に対する、自己の「意識」に関して問うている。

3. 結果の分析

この調査で明らかになったことは、以下のような点である。

良好な対人意識　問2／問3との連関から

76.8%の回答者が「いいえ」を選択しているということは、多くの子どもがその人間関係において一応の安心感・信頼感の中にいることを示している。これは、問2「同じクラスの人と話すことについてどう思いますか」に対して、「好き」「まあまあ好き」が87.8%、「得意」「まあまあ得意」が68.3%、また問3「なやみがあるとき、それをうちあけることのできる相手はいますか」に対して、「はい」が81.5%であるのと同じ傾向にあるといえる。

問11の「わかつてもらえないと思った」経験との相関関係を見てみよう。

問11とのクロス　良好な対人意識の中での経験

本問で「イ いいえ」を選択した回答者（4275人）のうち、問11「自分の話をわかつてもらえないと思ったことがありますか」に対して、

「ア はい」と回答した者 2970人（69.5%）

「イ いいえ」と回答した者 1245人（29.1%）

本問で「本当にわかりあえる人」が「いる」と回答している子どもでも、その69.5%が「自分の話をわかつてもらえないと思ったことがある」と回答している。逆にいえば、一回的な経験として「自分の話をわかつてもらえないと思ったこと」があったとしても、つまり日常の言葉のやりとりの中で翻訳をきたした経験をもつ子どもでも、それが決して短絡的に相互理解や対人意識を疎外する結果にはなっていないことを示している。（問11 分析3 - 2 参照 96ページ）

「わかりあえる人がいない」という子どもの人間関係意識

21.8%の回答者が「はい」を選択、つまり5人に1人が「自分と本当にわかりあえる人はいな

い」と感じることがあると回答している。この子どもたちは人間関係に問題を抱えているように思われるかもしれないが他の問い合わせとのクロスをしてみると、そうではないようである。

問2(a)とのクロス 話すことの好き・嫌いとの関連

本問で「ア はい」を選択した回答者(1215人)のうち、問2(a)「同じクラスの人たちと話すことについてどう思いますか」に対して、

「ア 好き」「イ まあまあ好き」と回答した者	977人 (80.5%)
「ウ あまり好きでない」「エ きらい」と回答した者	108人 (8.8%)

問3とのクロス なやみをうちあける相手の有無との関連

本問で「ア はい」を選択した回答者(1215人)のうち、問3「なやみがあるとき、それをうちあけることのできる相手はいますか」に対して、

「ア はい」と回答した者	889人 (73.2%)
「イ いいえ」と回答した者	311人 (25.6%)

本問「自分と本当にわかりあえる人がいないと感じことがありますか」に対し「はい」を選択した子どもでも、問2ではその80.5%が「同じクラスの人と話すのが好き・まあまあ好き」と答え、問3では73.2%が「悩みをうちあける相手がいる」と回答している。つまり、「自分と本当にわかりあえる人はいない」と感じた経験はあっても、日常生活の中では良好な対人意識を持っているといえる。

これらのことからも、現代の子どもたちの人間関係に関する意識は概ね良好であり、肯定的であるということがいえる。

やや消極的な対人観 問9／問12との連関から

76.8%の子どもが「自分と本当にわかりあえる人がいないと感じことがありますか」に対し「いいえ」を選択しているということは、多くの子どもが、人間関係において安心感・信頼感の中にありますことを示している。しかし、そうした中にあっても、問9や問12とクロスさせてみると、相手の人生にはあまり積極的に関わらない、という態度が読み取れる子どももいる。

問9とのクロス 親しい友達に注意ができるか、との関連

本問で「イ いいえ」を選択した回答者(4275人)のうち、問9「親しい友達がよくないことをしていたらどうしますか」に対して、

ア「自分でその友達に『よくない』と言う」を選択した者	2824人 (66.1%)
ア以外(直接は言わない)を選択した者	1525人 (35.7%)

問12とのクロス 友達にアドバイスができるか、との関連

本問で「イ いいえ」を選択した回答者(4275人)のうち、問12「友達に相談されたときアドバイスがうまくできますか」に対して、

「ア はい」と回答した者	2589人 (60.1%)
「イ いいえ」と回答した者	1606人 (37.6%)

つまり、「本当にわかりあえる人がいる」と考える子どもでも、35.7%の子どもが「友達がよくないこと」をしていても直接注意せず、37.6%の子どもが「友達に相談されたとき」にアドバイス

がうまくできないと回答している。「わかりあえる人がいる」としながらも、その人間関係はどちらかといえば消極的であるといえる子どもが3人に1人はいることになる。

発達段階と対人意識の関連

本問「自分と本当にわかりあえる人がいないと感じることがありますか」に対し「はい」を選択した子どもの、数値の学年別の推移（##ページの表／グラフ参照）を見ると、小学4年生（10.4%）から中学2年生（25.4%）にかけて上昇し、以降はほぼ25%前後で推移している。高校1年生で特異点はあるものの、中学2年以降はほぼ4人に1人が「はい」を選択していることになる。つまり、発達段階にしたがって「わかりあえる人がいない」と感じることのある子どもの割合が増加していくことになる。

また、男女差を見ると、小学4年生でほぼ同数であるのを除くと、全体に女子のほうが高い割合を示している。

記述回答の分類 コミュニケーション疎外の理由

「はい」を選択した回答者の、記述回答（全1105例）を次の(1)(2)の観点で分類してみた。

(1) 「自分に対する意識（対自）」「他人に対する意識（対他）」に分類

<例> 「自分に対する意識（対自）」

- 自身、自分のことをよく分かっていないと思うから。
- 自信がなくなった時、自分がキレイな時
- ムカつくことがあった時
- 自分が自己中なことを言っているとき
- 自分がちょっと落ち込んでいる時

<例> 「他人に対する意識（対他）」

- 自分の気持ちを理解してもらえないとき
- 自分の考えを否定されたとき
- 本当の友達だと思っていた人にうらぎられた時
- 友達に無視された時・うそをつかれた時
- 自分の悩みをうち明けても真剣に考えてくれないとき

すると、以下のような割合となった。

対自	16%
対他	43%
その他	41%

のことから、子どもたちの対人意識として、やや「対他」的な意識が強いことが読み取れる。つまり人間関係の中で「他人に理解されない」ことにもっとも大きな疎外感を感じていることが示されている。

(2) 「具体的・一回的な経験を示すもの／概念的・恒常的な観念を示すもの」に分類

<例> 「具体的・一回的な経験を示すもの」

- いじめられたとき
- 私が自分なりに精一杯やっていても、誰も認めてくれない時
- 自分が相談している時、突然話の内容を変えられた時。
- 友達とケンカした時

友達に冷たくされた時。友達に避けられた時。自分だけにある話をしてくれなかつた時。

仲間はずれにされた時。

<例>「概念的・恒常的な観念を示すもの」

自分以外の人は他人なんだから、そんなの当たり前。

人には一人一人の価値観があって、違うから

誰も私の世界を理解しないから。

自分のことが分かるのは自分だけだと思う

自己でもよくわからないものを他人にわかってもらうのは無理かと思う。

そんなテレパシー少年などいない。

分かり合える人はいらない

すると、以下のような割合となった。

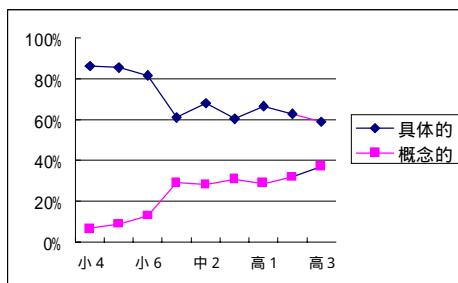
具体的・一回的な経験を示すもの 67%

概念的・恒常的な観念を示すもの 26%

その他 6%

この分類の学年別の推移を表およびグラフにすると以下のようになる。

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
具体的	86%	85%	82%	61%	68%	60%	66%	63%	59%	67%
概念的	7%	9%	13%	29%	28%	31%	29%	32%	37%	26%
その他	7%	8%	3%	10%	4%	9%	5%	5%	4%	6%



これによると、年齢が低いほど具体的な経験を回答した子どもが多いのに対し、学年があがるにつれて概念的な回答が多くなってきている。

(3)また、留意しなければならないことは、「観念的／恒常的な観念」を示す回答の中には、自己閉鎖的で他者を拒絶するようなものが、少数ながら見うけられることである。これらの回答をした子どもの、個別の回答を、問2（同じクラスの人と話すことについてどう思いますか）、問11・2（自分の話をわかってもらえないと思ったことはありますか／そのことをどのように思いますか）、問13（あなたはまわりの人とどのように話したり、聞いたりしたいですか）と並べて示したのが以下の表である。つまり、本問において「観念的・恒常的」な回答をした子どもが、アンケート全体ではどのように回答しているかを見てみると、コミュニケーションに対する「マイナス意識」がより強い傾向にあることが示されている。そういった、アンケート全体を通して、強い「マイナス意識」の読み取れる子どもの回答の一部を以下に並べて示したものである。

学校種	2同じクラスの人と話すことは好き	どうしてか	4.1「自分と本当にわかりあえる人はいい」と感じるのはどう	11どうして自分の話をわかってもらえないと思ったか	そのことをどう思うか	13まわりの人とどのように話したり聞いたりしたいか
-----	------------------	-------	-------------------------------	---------------------------	------------	---------------------------

	か嫌いか		いうときか			
小5男	どちらとも言えない	みんながよく買ってるゲームなどはほとんど知らないから話が合わない・自分の考えをわかってもらえない・相手が何を言っているのかわからない・自分をうまく伝えられない	いつでもだいたいそうだ	指名されてそれに答えてなにかしつぱいすると、それがボクのときはすぐにバカにされてしまうことが多いめにはってんしたことがあったから	それでよい	人と話はあまりしたくない
小5男	どちらとも言えない	どちらともいえない	ことばじゃうまくせつめいできない	りやくすから	とりあえずそれでよい	どうでもいい
小6女	あまり好きでない	話をすることがめんどうだから	ほとんど。でも一人がすきだから、わかってほしくない	自分の話が難しそぎて相手にはわからないから	それでよい	人と話はあまりしたくない
小6女	あまり好きでない	話をすることがめんどうだから・伝えられないから	とんでもなく悪いことをしているし、考えているから	自分の話が難しそぎる・話すのになれない・話下手	それでよい	人と話はあまりしたくない
小6男	嫌い	話をすることがめんどうだから・友がムカツクから	だるいから			人と話はあまりしたくない
中1男	あまり好きでない	話をすることがめんどうだから	他人に自分のことがわかるはずがない	自分から話すのに慣れてない・話下手だから	とりあえずそれでよい	考えたことがない
中1男	嫌い	話をすることがめんどうだから・1人でいたいから・124	いつも	友達が無視するから	それでよい	話したくない
中1男	嫌い	話をすることがめんどうだから	レベルが違う	自分の話が難しそぎて相手にはわからないから	それでよい	人と話はあまりしたくない
中2女	あまり好きでない	話をすることがめんどうだから・気を使ってしゃべるのが疲れるから	自分が特殊な神経の持ち主だから。	友達が聞きたいと思っていない・考えがまとまらない・話下手	とりあえずそれでよい	どのような形でもよい
中2男	あまり好きでない	話をすることがめんどうだから	なんとなく	友達が聞きたいと思っていないと感じるから	とりあえずそれでよい	考えたことがない
中2男	嫌い	うざいから。	しゃべっているとき。	友達が聞きたいと思っていないと感じるから	とりあえずそれでよい	人と話はあまりしたくない
中2男	嫌い	自分の考え方や気持ちをわかってもらえないから	ぼくはマニアックだから	自分から話すのに慣れてない・話下手だから	できれば変えたい	人と話はあまりしたくない
中2男	嫌い	相手が何を言っているのかわからない・みんなイカレてるから	人の言葉がわからない	友達が聞きたいと思っていないと感じるから・Kill	それでよい	自分の話をもっと聞いてもらいたい
中3女	あまり好きでない	相手が何を言っているのかわからない	1人1人考えることはちがうはず。だから、いつもそう思う。	うまくまとめられないから・自分の話が難しそぎて相手にはわからないから	それでよい	考えたことがない
中3男	あまり好きでない	話をすることがめんどうだから・レベルひくい	他人にわかるわけないから。	考え方がまるでちがうから。	それでよい	聞き役に徹する
中3男	あまり好きでない	話をすることがめんどうだから	ほとんどいつも			人と話はあまりしたくない
中3男	あまり好きでない	話をすることがめんどうだから	いつも	自分の話が難しそぎて相手にはわからないから	それでよい	どのような形でもよい
中3男	嫌い	話をすることがめんどうだから	ひみつ。		それでよい	考えたことがない
中3男	嫌い	わかってもらえない・めんどう	いつも。	自分の話が難しそぎて相手にはわからない	とりあえずそれでよい	人と話はあまりしたくない
中3男	嫌い	自分の考え方をわかってもらえない・相手の言うことがわからない・話をするのがめんどう	みんなの言つてることがわからない	向こうの人が何言つてかわからない	それでよい	考えたことがない
中3男	嫌い	まわりの人人がくだらない	まわりと話が合わない	話すのが下手だから	変えたい	考えたことがない

中3男	どちらとも言えない	何も感じてない	いつも	知らん	それでよい	7
高1女	どちらとも言えない	話すことが無いから	すべてにおいて人は一人			考えたことがない
高1女	どちらとも言えない	話をすることがめんどうだから・だるいから・わかつてもらえない・相手のことがわからない・うまく伝えられない	自分は一人しかいないから	いつも	それでよい	どのような形でもよい
高1男	あまり好きでない	話をすることがめんどうだから	いつも	友達が聞きたいと思ってないと感じるから		人と話はあまりしたくない
高1男	あまり好きでない	自分の考えていることをわかつてもらえないから	俺は奥が深い	自分の考えがうまくまとまらないから	それでよい	考えたことがない
高1男	嫌い	自分の考えていることをわかつてもらえないから	僕は孤独	話したくない	それでよい	人と話はあまりしたくない
高3女	嫌い	嫌いだから	ノーコメント	友達が聞きたいと思っていないから・根本的にタイプが「あわないから	とりあえず それでよい	人と話はあまりしたくない

「概念的・恒常的」な意識が必ずしも悪いこととはいえないであろう。むしろ自我意識の形成にともなって「自分は自分、他人は他人」という意識が芽生えるのは当然のことともいえる。ただ、以上のように、非常にマイナス傾向の強い子ども、つまり「同じクラスの人と話すのが嫌い」「自分の話を人にわかつてもらわなくてもいい」「まわりの人と話したくない／考えられない」という悲観的・諦観的なコミュニケーション観を示す子どもの対人意識は、ややもすると「概念的・恒常的」意識が、「自己中心的・自己閉鎖的」意識へとシフトしてしまう危険性があることも指摘しておきたい。

こういったマイナス傾向の強い子どもは、全体から見ればごく一部ではある。しかし少数ながらこういった子どもたちが存在することには留意が必要であろう。

問2／問3／問4のクロス マイナス傾向の子どもの存在

全回答者(5566名)のうち、

問2 同じクラスの人と話すこと 「あまり好きでない」「嫌い」

問3 悩み事を打ち明ける相手 「いない」

問4 本当にわかりあえる人 「いない」

以上のように問2・問3・問4いずれの問い合わせに対してもマイナス意識の回答をした子ども
70名 (全体の1.3パーセント)

4. 共同討議

現代の子どもたちの健康な対人観

「自分と本当にわかりあえる人がいる」と考える子どもが7割以上にのぼるが、現代の子どもたちが、決して人間関係における希薄感や疎外感を抱いていないことが示された。これは、健康で、正常なことである。

教師（大人）の感覚とのズレ

しかしながら、教師（大人）の感覚や実感からは、現代の子どもたちの人間関係は逆に希薄化しているように思える。ここに、大人と子どもの、対人観のズレがあるのではないか。現代の子どもたちは、決して人間関係において悲観的となっているわけではない。対人観においても、大人の観

念的な理想（強固な対人観）で、子どもの人間関係が希薄であると見ることは、誤解であるかもしれない。親・教師はこのことをしっかり認識する必要がある。

「わかりあえる人がいる／いない」は決して子どもの固定観念ではない

「はい」を選択した子どもは、むしろコミュニケーションを求めており、素直で正直な感覚の子どもなのではないか。これがコミュニケーションを拒絶しているのだとはいえない。また、その逆に「いいえ」と回答した子ども、すなわち「わかりあえる人がいる」と思っている子どもはすべて好ましいコミュニケーション（人間関係）の中にあるといい切ることはできないであろう。

緊密な人間関係といえるか

「自分と本当にわかりあえる人がいる」といながらあまり積極的に他者と関わろうとしていない子ども（分析）や、いつも他者からの理解を求める（分析-(1) / 考察）という子どもたちの人間関係・対人意識や態度も読み取れた。多くの子どもが「わかりあえる人がいる」とはいうものの、実際にはそれは脆弱性をはらんでいるのではないだろうか。メールを介したアノニマス（匿名性）のコミュニケーションに安心感を持ったり、人付き合いの中で葛藤を出来るだけ回避しようとする子どもたちの様子を見ると、やはり、他者依存的・消極的なかかわりとしての人間関係の傾向が、76.8%の回答者の中にも含まれるように思われる。そういうた、薄い、脆弱な人間関係の中で、小さなつながりの中にむしろ安心感を見出しているのかもしれない。

問題は、他者依存で消極的であるがゆえに、相手の出方や周りの状況によって、容易に「自分と本当にわかりあえる人がいない」という意識に逆転する可能性を孕んでいるということであろう。異質な他者への誠実な理解の態度をどのように育てていくかが課題である。しかしながら、現実には、日本の社会全体が核家族化・都市化の中で、人ととの葛藤体験を減少させてきている。特に近年は、インターネット等の普及により、ますます社会の匿名化が進み、葛藤をする場が少なくなっていくように思われる。子どもたちが、地域社会や、異質な他者とかかわる体験の場が大切になってくるであろう。

5 . 考察

5 - 1 . 現状と課題

子どもたちの良好な対人意識

76.8%の子どもが「イ　いいえ」を選択、つまり自分と本当にわかりあえる人がいないと感じたことがない、と回答していることから、現代の子どもたちが対人関係において「マイナスでない」意識、つまり概ね「良好」な意識をもっていることが示された。また、「ア　はい」を選択回答した子どもであっても、その記述回答を見る限りにおいては、その多くは一回的な経験を示すものであり、「本当にわかりあえる人がいない」ということが固定観念化してしまっているわけではない。このことは、他の質問項目に対する回答からも裏付けられる。これは、人間関係における、健康で正常な状態を示している。

自己閉鎖的な子どもの存在

しかし、ごく一部（「ア　はい」を選択回答した子どもの、記述回答を分類した中の、数パーセント）ではあるが、「わかりあえる人がいない」ということが固定観念化し、自己閉鎖的で他者を拒絶するような子どもの存在も示されることとなった。ここで特徴的なのは、具体的な経験よりも、

概念的な回答が多くなることである。この中には、自らの殻をつくり、そこに「ひきこもる」ような態度もみられる。言い換えれば、共感の感覚に対する閉鎖であり、異質な他者に対する拒絶の態度である。

自己認識と、差異としての他者

本問「自分と本当にわかりあえる人がいないと感じることがありますか」に対し「はい」を選択回答した子どもの割合を見ると、小学4年生(10.4%)から中学2年生(25.4%)にかけて上昇し、以降はほぼ25%前後で推移している。つまり、特に中学2年生にかけては学年があがるにつれて「わかりあえる人がいない」と感じることのある子どもの割合が増加していることになる。また、「それはどういうときですか」との質問への記述回答を見ると、小学生では、具体的・一回的な事例的回答が多いのに対し、中1より上の学年になると、概念的・恒常的な回答が多くなる(42ページ表/グラフ参照)。

これは、一つには発達段階における自我形成と関連していると考えられる。つまり、他者を認識し、その差異を受容するなり拒絶するなりいずれの態度をとるにしても、そこには前提として「自己認識」が必要となってくる。中学生くらいの年代は、ちょうど自己認識・自我同一性の芽生えが生じる頃にあたると考えられている。その、自己認識・自我同一性の芽生えから確立へと向かう過程において、その鏡として異質なる他者を意識し、それとの差異への態度・意識のあり方が、対人意識として明確になっていくということである。

また一方で、具体的な経験の蓄積によって概念的なものを生じさせた結果とも考えられる。概念的なものが、具体的な経験の積み重ねで出来ていくものだとすれば、で考察したような自己閉鎖的な意識やコミュニケーションに対する悲観的な意識、心理的な「ひきこもり」というのは、人間関係における様々なトラウマ(「相手が理解してくれないから」といった類の回答に示されるようなもの)によって生成されていくものであるといえるかもしれない。たとえば、「はい」を選択しているある小学生のアンケート全体を見ると、「いじめ」を受けるような状況下にあったことが推察されるが、そういう場合、その苦悩によっては対人意識が否定的にならざるを得ないのでないだろうか。

学校種	2同じクラスの人と話すことは好きか嫌いか	どうしてか	4.1 「自分と本当にわかりあえる人はいない」と感じるのはどういうときか	11どうして自分の話をわかってもらえないと思ったか	そのことをどう思うか	13まわりの人とどのように話したり聞いたりしたいか
小5男	嫌い	自分の考え方や気持ちを伝えられないから	やすみじかん	話すのが下手だから	変えたい	人と話はあまりしたくない
小6男	嫌い	バカにされるから	つくえなどをたおされたとき	むしされるから	それでよい	考えたことがない
小5男	嫌い	友だちが一人で、ほかの人にはなすとわるぐちいわれそうだから(Aくんのばあいちかづいただけで)	自分がいやなとき。こんな弱い自分が	他人が聞きたいと思っていないと感じる・自分の考えがまとまらない・話下手	できれば変えたい	友だち以外とは、したくない(友一人)

理解されないことの悩み

本問「自分と本当にわかりあえる人がいないと感じることがありますか」に対し「はい」を選択回答した子どもの記述回答を見てみると、まず特徴的なのは、対他の意識、つまり「相手が理解してくれないから」といった意味を示すものが、記述回答のうちの半数近く(43%)を占めたことである。つまり、「自分とほんとうにわかりあえる人がいない」と考える回答者の意識として、「自分が他人から理解してもらえなかった」という思いが強いということである。

このことは、現代の子どもたちが、人間関係において、「他人(相手)から理解されない」とい

うことに、大きな悩みを抱えていることを示している。それは、自分から積極的に相手に働きかけるというよりも、相手の理解を求める、といったいわば「他者依存のコミュニケーション」ともいえる受動的な態度である。

子どもたちは、人間関係においては相手に理解されたいという意識を潜在的に持ち、それがつまづいたり、障害になったときに「自分と本当にわかりあえる人はいない」という意識が顕在化する。つまり、コミュニケーションの「意識面」においては、他者依存の傾向があるということである。また、他者依存型の回答は、具体的な経験を示すものが多いのもひとつの特徴である。

5 - 2 . 提言 - 今後へ向けて -

本調査をふまえるとき、今後、以下のようなことが大事になる。

子どもたちの人間関係意識は概ね良好である

子どもたちの問題行動などをクローズアップするとき、大人はえてして、子どもの人間関係が希薄化・空洞化してしまっているなどと捉えがちである。しかしながら、多くの子どもたちの対人意識は、本問で分析・検討したように必ずしもマイナスであるということはいえないようである。このことを大人はきちんと認識しておく必要がある。

少数の自己閉鎖的な子どものコミュニケーションをいかに開くか

ごく一部であるが、自己閉鎖的な対人観を示す子どもの存在があることも確かである。こういった子どもの存在をどう考えていくべきか。学校教育の役割としてこういった子どもをクローズアップし対処することが適切・可能であるのか。社会全体の問題としてとらえていくべきであるのか、反省・検討されなければならない。

6 . 反省と課題

「『自分と本当にわかりあえる人はいない』と感じことがありますか」という問い合わせに対して「いいえ」を選択した子どもが、必ずしも「わかりあえる人」が「いる」子どもとは限らない点は、この調査にあたっての不備といわざるを得ない。つまり、多くの子どもが「少なくともマイナスではない」対人意識を持っていることは明らかになったが、それが積極的・肯定的な、より「プラス思考の」対人意識といえるかどうかは、具体的には明らかにできなかったからである。どれくらいの子どもたちが、「自分と本当にわかりあえる人」が「いる」という、真に安心感の得られる人間関係の中にいるのかは、今後明らかにしていく必要があるだろう。

また、問い合わせの問題も残された。つまり、問い合わせが否定形のため、子どもたちの、そうありたくない、という意識が回答のときに働いたことが考えられることである。確かに、「自分と本当にわかりあえる人はないと感じことがありますか」という質問の文言は、子どもたちにとっては、ある意味でややショッキングな問い合わせであったかもしれない。「自分と本当にわかりあえる人はいない」などとは答えたくない、そんなふうに自分をさせたくない、という思いが「いいえ」を選択させたという心理的側面があるかもしれない。現実の姿をどの程度反映できたかが課題として残った。

4 教師の指名に関する意識

指名されてどう思ったか

分析担当 渡辺 通子

1. 調査の意図

ここからは、学校の授業中のことについて、子ども（児童生徒）の意識を問う問い合わせである。

授業は、教室における構成員である教師対生徒、あるいは生徒対生徒という関係において成り立つ。授業とは本来、<学び>という明確な目的を持つ時間であることから、生徒にとって授業へ参加することは、学校生活の中の休み時間や放課後など、その他の時間とは違った特殊な場 - それはより<公的>な場といつていいだろう - に臨むことである。

本問は、授業という公的な場における子どもの発言に関する意識を明らかにする。生徒は発言に関して、どのような意識をもっているのだろうか。授業の成立には、その構成員である教師と生徒のかかわりが必須である。この場合、これまで教師先導型で進められるのが一般的な授業のあり方であるとされてきた。ここでは、授業時の教師の指名に対して、子どもがどのような受け止め方をしているのかを明かにしようとする。さらに、教師の指名に対し、生徒はどのような受けとめ方をするのか、またそのような意識を持つ理由は何であるのかを明らかにしようとする。そのことによって、授業という場が、生徒にとって、どのような場として意識づけされているのかが明らかにされよう。

2. 調査

2-1. 調査問題とその結果

5 先生に指名されて、(a)うれしいと思ったとき、(b)うれしくないと思ったときはありましたか。また、ある場合はそれぞれどのようなときだったか答えてください。

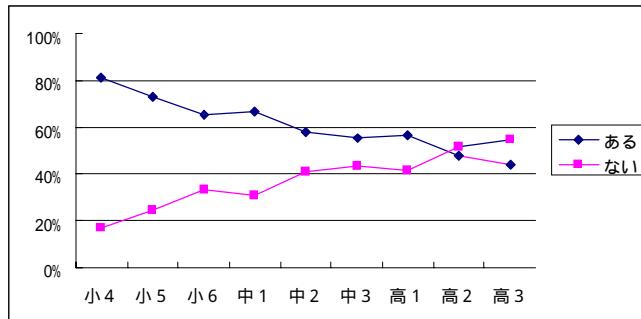
(a)うれしいと思ったとき

ア ある	3426人	61.6 %	
イ ない	2046人	36.8 %	無答誤答 1.6%

【表1】

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	全体
ア ある	男	76.3%	70.5%	67.1%	71.3%	58.5%	53.2%	41.4%	39.7%	38.9%	61.6%
	女	87.1%	76.3%	63.8%	62.4%	57.7%	57.4%	64.6%	54.2%	46.4%	
	計	81.3%	73.1%	65.3%	66.6%	58.1%	55.3%	56.8%	47.9%	43.8%	
イ ない	男	21.3%	27.2%	31.0%	27.3%	39.8%	45.1%	56.8%	59.0%	60.2%	36.8%
	女	12.2%	21.9%	35.1%	34.5%	41.5%	41.3%	33.9%	45.8%	51.7%	
	計	17.1%	24.8%	33.1%	31.1%	40.6%	43.2%	41.5%	51.5%	54.7%	

グラフ 1



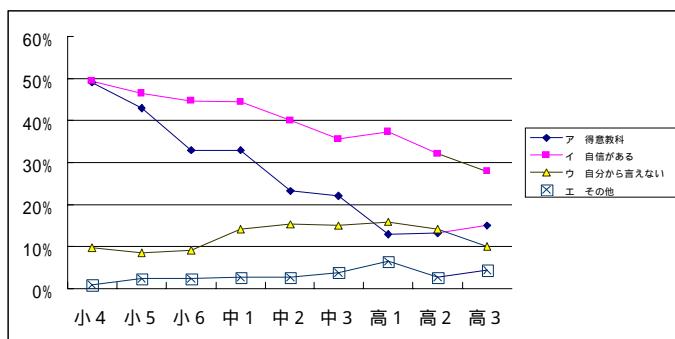
((a) でアと答えた人に) それはどのようなときか <複数回答可>

ア 得意教科の時間	1550人	45.2%
イ 自分の意見に自信があるとき	2246人	65.6%
ウ 言いたいのに自分からは言えないとき	706人	20.6%
エ その他	475人	5.1%

【表1】(a) どのようなとき (複数回答可) [5 (a) ア 回答者]

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	分母
ア 得意教科	男	62.3%	60.5%	53.8%	50.0%	41.6%	41.5%	31.3%	33.9%	36.4%	49.1%	1620
	女	58.7%	56.6%	46.8%	48.5%	38.3%	38.2%	19.7%	23.6%	33.3%	41.7%	1806
	計	60.5%	58.7%	50.2%	49.3%	40.1%	39.8%	22.5%	27.3%	34.3%	45.2%	3426
イ 自信がある	男	57.4%	61.7%	65.2%	67.3%	68.9%	67.2%	61.2%	74.2%	59.1%	65.1%	1620
	女	64.5%	65.7%	71.8%	65.7%	68.9%	61.2%	67.3%	62.7%	65.6%	65.9%	1806
	計	60.9%	63.5%	68.6%	66.5%	68.9%	64.1%	65.8%	66.9%	63.6%	65.6%	3426
ウ 自分から言えない	男	11.5%	7.0%	11.4%	12.9%	17.6%	22.3%	13.4%	17.7%	18.2%	14.1%	1620
	女	12.4%	17.2%	16.4%	29.7%	35.9%	32.0%	32.7%	36.4%	25.0%	26.5%	1806
	計	11.9%	11.7%	14.0%	21.1%	26.1%	27.3%	28.0%	29.7%	22.9%	20.6%	3426
エ その他	男	0.8%	2.6%	2.9%	4.4%	3.8%	6.6%	11.9%	4.8%	11.4%	4.4%	1620
	女	1.7%	3.7%	4.1%	3.3%	5.8%	7.4%	11.1%	6.4%	9.4%	5.8%	1806
	計	1.2%	3.1%	3.5%	3.9%	4.7%	7.0%	11.3%	5.8%	10.0%	5.1%	3426

グラフ 2



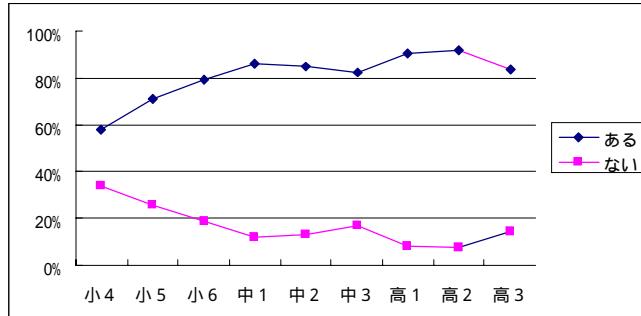
(b) うれしくないと思ったとき

ア ある	1829人	81.1 %
イ ない	355 人	16.1 %

【表2】

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	全体
ア ある	男	54.4%	64.1%	73.8%	81.6%	79.1%	76.6%	79.6%	84.0%	73.5%	
	女	61.9%	79.7%	84.1%	90.1%	92.2%	87.5%	96.0%	98.0%	88.9%	
	計	57.9%	71.1%	79.2%	86.0%	85.2%	82.1%	90.5%	91.9%	83.4%	81.1%
イ ない	男	35.6%	31.5%	24.3%	16.7%	18.7%	22.4%	18.5%	14.7%	22.1%	
	女	32.4%	19.0%	14.5%	7.8%	6.4%	11.9%	2.8%	2.0%	10.1%	
	計	34.1%	26.0%	19.1%	12.0%	13.0%	17.2%	8.1%	7.5%	14.4%	16.9%

グラフ3

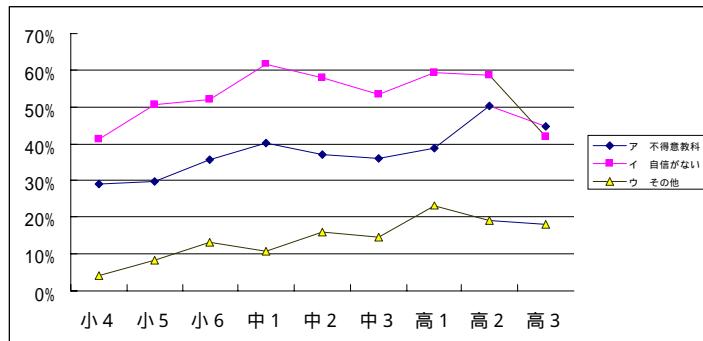


((b) でアと答えた人に) それはどのようなときか <複数回答可>	
ア 不得意教科の時間	2060人 45.7 %
イ 自己の意見に自信がないとき	3009 66.7 %
ウ その他	768 17.0 %

【表4】(b) どのようなとき (複数回答可) [5 (b) ア 回答者]

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
ア 不得意教科	男	47.1%	37.3%	48.1%	38.0%	39.8%	38.3%	43.4%	48.9%	42.2%	41.0%
	女	53.5%	46.5%	42.8%	53.9%	47.4%	49.3%	42.7%	58.3%	58.7%	49.3%
	計	50.3%	41.9%	45.1%	46.7%	43.6%	44.1%	42.9%	54.5%	53.6%	45.7%
イ 自信がない	男	69.0%	68.8%	60.6%	70.1%	61.2%	64.2%	57.4%	56.5%	50.6%	63.5%
	女	73.3%	73.9%	70.0%	73.3%	74.8%	65.8%	68.9%	68.3%	50.0%	69.2%
	計	71.1%	71.3%	65.8%	71.9%	68.0%	65.0%	65.5%	63.6%	50.2%	66.7%
ウ その他	男	6.9%	10.6%	13.4%	10.9%	17.4%	16.9%	24.0%	20.6%	21.7%	15.2%
	女	7.0%	13.2%	19.3%	13.6%	20.4%	18.3%	26.5%	20.6%	21.7%	18.5%
	計	6.9%	11.9%	16.7%	12.4%	18.9%	17.6%	25.8%	20.6%	21.7%	17.0%

グラフ4



2 - 2 . 調査問題の解説

この問いでは、教師の指名が授業の展開に重要な役割をなすものであるということが前提となっ

ている。そしてその教師の指名は、子どもの意識に何らかの影響を与えることになると考えられる。

理由の選択肢については、教科に関する子どもの得手不得手意識にかかるもの（「(a)ア 得意教科の時間」・(b)「ア 不得意教科の時間」）、自身の発言に対する子どもの意識にかかるもの（「(a)「イ 自分の意見に自信があるとき」・(b)「イ 自分の意見に自信がないとき」）、授業の中でのコミュニケーションの場への参入意識にかかるもの（「(a)「ウ 言いたいのに自分からは言えないとき」）の三点を設けた。

3. 結果の分析

教師の指名をきっかけとしたコミュニケーションについて

教師に指名されて「うれしいと思ったことがある」と答えたのは61.6%（3426人）で、半数を超えており、「うれしいと思ったことがない」の36.8%（2046人）を上回っている。このことから、教師の指名が有効に機能しながら教室のコミュニケーションが成立していることがうかがえる。

「うれしいと思ったことがある」と答えた子どものうち、「言いたいのに自分からは言えないとき」と答えたのは20.5%（706人）で、およそ五人に一人は教師から指名されることで初めて発言の場を得ていることになる。この項目の数値が増えるのは、中学1年時までで、その後はほぼ横バイ傾向を示す。

さらに、学年別の発達段階による傾向を見ると、「うれしいと思ったことがある」と答えるのは、中1・高1でわずかな上昇が見られるものの、全体としては学年が上がるにつれて減少傾向を示し、最も高い小4で81.3%だった数値は、小6で65.3%、中3で55.3%と過半数となり、高3では43.8%と半数を切っている。特に男子においては、高校段階で極端に減少し、30%台まで落ちこんでいる。

反対に、「うれしいと思った時がない」と答えたのは、中1・高1で若干減るもの、全体として学年が上がるにつれて上昇傾向を示し、「うれしいと思った時がある」の結果と対照的な傾向を示している。男女の差異についても同様に対照的で、小4で最も低い17.1%だった数値は、小6で33.1%に、中3で43.2%、高3では54.7%と過半数を超えるようになる。

男女差が縮まるのは、小6と中2で、この時期を境にしながら男女の傾向に違いが見られる。すなわち小学校段階では「うれしいと思った時がある」と答えるのは女子が男子を上回るが、中学段階になると逆転して男子が女子を上回る。高校段階では、さらに逆転して女子が男子を上回るようになる。

それに対し「うれしくないと思った時がある」と答えたのは、「うれしくないと思った時がない」の16.9%（355人）をはるかに上回り、81.1%（1829人）にものぼる。教師の指名が必ずしも効果的に機能していないことがわかる。

また発達段階による傾向を見ると、「うれしくないと思った時がある」は、小4（57.9%）から中1（86.0%）まで上昇傾向を示すが、それ以降は80%台に安定していることから、教師の指名をきっかけとした、あるいは教師の指名を中心に展開される授業のスタイルは、中学1年までに定着していることがうかがえる。

教師の指名をきっかけに自己表現の場を得ていくというコミュニケーションのスタイルは、低学年及び女子の小学校・高校段階、男子の中学校段階に特徴的ともいえる。男子の高校段階では全学年を通して、「うれしいと思った時がある」と答えるのが40%前後に落ち込み、「うれしいと思った時がない」が60%前後に伸びることから、寧ろこうしたスタイルに否定的であることがみてとれる。

指名発言と反応の様相 (a)(b)のクロス集計の結果

【表6】は、(a)(b)のクロス集計の結果を示したものである。(a)(b)をクロス集計することにより、授業中の教師の指名に対する子どもの意識について、【表5】に示したような次の四つのパターンと数値が得られた。

【】教師の指名に対して常にうれしいと意識する者	509人	9.1%
【】教師の指名に対してうれしかったりうれしくなかったり意識する者	2854人	51.3%
【】教師の指名に対して常にうれしくないと意識する者	1601人	28.8%
【】教師の指名に対して無関心を示す者	425人	7.6%

【表5】

【】教師の指名を常にうれしいと意識する 9.1%	【】教師の指名を常にうれしくないと意 識する 28.8%
	【】教師の指名をうれしいと意識すること もあり、うれしくないと意識することもある 51.3%
【】教師の指名に対して関心を示さない 7.6%	

【表6】(a)(b)のクロス集計結果 (分母は全生徒数5566人)

		うれしくないと思ったとき	
		ある	ない
うれしいと思ったとき	ある	2854人 51.3%	509人 9.1%
	ない	1601人 28.8%	425人 7.6%

「うれしいと思った時がある」と答えながら「うれしくないとと思った時がある」と答えている【】のパターンの生徒は51.3% (2854人) である。ほぼ半数の生徒が教師の指名に対して、うれしいと思うこともあり、またうれしくないとと思うこともあるという実態も見られる。

指名されることに対して、常に「うれしいと思っている」【】のパターンの生徒は9.1% (509人) である。それに対し、指名されることに対し、常に「うれしくないとと思っている」と答えた【】のパターンの生徒は28.8% (1601人) で、およそ三人に一人弱は指名されることに対して常に否定的であることがわかる。

さらに、【】のパターンである「うれしいと思ったときがなく、かつうれしくないとと思った時もない」という教師の指名に対して何等関心を示そうとせず、授業に参加することに無関心とも受けとめられる生徒の数は7.6% (425人) となっている。

教師の指名をうれしく思ったりうれしくないとと思う理由

教師の指名をうれしいと思う理由については、「自分の意見に自信がある時」が最も多く65.6% (2246人) で全学年を通じて、常に教師の指名をうれしく思ったり思わなかったりする第一の理由となっている。次いで「得意教科の時間」と答えたのが45.2% (1550人) となっている。また「言いたいのに自分からは言えないとき」と答えたのは20.5% (706人) で、およそ五人に一人は教師から指名されることで初めて発言の場を得ていることになる。

さらに、これを発達段階別に見ていくと、「自分の意見に自信がある時」と「得意教科の時間」の両項目は、他の項目と比べ明らかに減少傾向を示している。特に「得意教科の時間」は、高校段階で著しい減少を示し、「自分から言えないから」とほぼ同数の10%台となる。

「エ その他」と回答したもので、記述による回答は171例あった。主なものとして以下の項目が挙げられる。

分母は171人

・「言いたいから」「発言したいから」	14例	8.2%
・「自分だけができるから」「他の人が答えられないのに知っているから」	12例	7.0%
・「予習ができている時」	12例	7.0%
・「好きな先生の時」「先生に興味がある時」	12例	7.0%

「言いたい時」「発言したい時」に指名されることで、子どもは表現の場を得ることをうれしいと意識する。また、あらかじめ「予習をして」発言する内容的理解が充分であるときやクラスの中で他者との比較において、より理解できていると意識付けられた時に、発言することをうれしいと意識し、対教師との関係における好悪の意識までが表現意欲につながっている。

教師の指名をきっかけにした、あるいは指名中心の授業は、教師の指名のタイミングによって、つまり生徒のモチベーションの高まりをいかにしてとらえるかによって、内容の理解を超えて生徒との関係作り如何によって活性化するといえよう。

教師の指名をきっかけにしながら発言を促すという授業におけるコミュニケーションのあり方は、学年が上がるにつれて定着し、教師の指名を中心とした授業のスタイルになっていくことが見て取れる。また同時に、教師の指名をきっかけにした発言が、その授業のなかで、ある一定の価値づけ（一元的な価値づけ）がなされるため、発言した自分の意見に価値づけがなされるという自信がある時にのみ発言しようとする教室コミュニケーションの質のあり方がうかがえる。

教師の指名を「うれしくないと思ったときがある」と答えたもののうち、その理由については、「自分の意見に自信がない時」と答えたのが最も多く66.7%（3010人）で、次いで「不得意教科の時間」と答えたのが45.7%（2061人）である。「その他」と答えた者は17.0%（769人）で、「指名されてうれしい時がある」と答えた者の理由の「その他」の5.1%（175人）を大きく上回ることから、うれしくない理由は、多様であることがわかる。

その他

教師の指名を「うれしくない」と答えたもののうち、記述式による回答は582例あった。その主なものは以下のとおりである。
分母は582人

・「わからない時」「考えていない時」	105例	18.0%
・「先生が嫌いだから」	71例	12.2%
・「めんどうだから」「めんどうくさいから」	50例	8.6%
・「指されたくないから」「発言するのがいや」「答えたくないから」	42例	7.2%
・「聞いていなかった時」	36例	6.2%
・「眠いとき」「寝たい時」	34例	5.8%
・「みんなの前で話すのが嫌だから」「あがり性」「恥ずかしいから」	33例	5.7%
・「宿題をやっていない時」「予習していない時」	28例	4.8%

これらを大別すると、授業という場への拒絶や不適応（「めんどうだから」「指されたくない」「答えたくない」）、教師への反発（「指されたくない」「先生が嫌いだから」）、教室における対他意識（「みんなの前で話すのがいやだから」「恥ずかしいから」）、心理的肉体的不快感（「眠い時」「寝たい時」「あがり性だから」）、その他に分けることができる。

指名され、質問されたことに対し、「わからない時」や「考えていない時」など、また「宿題や予習が充分でない時」という内容理解に関する回答が最も多かった。このことは、教師の指名の意図を多くの子どもが内容理解に関するものと受けとめていると見て取れる。

そうした意識で授業に臨むことで、授業というものが生徒にとっては<公的な場>となり、発言の際には何らかのプレッシャーを伴うものとなっている。教師の指名は、ある意味で緊張の強要でもあり、教師の指名に対する子どもの意識には、授業という枠組みに、教師によって半ば強制的に組み込まれてしまうことへの反発もあると考えられる。また教師の指名を中心とした授業 자체を教師による管理と受けとめる生徒もいる。

4 . 共同討議

教師に指名されて、「うれしいと思った時がある」と答えた回答率は61.6%で、全体の半数を上回っている。この数値を高いとみるのか、低いとみるかについては意見の分かれることもある。教師は「うれしいと思った時がない」と答えた子どもが36.8%もいることを自覚しながら授業を進める必要がある。

授業時における教師の指名について、そのことに子どもがうれしく思ったり、あるいはその反対の気持ちになったりと感情を動かしていることに、教師はどこまで自覺的になっているのかといった教師の意識については、この調査からはみることができないが重要な問題である。

記述回答に見られる、 授業という場への拒絶や不適応、 教師への反発、 教室における对他意識、 心理的肉体的不快感、 その他 には充分配慮する必要がある。

学習のきっかけとしての教師の指名を否定するものではないが、授業における子どもの発言のきっかけとしての教師の指名の在り方を問い合わせなおす必要がある。それは授業の在り方を問い合わせ直すことでもあり、子どもの学ぶ姿勢を問い合わせ直すことでもある。

5 . 考察

5 - 1 . 現状と課題

教師と生徒のコミュニケーション意識の齟齬

この問いは、授業における教師と生徒との関係についての問題も浮き彫りにしている。第一は、教師の指名のあり方が生徒を心理的に開放するものになっておらず、逆に緊張を強いているという問題である。第二に、教師の指名が生徒にとって必ずしも有効に働く場合には、授業におけるコミュニケーションを沈滞させるばかりでなく、指名されること自体や発言すること自体を厭うようになり、指名自体が時として教師と生徒のコミュニケーションを阻害するものとして機能してしまうという問題である。問い合わせ3であきらかになった「悩みをうちあけることのできる相手」として教師が最も低い数値であるのも授業での教師と生徒のコミュニケーション意識の齟齬が何らかの影響を及ぼしているのではないかと考えられる。

コミュニケーションの質を固定化する一元的価値付け指向の教師による指名

授業中の教師の指名が、教室コミュニケーションの質の重要な鍵を握っていることは明らかである。

教師の指名について、反対に指名されてうれしいと思った時の理由で最も多いのは「自分の意見に自信があるとき」65.6%（2246人）、指名されてうれしくないと思った時の理由で最も多いのは「自分の意見に自信がないとき」66.7%（1745人）であり、指名されてうれしい時もうれしくない時も「自分の意見」の価値にかかる回答である。いずれも65%を超えており、発言の内容につい

て、価値付けされる意見を述べることに発表の意義を認めている傾向がみてとれる。「自分の意見に自信があるとき」に指名されれば「うれしい」が、反対に「自分の意見に自信がないとき」に指名されると「うれしくない」のである。生徒の多くは、授業に関する内容的な理解がないと指名をうれしく思わないと言える。

このことは、子どもの意識の中で、教師の指名は内容的理解の確認が主なる目的であると受けとめられているためと考えられる。教師の指名の意図を問い合わせに対する内容的理解の確認を求めるものであるととらえる傾向が強いために、不得意と意識する教科の授業や答えに対し、自信のない場合には、指名がマイナスの効果をもたらしている。

授業という枠組み

授業におけるコミュニケーションが、教師の指名によって展開するという特殊なものであるにもかかわらず、教師に指名されて「うれしいことがある」と答える子どもの数は、全体の61.6%と半数を超える、また51.3%（2854人）の子どもが指名されることをうれしいと思ったり、うれしくないと思ったりしていることから、生徒の大多数は、授業という場においても表現意欲をもっているといえる。

ところが同時に、本調査からは、学年が上がるにつれて、この数値は減少傾向を示し、そういう場での表現が閉ざされて行くこともまた明らかになった。学年が上がるにつれ、授業での表現意欲を失い、教室コミュニケーションから回避しようしたり、自己表現を自ら閉ざして行く傾向もまた見て取れる。

教室という場は、子どものコミュニケーションの意識を活性化させる可能性を持つ場であるとともに、子どものコミュニケーション意識を閉ざす場となり得ることもある。

教師に指名されることをうれしくないとする理由については、選択肢の「ア 不得意教科の時間」・「イ 自分の意見に自信がないとき」にあてはまらず、「ウ その他」と答えている子どもが、小中学校では一桁から10%台であるが、高校においてはいずれの学年も全体の平均値17.0%を上回る数値である。これは心理的な発達上の問題によるものなのか、それとも高校における授業のあり方や教師の指名のあり方によるものなのか、何らかの問題の反映と考えられる。

また、記述による 授業という場への拒絶・不適応 教師への反感・反発 教室における対他意識 心理的肉体的不快感 その他 といった回答をする子どもがいることも十分に配慮がなされなければならない。授業は生徒にとっては公的な場であり、それだけで発言には何らかのプレッシャーを伴うものである。教師の指名は、ある意味で緊張の強要でもある。教師の指名に対する子どもの意識には、授業という枠組みに、半ば強制的に組み込まれてしまうことへの反発、教師の管理に対する反発もあると考えられる。

指名を前提とした授業の在り方

本問の調査結果は、教師による指名を授業成立の要因とする授業観、そして教師の指名を学習活動の手段とする教師中心の授業の在り方に対して、問題提起がなされたとも見て取れる。もちろん、伝統的なこの授業観を否定するものではないが、「指名されること自体が嫌」「先生が指名しなくても自分が発言したくなる時にする楽しい授業にすれば必要ないはず」「言いたい時には手を挙げるから、手を挙げていない人をむやみに当てないでほしい」とする子どもたちの声を見逃すわけにはいかない。

「先生がわかっているのかを確認するためだから別にいいと思う」「明らかに不真面目に取り組んでいた僕への見せしめにしか思えなかった」などの回答に見られるように、教師の指名が、内容的理解を確認するだけのものになっていて、授業の構成員全員がかかわるようなコミュニケーション

ンを活性させる働きかけが見られないこと、あるいは、注意をするためのものとして機能するため、結果的に、一人の生徒を見せしめや恥をかかせるために大勢の他者を意識させるというコミュニケーションになってしまっているという事実である。

5 - 2 . 提言 - 今後に向けて -

以上のように、授業が教室という場において、教師という知的側面やその他で優位にたつ者と生徒との間のコミュニケーションによって展開されているという動かせない現実を再確認することが必要である。教師に指名されることをうれしくないとする子どもがその理由として挙げている生徒の意識の根底にあるのは、教師の指名を「教師」対「我」あるいは「授業者」対「被授業者」という関係でとらえているという事実である。「教師と生徒」の関係をどうとらえるか、またどうとらえなおすのかを踏まえた上で、授業のダイナミズムを再生する必要がある。従来、指名を媒介にしてとらえがちであった授業中の教師と生徒の関係の見直しが必要とされる。

6 . 反省と課題

「(a)うれしいと思ったとき」及び「(b)うれしくないと思ったとき」の理由を問う(b)の選択肢がいずれも(a)では「ア 得意教科の時間」「イ 自分の意見に自信があるとき」「ウ 言いたいのに自分からは言えないとき」、(b)では「ア 不得意教科の時間」「イ 自分の意見に自信がないとき」と限られたものとなっている。そのほかに、場の条件等に関する選択肢を加える等して詳細に調べる必要がある。

5 授業中の発言に関する意識

——発言することについてどう思うか——

分析担当 渡辺 通子

1. 調査の意図

本問は、子ども（児童・生徒）の授業中の発言についての意識を問うものである。授業という改まった集団の<公的>な場における子どもの発言意識を明らかにしようとするものである。指名されてからではない自主的な発言に対して、子どもがどのような意識を持っているのか、そして、実際にはどのような行動をとったのか、意識と実態の違いを明らかにする。

さらに、発言しなかったと回答した者に対して、発言したかったにもかかわらず、発言を抑制した理由が何であるのかを問うことで、子どもの授業における発言意識を疎外する要因を明らかにする。

2. 調査

2-1. 調査問題とその結果

6 「授業中発言したくなることはありますか」

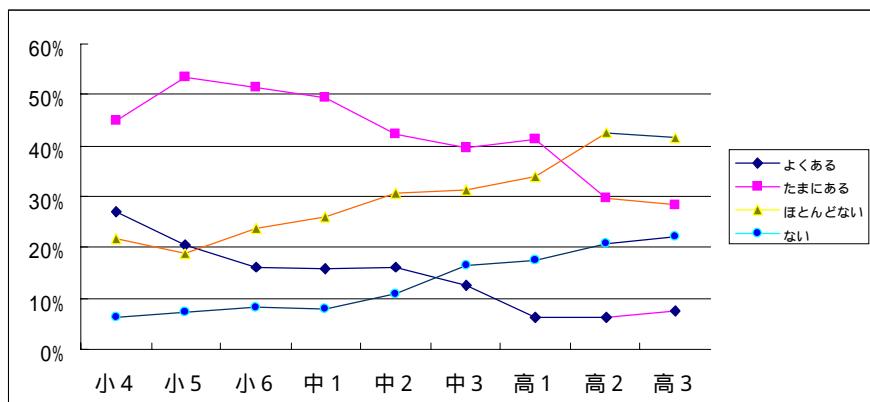
ア よくある	817人	14.7%
イ たまにある	2448人	44.0%
ウ ほとんどない	1596人	28.7%
エ ない	684 人	12.3%

(無答・誤答 21人)

【表1】

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	
ア よくある	男 30.6%	23.1%	19.8%	19.5%	20.1%	15.0%	6.2%	10.9%	8.8%	
	女 23.0%	17.5%	13.0%	12.3%	11.5%	9.9%	6.2%	3.0%	6.8%	
	計 27.1%	20.6%	16.3%	15.7%	16.1%	12.4%	6.2%	6.4%	7.5%	14.7%
イ たまにある	男 41.9%	51.8%	47.0%	53.4%	42.0%	40.8%	35.2%	29.5%	28.3%	
	女 48.2%	55.3%	55.7%	46.0%	42.6%	38.3%	44.4%	30.0%	28.5%	
	計 44.8%	53.3%	51.5%	49.5%	42.3%	39.6%	41.3%	29.8%	28.4%	44.%
ウ ほとんどない	男 20.6%	16.9%	24.6%	20.4%	28.5%	27.1%	39.5%	39.7%	42.5%	
	女 23.0%	21.1%	22.9%	31.1%	33.1%	35.3%	31.4%	44.8%	41.1%	
	計 21.7%	18.8%	23.7%	26.0%	30.6%	31.2%	34.1%	42.6%	41.6%	28.7%
エ ない	男 6.9%	8.2%	8.0%	6.0%	8.8%	16.7%	18.5%	19.2%	20.4%	
	女 5.8%	5.7%	8.4%	9.9%	12.9%	16.4%	16.8%	22.2%	23.2%	
	計 6.4%	7.1%	8.2%	8.1%	10.7%	16.5%	17.4%	20.9%	22.2%	12.3%

グラフ1



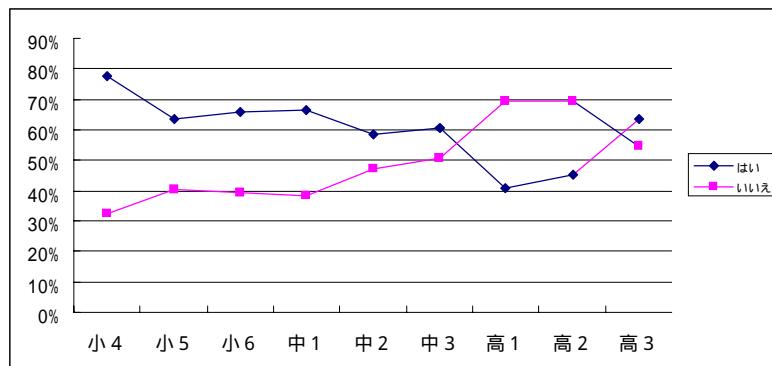
6-1 (6でアイと答えた人に) 「その時発言しましたか」

ア はい 2013人 36.2% (分母は5566人) * * 3509人
イ いいえ 1496人 26.9%

【表2】

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア はい	男	79.3%	68.6%	73.7%	75.2%	69.2%	61.8%	56.7%	58.7%	61.9%	68.8%	1668
	女	75.8%	56.5%	59.1%	56.5%	45.1%	58.7%	34.4%	32.8%	64.4%	54.2%	1597
	計	77.7%	63.3%	65.9%	66.5%	58.7%	60.4%	40.9%	45.4%	63.5%	61.7%	3265
イ いいえ	男	31.0%	35.3%	34.0%	29.1%	36.8%	50.2%	56.7%	52.4%	57.1%	38.8%	1668
	女	34.3%	46.6%	44.3%	49.3%	60.6%	51.4%	74.8%	85.1%	53.4%	53.2%	1597
	計	32.6%	40.2%	39.5%	38.6%	47.1%	50.7%	69.6%	69.2%	54.8%	45.8%	3265

グラフ2



6-2 (6-1でイと答えた人に) Q6-2 「それはどうしてですか。」 <複数回答可>

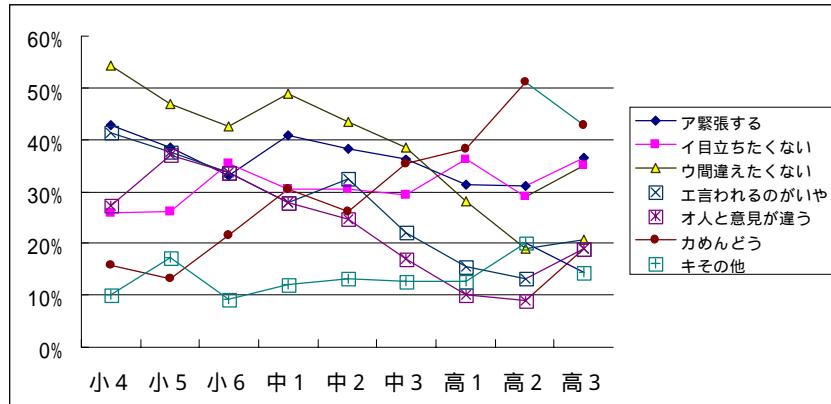
- ア みんなの前で話すのは緊張するから 547人 36.5%
イ あまり目立ちたくないから 457人 30.5%
ウ みんなの前で間違えたくないから 600人 40.1%
エ クラスの人からいろいろ言われるのがいやだから 417人 27.9%
オ クラスの人と意見が違うから 361人 24.1%
カ めんどうだから 427人 28.5%
キ その他 201人 13.4%

【表2】

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	全体
ア みんなの前で話すのは緊張するから	男	55.6%	32.8%	31.0%	33.8%	35.5%	32.5%	28.9%	30.3%	20.8%	
	女	29.4%	43.9%	34.3%	45.5%	40.2%	40.6%	32.0%	31.6%	46.2%	
	計	42.9%	38.5%	33.0%	40.8%	38.1%	36.3%	31.3%	31.1%	36.5%	36.5%
イ あまり目立ちたくないから	男	27.8%	27.3%	32.4%	25.7%	26.9%	27.2%	36.8%	30.3%	20.8%	
	女	23.5%	25.0%	37.1%	33.6%	33.3%	31.6%	36.1%	28.1%	43.6%	
	計	25.7%	26.2%	35.2%	30.4%	30.5%	29.2%	36.3%	28.9%	34.9%	30.5%
ウ みんなの前で間違えたくないから	男	52.8%	42.2%	40.8%	39.2%	35.5%	33.1%	15.8%	12.1%	20.8%	
	女	55.9%	51.5%	43.8%	55.5%	49.6%	44.4%	32.0%	22.8%	20.5%	
	計	54.3%	46.9%	42.6%	48.9%	43.3%	38.4%	28.1%	18.9%	20.6%	40.1%
エ クラスの人から	男	25.0%	32.0%	35.2%	17.6%	33.3%	19.9%	13.2%	9.1%	12.5%	

いろいろ言われるの がいやだから	女	58.8%	43.2%	32.4%	34.5%	31.6%	24.8%	16.4%	15.8%	23.1%	
	計	41.4%	37.7%	33.5%	27.7%	32.4%	22.2%	15.6%	13.3%	19.0%	27.9%
オ クラスの人と意 見が違うから	男	16.7%	36.7%	31.0%	23.0%	24.7%	13.2%	13.2%	6.1%	16.7%	
	女	38.2%	37.1%	35.2%	30.9%	24.8%	21.1%	9.0%	10.5%	20.5%	
う	計	27.1%	36.9%	33.5%	27.7%	24.8%	16.9%	10.0%	8.9%	19.0%	24.1%
カ めんどうだから	男	25.0%	18.0%	21.1%	33.8%	30.1%	38.4%	34.2%	66.7%	29.2%	
	女	5.9%	8.3%	21.9%	28.2%	23.1%	31.6%	39.3%	42.1%	51.3%	
	計	15.7%	13.1%	21.6%	30.4%	26.2%	35.2%	38.1%	51.1%	42.9%	28.6%
キ その他	男	8.3%	16.4%	11.3%	12.2%	14.0%	15.2%	18.4%	18.2%	25.0%	
	女	11.8%	18.2%	7.6%	11.8%	12.8%	9.8%	10.7%	21.1%	7.7%	
	計	10.0%	17.3%	9.1%	12.0%	13.3%	12.7%	12.5%	20.0%	14.3%	13.4%

グラフ3



2 - 2 . 調査問題の解説

この問では、授業中の子どもの発言についての意識を知るために、まず、授業中発言したくなることがあるかどうかについて問うた。この際、選択肢を「ア よくある」「イ たまにある」「ウ ほとんどない」「エ ない」の四つの段階に分け、傾向性がつかめるようにした。

問6-1では、問6で「発言したくなることがある」と答えた者に対して、実際に発言したかどうかを問い合わせ、子どもの発言意欲と実際の発言活動とのずれを明らかにする。

問6-2では、授業中発言したくなつたにもかかわらず、発言しなかった理由を問うことで、授業での発言を阻害する要因を明らかにする。選択肢として、人前で発言することについての意識にかかるもの（ア「みんなの前で話すのは緊張するから」・イ「あまり目立ちたくないから」）、発言の内容についての意識にかかるもの（ウ「みんなの前で間違えたくないから」）、クラスでの人間関係等についての意識にかかるもの（エ「クラスの人からいろいろ言われるのがいやだから」・オ「クラスの人と意見が違うから」）、発言すること自体についての意識にかかるもの（カ「めんどうだから」）を設けた。

3 . 結果の分析

自主的な発言の現状 - 発達段階別と男女比 -

「よくある」「たまにある」の58.7% (3265人) が、「ほとんどない」「ない」の41.0% (2280人) を上回っていることから、半数以上の生徒が、授業中に発表したくなる場面に当面したことがあったことがうかがえる。

しかしながら、発達段階別に見ていくと、学年が上がるにつれて、自主的な発言意識には、明らかに減少傾向が見られる。【表4】は、発言したくなることが「よくある」・「たまにある」と答えた数値と「ほとんどない」「ない」と答えた数値を発達段階別に表したものである。自主的な発言意識は、小4、5年で70%台と高い数値を示しているが、小6、中1では60%台に、中2、3

年では50%台に減少する。高校段階になると、これまでと逆転して、「発言したくなることがほとんどない・ない」と答える子どもの数は、「発言したくなることがよくある・たまにある」を大きく上回るようになる。授業中のコミュニケーションは、発達段階が上がるにつれて活発でなくなっていくことが見て取れ、授業が生徒の自主的な発言の場として、充分に機能していかなくなっている現状がうかがえる。

【表4】「学年別授業中の発言意識」%

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3
発言したくなることがよくある・たまにある	71.9	73.9	67.8	65.2	58.4	52.0	47.5	36.2	35.9
発言したくなることがほとんどない・ない	28.1	25.9	31.9	34.1	41.3	47.7	51.5	63.5	63.8

また、授業中に発表したくなった時、実際に発言したのは「よくある」「たまにある」と答えた子どものうちの61.6%で、6割以上の生徒は自分から発言したことになる。この数は全体の36.2%にあたり、およそ3人に1人は、授業中に教師の指名によるものではなく自分から発言していることになる。

問6で「よくある」「たまにある」と答えた者のうち、実際に発言した者の数を発達段階別にみると、【表5】のとおりとなる。【表5】は、上段に「発言したくなった子どものうち実際に発言した子どもの割合」を、下段には「全体の子どものうち実際に発言した子どもの割合」をそれぞれ示したものである。

問6で「よくある」「たまにある」と答えた者のうち、小4では80%近い子どもが自主的に発言しているが、小5から中1では65%前後となる。中2・3ではやや減少し、60%前後となる。高校では高3を除いて、発言する数は40%と激減している。これらを全体の割合でみると、小4では55.9%と、クラスの半数以上が自主的に発言しているが、小5から中1になると40%台となり、中2・3になるとさらに減って30%台、高校になると高3を除いて、20%に満たなくなる。授業中の自主的な発言は、学年が上がるにつれて抑制されている傾向にあることがみてとれる。

また、上段の「授業中に発言したくなった者のうち実際に発言した子どもの割合」が、下段の「授業中に実際に発言した子どもの全体に占める割合」よりも全学年にわたって上回っていることから、発言したいという子どもの意識が自主的な発言のきっかけになることがわかる。

さらに、男女比でみてみると、高1と高3を除いて、いずれの学年も実際に発表をしたのは男子に多く、女子は少ないことから、授業中の発言についての意識は男女差がみられる。女子の場合、小6から中2の時期と高1から高2の時期には、下段の「授業中に実際に発言した子どもの全体に占める割合」が、上段の「授業中に発言したくなった者のうち実際に発言した子ども」の割合よりも多くなる。同様のことが小5の男子でも見られる。このことは、この時期には、子どもが発言したいという意識を抑制する傾向にあることの表れと見て取れる。

【表5】「学年別実際に発言した子どもの数」% 分母は上段は発言したくなった数
分母は下段は各学年の総数

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3
全体	77.7	63.3	65.9	66.5	58.7	60.4	40.9	45.4	63.5
	55.9	46.9	44.8	43.7	34.4	31.5	19.6	16.5	39.2
男	79.3	68.6	73.7	75.2	69.2	61.8	56.7	58.7	61.9
	72.5	74.8	67.2	73.4	62.5	56.1	41.6	40.6	37.2
女	75.8	56.5	59.1	56.5	45.1	58.7	34.4	32.8	64.4
	71.2	73.1	68.7	58.7	54.1	48.2	51.3	38.5	35.4

発言しない理由にみられる対他意識 - 集団の中での自己実現意欲 -

発表しない理由については、以下の順位で多い。

【表6】子どもが発表しない理由

1位 ウ みんなの前で間違えたくないから	600人	40.1%
2 ア みんなの前で話すのは緊張するから	547人	36.6%
3 イ あまり目立ちたくないから	457人	30.5%
4 カ めんどうだから	427人	28.5%
5 エ クラスの人からいろいろ言われるのがいやだから	417人	27.9%
6 オ クラスの人と意見が違うから	361人	24.1%

最も多いのは、「ウ みんなの前で間違えたくないから」で、40.1%（600人）である。続いて多いのが「みんなの前で発表するのは緊張するから」で36.6%（547人）となっている。その外の選択肢は、ほぼ30%前後の数値を示している。

発言しない理由として、最も多い子どもが選択した「ウ みんなの前で間違えたくないから」には、「みんなの前」という対他意識を要する場で、「間違う」ことを避けようとする子どもの意識がうかがえる。次いで、「ア みんなの前で発表するのは緊張するから」が多かったことからも、授業中に発言することは、生徒にとって対他意識が必要とされ、そのために極度の緊張を強いられていることがうかがえる。授業中のコミュニケーションが他者の目を意識し、極度の緊張を強いるものとなっている現状がうかがえる。

発達段階でみていくと、小学校から中学校までは「ウ みんなの前で間違えたくないから」が最も多く、その数も他の選択肢を上回っている。しかし、この理由は、学年が上がるにつれて減少し、高校になると「カ めんどうだから」と入れ替わる。全学年を通して多いのが「ア みんなの前で発表するのは緊張するから」で、小6と高1を除いて常に第二位となっている。小6と高1で、僅差でこれに入れ替わっているのは「イ めだちたくないから」である。授業中のコミュニケーションにおいて、自己表現の意欲は、他者意識のために緊張を強いられ、抑制的なものになっていることがうかがえる。

授業中、発言したかったにもかかわらず、発言しなかった理由について、「キ その他」と回答した者は13.4%（201人）であった。そのうち記述式による回答は190例あった。その主なものは以下に挙げたとおりである。

・「指名されない」「先生が当てくれない」	40
・「タイミングがつかめない」「タイミングが悪い」	22
・「恥ずかしい」「緊張する」「格好悪い」「勇気がない」	9
・「他の人が答えた」	8
・「間違えたらいや」「答えに自信がない」	9
・「授業のペースを崩してしまう」「授業の邪魔になる」	8
・「目立ちたくない」	6
・「先生が嫌いなとき」	4
・「わざわざ発言する程ではない」「わざわざ言うのはいや」	4

教師の指名と子どもの発言意識との関係 - 問5と問6のクロス集計結果 -

【表7】は教師の指名と子どもの発言意識との関係を表したものである。問5と問6をクロス集計することにより、教師の指名に対する意識と発言意識との間には、次のような分析結果が得られた。

授業中に発言したくなる時が「ある」「たまにある」と答えている授業中の発言意識の高い者は、教師の指名に対しても肯定的である。「教師に指名されてうれしいと思ったことがある」と答えた

のは、46.6%（2595人）で、「うれしいと思った時がない」と答えた11.4%（631人）を大きく上回っている。

反対に、授業中に発言したくなる時が「ほとんどない」「ない」と答えていた授業中の発言意識の低い者は、教師の指名に対しても否定的である。「指名されてうれしいと思った時がない」と答えたのは25.4%（1413人）で、「うれしいと思った時がある」と答えた14.8%（824人）より多い。

これらのことから、教師の指名に対する子どもの意識と発言意識には関係性がみられるといえる。すなわち、教師の指名をきっかけに、教室コミュニケーションに参加することで、自己表現が可能となった子どもは、教室コミュニケーションの積極的な参加者となっている。

【表7】教師の指名と子どもの発言意識

		分母は 5566人	
		指名されてうれしいと思ったとき	
		ある	ない
授業中に発言したくなる時	よくある たまにある	2595人 46.6%	631人 11.4%
	ない ほとんどない	824人 14.8%	1413人 25.4%

話すことの意識と発言意識との関係 - 問6と問2のクロス集計結果 -

【表8】【表9】は、普段の生活での子どもの話すことの意識と授業中の発言意識との関係を示したものである。【表8】は話すことの好き嫌い意識、【表9】は話すことの得意不得意意識との関係を示したものである。

「話すことが好き」と答えた子どもは、授業中に発言したくなることも多く、52.9%（2942人）となっている。一方、「話すことがきらい」と答えた子どもは、授業中発言したくなることは2.6%（145人）と少ない。これに対し、「話すことが得意」と答えた子どもは、授業中発言したくなることはやや少なく42.7%（2376人）であるが、「話すことが得意でない」と答えた子どもでも授業中発言したくなることがあると答えたのは10.7%（538人）と多くなる。授業中、発言したくなることのきっかけは、話すことの得手不得手意識よりも話すことの好き嫌い意識によるものといえる。

このことから、子どもにとって話すことに対する得手不得手意識は、授業中のコミュニケーションへの参加意欲にはさほど影響がなく、話したいと思うこと（内容）があれば、表現者になり得るといえよう。授業は、子どもの表現の場となる可能性を充分持っている<場>であることができる。

【表8】話すことの好き嫌い意識と発言意識との関係 分母は5566人

		クラスの人と話すことについて	
		好き / まあまあ好き	きらい / 余り好きでない
授業中に発言したくなる時	よくある たまにある	2942人 52.9%	145人 2.6%
	ない ほとんどない	1924人 34.6%	145人 2.6%

【表9】話すことの得意不得意意識と発言意識との関係 分母は総数 5566人

		クラスの人と話すことについて	
		得意 / まあまあ得意	きらい / 余り得意でない
授業中に発言したくなる時	よくある たまにある	2376人 42.7%	538人 10.7%
	ない ほとんどない	1408人 25.3%	494人 8.8%

4 . 共同討議

授業中、発言したくなることがあるかという問い合わせに対して、「よくある」「たまにある」と答えたのは、58.7%であるが、この数値を多いとみるか、あるいは少ないとみるか意見が分かれるところである。この数値は、授業に積極的に参加している子どもの数を示すものであるから、6割近い子どもは、授業に積極的に参加しようとしているといえる。

本問は、子どもが授業中に発言することを良しとする立場に立つものである。しかしながら、たとえ子どもに発言を強いたとしても、するようになるものではないことは、結果からも明らかである。子どもが発言する<場>、それ自体が発言を疎外していたとするなら、子どもの発言は望めない。そのためには、まず、子どもが発言したくなるような<内容>を持つこと、そして、子どもが発言するような授業参加者同士の対人関係を確保するような<場作り>をすることが授業を作る条件となる。

また、問い合わせにある「授業中の発言」について、回答者がその内容を「教師の発問に対する答え」あるいは「自由な発言」、その他など、どうとらえて回答しているのか、明らかにする必要がある。そのため補助調査を実施した。

5 . 考察

5 - 1 . 現状と課題

固定化した教室コミュニケーション*

* 教室コミュニケーションとは授業中に展開される教師と生徒とによる独自のコミュニケーションをいう

最も回答の多い数値を示した理由のうち「みんなの前で間違えたくないから」には、「みんなの前」という対他意識と「間違えたくない」という一定の価値への収斂傾向とが含まれる。このことは、言葉を変えれば、授業中の発言については、ある一定の価値基準に基づいた発言のみが受け入れられるという価値観の表われと考えられる。

続いて多いのが「みんなの前で話すのは緊張するから」の36.6%（547人）、「あまり目立ちたくないから」30.5%（457人）であることから、授業中の発言には、他の構成者（生徒）に対する強い対他意識を要するとみられる。

学年が上がるについて、「めんどうだから」とする回答が増えていることから、学年が上がるにつれて、授業への参加自体を閉ざしていく傾向がみられる。このことは、一元的な価値観の下に、発言が収斂され、しかも発言の際には、強い他者意識を強要される<授業という場>に、学年が上がるにつれて、積極的に参入していくことに価値を見出さなくなっていくためではないだろうか。

「答えるのがめんどうだから」と答えるのは、中学三年から高校にかけて、その割合が増えていく。このことは、学校生活の中の教室コミュニケーションが小学校から高校までを通じて同じスタイルで展開され、授業の在り様が固定化したものになっているためではないかと考えられる。そのため、この時期になると、経験的に教室コミュニケーションの型を捉えているために、積極的に参加する意識が低下するのではないか。

発言の場としての教室・発言を疎外する場としての教室

授業中に、発言しなかった理由として、「みんなの前で間違えたくないから」と「みんなの前で話すのは緊張するから」・「あまり目立ちたくないから」が上位にあることから、授業中の対他意識がきわめて高いことがうかがえる。問題はこの意識のあり方である。授業を構成する同じ教室の生徒同士が発表を促す場を提供するのではなく、逆に発表を疎外する場を作ってしまっている。このような傾向は、前述のような固定化した教室コミュニケーションの有り様が、誤った発言は無駄なものとして排除しようとする無意識の集団力学を生み出しているのではないか。このことは生徒同士の序列意識や選別意識につながる恐れがある。

授業中に発言したくなることが「よくある・たまにある」と回答する子どもが半数を超えることを考えれば、授業は、子どもにとって<発言をする場>として充分機能しうると考えられよう。今後は、教室コミュニケーションを可塑的で弾力性を備えたダイナミックなものに変えていくための改善の手立てを考えていく必要がある。

5 - 2 . 提言 - 今後に向けて -

発信型コミュニケーションの認知と場の提供を

本問の結果は、「発言すること」に限らず、「話すこと」「ものを言うこと」をどうとらえるかという問題を提起している。本問の結果から、授業中に発言するということは緊張を強いられ、コミュニケーションが抑制されたものになっているという側面が見て取れる。このことは、「授業中発言したくなることがある」と答える子どもが、学年が上がるにつれて減少していること、そして発言したくなることがあった時に、実際に発言する子どもの数もまた学年が上がるにつれて減少していることからも明らかである。

これまでわが国には伝統的に多くを語らないことを善しとしてきた文化があるが、そのことが昨今の国際社会において、多くの齟齬を生んでいることはよく知られた事実である。本問の結果から、現状の授業では、国際化社会で要求される発信型のコミュニケーションは成立していないこととなる。むしろ反対の傾向にあるといってよいだろう。

発信型のコミュニケーションにおいては、発信する中身が重要であることはいうまでもない。しかしながら、それ以前に解決すべき課題として、自分の考え方や意見を持つこと、言うべき時に言おうとすることなど、発信を抑制するのではなく発信型のコミュニケーションの意義が認められてこそ実現可能となる。発信型のコミュニケーションの場が確保される必要がある。

発信型のコミュニケーションにおいては、発信される情報の受容については、受け手もその主体として情報を見極め、その価値を認めつつ選択していく主体性を求められる。問7の調査結果からも明らかなように、聞くを中心とした受容型コミュニケーションに慣らされてきた子どもにとって、大きな転換を強いられることになるだろう。もちろん、混乱が生じることは充分予測し得る。だが、子どもがコミュニケーションの真の主体として、コミュニケーションを行うには、自らがその情報の選択権、価値判断する力を身につけることが肝要となる。

6 . 反省と課題

本問は、授業中の発言に対する意識について問うものであるが、授業中発言したくなった場合に、実際に発言しなかった子どもの意識について、なぜしなかったかのかを問うことになるとどまっており、授業中発言したくなることが「ほとんどない」「ない」と答えた41.0%の子どもに対し、なぜ発言したくならなかったのかについて問っていない。この点を明らかにすることで、子どもの発言に対する意識が一層明らかになるだろう。

また6-2の選択肢は、対他意識を問うものに偏ったきらいがあり、「力めんどうだから」については、面倒である理由やその内容が明らかにならなかった。場や思考の問題等を含めて問う必要がある。

付記

- ・問6で、アからエの回答の合計が100%にならないのは、無答誤答があるためである。
- ・問6 - 1で、アとイの合計3509人が、問6でアとイと答えた者の合計3265人と異なるのは、誤答があったためである。それに応じて%には多少の誤差が生じている。

6 表現能力に関する自己意識

——具体的にどんなことができるか——

分析担当 渡辺 通子

1. 調査の意図

国語科の学習では、いわゆる音声言語教育の一環として「話すこと」「聞くこと」の学習を行っている。ここでは、そのなかで代表的と思われるコミュニケーションスキルの8項目をとりあげた。これらは授業をとおして身につけることのできる表現能力であると考える。本問では、これらのスキルが子どもにとって、どの程度達成されていると意識されているのかを明らかにする。8つの項目は、「話すこと」「聞くこと」の基本的なスキルから、思考を深める内容やより公的な場で必要とされるコミュニケーションスキルを設定した。

2. 調査

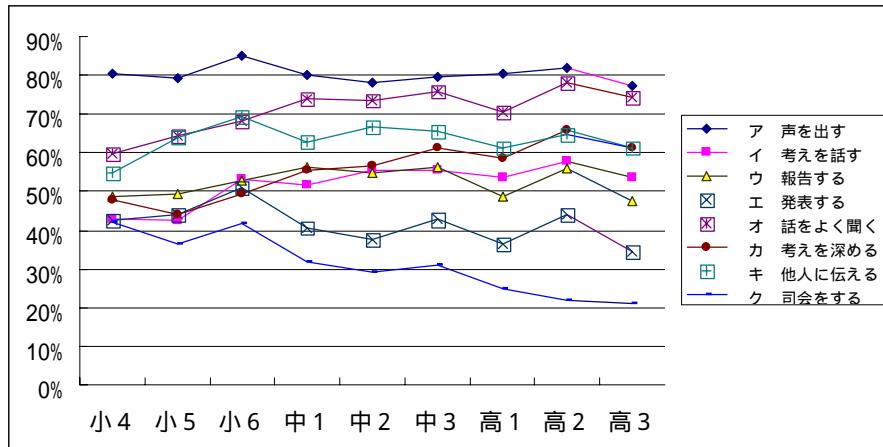
2-1. 調査問題とその結果

7 「あなたのできるものに をつけてください」 <複数回答可>		
ア 声に出して読むことができる	4459	80.2%
イ 自分の考えたことを話すことができる	2888	51.9%
ウ 調べたことを報告することができる	2947	53.0%
エ 大勢の人の前で発表することができます	2337	42.0%
オ 友達の話をよく聞くことができる	3968	71.3%
カ 友達と話し合って考えを深めることができます	3067	55.1%
キ 聞いたことを人に伝えることができます	3574	64.2%
ク 司会をすることができます	1775	31.9%

【表1】

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	
ア 声を出す	男	77.5%	77.3%	83.7%	80.7%	75.9%	75.0%	68.5%	75.0%	66.4%	
	女	83.5%	82.0%	86.4%	79.4%	80.4%	84.2%	86.3%	87.2%	83.1%	
	計	80.3%	79.4%	85.1%	80.0%	78.0%	79.6%	80.4%	81.9%	77.2%	80.2%
イ 考えを話す	男	40.0%	45.2%	52.1%	54.6%	59.7%	55.5%	45.7%	57.1%	54.9%	
	女	46.0%	39.3%	54.5%	48.8%	50.4%	55.8%	57.8%	58.1%	53.1%	
	計	42.8%	42.6%	53.3%	51.6%	55.4%	55.6%	53.7%	57.7%	53.8%	51.9%
ウ 報告する	男	45.6%	46.8%	48.9%	53.7%	54.3%	52.1%	44.4%	51.3%	41.6%	
	女	52.5%	52.4%	56.5%	58.5%	55.2%	60.4%	50.9%	59.6%	50.7%	
	計	48.8%	49.3%	52.9%	56.2%	54.7%	56.3%	48.8%	56.0%	47.5%	53.%
エ 発表する	男	40.0%	42.3%	47.6%	42.8%	38.1%	39.3%	29.0%	38.5%	37.2%	
	女	45.3%	46.0%	54.2%	38.6%	37.3%	46.5%	40.1%	48.3%	32.9%	
	計	42.5%	43.9%	51.1%	40.6%	37.7%	42.9%	36.4%	44.0%	34.4%	42.%
オ 話をよく聞く	男	54.4%	59.4%	58.5%	68.4%	67.3%	70.1%	68.5%	75.0%	60.2%	
	女	66.2%	70.4%	76.8%	78.9%	81.0%	81.8%	71.4%	80.8%	82.1%	
	計	59.9%	64.3%	68.1%	73.9%	73.7%	76.0%	70.5%	78.3%	74.4%	71.3%
カ 考えを深める	男	40.6%	40.2%	41.5%	49.4%	51.4%	54.9%	53.1%	60.9%	47.8%	
	女	56.1%	49.1%	56.5%	61.1%	62.5%	67.8%	61.2%	70.0%	68.6%	
	計	47.8%	44.2%	49.4%	55.5%	56.5%	61.4%	58.5%	66.0%	61.3%	55.1%
キ 他人に伝える	男	48.8%	58.1%	63.6%	59.5%	62.7%	58.1%	58.0%	60.3%	56.6%	
	女	61.9%	71.0%	74.5%	66.1%	70.9%	72.9%	62.7%	68.0%	63.8%	
	計	54.8%	63.8%	69.3%	62.9%	66.5%	65.5%	61.2%	64.6%	61.3%	64.2%
ク 司会をする	男	36.3%	32.6%	36.1%	30.2%	29.0%	28.8%	16.7%	19.2%	27.4%	
	女	48.9%	41.4%	46.7%	33.4%	28.9%	33.6%	29.2%	23.6%	17.4%	
	計	42.1%	36.5%	41.6%	31.9%	28.9%	31.2%	25.0%	21.7%	20.9%	31.9%

グラフ1



2 - 2 . 調査問題の解説

具体的なコミュニケーションの能力として、一対一という<私的な場>から、一対多数(衆)という<公的な場>でのコミュニケーションの際に必要と考えられるものを、受容（「聞くこと」）と発信（「話すこと」）の観点からスキルとして8項目をとりあげた。本問はいずれも人とのコミュニケーションの際に必要とされる表現と受容の能力である。

「ア 声に出して読むことができる」は、内容にかかわらず、声に出すこと自体ができるかどうかを問うもので、コミュニケーションの際の表現の基本的なスキルである。

続いて、イ・ウ・エは、声に出す表現に関するスキルである。「イ 自分の考え方を話すことができる」では、「話すこと」の技術として、自分の考えを持ち、かつ、そのことを声に出して表現、つまり主張できるかどうかを問うものである。「ウ 調べたことを報告することができる」では、本やその他の資料・メディアなどを使って調べたもの、つまり受信した情報を他者に伝達することができるかを問うものである。「エ 大勢の人の前で発表することができる」は、多数の聞き手が想定される公的な場で話すことができるかどうかを問うものである。

「オ 友達の話をよく聞くことができる」は、理解に関するコミュニケーションの基本的なスキルである「聞くこと」について問うものである。

カ・キ・クは、受容と表現が総合的に行われる、より複雑なコミュニケーションのスキルである。「カ 友だちと話し合って考えを深めることができる」は、ディスカッションにおける能力を問うものである。コミュニケーションの主体として、友達という他者と関わり、相互交流を持つことで、自分の考えを深めていくことができるかどうかを問うている。「キ 聞いたことを人に伝えることができる」は、伝達の abilities を問うものである。聞き取ったことを、さらに別の相手に正しく話すことができるかどうかを問うている。「ク 司会をすることができる」は、公的な場における言語運用能力のスキルである。多数の相手に対して働きかけをしながら、会を進行したり、あるいは調整役を務めながら、特定の目標に向けて意見を集約していくことについて問うている。

3 . 結果の分析

高い朗読・聞き取り能力意識

結果を数値の高い順に並べ替えると以下の【表2】のようになる。

【表2】表現能力に関する子どもの意識 - 子どもはどのようなスキルをできると意識するか -

1位 声に出して読むことができる	4462人 80.2%
2 友だちの話をよく聞くことができる	2889人 71.3%

3	聞いたことを人に伝えることができる	2949人	64.2%
4	友だちと話し合って考えを深めることができる	2338人	55.1%
5	調べたことを報告することができる	3970人	53.0%
6	自分の考えを話すことができる	3069人	51.0%
7	大勢の人の前で発表することができる	2337人	42.0%
8	司会をすることができます	1775人	31.9 %

全項目中、6項目までは、半数を超える子どもができると回答しており、半数以下は「ク 司会をすることができます」31.9%（1775人）・「工 大勢の人の前で発表することができる」42.0%（2337人）の2項目である。授業におけるコミュニケーション活動能力においては、この2項目を除いて、おおよその生徒がその力をできると認めている。

このうち「ア 声に出して読むことができる」が最も多く、80.2%（4459人）の子どもができると回答している。「オ 友達の話をよく聞くことができる」も71.3%（3968人）で70%を超えており。「キ 聞いたことを人に伝えることができる」と答えたのは64.2%（3574人）で全体の6割程度である。「カ 友だちと話し合って考えを深めること」55.1%（3067人）・「ウ 調べたことを報告すること」53.0%（2947人）・「イ 自分の考えを話すこと」51.9%（2888人）については、半数以上の児童生徒ができるとしている。

これに対し、「工 大勢の人の前で発表することができる」については半数を割って42.0%（2337人）、「ク 司会をすることができます」31.9%（1775人）は、8項目中最も低い数値となっている。

対他意識と主体性 - 「内容」と「場」と「責任」の問題 -

子どもができると自己意識するコミュニケーションスキルは、【表1】にみられる順番で高い数値を示している。この順位づけは、個々の項目のコミュニケーションスキルについて、子どもがどう受けとめているか、その意識の表われと見ることができる。

7割以上の子どもができると回答している「ア 声に出して読むことができる」「オ 友だちの話をよく聞くことができる」というスキルは、対他意識をもって行うというよりも読んだり聞いたりという個としての活動能力にかかるもので、「聞くこと」「話すこと」の基本的なスキルである。ここで想定されるコミュニケーション活動は、いわば一方通行型のコミュニケーションで、対他意識はさほど要求されず、むしろ個人的な能力に負う部分が大きいといえよう。

第3位の「キ 聞いたことを人に伝えることができる」は、話を聞く相手や伝える相手を想定して行われるため、前の2項目より他者意識を必要とする。しかし正確に伝えることが第一であるから、受容型のコミュニケーションが想定され、主体性はそれほど必要とされない。

「オ 友だちの話をよく聞くことができる」や「キ 聞いたことを人に伝えることができる」という「聞くこと」の活動や「聞くこと」に主眼をおく受容型のコミュニケーションが、子どものできるという意識の上位を占めている。

第4位の「カ 友だちと話し合って考えを深めることができる」や5位の「ウ 調べたことを報告することができる」、第6位の「イ 自分の考えを話すことができる」というスキルでは、「話すこと」「聞くこと」がより複合的な言語行為となり、「話し合」ったり、「調べ」たりする思考活動を必要とする。これらのコミュニケーション活動では、「考え」や「調べたこと」といった内容が問題となる。話の内容に関して自分が責任を負う必要があるからである。また同時に、プレゼンテーションの力も必要となる。さらに、コミュニケーションの主体として、より主体的に自分の考えを明らかにし、相手とかかわることが要求される。これらの項目についての回答が50%どまりだったのは、責任を伴いながら、主体的に自分の考えを明らかにしつつ相手とかかわっていく活動

に、子どもたちが心理的な抵抗感を持っているためと思われる。

第7位の「工 大勢の人の前で発表することができる」や第8位の「ク 司会をすることができます」というスキルは、公的な場での言語能力であるプレゼンテーション能力を必要とする。最下位の「ク 司会をすることができます」と答えているのは、31.9%で、他の項目より、より少ない数値となっている。司会の役割は、文字通り会を司ることであるから、多数の参加者を前に全員を思考させ、多くの発言を求めつつその場の脈絡を作り、特定の目標に向けて発言を束ねていくことである。対他意識を持ちながら、集団の思考活動をまとめていく力が要求されるスキルであることから、難易度が高いと意識付けられている。

発表や司会が大勢の他者の前で行わなければならないことから、より改まった場での表現活動については、子どもの抵抗感も高いことが見て取れる。

話すことの「好き嫌い」及び「得意不得意」意識と表現能力の自己意識

- 問2(a)(b)と問7のクロス -

【表3】と【表4】は、話すことの好き嫌い意識と得意不得意意識と表現能力の自己意識との関係を見たものである。【表5】は、さらに好き意識と得意意識の自己表現との関係を問7で得られた全体の数値と比較したものである。

本問で取り上げた授業中の具体的な8項目のコミュニケーションスキルについて、問2で話すことが「好き・まあまあ好き」あるいは「得意・まあまあ得意」と答えている子どもの方が、本問での全体の平均をすべて上回っていることから、授業以外の場でのコミュニケーションと授業で取りたてられる表現能力意識には相関があるとみられる。

また、得意意識を持つ子どもの方が、好き意識を持つ子どもよりも表現能力の自己意識は高い。すべての項目にわたって、話すことが「得意・まあまあ得意」と答えた子どもの方が「好き・まあまあ好き」と答えた子どもよりもできると答えた回答は多い。1.4から4.6の微差ではあるが、特に「工大勢の人の前で発表することができる」(+4.6)、「ク司会をすることができます」(+4.3)の項目が高く、全体の平均との差は、わずかに広がり3.1から5.7になる。最も多いのは「工大勢の人の前で発表することができます」(+5.7)で、話すことが得意だと意識する子どもは、より公的な場で話すことができると意識していることがわかる。ただし、「才友達の話をよく聞くことができる」「力友達と話し合って考えを深めることができる」「辛聞いたことを人に伝えることができる」の聞くことに関しての項目は、不得意意識を持つ子どもの方が嫌い意識を持つ子どもよりも高い数値を示している。

分母は上は4886人

【表3】話すことの好き嫌い意識と表現能力の自己意識との関係 % 分母は下は 296人

	ア声に出して 読むことができる	イ自分の考え たことを話す ことができる	ウ自分で調べ たことを報告 する能够在 する	工大勢の人の 前で発表す ることがで きる	才友達の話を よく聞くこ とができる	才友達と話し 合って考 えを深め るこ とができる	辛聞いたこと を人に伝え るこ とができる	ク司会をす ることがで きる
好き・まあまあ好き	3991 81.7	2635 53.9	2654 54.3	2106 43.1	3587 73.4	2829 57.9	3231 66.1	1616 33.1
あまり好きでない・嫌 い	199 67.2	106 35.8	138 46.6	92 31.1	156 52.7	94 31.8	143 48.3	63 21.3

分母は上は3799人

【表4】話すことの得意不得意意識と表現能力の自己意識との関係 % 分母は下は 1045人

	ア声に出して 読む能够在 する	イ自分の考え たことを話す 能够在	ウ自分で調べ たことを報告 する能够在 する	工大勢の人の 前で発表す ことがで きる	才友達の話を よく聞くこ とができる	才友達と話し 合って考 えを深め るこ とができる	辛聞いたこと を人に伝え るこ とができる	ク司会をす ることがで きる
得意・まあま あ得意	3163 83.3	2186 57.5	2161 56.9	1812 47.7	2851 75.0	2281 60.0	2648 69.7	1421 37.4

あまり得意でない・不得意	748 71.5	356 34.1	427 40.9	250 23.9	654 62.6	427 40.9	509 48.7	168 16.1
--------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------

【表5】全体と話すことの「好き嫌い」及び「得意不得意」意識との比較

	ア声に出して読むことができる	イ自分の考えたことを話すことができる	ウ自分で調べたことを報告することができる	エ大勢の人の前で発表することができる	オ友達の話をよく聞くことができる	カ友達と話し合って考えを深めることができます	キ聞いたことを人に伝えることができます	ク司会をすることができます
全体	80.2	51.9	53.0	42.0	71.3	55.1	64.2	31.9
好き・まあまあ好き	81.7	53.9	54.3	43.1	73.4	57.9	66.1	33.1
得意・まあまあ得意	83.3	57.5	56.9	47.7	75.0	60.0	69.7	37.4

各項目の発達段階別意識と男女差

8つの項目について、発達段階別にみていくと、以下のような特徴が得られた。

ア「声に出して読むことができる」

「ア声に出して読むことができる」は、全学年を通してほぼ80%前後の数値を示し、発達段階による変化は見られない。男女別に見ると、女子が男子を上回り、その差は中3以降広がる。男子は、発達段階が上がるにつれて若干減少傾向を示し、女子との差が広がる。今回の調査の対象である小4以前の段階で、この能力が身につくと意識づけなされていると考えられるが、それがいつ頃であるのか、本調査では特定できない。

イ「自分の考えを話すことができる」

「イ自分の考えを話すことができる」は、小6で数値が伸び、これまで40%台だったものが50%台となる。それ以降はあまり大きな変化は見られない。男女差については、男子は小4から中2までは上昇傾向が見られ、それ以降は50%台を示す。女子は中学段階では上昇傾向が見てとれるが、全体に変動が大きいことから傾向性は見て取れない。

ウ「調べたことを報告すること」

「ウ調べたことを報告すること」は、中学一年までは上昇傾向が見て取れるが、それ以降に傾向性は見られない。男女差は、いずれの学年でも女子が男子の数を上回っている。

エ「大勢の人の前で発表することができる」

「エ大勢の人の前で発表することができる」は、小学校段階においては上昇傾向が見て取れるが、それ以降は傾向性が見られない。学年によって数値が大きく変化することから、発表の場の有無が子どもの意識に何らかの影響を与えていているのではないかと思われる。

男女差を見していくと小学校段階では、女子が男子を上回る。中学校段階になると、中1では小学校と逆転して男子が女子を上回るが、中2ではその差が僅差となり男女ともほぼ同数を示し、中3では逆転して女子が男子を上回る。高校では、2年までは女子が男子を10%以上上回るが、高3で逆転している。公的な場での発言能力意識には、発達段階及び男女に差が見られる。

オ「友達の話をよく聞くことができる」

「オ友達の話をよく聞くことができる」は、中学校までは上昇傾向を示し、高校段階に入ると傾向性は見て取れない。全体として学年が上がるにつれて増加している。小学校段階では60%台だったものが、中学段階以降になると70%台を示し、高い数値となる。

男女別に見ると、いずれの学年も女子が男子を上回っており、女子は小5で70%台を示し、中2以降では、高1を除いて80%台と高い数値を示す。男子は小4から6までは50%台、中1から高1までは70%前後となる。そのほか男女の差異として、女子の場合、高1で減少するのが特徴的である。このような傾向は男子には見られない。男子の場合、高校では発達段階による傾向性はみられない。

力「友達と話し合って考えを深めることができる」

「力友達と話し合って考えを深めることができる」は、全体的に学年が上がるにつれて上昇傾向が見られる。小学校段階では40%台だったものが、中学段階では、中1・2で50%台だったものが、中3では60%台に増え、高校段階では高1で若干下がるもの以後は60%台となっている。

男女別に見ると、小5と高1、高3で減少するが、小5の場合には女子の減少が目立ち、高1では男女とも減少しており、高3では男子の減少が目立つ。全学年を通じて女子の数値が男子の数値を上回っている。

キ「聞いたことを人に伝えることができる」

「キ聞いたことを人に伝えることができる」は、小学校段階では、小4で54.8%、小5で63.8%台、小6で69.3%と上昇傾向が見て取れる。中学以降はいずれの学年も60%台を示し、大きな変化は見られない。子どもの意識では、この能力については小学校段階で達成感を感じていると思われる。また男女とも中1、高1という校種の変わったときに一旦減少傾向が見られる。この数値は女子に著しい。

男女別に見ると、女子の数値が男子の数値を全学年で上回っている。中1及び高1でこの差が縮まる。また、女子の場合、校種別では、小学校、中学校と学年が上がるにつれて上昇しているが、高校ではこの傾向は見られない。男子の場合、校種別に見ると、小学校では上昇傾向が見られるが中学高校では傾向性は見て取れない。上記の女子に顕著なある時点での減少傾向と併せて、教室環境の人間関係の変化と何らかの関連があると思われる。

ク「司会をすることができる」

「ク司会をすることができる」は、学年による変動はあるものの全体として減少傾向にある。小学校段階で40%前後を示しているが、中学校段階では30%前後に減少し、高校段階ではさらに20%台になる。

男女差を見ると、小学校段階では女子が男子を上回るが、中学校段階になると中2で男子が女子を上回り、その他の学年でも男女差は縮まる。高校段階では、男子に上昇傾向が見られるのに対して、女子には減少傾向が見られ、高2までは女子の数の方が多いが、高3で逆転している。

発達段階に伴う傾向性

本問で取り上げた項目のうち、発達段階に伴う傾向性が明確に見て取れるのは、「才友達の話をよく聞くことができる」・「力友達と話し合って考えを深めることができる」の2項目に見られる増加傾向と「ク司会をすることができる」に見られる減少傾向である。その他の項目では、小学校段階もしくは中2までに傾向性が見て取れるものが多いことから、表現能力についての子どもの達成意識は、小学校段階を終了した時点から中2までにはほぼ確定されていると考えられる。

8項目についての自己意識は、発達段階が上がるにつれて、できると意識する数値は、最も高い数値を示す項目と最も低い数値を示す項目との差が大きくなる。小4では40~80%台にあったものが、中3では30~70%台に、高3では20~70%台になる。発達段階が上がるにつれて、それぞれの

スキルに対するとらえ方に差が出てくることがみてとれ。得手意識と共に不得手意識も強くなる。

また、8項目中7項目で、高校1年時に一旦減少傾向を示すことから、子どもの言語活動意識にとって、高校1年という時期が何らかの意味を持つ学年であるといえる。

「ウ調べたことを報告することができる」・「工大勢の人の前で発表することができる」「ク司会をすることができる」の3項目では、中2で、男女の数値がほぼ重なることから、中学2年という時期が、言語能力意識の男女差にとって、何らかの意味を持つ学年であるといえる。

高い女子の言語能力自己意識

8項目中7項目に男女差が見て取れ、言語活動に対する意識には男女差が見られることが明らかになった。とりわけ女子の方が男子に比し、「できる」という意識が高く、「ア声に出して読むことができる」「ウ調べたことを報告することができる」「才友達の話をよく聞くことができる」「力友達と話し合って考えを深めることができる」「キ聞いたことを人に伝えることができる」では、全学年で女子の数値が男子の数値を上回っており、それ以外の項目でも女子の数値が高いことから、女子の表現能力に対する高い自己意識が見て取れる。

「ア声に出して読むことができる」という読みの基本的なスキルと「工大勢の人の前で発表することができる」・「ク司会をすることができる」の場の意識を要するスキルについては、男女で違う傾向が見て取れた。

充分でないプレゼンテーション能力

「ク司会をすることができる」の回答数は、発達段階が上がるにつれて明らかに減少傾向にあり、他の項目と比較して極端な傾向を示している。また「ウ調べたことを報告する」・「工大勢の人の前で発表することができる」の2項目については、小学校段階のみで傾向性が見て取れ、それ以降では傾向性がない。これらは人前で話すというプレゼンテーション能力を要する項目であり、充分な活動の場が確保されていないのではないかと考えられる。

4. 共同討議

結果に示された数値を高いと見るか低いと見るか意見の分かれることもあるが、子どもの多くは表現能力に自信をもっているということが確認された。

ここで得られた数値は生徒の意識であり、この数値と生徒の実態とをどうとらえるかが問題となる。討議の中では、例えば「才 友達の話をよく聞くことができる」71.3%、「キ 聞いたことを人に伝えることができる」64.2%は共に、教師の意識からは実態よりも高い数値を示しているのではないかという意見もあった。回答者の意識として、問題で問われたこれらの技能を機械的なスキルとしてとらえているためにでたものではないかと考えられる。つまり、問い合わせの項目を授業という教室の中で作られた虚構の世界でのみ通用するコミュニケーションのスキルとしてとらえた結果がここでの数値なのではないか。この数値は虚像化された授業の実態の表れであり、教師の持つ理想の授業像が子どもの意識に反映されたとともに考えられる。

5. 考察

5 - 1 . 現状と課題

表現能力に対する意識と表現活動の問題

表現能力に対する子どもの意識については、以下の諸点が指摘できる。

まず第1に、表現能力に対する子どもの意識には、発達段階による傾向性がみられるものがあることが挙げられる。「友達の話をよく聞くことができる」・「友達と話し合って考えを深めることができる」の2項目には増加傾向が、「司会をすることができる」には減少傾向がみてとれる。発達段階が上がるにつれて、友達と関わりを持ちながら、聞く能力や思考力を深化させていると意識している。それに対し、「司会をする能力」については、発達段階が上がるにつれて、司会をする能力がないと意識する子どもが増えている。また、発達段階による傾向性は、小学校段階において特に顕著に上昇傾向がみられる。これらのことから、表現能力に対する子どもの意識には、実際の活動の有無が影響していると考えられる。

第2に、項目によっては、中1・高1の学校種が変わる時期に、一旦減少傾向や増加傾向がみられ、その後は学校種別ごとの変化が見られることから、表現能力に対する子どもの意識には、環境の変化による影響を受け易いことが指摘できる。このことは、とりわけ高校1年段階に顕著である。

第3に、男女による意識の差異が指摘できる。8項目中7項目に男女差が見て取れ、とりわけ女子の方が男子に比し、「できる」という意識が高い。また、「大勢の人の前で発表することができる」については中学校・高校段階で、「司会をすることができる」については高校段階で、男女で違う傾向が見て取れた。これらはどちらもプレゼンテーション能力を要することから発達段階が上がるにつれて、女子よりも男子の方がプレゼンテーション能力についてできると意識するようになるといえる。

学校知と生活知のギャップ

問2と関係づけてみていくことで、授業以外の日常の学校生活の中で話すことと授業中に話すこと、つまり発言することへの意識の関係をみることができます。学習能力としてのコミュニケーション能力と生活能力としてのコミュニケーション能力とは、異なるものであるので、一概に比較できないが、問2とのクロス集計から授業での表現能力と授業以外のコミュニケーション意識には相関があることが見て取れた。

問2-bでは、友達と話すことを68.3%（3799人）が「得意」または「まあまあ得意」としている。「あまり得意でない」または「得意でない」は18.8%（1045人）で、約5人に1人弱は不得意意識をもっていることになる。

話すことを「得意」または「まあまあ得意」とする68.3%の数値を、問7で上回る、もしくは同程度なのは、「声に出して読むことができる」80.2%・「友達の話をよく聞くことができる」71.3%・「聞いたことを人に伝えることができる」64.2%である。「友だちと話し合って考えを深め」たり、「自分の考えを話し」たり「調べたことを発表」したりすることは下回っている。「大勢の人の前で発表」したり「司会をし」たりは、さらに少なく、一対多のコミュニケーションに苦手意識が強いことが見て取れる。内容を伴う表現活動や、場の意識が高まる表現活動については抵抗感も高まっている。

このことから授業で身につける知（学校知）が、ふだんの生活の中でそのまま生きた力（生活知）になっているとは言いがたい。生活の中で活用すべき知が学校知として位置づけされていないとみることもできよう。両者にあるこのギャップをどのようにして縮めていくかが今後の「話すこと・聞くこと」教育における課題である。その意味で、問7に設定したコミュニケーション能力を向上させるためのコミュニケーションスキルの指導は、今後改良を加え、さらに必要とされよう。

5-2. 提言 - 今後に向けて

将来の社会人を育てることは、学校の役割のひとつである。ところが現実の学校は、社会から隔絶された場として、独自の文化生活を営むことを保証された場になってしまっている面がないだろ

うか。そのため一歩学校から出て社会の成員となったとき、学校で身につけたものがうまく生きて働くことなく、学校という特殊な場でのみその能力の価値が認められるにとどまることが多い。学校こそが子どもの社会的コミュニケーションの場であり、またコミュニケーションの場として機能しなければならない。それが閉ざされているところに、今日の教育の問題がある。

その一方で、学校にはこれまで想像もしなかった新たな文化（価値観）が既に流入してきている。家族関係の変化に伴う生徒自身の変容や国際化や情報化などの社会的な要請の影響も受けている。近年、頻繁に発生している青少年の問題行動の背景にもこれらのことがかかわっているように思われる。こうした問題行動を対処療法的に生活指導上の問題として処理するだけではなく、学校生活の大部分の時間を占める学習指導の面からも、個々の教科指導において伝えるべき養うべき「知」の見直しを図ること - - それは早急な効果は望めないものであろうが - - をしていくかなければ根本的な解決にはならない。学校がコミュニケーションの開かれた場として機能していくことの可能性をもつことは、今回の調査にみられる子ども達の意識から十分にあるといえよう。

6 . 反省と課題

選択項目に挙げた項目を、生徒が能力としてとらえているのか、態度としてとらえているのか曖昧である。生徒の意識の問題と、現実の力として実際に機能していると認められるかどうかは別であることから、生徒の実際の能力と意識との関連をとらえていくことが必要である。

「ア 声に出して読むことができる」のように、調査対象をより低学年に下げる見ないと傾向性のつかめない問い合わせがあったため、今後は、調査対象を広げて行う必要がある。

また、調査結果からは、子どもの意識における達成意識と具体的な活動の有無、つまり言語能力意識と言語活動の経験との間に、何らかの関係があると考えられるが、この調査からは明かにはならない。同様に、子どもの言語能力意識には男女差がみられることから、言語能力意識が性差やジエンダーと何らかの関係があると考えられるが、この調査からは詳細は明かにはならない。

今回の調査項目では、モノとコトの違いを表現するスキルや、他者との関係を切り結んで行く対人意識についての問い合わせ欠如していた。

7 コミュニケーションの手段 ——何を使ってコミュニケーションをとっているか

分析担当 前田健太郎

1. 調査の意図

子ども（児童・生徒）が、相談などをするとき、どのような手段を使ってコミュニケーションをとっているか、という問題について調査したものである。本問によって、最近の子ども達が直接相手と触れ合った形でコミュニケーションを行っているかどうかについて明らかになるであろう。

2. 調査

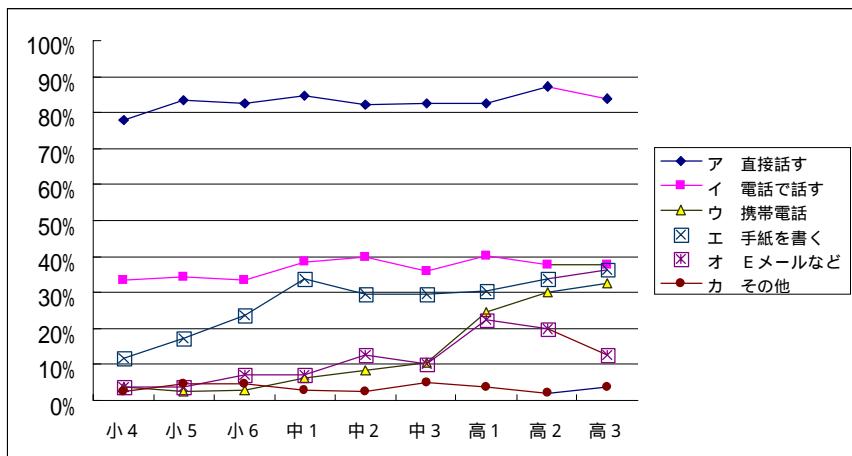
2 - 1. 調査問題とその結果

8 何か相談するとき、どのような手段を使うと相談しやすいですか。いくつ
答えるてもかまいません。（複数回答可）

- | | |
|------------------|---------------|
| ア 直接その友達と会って話す | 4622人 (83.0%) |
| イ 家の電話で話す | 2048人 (36.8%) |
| ウ 自分の携帯電話で話す | 605人 (10.9%) |
| エ 手紙を書く | 1521人 (27.3%) |
| オ Eメールなどの文字通信を使う | 573人 (10.3%) |
| カ その他 | 212人 (3.8%) |

8 相談するときの手段。（複数回答可）

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
ア 直接話す	男	74.4%	83.3%	82.7%	85.3%	82.3%	79.2%	79.6%	82.7%	74.3%	81.4%
	女	82.0%	83.5%	82.3%	84.3%	82.1%	85.7%	83.9%	91.1%	88.9%	84.6%
	計	77.9%	83.4%	82.5%	84.8%	82.2%	82.5%	82.4%	87.5%	83.8%	83.0%
イ 電話で話す	男	34.4%	35.1%	28.4%	35.1%	33.7%	27.5%	30.9%	34.6%	32.7%	32.1%
	女	32.4%	33.7%	38.3%	41.8%	46.8%	45.0%	44.7%	39.9%	40.6%	41.1%
	計	33.4%	34.4%	33.6%	38.6%	39.8%	36.2%	40.1%	37.6%	37.8%	36.8%
ウ 携帯電話	男	1.9%	1.2%	1.6%	5.5%	6.6%	8.2%	34.0%	35.3%	25.7%	9.1%
	女	5.8%	3.9%	4.1%	6.8%	10.4%	12.8%	19.9%	26.1%	36.7%	12.6%
	計	3.7%	2.4%	2.9%	6.2%	8.4%	10.5%	24.6%	30.1%	32.8%	10.9%
エ 手紙を書く	男	5.6%	3.1%	5.1%	4.9%	4.4%	4.8%	2.5%	2.6%	6.2%	4.3%
	女	18.7%	35.0%	40.6%	60.3%	58.0%	54.6%	44.7%	57.6%	53.1%	48.7%
	計	11.7%	17.3%	23.7%	33.9%	29.5%	29.7%	30.6%	33.7%	36.6%	27.3%
オ Eメールなど	男	1.9%	2.9%	5.1%	5.7%	10.8%	6.5%	16.0%	12.8%	12.4%	7.2%
	女	5.8%	4.6%	9.0%	8.9%	15.1%	13.9%	25.8%	25.1%	13.0%	13.2%
	計	3.7%	3.7%	7.1%	7.4%	12.8%	10.2%	22.5%	19.8%	12.8%	10.3%
カ その他	男	1.9%	3.1%	3.2%	4.0%	3.2%	7.4%	3.7%	4.5%	9.7%	4.4%
	女	3.6%	6.4%	6.4%	1.8%	1.4%	2.8%	3.7%	0.5%	0.5%	3.2%
	計	2.7%	4.6%	4.9%	2.9%	2.4%	5.1%	3.7%	2.2%	3.8%	3.8%



2 - 2 . 調査問題の解説

本問は、相談しやすいコミュニケーション手段のすべてについて、複数回答可の形で質問を行っている。相手と直接的にコミュニケーションを行う手段として考えられる「ア 直接その友達と会って話す」の他に、周囲の人間（家族）に内容を聞かれる可能性がある家の電話という媒体を使った「イ 家の電話で話す」、それに対し、家の電話より個別性が高くなる媒体「ウ 自分の携帯電話で話す」も、話しことばによるコミュニケーション手段の選択肢においてみた。また、書きことばによるコミュニケーションも存在するであろうという仮説から、「エ 手紙を書く」「オ Eメールなどの文字通信を使う」という選択肢も加えている。このエ、オの回答についてはコンピュータの使用という点において差異があるが、直接性が薄い、まとまった内容を一方的に渡す媒体（話しことばは、相手に会話の遮断をされる可能性がある点において違いがみられる。）という点では、全く同一の回答である。最後に、「カ その他」の回答をおくことで、子どものコミュニケーション手段について広くとりあげられるようにした。

3 . 結果の分析

本問において、学年、性別問わず、ほぼ80%の子ども達が「ア」の回答を選んだ。コミュニケーションについていろいろな問題を抱えているかもしれない子ども達が、望ましいコミュニケーション手段を選択している、あるいは望ましいと考えているということはわかる。

その他の回答については、「ウ 自分の携帯電話で話す」の回答を除いて、学年別における変化は見られなかった。また、「ウ」においても、携帯電話を持つことを許されるか否かという、家庭や学校の環境による差が回答率の変化に影響を与えていると予想されることから、子ども達の成長段階によって、手段の変化が大きく表れることはないと本問において明らかとなる。

また、「書く」という手段が、女の子において多く使われていることは、明らかである。コンピュータを必要とする「オ Eメールなどの文字通信を使う」においては、大きな差は表れていないが、「エ 手紙を書く」においては、男の子で10%以下の回答に対して、小6以上の女の子に関してはこの回答はすべて40%を越えている。なぜ、女の子が、「書く」という手段を用いるのかということについては、直接子ども達に聞いてみると、更なる調査が必要となってくるが、ここでわかることは、女の子の気持ちを察する際に、「書く」という手段も視野に入れる必要があるということである。

さらなる分析のため、ここで項目を抽象的に「話す」「書く」という形でまとめ直してみる。

「話す」……ア、イ、ウ、（カ・その他）

「書く」……エ、オ、（カ・その他）

複数回答があるので以下のように集計し直してみたい。

- a . 「話す」「書く」両方の手段を使う
- b . 「話す」手段のみを使う
- c . 「書く」手段のみを使う
- d . 両方の手段を使わない・無回答

ここで出る結果は、人によっては、一番しやすい手段を答えるということで複数回答にしていないケースもあり得るので、正確な数値であるとは断定できないが、ここで出るc、dの回答を出した子どものアンケート分析をすることによって、子どもたちが「話すこと」について抱えている問題点を探ることができる。

次に、「友達」という相手と直接的にコミュニケーションをとるか否かという点に着目してデータを分析してみると、

- e . 「直接会って」伝える（ア、カ）
- f . 「媒体を入れて」伝える（イ、ウ、エ、オ、カ）

という形となる。多数の子どもが「直接的」という回答を出したが、これが実際に「話すこと」の行為に積極的につながっているか、ということについては、やはり他の結果と照らし合わせながら分析する必要がある。

ここで、まとめ直した調査結果を示しておく。

・「話す」「書く」について
a . 「話す」「書く」両方の手段を使う 1642人 (29.5%)
b . 「話す」手段のみを使う 3518人 (63.2%)
c . 「書く」手段のみを使う 223人 (4.0%)
d . 両方の手段を使わない・無回答 183人 (3.2%)
・「直接」「間接」について
e . 「直接会って」伝える 4632人 (83.2%)
f . 「必ず媒体を入れて」伝える 761人 (13.7%)
(相談しない、わからない、無回答は含まれていない)

先程、女の子が「書く」という手段を多く用いているという結果が出たので、c . の回答については、性別における調査結果も示しておきたい。

c . 男 (2683人中) 69人 (2.5%) 【「エ 手紙を書く」の回答のみ14人】

c . 女 (2833人中) 154人 (5.4%) 【「エ 手紙を書く」の回答のみ113人】

割合にすると低いが、4.0% (113人) の女の子が、「エ 手紙を書く」の手段のみで、孫談をする点は注意しておきたい。

また、直接話をせずに、携帯電話を使って（その他の手段について回答されているものも含む）コミュニケーションをしていると回答した子ども達は、119人（男56人、女63人）であった。

ここで、調査結果をさらに分析すると、

「c . 書く手段のみを使う」子どもは「話すこと」に問題を抱えているのか。

まず、先程まとめ直した、「エ 手紙を書く」のみを回答した女の子のアンケート結果を分析してみたい。

113人の女の子の問2（a）、（b）における回答と照らし合わせてみると、

（a）ア、イと回答……95人（84.0%） ウ、エ、オと回答……18人（15.9%）

（b）ア、イと回答……66人（58.4%） ウ、エ、オと回答……43人（38.0%）

（（b）に関しては4人の子ども達が無回答であった）

と、好き嫌いに関しては全体の割合とも大きな差異はないが、得意不得意に関しては「不得意である」という意識をもつ割合が少し高くなっていることがわかる。しかし、その他の項目との関連から見て、大きく割合の変わる点は見られなかった。

次に、c. 全体の回答を問2の「話すこと」が「好き」か否かという質問と照らし合わせてみたい。

（c. の回答者223人における、問2（a）とのクロス）

（a）ア、イと回答……183人 ウ、エと回答……19人 オと回答……20人

というように、「話すこと」は好きであるが、相談においては「話す手段」を使わないという傾向が見られる。また、全体の%と比べてみても特に変化は見られない。

では、「得意」か否かという質問においては、

（c. の回答者223人における、問2（b）とのクロス）

（b）ア、イと回答……128人 ウ、エと回答……59人 オと回答……25人

（無回答は含まれていない。）

というように技能面において不得意さを感じている子ども達が26.4%と、全体の%から見て少し高くなっていることがわかる。しかし、先程の「書く」手段のみを回答した女の子と同様、顕著に数字として表れているとはいいきれない。

「話すこと」が「好き」と回答しているながら、相談における最良の手段に「話す」を選ばないのならば、「話す」より「書く」の手段の方が適していると判断しているか、もしくは、「技能」的な問題があると子ども自身が考えているかということになる。ここで、「好き」と答えながら、技能面において不得意さを感じている子どもが何人いるかについて調べてみると、42人（オと回答した11人も含む）であった。

「a.」「b.」の回答をした子どもは「話すこと」が十分にできているのか。

全体の90%以上の子ども達が相談の手段として「話すこと」を選んでいるのだが、果たして十分にコミュニケーションを行っているのであろうか。90%以上という結果からも、全体における分析結果と大きな差が見られないことからも、例えば、問11において75%近くの子ども達が、1度はコミュニケーション不成立を感じたことがあると回答していたりしていることからも、手段として選んでいるが「話すこと」についての問題点を抱えながら行われていると見なくてはならない。

（問8で「a.」「b.」の回答をした子ども達のうち）

問11の質問の回答 ア……3863人 イ……1255人

「d.」の回答をした子どものコミュニケーション意識について。

d. の回答の中で特に多かったのが「相談しない」という回答であった。問3において、「いいえ」を回答した子どもが17.6%いることから、このような回答が出ることは考えられ得ることであるが、ではこのような子ども達のコミュニケーションはどのような傾向を見せているのであろうか。「相談しない」という意味が含まれている回答をした44人を対象に分析をすすめていきたい。

まず、問3の質問で「ア はい」を回答した子どもが13人、「イ いいえ」は30人であった。問3で「ア」と回答した子ども達の3.1の回答を見ると、8人の子ども達が「友達」と回答していることから、この子ども達は相手以外の要因によってコミュニケーションを行っていないことを窺

い知ることができる。また、この子ども達は問2（a）の回答では7人が「好き」「まあまあ好き」を選択しており、特に「話すこと」が嫌いということではない。問13の回答においても、コミュニケーションをそれほど消極的には考えていないであろう（しかし、オ、力をそれぞれ2人が選択しており見方によっては消極的とも考えることができる）と思われる結果が出ている。

次に、問3で「イ」と答えた子ども達について分析したい。この子ども達は、もし友達がいたとしたら相談をするのであろうか。まず、問2（a）において「好き」「まあまあ好き」と回答した子どもが20人いることから、「話すこと」が嫌いではない生徒の割合は高いのであるが、9人の子ども達が「嫌い」「あまり好きではない」「めんどう」と答えている点には注意したい。また、問13の回答も、

（「相談しない」　問3の「イ」と回答した子ども達の問13における回答）

イ…1人　ウ…5人　エ…4人　オ…4人　カ…11人　キ…5人

というように、様々な回答をしている。

「f.」の回答をした子どもは、なぜ直接相手と話をしないのか。

今までの分析同様に、2との関連で整理してみると、「好き」か否かという回答については、以下のような結果が出た。

（f.の回答者761人における、問2（a）とのクロス）

ア…388人　イ…237人　ウ…42人　エ…23人　オ…54人

割合は低くなっているが、やはり多くの子ども達は「話すこと」は「好き」であるという結果は出る。しかし、アの割合が50%を切っていることには注意しておきたい。また、技能面に関しても、

（f.の回答者761人における、問2（b）とのクロス）

ア…115人　イ…342人　ウ…141人　エ…34人　オ…80人

と、あまり全体の割合と差異はなく、コミュニケーション意識が手段に直接的に影響しているとは言いきれない結果が出てきた。

では、子ども達はなぜ相手と直接会ってコミュニケーションを行わないのか、更なる分析が必要となってくる。

ここでは、携帯電話を使ってコミュニケーションをする子ども達の意識についてさらに調べてみる。

（8で「ウ　自分の携帯電話で話す」と答え、「ア」と答えなかった人の10（a）の回答とのクロス）

ア……38人　イ……55人　ウ……9人　エ……8人

オ……18人　カ……14人　キ……3人

（複数回答はそれぞれの回答の人数に入れている）

というように、全体の割合と同様に「イ」の回答が多いことがわかる。

4. 考察

4-1. 現状と課題

「書く」手段は「話すこと」を妨げるか。

「書く」という手段、特に、「手紙」でのコミュニケーションを行う女の子について調べてみたが、「話すこと」に問題があるから「書く」手段を選択するという実態は見られなかった。技術面における不得意意識が少し高いという傾向が見られるが、手段の選択の直接的な原因とは考えられない。

「書く」ということにも、内容の整理、記録に残るという点で長所は多く存在するが、果たしてそのような長所を備えた形での「書く」行為を行っているのであろうか。女の子達の間で行われている、「手紙」におけるチャットなどのコミュニケーション分析などをさらに調査する必要があるが、特に「書く」行為の前述の長所をふまえての選択ということではないと考える。

この先の課題としては、「書く」手段はどのような点に楽しさがあるのか、「話す」ことより「書く」ことを選ぶ理由などの調査が必要となってくる。

「相談しない」子ども達のコミュニケーション意識。

相談しない子ども達のコミュニケーション意識については、個別にとりあげ、難点火について指摘をしていきたい。

例えば、「その他」の回答の中に、

(2) その他について)

「きらいな人が多いから」「相手が楽しくなさそうにするから」「友達がいること自体いやだから」「相手の言っていることがあまりにもベタでつまらないし、考えが合わない」「嫌いな人と話す気はないから」「まわりの人がくだらない」

(4) 理由)

「いつも」「分かり合うまで話すのがめんどうだから」「常に」「自分と全く同じ思想を持つ人はいないから」「ほとんどいつも」「学校で友達に無視されたとき」「いつも」「みんなの言っていることがわからない」

その他、現在問題となっている少年犯罪にもつながりかねない傾向を含む回答なども4、5人という少人数であるが存在した。

完全に、相手との会話、対話、ふれあいを拒否している傾向であるとも捉えかねない内容を答えている子ども達が40%近くいることは、ただ単に「相談することがない」から「相談しない」ではなく「相手と相談する」ことに「無意味」「拒否」「嫌悪」などを感じているから「相談しない」のである。この傾向は、コミュニケーション意識の調査としても注意する必要性があるとともに、この子ども達の成長過程においては、特に注視して見届けなければならないと考える。

この子ども達は、「自分自身」にのみ心を向けている傾向にある。周囲に対して拒否反応を起こす場合、それを拒否・排除という心理が働くことも考えられる。また、自分自身を周囲から否定された場合は、逆に自分を排除しようという行為にもつながりかねない。

現在、いじめの問題、不登校の問題、少年犯罪の問題など考えなくてはならない課題が山積みであるが、このような問題につながる可能性を含む、子ども達の意識の問題は注視する必要がある。人との関わり合い、通じ合いにもつながるコミュニケーションの意識の実態からも、これらの子ども達の問題点は見つかるかもしれない。この点についての詳しい調査については困難な点が多いが、会話分析など、できる限りの方法を用いて調査を続けたい。

媒体を通してコミュニケーション手段をとることの問題点。

携帯電話においても、とほぼ同様である。好き嫌い、得意不得意という意識について割合の差異は見られない。しかし、問10の回答の傾向、「イ」の回答率が全体の調査と同様、割合が高いことは、注意したい点である。

「ア」と「イ」の問題の差は、自分の意見を積極的に主張できる（「ア」）か否（「イ」）かという点にある。携帯電話という媒体に頼るが為に「イ」の傾向が強くなるとすれば、直接的に相手と話をしないことが、主体的な話のやりとり（問13の「ウ」の回答の内容）の妨げとなるということが言える。「ウ」から「カ」の回答も、「イ」同様に消極的傾向が見られるものであるから同

様のことが言える。

問8で「直接的に話をする」という手段をとっているならば、問10での「イ」の回答は、「相手の話を冷静に聞いてみる」と解釈可能であるが、問8で「媒体を通して話をする」という回答のみで話をしているならば、先述の傾向もあり得ると考えざるを得ない。コミュニケーション手段の選択における子ども達の意識を再調査することにより、より明らかとなる点であるが、このアンケートの調査結果からも、直接相手と会うことを恐れる子ども達のコミュニケーションの危険性を注視することは必要となってくる。

4 - 2 . 提言 - 今後へ向けて

「相談」という内容から、本調査においてはあまり明確には表れなかつたが、携帯電話やEメールなどの通信手段が子ども達にも広く使われるようになっている。特に携帯電話に関しては、文字通信機能も付加され、その使用頻度も高くなっている。文字通信の利点として低コストであることなどがあげられるが、逆に一方的な伝達という、望ましいコミュニケーションの形態である「通じ合い」からは遠くかけ離れた実態を生んでしまう危険性もそこには孕んでいる。前項では、直接相手と会わない、携帯電話におけるコミュニケーションが生む会話の消極的傾向について述べた。ここで述べた一方的な伝達は、確かに相手に会話の遮断をされない点で、強くはっきりとした主張を生むことにつながるとも言えようが、さらに悪い傾向とも言える、相手のことを考えないでコミュニケーションを行うことにつながりかねない。よって、相手と直接会わずに、無責任に一方的に話をするすめる傾向が生まれてくるのである。

問題は、自己意識、他人に対する意識が完全に確立していない子ども達にとって、このような手段が思いもよらない副産物を生むのではないかということにある。例えば、相手に反論されるのが怖くて相手と面と向かって話ができない、自分をさらけ出すのが怖くて大事なことを相手に直接話ができない、などということは、媒体を入れないと会話ができないということの一要因として考えられることであり、必ずしもとは言いきれないが、先に挙げた例のような結果につながりかねないことも同時に考える必要性が出てくる。

自分自身を成長させるときに、相対化ということがとても重要となってくる。大人においては、自己反省などの自己相対化が可能であるが、子ども達は自己中心的な面が大人よりも多く見られる点、なかなか自己相対化できない局面も生まれる。その際に、相手からの批判、批評、指摘などが自己相対化においてとても重要なものとなる。これらは、相手が存在しなければ受けられないものであり、また、相手のことを考えた言葉であればあるほどよりよいものとなる点において、相手意識が強くあることが望まれるものである。もし、相手と話すことに対して恐怖心があったとしたら、このようなコミュニケーションは成立しない。また、話を聞くという点においても同様である。子どもの成長を考えた上で、先にとりあげたような問題を生んではならないのである。

情報化社会を迎え、携帯電話、Eメールなどの通信手段を否定することはもちろんできないことであるが、子ども達にとって、直接会って話すコミュニケーション手段が、どれだけ重要なものであるか、このことを無意識のうちにとどめるのではなく、教育の場においても必ず触れておかなければ、先に挙げた問題点が、この先明確に表れてくるであろうと考える。

5 . 反省と課題

今回の調査において、よりよい形のコミュニケーションの一事例として「相談」というものをとりあげたが、「相談」というものが、個別性、プライバシーの強い内容を伴うが為に、普段行われているコミュニケーションの手段を問うものから少し離れた質問の形式となってしまったことは、

今後の課題として残る。例えば、「どのような手段を使うと相手と楽しく話のやりとりができるか」など、内容の限定の方法を考えて調査を行えば、本調査はより明らかなものとなると考える。

また、コミュニケーション手段が、その意識とどれだけ関わっているかについては、普段の子ども達のコミュニケーションの実態調査、現在流行している「Eメール」という手段について子ども達がどのように思っているか、家の電話、携帯電話で話している割合がどれくらいあるのかなどについて子ども達自身に話し合いをしてもらい、より充実した形での調査報告を行うことを今後の課題としたい。

8 抵抗感のある内容に関する伝達意識 ——親しい友達に注意をすることができるか

分析担当 北林 敬

1. 調査の意図

本問は、友達がよくないことをしていた時、子ども（児童・生徒）が注意をするという言語行為によって、他者とのコミュニケーションを取り結ぶことができるのか。また、それができない場合は、何が言語行為を阻む原因であるのかについて調査したものである。相手に注意をするということは、いわば、人間関係を破壊しかねない行為であるとともに、こうした注意を避ける事は、友人関係自体に大きな質的な変容をもたらすことにもなる。注意をすることには、大きな抵抗感が伴うのはそのためである。こうした抵抗感のある内容を伝達する時のコミュニケーション意識とその特質について明らかにしようとするものである。

2. 調査

2-1. 調査問題とその結果

9 親しい友達がよくないことをしていたらどうしますか。1つ答えてください。		
	総数	割合
ア 自分でその友達に「よくない」と言う	3545	63.7%
イ だれかがその友達に言うのを待つ	396	7.1%
ウ 先生にそのことを言う	172	3.1%
エ 他の友達に相談してみる	906	16.3%
オ その他	669	12.0%

イウエオ（「よくない」と言わない）の理由

9.1 どうしてそのようにするのですか。いくつ答てもかまいません。 (複数回答可)		
	総数	割合
ア その友達と仲良くしていかから	995	46.4%
イ 先生や他の友達がいい考えを持っているから	318	14.8%
ウ その友達に言い返されるのがいやだから	343	16.0%
エ 自分の考えに自信がないから	363	16.9%
オ めんどうだから	418	19.5%
カ 一人では言いづらいから	736	34.3%
キ その他	432	20.2%

2-2. 調査問題の解説

問9の解説

問9は、親しい友達がよくないことをしていた時、相手に「よくない」と注意をすることができるかどうかに関する問い合わせである。相手が親しい関係にある場合、相手に対して比較的注意はしやすい。しかし、反面、せっかく築き上げた親しい友達関係に支障をきたす恐れもある。このような抵

抵抗感のある伝達行為を子ども達は、親しい友達に伝えることができるのかどうか。これができるという回答を、ア「自分でその友達に『よくない』という」という選択肢で答えられるように置いた。ア以外の選択肢は、いずれも、抵抗感のある内容を伝達できないという回答である。イ「だれかがその友達に言うのを待つ」は、自分からは行動を起こさないコミュニケーション回避に他ならない。ウ「先生にそのことを言う」は、先生という大人に対しての他者依存に他ならない。エ「他の友達に相談してみる」は、相談した結果によっては注意をするという行為につながる可能性があるという点については良い傾向といえるが、対人関係については慎重であり、友達という他者に依存している点ではウと同様である。さらに、ア~エのいずれにも当てはまらなかったものについては、オ「その他」で記述回答できるようにした。

問9.1の解説

問9.1は、問9においてア「自分でその友達に『よくない』と言う」を選ばなかった回答者に、その理由を尋ねた問い合わせである。つまり、イウエオを選択した理由を、選択肢ア~キの中から選び回答することで、親しい友達に、よくないとどうして言えないのか、その訳を尋ねているのである。選択肢の内容は、ア「その友達と仲良くしていかから」（対人関係への配慮）、イ「先生や他の友達がいい考えを持っているから」（他者への依存）、ウ「その友達に言い返されるのがいやだから」（議論の回避）、エ「自分の考えに自信がないから」（自信の欠如）、オ「めんどうだから」（意欲の欠如）、カ「一人では言いづらいから」（友達への遠慮）、キ「その他」（自由記述）で、これらの中から選択して回答するようにした。親しい友達に「よくない」と言わない理由は、一つとは限らないため複数回答可とした。

以上のように、抵抗感を伴う内容を、親しい友達に伝えることに関して消極的な場合、どのような意識がはたらいているのかを問うている。

3. 分析の結果

この調査であきらかになったことは以下のような点である。

よくないことには「よくない」と言える - 63、7%

親しい友達に注意をするというコミュニケーション行為は、注意をされる相手にとっても、また、注意をする自分にとっても人間関係における危機を招来するおそれのある行為である。親しい友達関係においては、ややもすると流れに任せて、言わなければならないことを言わずに済ますことが多いのではないかという予想もあったが、そうしたなれ合う関係を断ち切って、よくないことは「よくない」と、はっきりと言う強いコミュニケーションができると考える子どもたちが、63、7%もいたことは、子どもにおける積極的な人間関係意識を見ることができる。これは、子どもたちにおいて相互交流のコミュニケーション意識がしっかり存在することを意味している。ここに見られる友達観は、極めて健康であると言えよう。親しい友達が、よくないことをしていたならば、「よくない」と注意をするのが、本当の友達と考えているからといえよう。この回答の学年別グラフにおいては、高等学校2・3学年に増加の傾向があることも特徴的である。

よくないと言えない - 第一の傾向

9.1の理由から、「よくない」と言えない傾向を三つに分類することができる。

第一の傾向は、人間関係に配慮するという意識を持つことである。ア「その友達と仲良くしていかから」と回答した者が46、4%おり、カの「一人では言いづらい」と回答した34、3%の者

も、他の二・三人の友だちと一緒にならば、自分と相手との人間関係に齟齬をきたす恐れは緩和されるという配慮を感じさせる。また、キ「その他」の回答の中でも、「仲間はずれにされるから」や「こわいから、ともだちじゃなくなるかもしれないから」などに表れているように、「よくない」と言うことによって、人間関係に支障をきたすことや、人間関係の絆が壊れることを恐れる意識が存在する。また、ウ「その友達に言い返されるのがいやだから」においても、友達に対して臆病な気持ちとともに人間関係への配慮を見ることができる。

よくないと言えない - 第二の傾向

第二の傾向は、「よくない」ときちんと伝える自信がないというものである。イ「先生や他の友達の方がいい考えを持っているから」という14、8%の回答や、また、エ「自分の考えに自信がないから」という16、9%の回答などがそれにあたる。イの「先生や他の友達の方がいい考えを持っているから」という回答には、自分の考え以上の何かを期待している反面、自分の考えが相対的に、先生や他の友達よりも劣っているのではないかという意識も見られる。また、エの「自分の考えに自信がないから」という回答には、自分の考えが相手を説得できるものではないという不安の意識が見られる。これらの回答は、親しい友達に対しても、「よくない」ことを適切に伝えられる自信がないということを示しているのである。

よくないと言えない - 第三の傾向

第三の傾向は、人間関係に配慮せず、それどころかこうした関係を切り捨てて構わないという意識を持つものである。オ「めんどうだから」という回答をした19、5%がそれに当たる。親しい友達がよくないことをしていても、めんどうだから注意しないということは、どんな場合でも、めんどうなことには手を出さない、他人がどうであろうと関係ないという乾いた人間関係意識を持つものということができる。また、キ「その他」においても、こうした傾向を有するものが存在する。

- ・「悪いことをしている奴とはつきあわない」
- ・「べつに関係ない」
- ・「よくないことに気付かない友だちはいるから」
- ・「悪いことをしている人を見たくないから」
- ・「放っとく」
- ・「よけいなお世話だと思うから」
- ・「自分は自分、人は人」
- ・「他人が何をしようと自分には関係ないから」
- ・「友達やめる」

以上の記述回答に表れているように、よくない行為をしている相手に対しての思いやりの気持ちよりも、人は人、自分は自分と割り切った人間関係観がうかがわれる。この第三の傾向は、全体の約7、5%程度と、第一や第二の傾向に比して少ない数値に止まっているが、最も問題のあるものと言えよう。

4 . 共同討議

何が「よくないこと」なのか

親しい友達がよくないことをいたら、「よくない」と言う。これは、相互理解へのコミュニケーションの第一歩である。しかし、ここで、よくないことと問うたことは、子ども達においては、さまざまに捉えられている。そして、このことが、回答する側に大きな混乱をもたらしてもいるよ

うである。

それは、キ「その他」において、次のような記述回答からも明らかであろう。

- ・「『よくない』の定義がなんなのか分からぬ。ものさしは人によってちがう」
- ・「よくない内容にもよるから」
- ・「あまりにヤバイこと以外は別にいいと思う」
- ・「それをよくないと決めるのは友達。あたしはそれには賛成できないよ、と言うだけ。友達の決めたことが許せなければ理由を言って友達をやめる。」
- ・「常識範囲以内ならそんなに悪いとは思わないから。」
- ・「よくないことの度合いによる。私にとって『ちょっとよくない』ことでも、その子にとって『とても大切』なことなら、他の人によほどの迷惑がかからない限り注意はしない。」

以上の回答に記されているように、「よくないこと」の内容に幅があり、よくないことの度合いもさまざまであるが故に、子どもの回答に揺れを生じさせることとなったように思われる。

「めんどうだから」というのはどうしてか

9.1で、工「めんどうだから」を選択した者は、5566人中418人と、総数の7、5%にしかならないが、これを選択した、コミュニケーションを回避する傾向を持つ者について、彼等の意識について考えたい。

ここで、工を選択した者は、単に相手に対して注意するという行為だけを「めんどう」と感じているわけではない。もちろん、注意をする場面を想定すれば、めんどうだと感じて、工を選択することもあるだろう。しかし、そればかりではなく、相手に対して「よくない」と注意した後に起こることを予想して、そうしたごたごたに巻き込まれるのは、めんどうだと感じて工を選択した者も多いと予想される。

それは、9.1で、工「めんどうだから」と一緒に、キの「その他」の両方を回答した者の記述回答部分からも明らかである。

- ・「怖いから」
- ・「嫌われたくない」
- ・「『よくない』と言われると、怒ったり、他の人に自分の悪い所を言われたりするから」

以上の回答が示すように、注意をした後に、相手からの報復が予想され怖いと感じ、こうした事態に巻き込まれることをめんどうと感じている。

この設問では、親しい友達に注意することができるのかという問い合わせであることと考えあわせれば、こうした回答を寄せる子供の存在は、子どもの危うく脆い人間関係というものを想像させる。工の「めんどうだから」だけに印をつけ、キ「その他」に記述しなかった多くの子どもの中にも、こうした脆い人間関係において、コミュニケーションをとっている者も多く存在するのではないか。分析においては、乾いた人間関係意識を持つという指摘をしたが、乾いた人間関係意識の生まれた背景には、簡単に壊れてしまう危うくもろい人間関係の中で生きているという現実があるのではないか。言い換えれば、一見親しい友達であっても、ちょっとしたことがきっかけとなって、すぐに敵視し報復に出るというきわめて不幸な人間関係の中におかれているのではないかと考えられるのである。

5 . 考察

5 - 1 . 現状と課題

「よくない」と言える友達関係 63、7%

問9において、ア「よくない」と言うと回答した子どもが63、7%と圧倒的に多い。なれ合う関係を断ち切って、よくないことは「よくない」と、はっきりと言う強いコミュニケーションができると考える子どもたちが、63、7%もいたことは、子どもにおける積極的な人間関係意識を見ることができ、高く評価したい。さらに、学年別グラフによってその傾向は、高等学校2・3学年に増加の傾向があることから、思春期を越え自我がようやく確かなものとなりつつあるという成長の過程と軌を一にしていることができるよう。ただし、ここでふまえておかなければならぬことは、こうした回答をした子どもが、実際の場面において「よくない」と言えるかということとは別なのである。おそらく、この数値は、かなり低下することと考えられる。

何故、親しい友達に「よくない」と言えないのか

分析にもあるように、「よくない」と言えない子供たちの傾向は、大きく三つに分類できる。それぞれの傾向において、積極的にコミュニケーションが取れない理由についても考察しておきたい。

第一は、ア「その友達と仲良くしてみたいから」と回答した46、4%と、カの「一人では言いづらい」と回答した34、3%の回答がそれにあたる。ア「その友達と仲良くしてみたいから」というのは、相手にとって耳に逆らう内容を伝達することは、人間関係を破局へと導くものであることを承知しているが故に選ばれた回答であろう。また、ウ「その友達に言い返されるのはのがいやだから」という16、0%の回答は、言い返されるという対立的状況におかれることで、親しい友達との間に溝ができるaosをおそれ、そうした対立的状況を回避する臆病な気持ちが表れており、これも、人間関係意識によってコミュニケーションができなくなっているといえよう。また、カ「一人では言いづらい」というのは、自分だけではなく他の二・三人の友だちと一緒にならば、自分と相手との人間関係に齟齬をきたす恐れが緩和されるという配慮を感じさせる。総じて言えることは、この傾向を持つ者は、一見優しく相手のことを考えるよう見えるが、実のところは、彼等の生育歴において、抵抗感のある内容を友達にぶつけたことがないのではないかと想像されるのである。それ故に人間関係に破局や齟齬をきたす行為に臆病な態度をとらざるを得ないのではないかと考えられるのである。

第二は、イ「先生や他の友達の方がいい考えを持っているから」という14、8%の回答や、エ「自分の考えに自信がないから」という16、9%の回答などがそれにあたる。この回答を寄せた子供たちは、自分の考えの不足や、適切な反論、なにより自分自身の考えに対する自信がないと答えている。ここにおけるコミュニケーション阻害の要因は、自分の考え方や他者に伝える能力に自信がないという意識である。それは、単に伝達内容や伝達能力という問題にとどまるものではない。それは、長い成長の過程において、成功感を持つことが少なく、自分の態度をあいまいなまま保留在ってきた結果、自分自身に自信がもてなくなっているためといえよう。

第三は、オ「めんどうだから」という回答をした19、5%に代表されるもので、めんどうなことには手を出さない、他人がどうであろうと関係ない、相手に対しての思いやりの気持ちよりも、他人は他人、自分は自分と割り切る。ここに共通するものは、相手との関わりを避けようとする自閉的な意識である。こうした回答を寄せた者は、これまで、どんな交友関係を作ってきたのか、暗澹たる思いにかられる。彼等の言うめんどうでないこととは、言い換えれば、自分の殻に閉じこもり相手との心の交流もなく暮らすことである。彼等は、自分だけの平穏な生活に閉じこもり、そこから一步も踏み出そうとしない人間である。それは、共同討議で提起されたように、危うく脆弱な人間関係が原因であるかもしれない。また、バーチャルなゲームやテレビジョンの影響もあるであろう。ともあれ、こうした自閉的な傾向は、学年別グラフによると中学から高校にかけて漸増の傾向にあり、深刻な問題と言えよう。

倫理観の欠如

「よくないこと」の内容にはこだわらず、「よくないこと」に対してよくないと考えない子どもも存在した。キ「その他」の記述には、次のように倫理観が欠如しているのではないかと危惧される回答も少なからず目についた。

- ・「なんとなくぼくもやるときがあるから」
- ・「別に何やってもいいんじゃない？」
- ・「悪いことはぜったいだれでもする。」
- ・「私もよくないことにのってしまう」
- ・「おもしろそうだから（自分も仲間に加わる）」
- ・「たいてい自分が似たことをやったことがあるから」
- ・「自分もしてみたい時があるから」
- ・「自分もよくやりそうなことなら、それに口出しをする権利はない」
- ・「一緒にやると楽しい。」
- ・「私自身がよくないと思っていないと思う」

これらの回答に表れている考えは、よくないことをもって他人に注意しないばかりか、自分もおこなったり、誰でもてしまいかねないこととして、悪をそのまま肯定していることである。こうした回答をしたもののが想定しているよくないことには程度の違いがあるにせよ、倫理観や正義感というものの価値基準が定まっていないことが見て取ることができるのである。このような子どもが、ごくわずかではあるが存在することも見逃してはならない。そして、こうした子どもをいかに教育していくべきかということは、学校のみならず、家庭・社会においても取り組むべき課題に他ならないのである。

5 - 2 . 提言

親しい友達に対して「よくない」と言うことができる子どもが、63、7%いたことについては、評価すべきである。同時に、相手に注意ができない36、7%の子どもをいかにすべきかが問題とならねばならない。

特に注意ができない36、7%の理由の中で、「めんどうだから」を選択した19、5%の子どもは、全体から見れば、7、5%でしかないけれども、大きな問題を抱えていると言わざるをえない。「めんどうだから」とコミュニケーションを回避することは、自分を優先にして相手のことを思いやることができないことに他ならない。要するにわがままで自分勝手な人間である。彼らには、人間関係を構築するという、人間としての基礎的な部分が未熟なのである。このように自己中心的な考えに偏りがちな子どもを、いかにして人間関係の輪の中に引き入れていくのかが、家庭や学校そして地域社会における課題なのである。その解決の為には、自己中心的な殻に閉じこもろうとする子どもに、友達と一緒に協力しあって解決するという経験を据えるべきである。例えば、ボランティアなどの活動に協同で取り組ませることもよい方法であろう。相手が喜んでくれることの喜びに気づくことで、彼等の活動もより積極的となり、主体的に協同活動に取り組むことができよう。こうした協同活動を通して、望ましい人間関係を構築するような経験を重ねさせることが急務と考える。

6 . 反省と課題

問9における反省点は、アンケートを実施した子どもの実数と、回答数に違いが現れたことである。問9は、問9.1と違い、一つのみ答えるようになっている。本来ならば、アンケートを実施

した 5566 名と同じ数値の回答があるばずであった。ところが、回答数は、5688 と、実際にアンケートに答えた人数よりも 132 も増えている。これは、複数回答の所ではないにも関わらず、複数を回答した者があり、それを、そのまま加えた結果である。それに伴い、パーセンテージにおいても、若干の誤差が生まれてしまった。

9 抵抗感のある内容に関する受容意識 ——友達の意見を受け止めることができるか——

分析担当 北林 敬

1. 調査の意図

本問は、自分に対する批判的な言葉をどのように受け止めるのかという、子ども（児童・生徒）が、友達から「よくない」と言われた場合の反応とその理由を問うている。この回答から、抵抗感のある内容を子どもは受け止められるのか。また、批判を受け止められないとしたならば、その原因として、どのような意識がそこに存在するのかを明らかにすることを目的としている。また、友達の親疎によって、相手の批判の受け止め方にどのような違いが生まれ、どのような意識が存在するかという関係性の親疎がもたらすコミュニケーション意識の格差についても明らかにしようとするものである。

2. 調査

2-1. 調査問題とその結果

10. あなたが正しいことをしていて、そのことについて「よくない」と友達から言われたらどのようにしますか。（a）親しい友達（b）あまり親しくない友達の場合、それぞれ1つ答えてください。

		(a) 親しい友達	(b) 親しくない友達
ア	自分のやった（言った）ことは正しいと説明する	1843 33.1%	1309 23.5%
イ	友達になぜそのように言うか聞いてみる	2704 48.6%	2179 39.1%
ウ	自分のやった（言った）ことは正しいと思いながら、言わずには黙っている	230 4.1%	590 10.6%
エ	自分のやった（言った）ことは正しいと思いながらも、とりあえず友達の考えに合わせておく	331 5.9%	581 10.4%
オ	友達が正しいのではないかとふりかえってみる	742 13.3%	468 8.4%
カ	気にしないようにする	203 3.6%	787 14.1%
キ	その他	112 2.0%	201 3.6%

10. 1 どうしてそのようにするのですか。いくつ答えてもかまいません。（10のアイを除く、ウエオカキの理由）（複数回答可）

		(a) 親しい友達	(b) 親しくない友達
ア	その友達と仲良くしてみたいから	800 49.4%	420 16.0%
イ	自分のやること（言うこと）にあまり自信が持てないから	433 26.8%	504 19.2%

ウ その友達の方が強い立場にいるから	145	9.0%	250	9.5%
エ めんどうだから	238	14.7%	1084	41.3%
オ その他	220	13.6%	309	11.8%

2 - 2 . 調査問題の解説

問10の解説

問10では、自分が正しいことをしている時に、友達から、「よくない」と言われた場合、どのような行為をとるのかについて問うている。この回答から、相手の批判に対してきちんと受容し、コミュニケーション行為につなげているか否かを見ることができる。ア「自分のやった（言った）ことは正しいと説明する。イ「友達になぜそのように言うか聞いてみる」という回答は、積極的なコミュニケーション行為がなされている回答といえる。それに対して、ウ「自分のやった（言った）ことは正しいと思いながら言わず黙っている」、エ「自分のやった（言った）ことは正しいと思いながらとりあえず友達の考えに合わせておく」、カ「気にしないようにする」などは、コミュニケーション行為へ発展していくことは考えられない回答である。また、オ「友達が正しいのではないかとふりかえってみる」は、相手の批判について受け容れる態度はありながらも、コミュニケーション行為へとは直接に結びついていない回答である。以上のような、選択肢から、子ども達が自分の行為に対して「よくない」と言われた時の反応について、当てはまるものについて回答することで、子どもは抵抗感のある内容を、どのように受け止め、どのように反応するのかという傾向を捉えることができる。さらに、友達の親疎の違いによって、これらの回答に大きな違いが生じることが予想されたので、親しい友達に言われた場合と、親しくない友達に言われた場合とに分けて回答を求めた。

問10 . 1の解説

問10 . 1では、ウエオカの回答をした理由について問うている。アの「自分のやった（言った）ことは正しいと説明する」、イの「友達になぜそのように言うか聞いてみる」という回答は、相手に自分の正当性を伝えようとしたり、相手の考えを尋ねるというコミュニケーション行為がなされている回答といえる。ところが、ウエオカという回答では、積極的に自分を表現しようとしたり、相手に説明して貰って相互理解を深めようとする姿勢はうかがわれない。こうした反応をする理由について、ア「その友達と仲良くしていたいから」、イ「自分のやること（言うこと）にあまり自信が持てないから」、ウ「その友達の方が強い立場にいるから」、エ「めんどうだから」という四つの選択肢を用意した。また、以上のア～エ以外の場合には、自由記述で答えられるよう、オ「その他」を回答できるように選択肢に入れた。さらに、親しい友達に「よくない」と言われた時、説明したり相手の意見を聞いたりするといったコミュニケーション行為に向かわない理由は、必ずしも一つとは限らないため複数回答可とした。

3 . 結果の分析

この調査で、明らかになったことは、以下のような点である。

抵抗感のある内容でも受容できる

ア「自分のやったこと（言ったこと）は正しいと説明する」、イ「友達になぜそのように言うか聞いてみる」という回答は、相互理解を深めようするコミュニケーション行為といえる。すなわち、友達間において伝達交流の意識と伝達交流の意欲が存在している。本問の回答では、親しい友達では、ア(33、1%)に加え、イ(48、6%)と、合わせて約8割にも達するのに対して、親し

くない友達の場合、ア(23、5%)とイ(39、1%)とを合わせても、約6割程度に止まっている。ここから、親しい友達関係においては、8割の回答者が、相手から、「よくない」と言われた場合でも、相手との相互理解を深めようとしてコミュニケーション行為をとることが分かる。また、親しくない友達においても、こうした抵抗感を伴う内容でありながら、6割の者が、相手の考えを受容しようとする姿勢を見せていることは、子どもの対人関係における柔軟な姿勢といえよう。

親しい友達・親しくない友達

前節において、抵抗感のある内容でも受容できるとする回答は、親しい友達の場合、8割の数値であるのに対して、親しくない友達の場合6割程度に止まるということを述べた。ここから、親しくない友達よりも、親しい友達の場合に、相互理解を深めようとしてコミュニケーション行為に踏み切りやすいことがわかる。つまり、両者の回答における数値の開きから、友達関係における親疎の関係性が、伝えあおうとする意識・意欲に大きな影響をもたらすことが分かる。また、親しい友達の場合、学年が進行するにしたがって、ア「自分のやったこと(言ったこと)は正しいと説明する」の割合は、徐々に低下するのに対して、イ「友達になぜそのように言うか聞いてみる」の割合が高くなっていくことも特徴的である。ところが、親しくない友達の場合では、ア「自分のやった(言った)ことは正しいと説明する」については、親しい友達の場合と同じく低下しているが、イ「友達になぜそのように言うか聞いてみる」の割合は、横ばいのままで推移しているのである。ここでも、両者の違いを見ることがある。

友達の意見を受け止められない

ウ「自分のやった(言った)ことは正しいと思いながら言わずに黙っている」や、エ「自分のやった(言った)ことは正しいと思いながらとりあえず友達の考えに合わせておく」という回答は、相手の意見を無視したり、表面的な同調によって、その場から逃避しようとする態度を意味する。こうした態度では、相互理解を深めるというコミュニケーション行為へとは結びつかない。このウ・エの回答では、親しくない友達(ウ10、6%、エ10、4%)の場合の回答が、親しい友達の場合(ウ4、1%、エ5、9%)と比べて、2倍程度となっている。このことは、親しい友達に比べて、親しくない友達は、自分の正当性を話しても分かって貰えない、あるいは、分かり合えないという意識がこの数値の開きとなって表れているといえよう。また、カ「気にしないようにする」の回答した者は、親しくない友達の場合14、1%、親しい友達の場合3、6%と、相手の意見を、無視したり、相手を敵視したりして、相手の批判を考慮の対象からはずす者の割合は4倍近く存在している。これは、他を無視したり、敵視することは、親しい者同士の間では難しいが、親しくない間柄の場合は、容易に無視・敵視しうるためには4倍という数字となって表れたと考えられる。

高度な他者受容の姿勢 - 友達が正しいのではないか -

オ「友達が正しいのではないか」とは、親しい友達の場合13、3%、親しくない友達の場合8、4%いる。この回答の特質を考察するために、オと一緒にキ「その他」の記述回答の両方を回答している者の記述部分が手がかりとなる。それは、次のように記されている。

- ・「よくないといわれるようなことをした」
- ・「考えてみる」
- ・「人だから考えてみるのはあたりまえ」
- ・「まちがっていたからかもしれないけどゴメンネとあやまる」
- ・「自分の言いたいことを遠慮してしまう」
- ・「考える。(本当にそうなのかと)」

- ・「ようすをみる」など。

ここから、分かることは、相手の批判に対して、しっかりと考え、周囲の状況をよく見て、自分が悪い場合には謝るという姿勢がうかがわれる。つまり、自己の行為を反省的に捉える傾向を有しているのである。特に、親しくない友達では、8、4%であるのに比べて、親しい友達では、13、3%の回答があり、友達が親しい場合には、その批判を受け容れる者が多いといえよう。

高度な他者受容の姿勢 クロス集計の結果からー

問10で、オ「友達が正しいのではないか」と反省的に捉えた理由は、問10.1とのクロス集計によって分かる。

問10.1	ア	イ	ウ	エ	オ
問10 オ	355 47.8%	275 37.1%	64 8.6%	38 5.1%	111 15.0%

この表から分かることは、ウエの割合が低く、アイの割合が高いことである。つまり、オ「友達が正しいのではないかとふりかえってみるのは、問10.1ウの「その友達が強い立場にいるから」という、相手の威力に屈服した結果でもなく、また、エ「めんどうだから」という投げやりな気持ちからでもない。問10でオを選択した理由は、ア「その友達と仲良くしてみたいから」が最も多く、次に、イ「自分のやること（言うこと）に自信が持てないから」であった。アを選んだ理由は、友達との人間関係を大切にすることから、自分への批判をかみしめて振り返ってみようとする意を意味する。また、イ「自分のやること（言うこと）に自信が持てないから」というのは、相手の意見を尊重し、自分の行いを反省して捉えようとする意を意味するのである。

以上から、オの「友達が正しいのではないか」という回答をした者は、友達から、「よくない」と言わされたときに、友達の考えが正しくて、自分の考えや行いは、間違っているのではないかと反省的に捉えることができるものといえるのである。

コミュニケーションにおける受容と伝達の意識 クロス集計の結果から

問9で、親しい友達に対して、ア「自分でその友達によくないと言う」と回答した者が63、4%あり、これらの子どもが、「よくない」と注意することができた。では、こうした伝達意識を持つ者が、相手から、「よくない」という意見を受けた場合に、どのような態度を取るのであろうか。健全な伝達意識を持つ者は、親しい友達の意見に耳を傾けることができるものであろうか。このことを明らかにするために、問9のアと問10.1の(a) (=親しい友達)において、相手とのコミュニケーションに対して肯定的な態度であるア「自分のやった（言った）ことは正しいと説明する」、イ「友達になぜそのように言うのか聞いてみる」、オ「友達が正しいのではないかと振り返ってみる」とのクロス集計を試みた。

問10 (a)	ア	イ	オ
問9 ア	3545	1100	1646

問9でア「自分でその友達によくないと言う」を選んだものは、全部で、3545名あり、そのうち、問10(a)でアを選択したもの1100、イを選択したもの1646、オを選択したもの260、合計3006、割合に直して、問9アを選択したものの85%もの子どもが、積極的な受容意識を示している。言い換えれば、受容態度としては否定的な態度である、ウ「自分のやった（言った）ことは正しいと思いながら、言わずに黙っている」、エ「自分のやった（言った）ことは正しいと思いながらも、とりあえず友達の考えに合わせておく」、カ「気にしないようにする」、キ「その他」などを選択した者は、問9のアを選択した者のうちの15%にしかならないというこ

となるのである。

問9は、「よくない」と言う場合、問10は「よくない」と言われた場合で、それぞれ抵抗感のある内容についての伝達意識と受容意識を問題にしていた。そして、このクロス集計の結果によれば、親しい友達関係においては、伝達意識と受容意識については相関関係にあることを示しているのである。

4. 共同討議

気にしないようにする 他人は他人、自分は自分

力「気にしないようにする」は、他人の意見を受け容れようとする気持ちが全く見られない態度である。この力と一緒に、キ「その他」を複数選択した者の記述をみると次のように記されている。

- ・「しらないよ。」
- ・「ひどいときは『うっせーな』と言う」
- ・「うざったいのでシカトする。」
- ・「殺す。」

この場合、他人に自分が正しいと考える行いに対して批判をされるということであるから、「うざったい」「うっせー」などという怒りや敵意の気持ちとともに、「しらないよ」と相手の意見を黙殺する意識も存在する。ここから分かるように、力「気にしないようにする」という回答をした者は、自己中心の考えに囚われ、自分に対する批判を受け入れないばかりか、そうした批判をする相手に対して、例えば「殺す」という回答に表れているように敵意を持つ傾向にあるといえよう。こういう子どもに本当の友達などできるのであろうか。自分の気に入らない言葉を一度でもぶつけてきたら、もう友達関係は壊れてしまう。いや、自分から壊してしまう子どもである。いずれ、こうした考え方から脱却していくなければならないはずだが、学年別折れ線グラフでは、親しい友達の場合で、横ばい。親しくない友達の場合では、少しずつ増える傾向ですらある。アダルトチルドレンという言葉に象徴されるように、自分勝手でわがままで、大人になれないままの成人がふえていくこととなるのではないか。

5. 考察

5 - 1. 現状と課題

高度なコミュニケーション意識

親しい友達の場合、学年が進行するにしたがって、ア「自分のやったこと（言ったこと）は正しいと説明する」の割合は、徐々に低下するのに対して、イ「友達になぜそのように言うか聞いてみる」の割合が高くなっていくと分析において述べた。

親しくない友達の場合にイの割合が、学年進行で横ばいの状況で推移するのに比べ、イが、上昇の傾向を示しているのである。

アとイはともに、相互理解を深めようするコミュニケーション行為である。しかし、相手の意見を聞く前に、自分の正当性を述べるのは、ややもすると独り善がりの弊に陥る可能性もある。これに対して、自分の正当性を主張する前に、まず、相手の批判をきちんと聞き、相手の考えを受け止めて、自分の考えを検討し主張しようとする態度は、より高度なコミュニケーション意識の現れということができる。それ故、学年進行の折れ線グラフにおいては、小学生から中学・高校と学年が進むにつれて、イ「友達になぜそのように言うか聞いてみる」の回答が、ゆるやかではあるが増加していると考えられるのである。

コミュニケーションできない理由 遠慮・回避・自信のなさ

友達から「よくない」と言われたときに、コミュニケーション行為によって反応しなかった回答を分析すると、大きく三つに分類できる。

第一は、友達に対して遠慮する傾向を持つものである。いわば、人間関係に亀裂をもたらすことを恐れてコミュニケーションを避けるグループである。これは、ア「その友達と仲良くしてみたいから」を、回答した者たちで、親しい友達の場合49、4%、親しくない友達の場合16、0%の回答があった。親しい友達の場合、コミュニケーションができない者のほぼ半数にあたる49、4%の者がこの回答を選択しており、友達に対する遠慮が原因となって、批判する相手との伝達を避ける傾向にある。このように、友達への遠慮をするのは、親しくない友達よりも、親しい友達である場合の方が多い。

以上から、抵抗感のある内容を受け止められない原因として、人間関係に配慮した結果として生まれた友達への遠慮の気持ちが存在しているといえよう。

第二は、コミュニケーションを回避しようとする傾向である。これは、エ「めんどうだから」を回答した者たちで、親しい友達で14、7%、親しくない友達で、41、3%の回答があった。特に、親しくない友達の場合は、この「めんどうだから」を選択した者が、選択肢の中で最も多く、41、3%となっており、相手の批判に対して答えたり、相手の真意を確かめたりするなどの、他者との相互交流・相互理解を避けようとする意識がある。自分に対して注意した友達に対して、意見の衝突を回避するという態度をとることは、自己の考えを説明し、友達と分かりあおうという意欲に欠けるものである。これは、学年別グラフに示されるとおり、学年進行に伴って増加する傾向にある。

以上から、抵抗感のある内容を受け止められない原因として、分かりあおうというコミュニケーション意識の欠如を挙げることができる。

第三は、自分のやること（言うこと）に自信が持てないという傾向である。これは、イ「自分のやること（言うこと）にあまり自信が持てない」という回答をした者たちで、親しい友達の場合26、8%、親しくない友達の場合19、2%の者がこれを選択している。ここで、特に顕著なことは、親しさの程度のよって、回答の割合に大きな違いが存在することが分かる。とりわけ、親しい友達の場合、26、8%の回答が寄せられており、ここから、親しい友達に「正しくない」と言わされた場合、自分の考え方やおこないに対する自信が揺らいで、その考え方や行動を反省的に捉えようと内向する傾向がある。これは、学年進行にしたがって僅かずつ遞減の傾向にあり成長とともに、自分自身の考え方や行動に対する自信が、徐々にではあるが深まっていく傾向にある。

以上のように、抵抗感のある内容を受け止められない原因として、コミュニケーション能力についての自信の欠如を挙げができるのである。

親しくない友達の意見は受け入れられない

問10のウ・エの回答においては、親しくない友達の場合の回答が、親しい友達の場合の回答と比べて、倍以上の数値を示している。すなわち、親しくない友達（ウ10、6%、エ10、4%）の方が、親しい友達（ウ4、1%、エ5、9%）の倍以上の数値なのである。このことは、親しい友達に比べて、親しくない友達は、自分の正当性を話しても分かって貰えない、あるいは、分かり合えないという意識がこの数値の開きとなって表れているといえよう。また、無理に自分の正当性を主張することで、相手との意見の違いを顕著にすることは、その友達との交際に齟齬をきたすものとなりかねない。親しくない友達との人間関係を円滑に働かせるためにも、沈黙または妥協という態度をとることは、それ以後の交友関係を継続させるためには不可欠ものである。こうした子どもの意識がはたらいた結果、親しくない友達の場合のウ・エの回答は、親しい友達の倍以上の数値

となって表れているのである。同様に、力「気にしないようにする」の回答も、親しくない友達の場合 14、1%と、親しい友達の場合 3、6%と比べて、相手の意見を、無視したり、相手を敵視したりして、相手の批判を考慮の対象からはずす者の割合は 4 倍も存在するのである。これも、先に述べたウエと同じく、他を無視するという態度である。やはり、親しくない友達からの批判は、なかなか受け入れられないし、人間関係もよくなることは期待できないのである。

以上から、友達の親疎が、抵抗感のある内容を受け止める場合に大きな影響をもたらしていること、とりわけ親しくない者の意見は受け容れられない傾向にあるということが顕著に見て取ることができるるのである。

友達が正しいのではないかー

オの「友達が正しいのではないか」という回答をした者は、友達から、「よくない」と言われたときに、友達の考えが正しくて、自分の考えや行いは、間違っているのではないかと反省的に捉えることができると分析において述べた。彼らは、他者の考えを受容するとともに、自己の考えを相対化して考える姿勢を持つことができるのである。こうした、内面的な沈思の態度は、すぐには、相手に対するコミュニケーションとして表れてはこない。しかし、表面的な反応がない代わりに、相手の批判を聞き、沈思黙考することで、相手の批判を受容することができる、高度な他者受容の姿勢を有しているのである。こうした反応をする者は、親しい友達の場合も親しくない友達の場合も、学年進行に従って何らの変化もなく、横ばいの状態であることが、学年別折れ線グラフからわかる。これは、オ「友達が正しいのではないか」という反省的思考をおこなうことのできる子どもの割合に変化がないということを意味している。ここから、こうした高度な他者受容の態度は、子どもをとりまく環境の変化や、成長に伴う思考の深化といったものとは違って、こうした反省的思考を持つ多くの者は、その生来の気質に基づくということがいえるのではなかろうか。内向的な子どもが、オ「友達が正しいのではないか」とふりかえって考えているのであろう。もちろん、こうした内向的な性質を持つ子どもにおいても、親しくない友達から「よくない」といわれた場合には、受け容れる割合が少なくなるのも当然といえよう。

5 - 2 . 提言

問 10 から親しい友達の場合においては、相手からの注意や批判はよく聞き入れることができるといえよう。問 9 の親しい友達に「よくない」と言えることと同様に評価しておきたい。しかし、あえて、ここで、問題にしたいことは、こうした親しい友達どうしでのコミュニケーションが成立しているからと言って、安心していられないのではあるまいかということである。

これからのお子様に求められるコミュニケーション能力は、親しくない人間といかにコミュニケーションしていくかということに他ならないからである。

問 10 のウ・エの回答においては、親しくない友達の場合の回答が、ウ「自分のやったことは正しいと思いながら、いわずに黙っている」が 10、6%、と親しい友達の場合の回答と比べて、2、6 倍もの数値を示していた。また、エ「自分のやった（言った）ことは正しいと思いながらも、とりあえず友達の考えに合わせておくは、10、4%と、親しい友達に比べて 1、7 倍もの数値となっている。このことは、親しい友達に比べて、親しくない友達は、自分のことを分かって貰えない、あるいは、分かり合えないとはじめからコミュニケーションを回避してしまっているのである。ウのように言わずに黙っていたり、エのように友達の考えに合わせておくという態度は、誠実な態度とはいえないことは言うまでもない。また、力「気にしないようにする」は、相手の意見を無視したり、相手を敵視したりして、相手の批判を考慮の対象からはずすという態度である。これは、14、1%あり、親しい友達の 4 倍近い数値となっている。

学年別折れ線グラフでは、親しくない友達でウ・エと回答したものは、両者ともに、少しづつではあるが、増加している。同様に、力の「気にしないようにする」も学年別折れ線グラフでは、漸増の傾向にある。

以上から、子どものコミュニケーションの実態が、大きく二極化の傾向にあることが見て取れる。親しい者同士でのコミュニケーションは抵抗感のある内容であってさえも成立しており、抵抗感のある内容についても互いに注意しあい、それによってより親密な交友関係を作っていくことができる。これに対して、親しくない者同士のコミュニケーションは、不誠実な態度に陥りがちであり、コミュニケーションを回避して済まそうとする傾向にあるといえよう。しかも、この傾向は、学年の進行とともに増加の傾向にあり、それは、子どもの成長とともに深まる傾向にあることを意味しているのである。

大人になるということは、社会で生きるということである。そこでは、決して親しい友達とだけつきあっていけるものではない。いや、それどころか、親しくない者といかにしてコミュニケーションを取り結ぶことができるかが問題となるのである。そして、それがきちんと取り結ぶことができるようになってはじめて社会人として一人前といえるのである。物言わぬ事なかれ主義の大人ももちろん多い。こうした社会的風潮が、子どものコミュニケーション意識に大きな影響を与えていくともいえよう。物言わぬ大人ではなく、誰とでも、誠実に語り合える人間へと育てることは、社会的な課題といえるのである。

6 . 反省と課題

問10における反省点は、アンケートを実施した子どもの実数と、回答数に違いが現れたことである。問10は、問10・1と違い、一つのみ答えるようになっている。本来ならば、アンケートを実施した5566名と同じ数値の回答があるはずであった。ところが、回答数は、(a)で、6165(b)で、6115と、実際にアンケートに答えた人数よりも大幅に増えている。これは、複数回答の所ではないにも関わらず、複数を回答した者があり、それを、そのまま加えた結果である。それに伴い、パーセンテージにおいても、大きな誤差が生まれてしまった。

付言

自分が正しいと考えて行ったことや、言ったことを相手から「よくない」と言われることは、極めて心外なことというべきである。つい、相手を無視したりコミュニケーションを回避しようという衝動に駆られることもある。しかし、コミュニケーション以外に互いの考えをぶつけ合い、自分のいたらぬ所を補い、高めあう方法はない。人間は常に自分の考えに基づいて行動するが、必ずしも自分が正しいとは限らない。自分だけの視点からしか物が見えないようでは、客観的な判断は生み出すことができないのである。

以上から、相手の立場に立ってものを考え、相手の気持ちになって感じることが必要である。そのために、他者の考え方や思いを想像する力を、家庭や学校の場において培うことが重要となる。例えば、ボランティア活動に参加したとしても、老人や障害者の立場に立って考えたり、感じたりすることができなければ、真のボランティアとはいえない。それは形骸化されたものというべきであろう。相手の立場に立てるかどうかは、まさに想像力の賜に他ならない。こうした想像力を養うためにも、家庭においても、また、地域や学校の図書館においても、幼い頃からの文学体験が子どもの想像力を育成し、ひいては、狭い視野に拘泥せず、自己革新を図ることのできる人間へと成長させたい。そのためにも、家庭教育・学校教育・社会教育というそれぞれの場において、こうした想像力を育んでいくべきである。三者が、子どものものの見方・考え方の幅を広げることを常に念頭

に置きながら、子どもの教育に関わっていくことがなにより求められるのである。

10 コミュニケーション不成立に関する意識 「わかってもらえない」ということをどう意識しているか

分析担当 高山 実佐

1. 調査の意図

本問は、友だちとかかわっていく中で、「自分の話がわかってもらえない」と実感した経験の有無を問うている。すなわち、友だちとの関係で自分自身を理解してもらえないという意識を持つことがあるかどうか、を問うものである。次に、「わかってもらえない」ことを意識化させた、その理由を問うている。「わかってもらえない」原因をどう捉えているのか、選択肢から選ぶことで、コミュニケーション不成立について、その子ども（児童・生徒）自身がどう意識しているかを見るのである。最後に、「わかってもらえない」理由をどのように感じるのかを問い合わせ、今後のコミュニケーションへの意識を明らかにしようとするものである。

2. 調査

2-1. 調査問題とその結果

11 自分の話をわかってもらえないと思ったことはありますか。

ア はい	4128 74.2%
イ いいえ	1362 24.5%

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	全体
ア はい	男 62.5%	67.0%	69.3%	72.1%	73.7%	71.1%	71.6%	71.8%	71.7%	74.2%
	女 64.7%	71.5%	73.9%	72.1%	81.0%	80.7%	90.1%	81.8%	79.7%	
	計 63.5%	69.0%	71.7%	72.1%	77.1%	75.9%	83.9%	77.4%	76.9%	
イ いいえ	男 36.9%	32.4%	30.0%	25.9%	24.3%	26.2%	25.9%	25.0%	24.8%	24.5%
	女 34.5%	28.0%	25.5%	26.1%	17.6%	19.1%	9.3%	17.2%	17.9%	
	計 35.8%	30.4%	27.7%	26.0%	21.2%	22.7%	14.9%	20.6%	20.3%	

アはい（わかつてもらえないと思ったことがある）の理由 （複数回答可）

11.1 それはどうしてですか。いくつ答えるてもかまいません。

ア 友達が聞きたいと思っていないと感じるから	1434 34.7%
イ 自分の考えがうまくまとまっているから	2307 55.9%
ウ 自分の話の中身が難しすぎて友達にはわかりにくいから	951 23.0%
エ 自分から話すのになれていないから	516 12.5%
オ 話すことが下手だと思っているから	777 18.8%
カ その他	419 10.2%

上記11.1の理由について

11.2 そのことをどのように感じますか。

ア それでよいと思う	430 10.4%
イ とりあえずそれでよいと思う	968 23.4%
ウ できれば変えたいと思う	1921 46.6%
エ 変えたい	802 19.4%

2 - 2 . 調査問題の解説

コミュニケーションにおける相互理解関係からの疎外をどう意識しているか、を問題にしている。つまり、発話「自分の話を」受容「わかってもらう」というコミュニケーションの関係がどこかで齟齬をきたしている、その不成立の実感を経験したことがあるかどうかを問うているのである。「自分の話」に関する問い合わせであるが、コミュニケーションの「話す」技術だけではなく、「自分」が受け入れられているかどうかという友だちとの人間関係をみることができる。

11 1で、さらに、どこにその原因があるのかを問うている。複数回答で、コミュニケーション不成立の原因をどう意識しているのかを尋ねているのである。

アは、友だちの態度にその原因をみている。「わかってもらえない」のは、友だちが自分の話を聞きたいと思っていない、自分を受け入れようとしている意識しているのである。

イ・ウ・エ・オは、自分の発話にその原因をみている。

イは、話す内容をまとめる自分の能力を問題にしている。話したい内容・考えはあっても、自分がうまくまとめられないところに「わかってもらえない」原因をみている意識である。

ウは話す内容の妥当性を問題にしているが、「難しすぎて」には自分の話が込み入って「難しく」なったり、複雑で「わかりにくく」なったりするために、友だちに受け入れてもらえないらしい、という意識である。

エは、話すことへの「なれ」、そこに根ざす態度・意識を問題にしている。「自分から話す」という主体的なコミュニケーションに「なれ」ていないことが原因で、「わかってもらえない」という意識である。

オは、話す技術の自信を問題にしている。うまく話せば「わかってもらえる」はずなのに、「下手」だから「わかってもらえない」という意識である。

力は、上記以外の回答を自由記述で求めている。

11 2は、わかってもらえない原因をどのように感じているかと、問うている。コミュニケーション不成立を問い合わせ、その原因を意識化した上で、さらに、その現状をどう感じているのかを問うものである。「わかってもらえない」原因に関して、「それでよい」とする諦めを含んだ現状容認の意識、「とりあえずそれでよい」という消極的な現状容認の意識、「できれば変えたい」という消極的な現状改革の意識、「変えたい」という明確な現状改革の意識の四段階の選択肢を設け、今後のコミュニケーションをどうしていきたいのか問うているのである。

3 . 結果の分析

この調査で明らかになったことは、以下のような点である。

3 - 1 . コミュニケーション不成立に関する意識

「わかってもらえないと思ったことがある」について74.2%の子どもが「はい」と回答している。すなわち、74.2%の子どもがコミュニケーションの不成立を意識した経験があるということである。ここでは、わかってもらえたかどうかではなく、わかってもらえないという意識をもったかどうかの経験を問題にしている。問8以降の「友だちと話をするときはどうであるか」という条件があるので中で、74.2%の子どもが「わかってもらえない」という意識を経験しているのである。これは、少なくない数字である。

年齢別にみると、学年が上がるにつれて微増しているが、高1で特に多い。小4が63.5%、小5

が69.0%、小6が71.7%、中1が72.1%、中2が77.1%、中3が75.9%、高1は83.9%、高2が77.4%、高3が76.9%で、わずかに増加している。小学4年生でも、6割を超える子どもが友だちにわかつてもらえないと思ったことがある。男女差がみられ、女子の方が「はい」と答える割合が常に高い。高1女子では、90.1%の子どもが「わかつてもらえないと思ったことがある」と回答している。

一方、「わかつてもらえないと思ったことはない」、つまり常に「わかつてもらえている」と意識している子どもは、学年が上がるにつれて減少している。小4が35.8%、小5が30.4%、小6が27.7%、中1が26.0%、中2が21.2%、中3が22.6%、高1が14.9%、高2が20.6%、高3が20.3%と、高1の数字が特に低く、全体としては減少傾向を示している。

3 - 2 . 「わかつてもらえない」意識と人間関係 他の問とのクロス集計

「わかつてもらえない」意識と「わかりあえる」人 問4とのクロス集計

本問 自分の話をわかつてもらえないと思ったことはありますか。

問4 「自分と本当に分かりあえる人はいない」と感じことがありますか。

本問と問4の結果をクロス集計したものが以下のデータである。ただし、この問4は「わかつてもらえない感じること」を問題にしているので、「いいえ」という回答者の中には「わかりあえる人はいる」という意識で答えた者と、「そういうことは考えたことがない」「どちらでもない」という意識で答えた者との両方が含まれていると考えられる。

問4	問11	はい	いいえ
わかりあえる人はないと感じる	はい	19.9%	1.8%
	いいえ	53.4%	22.4%

(全回答者5566人中)

問11で「わかつてもらえないと思ったこと」を経験していると答えていても、全体の約半数53.4%の子どもが、問4で「わかりあえる人がないと感じたことはない」と実感している。理解してもらえない経験は経験として、「わかりあえる人」の存在を否定していないのである。わかつてもらえないと思ったことはあっても、人間関係としては、わかりあえる人がいないわけではない。(問4分析参照、)

一方、「わかつてもらえないと思ったこと」を経験し、「本当にわかりあえる人はいない」と実感している子どもが19.9%、1105人(*1)いる。4つの数字の中で大きいものではないが、5人に一人のこの数字は、現代の子どもの問題として大きなものである。(考察5参照)

また、「わかつてもらえないと思ったこと」がない、つまり、いつもわかつてもらえていると思っており、なおかつ、「本当にわかりあえる人はいない」と思っていない子どもは22.4%である。自分は理解されていると感じている子どもの数字である。いつもわかつてもらっているが、「わかりあえる人」はいないという実感を持っている子どもが、1.8%いる。

「わかつてもらえない」意識と「悩みをうち明けることのできる」人 問3とのクロス集計

本問 自分の話をわかつてもらえないと思ったことはありますか。

問3 悩みがあるとき、それをうち明けることのできる相手はいますか。

本問と問3の結果をクロス集計したものが以下のデータである。

問3	問11	はい	いいえ
悩みをうち明ける相手がいる	はい	60.7%	19.9%
	いいえ	13.0%	4.3%

(全回答者5566人中)

問11では「わかつてもらえないと思ったこと」があっても、60.7%の子どもは問3の「悩みをうち明けることのできる相手がいる」に対して「はい」と回答している。前項、問4とのクロス集計分析と同じ傾向がみられ、わかつてもらえないと思ったことはあっても、悩みをうち明ける相手はいるのである。コミュニケーション不成立は経験していても、人間関係については、とりたてて問題を感じていない子どもたちである。

その一方、「わかつてもらえないと思ったこと」があり、「悩みをうち明けることのできる相手」もいない子どもが13.0%、720人(*2)いる。やはり、前項、問4とのクロス集計分析と同じ傾向がみられ、ここにも経験と実感の両面で、疎外感を持つ子どもの意識がみられる。(考察5参照)

また、いつもわかつてもらえていると思っており、「悩みをうち明けることのできる相手」もいると回答している子どもは19.9%である。前項、問4とのクロス集計でも理解されていると感じている子どもの数が22.4%と同様の数字であり、約2割の子どもが良好な人間関係を実感していると言える。いつもわかつてもらえていると思っていても、「悩みをうち明けることのできる相手」がないと回答している子どもの数は4.3%である。

「わかつてもらえない」意識と「わかりあえる人」・「悩みをうち明けることのできる人」

問11と問4・問3のクロス集計

問3 悩みをうち明ける人はいる	はい	はい	いいえ	いいえ
問4 わかりあえる人はいない	はい	いいえ	はい	いいえ
問11わかつてもらえない はい と思ったことがある いいえ	14.5% 1.4%	45.5% 18.2%	5.1% 0.4%	7.7% 3.9%

(全回答者5566人中)

このクロス集計より、わかつてもらえないと思った経験はあっても、「わかりあえる人」「悩みをうち明けることのできる人」がいると実感している子どもは45.5%いることがわかる。コミュニケーション不成立の経験とは別に、人間関係において信頼できる他者の存在を意識している子どもの数である。

また、わかつてもらえないと思った経験はなく、かつ「わかりあえる人」「悩みをうち明けることのできる人」もいると実感している子どもは18.2%いる。この子どもたちは健全な人間関係を意識していると言える。

一方、わかつてもらえないと思った経験があり、「わかりあえる人」「悩みをうち明けることのできる人」もないと実感している子どもが5.1%、286人(*3)いる。この数字は、コミュニケーションによる意思疎通・人間関係に障害を感じている子どもの数である。多くはないが、深刻な問題であると言える。(考察5参照)

3 - 3 . コミュニケーション不成立の理由

相手の態度

「わかつてもらえない」のは「ア 友だちが聞きたいと思っていないから」と感じている子どもが全体の34.7%いる。この子どもたちは、相手が自分を受け入れていないと感じているのである。コミュニケーションを成立させる人間関係ができていない意識をここにみることができる。コミュニケーション成立以前の問題である。

さらに、アと他を複数回答した者はアの回答者1434人のうちの60.5% (867人) (= 総回答者数の15.6%) いる。

アの回答者とイウエオカの複数回答者のクロス集計（ア回答者1434人中）

	イ 自分の考え	ウ 話の中身	エ 慣れ	オ 下手	カ その他
ア友だちが聞きたいと思っていない	38.2% (548人)	23.1% (331人)	12.6 % (181人)	19.0% (272人)	3.8% (55人)

「わかってもらえないのは友だちが聞きたいと思っていないから」と感じつつも、上記の表のようにそれぞれ、自分にも原因があると感じているのである。

一方、ここでアのみを回答し、相手の態度にのみその原因をみている者は、アの回答者1434人のうちの39.5% (567人)、総回答者数の10.2%であった。複数回答可という条件の中で、この子どもたちは、発話する自分には原因がなく、友だちが聞きたいと思っていない、自分を受け入れようとしていないと、相手にのみその原因を見ているのである。この子どもの問題は大きい。

自分の問題

理由イ「自分の考えがうまくまとまっているない」には55.9%の回答者がおり、突出している。まとまった話ができない、まとまった話をしていないという意識である。話し手として自分の話し方を誠実に反省している姿がある。また、「話す」能力以前に考えをまとめる能力を必要としている姿がみえる。コミュニケーションの技術「話すのになれない」「話すことが下手」を選択した回答者よりも、はるかに多くの子どもが、話す内容・伝えたい内容を自分で思考・整理する能力の不足を感じているのである。

理由ウ「自分の話の中身が難しすぎて友達にはわかりにくいから」は23.0%の回答者がいる。自分の話したい内容と、友だちに受け入れられる内容との齟齬に原因をみているのである。話したい内容を好きなように話すと、友だちにはわかりにくいという意識をみることができる。

理由エ「自分から話すのになれないから」の12.5%の回答者は、他人から話しかけられた時には話すことができるが、自分から話すのは「なれない」から、「わかってもらえない」と感じている。本当に話したいことを自分のペースで話せていない意識を持っている。

理由オ「話すことが下手だと思っているから」を選んだ者18.8%は、話す技術に抵抗感を持っているものである。単純に、話す技術が未熟なため「わかってもらえない」と感じている子どもの数である。数字は大きくなく、コミュニケーション不成立の原因を技術の問題と捉えている子どもはあまり多くないと言える。

オ回答者777人のうち、45.9%に当たる子どもが、問2の「同じクラスの人たちと話すことについてどう思いますか」に「あまり得意ではない」「不得意」と回答している。

オの回答者と問2(b)のクロス集計（オ回答者777人中）

- オ 話すことが下手だと思っているから
問2 同じクラスの人たちと話すことについてどう思いますか。

問2	ウ あまり得意ではない	エ 不得意（うまく話せない）
オ 話すことが下手	35.8% (278人)	10.1% (79人)

この問2について、全体では「得意ではない」「不得意」を選択しているのは約2割(18.8%)であるという傾向と比べると、「話すことが下手なので」「自分の話をわかってもらえないと思ったこと」があり、「同じクラスの人たちと話す」ことに苦手意識を持っている傾向がはっきり見えている。話す技術の自信のなさが、コミュニケーションへの苦手意識に影響しているのである。

以上のように、イからオを選択し、コミュニケーション不成立の原因を自分に見ている者が圧倒的に多い。

「その他」の理由 記述回答の分析

10.2% (404例) の子どもがここで回答しているが、その内容は以下のように分類できる。

「そういうものだ」と考えている者	28.0% (112人)
相手に原因を求めている者	43.3% (175人)
自分に原因を求めている者	19.1% (77人)
その他（分析不可能な答えなど）	9.9% (40人)

(力回答者404人中)

の回答としては、「意見が違うから」「人それぞれ考え方や違うから」「価値観が違うから」「自分にしかわからないこともあるから」「経験しないとわからないこともあるから」と、いつもわかつてもらえるわけではないと認識している回答が記述されている。自他の差異を明確に認識しており、わかつてもらえないことはあるのだという意識が表れている。その中で、「あまり親しくない相手の場合、わかつてもらえる方がよっぽどおかしい」「他人同士なのでわかりっこない」と、どうせわかつてもらえないと諦めを含んだ回答も数例みられた。

の回答として、相手が「自己中心的」「無視する」「冗談で受け止める」「話の途中で笑う」などが記述されている。選択肢の理由ア「友だちが聞きたいと思っていないと感じるから」に通じるものがあるが、この子どもたちは「わかつてもらえないと思ったこと」を鮮明に記憶しており、その相手も具体的である。話す・聞く以前のコミュニケーションの問題として、人間関係を意識しているのである。

の回答としては、「うまく説明できないから」「自分も混乱しているから」「表現力の不足」「高度な次元での話をしてしまうから」と選択肢の理由イ～オに該当させができる回答や、少数ではあるが「人には話さない」「話してもむだ」と自分がコミュニケーションを拒否している回答がある。

の回答としては、「なんとなく」「わからない」が多いほか、「親とは意見が食い違う」「先生はわかつてくれない」などの友だち以外の具体的な人間関係を想定して回答しているものがあった。

3 - 4 . コミュニケーション不成立への意識

「自分の話をわかつてもらえないと思ったことがある」子どものうち、ア・イの「それでよいと思う」「とりあえずそれでよいと思う」を選択した子どもが33.8%いる。理由との関係はあるにせよ、3人に1人は自分の話をわかつてもらえないと思ったことを、そのままでよいと感じている。コミュニケーション不成立を容認しているのである。一方、ウ・エの「できれば変えたいと思う」「変えたい」を選択した子どもは66.0%おり、コミュニケーション不成立に対して、現状を変えたいという意識を持っている。

コミュニケーション不成立の原因とその現状に対する意識 問11-1と問11-2のクロス集計

わかつてもらえないと思ったことがある、その理由について、どのように意識しているのかクロス集計で得られたデータが以下の数字である。

(全回答者5566人中)						
11.2\11.1	ア友だち	イ自分の考え	ウ話の中身	エ慣れ	オ下手	カその他
アそれでよい	2.7%	2.3%	2.3%	0.7%	1.0%	2.0%
イとりあえず	6.1%	9.0%	5.2%	1.9%	2.1%	1.6%
ウできれば	11.5%	21.9%	6.6%	4.3%	6.9%	1.9%
エ変えたい	5.5%	8.0%	3.1%	2.4%	3.9%	1.9%

どの理由に対しても「ウ　できれば変えたい」を選択した者が一番多い。

原因別に特徴的な傾向をみると、「イ　自分の考えがうまくまとまっている」と回答した子どもが「ウ　できれば変えたい」「エ　変えたい」と、現状改革の意識を強く持っている。自分の考えをうまくまとめて、わかってもらえるように変えていきたいという意識である。コミュニケーションに関して、自分を反省している誠実な態度がここでも表れている。また、「ウ　自分の話の中身が難しすぎて友だちにはわかりにくいから」を選択した子どもは、「カ　その他」を選択した子どもに次いで、現状容認と現状変革の意思が接近している。話の中身の難しさは変えようもなく、それでわかつてもらえないのは仕方がないという意識の表れであろう。

(3 - 2 項)で問題にした子どもの、現状に対する意識

3 - 2 項の*1・*2・*3と問11-2のクロス集計

3 - 2 項で、問11と他の問とのクロス集計から

*1 わかつてもらえないと思ったこともあり、本当に分かりあえる人はいないと思う
1105人

*2 わかつてもらえないと思ったこともあり、悩みをうち明ける人はいない
720人

*3 わかつてもらえないと思ったこともあり、本当にわかりあえる人も悩みをうち明ける人もいない
286人

というデータを得た。その子どもたちと問11-2の相関を見るために、クロス集計した結果が以下のデータである。

11.2\	*1	*2	*3
アそれでよい	12.6% (140人)	15.2% (110人)	23.0% (66人)
イとりあえず	21.7% (240人)	24.0% (173人)	20.6% (59人)
ウできれば	40.5% (448人)	39.4% (284人)	32.5% (93人)
エ変えたい	19.9% (220人)	18.1% (130人)	20.3% (58人)

(各項目*1・2・3中)

全回答者と比較すると、*1・2・3ともに、「ウ　できれば変えたい」を選択した者が一番多い傾向は、同じである。が、アまたはイを選択した、現状容認の意識を持つ者が全体では33.8%(前項3-4 参照)であるのに対し、それぞれ*1は34.3%、*2は39.2%、*3は43.6%といずれもその数字は高い。特に、*3については、コミュニケーション不成立について「そのままでよい」という意識を持つ者と「変えたい」という意識を持つ者の割合が接近している。「本当に分かりあえる人はいない」「悩みをうち明ける人はいない」あるいはその両方を実感している子どもは、自分の話をわかつてもらえないと思ったことに、そのままで仕方がないという意識を持つ傾向がある。

コミュニケーションによる意思疎通においても、人間関係においても、障害を感じている子どもは、諦めにもつながる現状容認の意識が全体の傾向よりも強いと言える。

4 . 共同討議

4 - 1 . わかつてもらえないという意識

「わかつてもらえないと思ったことがある」と回答した者

「わかってもらいたい」と、相手に伝えることを意識して話していることが前提になっているが、「わかってもらえない」と思ったことの内容・質は、ここでは明らかにならない。「自分の話を」と問うことで、何らかのまとまりを持つ内容を想像して回答していると考えるしかない。些細な場面で「わかってもらえないと思ったことがある」というのは、多くの者が一度は経験していることかもしれない。が、原因を問う選択肢的回答や自由記述の内容などからみると、相手に受け入れてもらえない、気持ちが通じない、などの人間関係からの疎外を根底に置いて回答している。やはり、自分が受容されているかどうかの意識を見る事ができる。

また、「はい」と答えるのは常に女子の方が多いことから、女子の方がコミュニケーション不成立に敏感であり、それだけ、コミュニケーションに期待するところも多いと言えるのではないか。

「わかってもらえないと思ったことはない」と回答した者

回答した24.5%は、高1を除いて徐々に減少していく。自他の人間関係を考える意識の芽生えを見る事ができるのではないだろうか。いつでもわかってもらえるわけではない意識を年齢と共に、経験していくと考えられる。

4 - 2 . コミュニケーション不成立の原因

「友だちが聞きたいと思っていないと感じる」

「わかってもらえない」理由として、相手の非受容的態度を34.7%の子どもが選択しているというのは多い。発言しようとする意欲・コミュニケーションをとろうとする意欲、さらには人と関わろうとする意欲さえも減じさせることにつながるのではないだろうか。

一方、必ずしも、相手の態度だけを原因としているのではなく、その背後に「聞きたい」と思われるような内容・状況・技術などを自分が持っていないという、自分の側に問題をみる意識も含まれている可能性はある。

「自分の考えがうまくまとまっている」

問2の「話すこと」に関しては「好き・得意」といった肯定的な自己意識を持つ子どもが多い一方、「わかってもらえないと思ったことがあるのは自分の考えがうまくまとまっているから」と回答する子どもが多い。ここに、軽いおしゃべり、いわゆる「チャット」のような話はできても、わかってもらいたい自分の話については、考えをうまくまとめられないという意識をみることができるのでないか。

「自分の話の中身が難しすぎて友だちにはわかりにくい」

友だちにわかりやすい話の中身だったらわかってもらえるのだろうが、それは、自分のしたい話ではなくくなってしまう。この意識を持つ子どもたちは、友だちと話す際、わかってもらえる話かどうか、相手に気を遣うコミュニケーションをしているのではないだろうか。

一方、「友だちにはわかりにくい」と、どこかで相手にもその原因をみている意識も含まれるかもしれない。さらに、アンケート回答の際の意識として、自分のプライドを保ちたく、単に「わかってもらえない」のではないと、主張したい意識もあるのではないか。また、自分にとっては当然の中身でも、相手には「わかりにくい」だろうと、どこかで相手を軽んじている・拒否している意識も含まれるかもしれない。

「自分から話すのになれない」

「なれ」は、経験によって習得できる。「話す」ことになれるよう、教育やさまざまな場面を通

して、できることは多々あるはずではないか。

その他

「そういうものだ」と考えている者は、「わかってもらえないと思った」経験を重ねることで、こうした考え方を持つようになるのではないか。

5 . 考察

5 - 1 . 現状と課題

一般的な友だちと特定の相手

「自分の話をわかってもらえないと思ったこと」の経験を問うこの回答「はい」74.2%は、コミュニケーションにおいて自分が受容されていないという意識を持つ子どもの数字である。この数字と他の設問によって得た数字、

問い合わせ	悩みがあるとき、うち明ける相手がいる	はい	81.5%
-------	--------------------	----	-------

問い合わせ	「本当に分かりあえる人はいない」と感じたことがある	いいえ	76.8%
-------	---------------------------	-----	-------

とを比較すると、一見矛盾しているように見える。74.2%の子どもがわかってもらえないと意識した経験があるのに対し、問3の「悩み」や問4の「本当にわかりあえる」ことに関する相手への意識では、8割前後の子どもたちに問題は見られないである。74.2%の子どもの意識を一回性の経験と片付けて、現代の子どもたちに人間疎外を見、危惧している教師の意識を変更できるのだろうか。

しかし、ここでコミュニケーションと人間関係について改めて考えずにはいられない。人はいつでもわかってもらえるわけではないかもしれないが、友だちとの会話で、74.2%の子どもが「わかってもらえないと思ったことがある」というのは、友だちとのコミュニケーションにおいて、完全な安心感を持っていないということなのではないか。自分にその原因があるにせよ、友だちにその原因があるにせよ、いつでも自分を受け入れてくれるようなコミュニケーション関係がそこにはないということなのである。

ある相手には悩みをうち明けることができ、本当に分かりあえる人はいないとは感じていない、肯定的な人間関係観と、わかってもらえないという意識を経験している不安定なコミュニケーション観。これは、漠然とした実感の中では「悩みをうち明けられる」「本当にわかりあえる」特定の相手の存在を確認している一方、友だち一般とのコミュニケーションでは「わかってもらえない」と思った経験を多くの子どもがしているということである。子どもたちは、特定の相手とは信頼できる人間関係を結んでいるが、友だち一般とは確かな安心感を持てずに気を遣いながら人間関係を結んでいるといえるだろう。

友だち観

わかってもらえないと思ったことの原因として「友達が聞きたいと思っていないと感じるから」を選択した子どもが35.2%いた。この子どもは、相手に受容されていないという実感をはっきり持っているのである。「自分の話」を理解されないばかりでなく、「友達」という前提ではあっても、相手と自分の間に相互交流的な人間関係ができていないことがみられる。また、「自分の話の中身が難しすぎて友達にはわかりにくいから」24.6%という回答は、話の内容を意識して話さなくてはならず、話の中身によってはわかってもらえないのだという意識が窺われる。友だちが自分を全面的に理解してくれる相手だと思っていないことを示しているのではないか。とすると、これらの子どもの意識の底流には、信頼しきれない友だち観とでもいうものをみることができ、それが、「わ

かってもらえない」という実感につながっているといえる。

現代の子どもたちを見たとき、いつも一緒にいる友だちの間でも、どこかで「人は人、自分は自分」とバラバラであるような印象を抱かせ、そこに確かなつながりを見出すことが難しいと感じる。時間や場所は共有していても、自分の居場所と安心して過ごしている訳ではなく、一人でいることに耐えられず、単に一緒にいるだけであるように見える。また、自分をありのままにさらけ出すような話よりも、おしゃべりを楽しみ、葛藤のない、快適な関係を大切にしているように見える。そのような中で、この問11から、いつでも、どんな内容でも、うまく話せなくても、自分の話をわかつてもらえる、という安心感のあるコミュニケーションは、子どもたち同士の間で存在していないと言える。そして、子どもたちはそうした現状をとりわけ「問題」だとは意識していないのではないか。コミュニケーション不成立を容認している子どもが33.8%もいるのである。約3割の子どもが「それでよい」「とりあえずそれでよい」と思っているとき、周囲の子どもも強いてその関係を変えようとは思わないだろう。そして、そのような安心感のあるコミュニケーション関係を結べていない子どもたちは、なんとなく不安そうな、脆く映る友だち関係しか結べていないと言えるであろう。

疎外感

結果の分析3-2 項で指摘した「わかつてもらえないと思ったこと」もあるし、「本当に分かりあえる人はいない」と感じている19.9%(*1)の子ども、「悩みをうち明ける相手」もない13.0%(*2)の子ども、上記の全ての項目でマイナス傾向を持つ5.1%(*3)の子どもの思いは深刻である。コミュニケーション関係においても、人間関係においても、孤立感を抱え、他者とつながることのできない意識をはっきりと持っているのである。ある集団の中ばかりでなく、生きている自分の周囲のどこにも、わかつてもらえると実感できる場所がないのである。また、この子どもたちには、コミュニケーション不成立の現状に対して「それでよい」「とりあえずそれでよい」と、容認する意識が全体の傾向より強く見られる。人間関係での疎外感とも重なって、コミュニケーションに対して諦めの意識を持っているのである。家庭で、クラスで、学校で、地域で、誰か一人でも自分のことをわかつてくれる人がいるという意識を持てないでいる子どもの姿がここではっきりと浮かび上がってくる。

前項で指摘したように、意識化されていなくても、友だち関係に希薄さ・不安定さを含んでいる子どもが多いほか、こうした徹底的な孤立感を抱える子どもがいる現状は、子どもの脆さ・弱さにつながっていく。不登校・引きこもり・集団でのいじめ等、もちろん一概には論じられないが、子どもの問題行動といわれるものは、自分が他者としっかりつながっているという意識を持てないでいるところから生じていると言える。自尊の感情・他者への思いやりは、人と人との結びつきがあってこそ生まれるものであろう。自分を受け入れ、大切だと思ってくれる友だちの存在、そして、相手を受け入れ、大切だと思える自分、といった真に相互交流的な人間関係が、今、子どもたちに欠けていると言えるのである。

発話者の問題意識

「わかつてもらえないと思ったことがある」原因の分析を通してみえてきたのは、「自分の話を発話すること、相手が受容すること、という個々の「話す」「聞く」ことへの意識だけではなかった。

「自分の考えがうまくまとまっているから」と、まとめる力・内容を整理する能力を意識している子どもが55.9%もいるのである。話す技術・伝える技術への自信のなさ・抵抗感ももちろんみられるが、発話する際の自分の能力不足を感じている子どもの数が圧倒的に多い。漠然とした「考

え」にことばという形を与えまとめていく、というのは発話者の主体の確立ということである。表現するべき自分の考えを豊かに持ち、それをことばに託してまとめる力を子どもたちは求めていると言える。

5 - 2 . 提言 今後に向けて

本調査をふまえるとき、今後、以下のようなことが重要だといえる。

コミュニケーションへの意識と人間関係

相互交流的なコミュニケーションが成立していないくとも、そこで人間関係が希薄だと意識していない子どもの姿が見られた。目に見えるもの、量としてはかれるもの、金銭・モノなどはわかりやすくても、人と人との結びつきといった抽象的なものはわかりにくい。友だちと一緒に遊んだと言っても、テレビゲームをしたり、マンガ・ビデオを見るだけといった遊び方が多い。お互いに向かい合い、お互いに向かってことばを発しながら遊ぶことなど、ほとんどないのではないか。

遊びの場で、学びの場で、日常生活の場で、並んで何かを行うだけでなく、他者と「向き合って」行動する機会を増やすことが、相互交流的な人間関係を築くことになる。情報やモノが溢れ、人との関係などなくともそれなりに楽しく日々を過ごすことができる現代、今一度、人とつながることで得られる喜び、楽しさ、強さを再確認することが大切だと考える。

話す内容

自分の考えをうまくまとめること、つまり、主体の確立が一番意識されているのである。人間関係や技術・慣れなどの問題も大切ではあるが、さまざまな場面での経験や心情をことばに直すこと、まとめることの重要性を今一度、認識するべきなのであろう。そのためには、ことばを通して他者と出会うこと、世界と出会うこと、時の流れと出会うことが重要であると考える。そうした出会いにより、新たな自分を見出し、考えを得、ことばを使ってその考えをまとめていく。子どもの心を開き、出会いがあったと実感できるような機会をつくることが、大切なではないだろうか。

6 . 反省と課題

数字の誤差

それぞれのデータについて、少々の誤差がある。無回答であったもの、一つの回答を求めているにもかかわらず、重複回答をしたもの等があったためである。

- ・問11・・・合計5490（総回答数5566）
- ・問11-2・・・合計4121（該当数4128）

問8以降の条件「ここからは、授業以外で友だちと話をするときにどうであるかを考えてください」を意識していない回答があった。

「わかつてもらえないと思ったこと」の内容

回答者の意識が、経験として「そんなこともあった」という程度なのか、「他人にはわかつてもられない」という深刻なものなのか、その違いが明確にならなかつたという問題がある。例えば、「よくある」「たまにある」「ほとんどない」「全くない」の選択肢を設けることで、意識の深刻さがはかれるのではないか。

「わかつてもらえないと思ったこと」の理由

今回の選択肢では、アのみ対他意識、イウエオは対自意識を問題にしているが、対他 対
自 の他に、技術 態度 意欲 を相關させた選択肢を設けた方が、回答者の意識をより詳
しくみることができるのでないか。

11 相談への応対に関する意識 友達の相談にうまく応じることができると思っているか

分析担当 牛山 恵

1. 調査の意図

本問は、子どもが友達に相談されたとき、それに対してどのような対応ができるかということについて問うものである。友達へのアドバイスは、相談されたことに関してしっかりした自分の考えがなければならず、自分の話に責任を持たなければならない。また、話す内容がまとまっていて、自分の話に自信がないとうまく相談に応じることはできない。従って、友達へのアドバイスは、双方面のコミュニケーションの中で、相手との関係がもっとも充実していることをあらわし、また、話し手としてはもっとも話しがいのあるものだと言ってもよいだろう。本問は、そのような充実したコミュニケーションに関する話し手としての意識を問い合わせ、責任をともなった誠実なコミュニケーションの実態を明らかにしようとするものである。つまり、本問は、友達の相談を聞き、アドバイスをする意志があるということを前提として、回答者は、自分自身に対して、「友達の相談を聞き、アドバイスがうまくできる」という能力を持つと考えているかどうか、その点を明らかにしようと意図する設問である。

2. 調査

2-1. 調査問題とその結果

12. 友達に相談されたときアドバイスがうまくできますか。 [総解答数 5446 人]

- | | | |
|---------|-------|--------|
| ア、「はい」 | 3241人 | 58、20% |
| イ、「いいえ」 | 2205人 | 39、6% |

「イ、いいえ」(友達に相談されたときアドバイスがうまくできない)の理由
(複数回答可)

- | | |
|------------------------------------|-------------|
| 12-1 それはどうしてですか。いくつ答えるてもかまいません。 | |
| ア 友達の相談を聞くことがあまり得意ではないから | 346人 15、7% |
| イ 友達の話を聞くことはできるが、いい考えをまとめられないから | 1206人 54、7% |
| ウ 友達の相談を聞いて考えることはできるが、言い方に迷ってしまうから | 948人 43、0% |
| エ めんどうだから | 170人 7、7% |
| オ その他 | 258人 11、7% |

上記の理由について

12-2 そのことをどのように感じますか。

- | | |
|------------|------------|
| ア それでよいと思う | 226人 10、2% |
| イ 仕方がないと思う | 518人 23、5% |

ウ できれば変えたいと思う	1028人	46、6%
工 変えたい	524人	23、8%

2-2. 調査問題についての解説

この「問い合わせ」は、回答者が、「友達」「相談」「アドバイス」の3点をどのようにとらえたかによって、回答に幅が生じる可能性がある。「友達」に関しては自己との関係の親密度が、「相談」に関しては内容や深刻さの度合いが、「アドバイス」に関しては相談の内容や相談者が求めているものによって変わることが、それぞれ回答に幅を生じさせるものとなる。その点を踏まえ、本問で明らかにされることは、「アドバイス」をめぐる「話すこと・聞くこと」の能力および技能、「話すこと・聞くこと」に関する意識である。

「問12」の中心の問い合わせは、友達の相談にアドバイスがうまくできるかどうかを問うたものである。「ア はい」という答えは、アドバイスすることに自信を持っていることを示しており、話し手本人は友達とのコミュニケーションに問題を感じていないと見ていいだろう。

それに対して「イ いいえ」という答えは、アドバイスという形で責任のある話をすることに自信を持っていないことを示している。そのような回答者は、友達とのコミュニケーションに対して問題を感じているわけだが、しかし、それは必ずしもコミュニケーションに対する自信のなさを示すものではなく、アドバイスという形での友達への自分のメッセージを内省的に見る、コミュニケーションにおける対的な意識のあらわれとも見ることができる。

「問12-1」は、アドバイスがうまくできない理由を問うもので、選択肢の「ア」は自分の聞く能力に、「イ」は話の内容のまとめ方に、「ウ」はものの言い方に、それぞれ問題を感じている場合である。いずれも自分の話に自信がない場合であるが、自分の話をきびしく見つめている誠実な話し手であることを示すものもある。

選択肢「工 めんどうだから」は、問題のある答えである。友達に相談された者としてそれに答える意志がないということを示すものであり、コミュニケーションの上からはそれを拒否するものとして問題を持っている。

選択肢「オ その他」は記述回答を求めるもので、ここには回答者の生の声が出てくるものと思われる。

「問12-2」は、アドバイスがうまくできない理由についてどう思っているかを問うもので、「ア、イ」は現状の自己容認、あるいは努力の意志の放棄を示しているが、それに対して「ウ、エ」は向上の意志を示すものであって、そこには話し手としての誠実な意志が見られるものと思われる。

本問の「アドバイス」に関しては、まず、その前段階として「聞くこと」を視野に入れる必要がある。ここでは、「友達の相談を聞く意志があり、またそれを態度で表すこと」が前提となっていて、その上で、「友達の相談を正しく聞くことができると思っているか」という「正しく聞く能力」と「その能力がある」と思う意識が問われる。次に、友達の相談に応じて「アドバイスがうまくできる」ことが問われる。「話すこと」も「聞くこと」と同様、「アドバイスをする意志があり、それを態度で表すこと」が前提となっており、「アドバイスがうまくできる能力」と「その能力がある」と思う意識が問われる。また、「アドバイスがうまくできる」ということに関しては、アドバイスの内容とアドバイスのしかた、すなわち方法とが意識されるような選択肢が提示されている。

3. 結果の分析

この調査で明らかになったことは、以下のような点である。

双方向コミュニケーションの成立意識

「アドバイスがうまくできる」と回答している者は、回答者の半数以上（58、2%）である。学年別に見ると、高3が最も低く男女計で51、9%だが、最も高い小4の61、9%と比較しても10%の差であり、学年差は少ないと考えられる。また、男女比は、高1の男子59、3%に対して女子49、1%の10、2%差が、もっとも男女差のある数値である。しかしながら、どの学年も男子が優勢ということではなく、中3では、男子53、2%に対して女子60、2%となっている。男女による意識の違いがあるとは言えない。

友達から相談を受けるということは、友達に信頼されているということであり、相手が自分を信頼して相談を持ちかけたということである。それに対して、「アドバイスがうまくできる」と解答することは、自分は友達の信頼に応えうるという自信である。しかも、友達の相談を聞いて考え、相手の求めに応じてアドバイスができるということは、友達との間に双向のコミュニケーションが成立しているという意識を持っていることを意味している。そのような意識を持つ子ども（児童・生徒）が全体の半数以上いるということであり、半数以上の子どもたちが充実したコミュニケーション関係を持っているということである。

【学年別・男女別集計 アドバイスがうまくできるかー ア はい】

3241人 / 5546人

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	全体
ア はい	男	59.4%	59.2%	62.0%	55.5%	64.1%	53.1%	59.3%	61.5%	53.1%	
	女	64.7%	64.3%	60.6%	61.6%	58.0%	60.2%	49.1%	45.8%	51.2%	
	計	61.9%	61.4%	61.2%	58.7%	61.3%	56.6%	52.5%	52.6%	51.9%	58.2%

「アドバイスがうまくできない」という回答にみるコミュニケーションの障害

「アドバイスがうまくできない」と回答している者は、39、6%である。学年別では、高1・高2の45%がもっと多く、もっと少ないのは中2の36、4%である。男女別では、高2の男子が35、3%、女子が52、2%で、もっと大きな数値差を示している。しかしながら、中3では、男子が43、6%なのに対して女子が38、8%であり、必ずしも女子が多いということではない。男女による意識の違いがあるとは言えない。

【学年別・男女別集計 アドバイスがうまくできるかー イ いいえ】

2205人 / 5546人

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	全体
イ いいえ	男	38.1%	39.6%	37.1%	41.4%	33.2%	43.6%	37.7%	35.3%	39.8%	
	女	34.5%	35.2%	39.1%	35.2%	40.1%	38.8%	49.1%	52.2%	43.5%	
	計	36.5%	37.6%	38.1%	38.2%	36.4%	41.2%	45.2%	44.8%	42.2%	39.6%

「12-1」では「アドバイスがうまくできない」と思う理由が問われる。その理由を数値の多い順に示すと、次のようになる。

アドバイスがうまくできない理由（複数回答可）

イ 友達の話を聞くことはできるが、いい考えをまとめられないから

1206人 54.7%

ウ 友達の相談を聞いて考えることはできるが、言い方に迷ってしまうから

	948人	43.0%
ア 友達の相談を聞くことがあまり得意ではないから	346人	15.7%
オ その他	258人	11.7%
エ めんどうだから	170人	7.7%

もっとも多いのが「イ、いい考えをまとめられない」(54.7%)で、次いで「ウ、言い方に迷う」(43.0%)である。「イ」の「いい考え」というのは、アドバイスの適切さをさし、また「まとめられない」は、アドバイスが思いつきのようなものではなく、論理的に構成されているかどうかということをさす。つまり、「イ」は、アドバイスそのものの内容に自信が持てないことを示していて、半数以上の子どもがこれを選択している。次に、「ウ」の「言い方」だが、これはアドバイスの内容ではなく、アドバイスの伝え方の問題である。伝え方については、相手との関係と話の構成・表現の二つの要因が問題となる。そこから「ウ」は、相手との関係のはかり方と文章構成・表現法に自信がないことを示している。「ア」は、「友達の相談を聞く」ことが得意ではないということなのだが、相談のような話題は苦手という意識の表れとみることができる。

以上のことから、相談を受け止めたり、アドバイスの内容と方法に自信を持てなかったりすることが、コミュニケーションの障害になっていることがわかる。

「友達の相談を聞くこと」にどのような抵抗があるのか

「アドバイスがうまくできない」ことの理由としてあげられた「ア、友達の相談を聞くことがあまり得意ではない」(15.7%)は、「聞くこと」に問題があることを示している。第一に、相談のような話題を聞くことが苦手であるということ。次に、「得意ではない」という言葉には、回答者が「友達の相談」を「聞くことが好きではない」「上手に聞けない」などと思っていることが表れている。これについては、参考として「問1」の設問の結果を参考に取り上げる。

問1 同じクラスの人たちと話すことについてどう思いますか。

好き	59.3%
まあまあ好き	28.5%
あまり好きではない	4.0%
嫌い	1.3%
どちらとも言えない	6.4%

「好き」と「まあまあ好き」を合わせると90%に迫る。「同じクラス」という限定があっても、話をすることについては「好き」ということで高い数値を示している。「友達」と認めている相手の話であれば、それを聞くことについては、嫌うような要素はないと考えられる。にもかかわらず「友達の相談を聞くことがあまり得意ではない」という結果が出ることについては、で分析したように、「相談のような話題は苦手という意識の表れ」とみることができよう。さらに、単に聞くだけではなく、「上手に聞けない」と意識しているのは、相談者にとってよい聞き手となる自信がないという思いが反映していると考えられる。

アドバイスをすることへの不安

「イ、友達の相談を聞くことはできるが、いい考えをまとめられない」(54.7%)には、友達の相談に対して、友達に示すことができるようなまとった「いい考え」が持てないと感じている回答者の姿が見える。これについては、参考として「問11」を取り上げる。

問11 自分の話をわかってもらえないと思ったことがありますか。

- はい 74、2%
いいえ 24、5%

上記理由（複数回答可）	数値順
イ、自分の考えがうまくまとまっているから	55、9%
ア、友達が聞きたいと思っていないと感じるから	34、7%
ウ、自分の話の中身が難しすぎて友達にはわかりにくいから	23、0%
オ、話すことが下手だと思っているから	18、8%
エ、自分から話すのになれていないから	12、5%
カ、その他	10、2%

「はい」と回答した者が74%にものぼるが、その理由としてもっと多いのが「考えがうまくまとまっている」で、半分以上の子どもが取り上げている。「自分の話をわかってもらえない」原因は、自分の話が、考えがまとまらないままに話された内容のものだから、と意識している。「自分の考えがうまくまとまっているから」相手に「わかってもらえない」という思いと「いい考えをまとめられないから」「アドバイスがうまくできない」という思いには共通するものがある。それは、相手に話をするときには、自分の「考えをまとめ」ることが不可欠だけれど、それがうまくできないという意識である。つまり、自分の考えをまとめて話すことに対する苦手意識だ。特に、相手の相談を受けてそれに応じるアドバイスは、目的や内容が明確である必要があり、そのことへの自信のなさが54、7%という数値になってあらわれたと言えよう。

「話す」という技能への不安

「ウ、友達の相談を聞いて考えることはできるが、言い方に迷ってしまう」(43、0%)には、「言い方」すなわち「伝える方法」に対する意識があらわれている。そこに働いているのは、単なる技能的な面に対する自信のなさだけではない。「問11」の理由としてあげられたものを参考見てみよう。

問11では「自分から話すのになれていない」(12、5%)ために話すことに不安があったり、「話すことが下手だと思っている」(18、8%)ために話すことに自信がなかつたりしている。相談に対するアドバイスにもこれらと共通する意識が働いていると見てよいだろう。しかし、43%という数字は単なる話し下手の意識だけではなさそうである。アドバイスは、相手の気持ちや事情を念頭に置かねばならず、そこでは微妙なもの言いが求められる。「言い方の迷い」が、43%にもなっているのは、そのようなものに対する配慮が強く働いていることを示している。

自分の考えを伝えることへの苦手意識

上記 で、「問12-1」の選択肢「イ いい考えをまとめられない」・「ウ 言い方に迷う」を取り上げ、この選択から「アドバイスをすることへの不安」「『話す』技能への不安」と同時に、「話し相手に対する配慮」が明らかになると分析した。これらは、結局、自分の考えを相手に伝えることに対する不安や苦手意識を明らかにするものであった。この回答に見られる不安や苦手意識は、その原因を、内容と方法と相手に対する意識によるというように明確に分けることができない場合が多い。「問12-1」は複数回答を認めたものだが、複数回答でもっとも多かったのは、選択肢「イ」と「ウ」の2項目を選択したものであった。「イ」のみを選択した者は、全体の

29%、「ウ」のみを選択した者は、全体の28%、そして、「イ」と「ウ」の2項目を選択した者は、全体の18%であった。

コミュニケーションへの無関心と拒絶

「工、めんどうだから」(7、7%)は、数値こそ高いものではないが、この項目を選択する子どもは、人間関係を築くことに消極的もしくは拒絶的な心理状態にあると考えられ、コミュニケーションに関して問題を抱えている者たちである。なぜ、そのように考えるのか、その理由を問う設問はないが、「オ、その他」の項で記述されたものの中に、その理由と思われる回答をみることができる。

「オ、その他」(11、7%)については、以下に、記述されたものの分類といくつかの事例をあげておく。

a 人間関係の希薄

- ・あまり相談されない。
- ・はじめから相談されない。
- ・他人のことなんて考えたくない。

b 相手の問題

- ・そいつが自分で考えるべきだから。
- ・自分のことは自分でやらなきゃ。

c 相手への不信

- ・その子の本当の気持ちは自分にはわからない。
- ・言ったところで、相手が私の意見を聞いてないから。

d アドバイスの有効性への疑問

- ・その人にとって、いいアドバイスかわからない。
- ・はたしてそれがアドバイスになっているかわからない。

e 自分自身への自信のなさ

- ・自分のアドバイスに自信が持てない。
- ・間違っていることをいってしまうかもしれない。
- ・自分だけの意見は正しいとは言えないから。

記述の中でもっと多かったのは、「自分自身への自信のなさ」を示すものである。例示したものの中にも「人生経験があまりない。」「自分の意見がいいかどうかわからない」などの回答が目についた。また、c「相手への不信」、d「アドバイスの有効性への疑問」の根底には、相手への配慮がうかがわれる。「相談ーアドバイス」という形に、内容と相手への配慮といったコミュニケーションのもっとも難しいところが出ていると言える。

「めんどうだから」という言葉で「アドバイスがうまくできない」理由とするのは、アドバイスをすること自体に否定的であり、それは、上記、a「人間関係の希薄」やb「相手の問題」c「相手への不信」に見られるようにコミュニケーションそのものへの無関心や拒絶を表していると言えよう。

「アドバイスがうまくできない」理由とその改善への意識

「12-2 そのことをどのように感じますか」という設問は、「12」で「アドバイスがうまくできない」と回答した者が、「12-1 それはどうしてですか」で、アドバイスができない理由を選択し、それに関して「どのように感じるか」を問うものである。したがって、「アドバイスがうまくできない」ことを「ウ、できれば変えたい」(46、6%)もしくは「工、変えたい」(2

3、8%)と考えている者が多いととらえるだけではなく、「12-1」との相関で分析する必要がある。

以下に、「12-1」と「12-2」のクロス集計を示す。ただし、「12-1」は複数回答可であるため、集計が複雑になってしまないので、単独で1項目を選択したもののみ、集計対象とする。なお、複数回答率は25%である。

12-1と12-2のクロス集計

12-2	12-1	ア 聴くことが得意ではない	イ いい考えをまとめられない	ウ 言い方に迷う	エ めんどう	オ その他
ア それでよい	20%	1%	2%	57%	34%	
イ 仕方がない	20%	1%	19%	33%	19%	
ウ できれば変えたい	20%	90%	46%	2%	34%	
エ 変えたい	40%	8%	31%	7%	12%	

上記の結果から次のようなことが明らかになる。

「ア、友達の相談を聞くことがあまり得意ではない」と回答した中でもっと多いのが「エ、変えたい」(40%)と考えている子どもである。「イ、友達の相談を聞くことはできるが、いい考えをまとめられない」と回答した中でもっと多いのが「ウ、できれば変えたいと思う」で、90%の高い数値を示している。「ウ、友達の相談を聞いて考えることはできるが、言い方に迷ってしまう」と回答した中でもっと多いのは、これも「できれば変えたい」(46%)である。

「エ、めんどうだから」と回答した中でもっと多いのは「ア、それでよいと思う」(57%)で、次いで「仕方がないと思う」(33%)となる。友達から相談を受けてアドバイスすることができない理由を「めんどうだから」と回答する子どもにおいては、それを改善しようとする気持ちのある者はわずか1割にも満たないということになる。ここに、数は少ないが、その少数の子どもがコミュニケーション上で難しい問題を抱えていることが察せられる。

コミュニケーションに対して消極的な子どもの追跡調査

「12-1」で、「エ、めんどうだから」と回答した子どもについて、以下の4項目について追跡調査を行ってみた。

「問3 なやみがあるとき、それをうちあけることのできる相手はいますか。」

「問4 自分と本当にわかりあえる人はいないとかんじことがありますか。」

「問11 自分の話をわかってもらえないと思ったことはありますか。」

「問13 あなたはまわりの人とどのように話したり、聞いたりしたいですか。」

なお、追跡調査対象者は、アトランダムに選び出した5人である。

12-1「エ」と問3、問4、問11、問13のクロス集計

	問3	問4	問11	問13
A 高3・女	うちあける相手はない	わかりあえる人はいない	わかってもらえない	自分が話す
B 高1・男	うちあける相手はない	わかりあえる人はいない	わかってもらえない	話はあまりしたくない
C 中3・男	うちあける相手はない	わかりあえる人はいない	わかってもらえない	考えたことがない
D 小5・男	うちあける相手はない	わかりあえる人はいない	わかってもらえない	その他 どうでもいい
E 中1・男	うちあける相手はない	わかりあえる人はいる	わかってもらえない	考えたことがない

抽出者に男子が多いのは、「めんどうだから」と回答した者がどの学年も男子が多いため、男子の確率があがったからである。

男女比

小5・男子 6%、女子 3%	小6・男子 7%、女子 3%
中1・男子 6%、女子 1%	中2・男子 6%、女子 3%
高1・男子 6%、女子 0%	高2・男子 2%、女子 1%
	高3・男子 3%、女子 1%

以上のような追跡調査から、友達の相談に「めんどうだから」という理由でアドバイスができない子どもは、他の調査結果からもコミュニケーションがうまくいっていないことが明らかになった。

コミュニケーションがうまくいかない理由を問う設問がないため、その内実は明らかにはされないが、コミュニケーションに対して消極的あるいは拒絶的である場合、信頼できる友達にも恵まれていない実態が浮かび上がってくる。

4. 共同討議

本問は、子どもたちの58、2%が、「友達にうまくアドバイスができる」と考えている現実を明らかにした。アドバイスは、他人の問題を受け止めた上でよりよい解決策などを示すことであり、きわめて意識的、積極的な表現活動である。そのアドバイスを、58、2%の子どもが、うまくできると回答した。子どもたちは、意識的なコミュニケーションに対して、自信と意欲を持っていることが明らかになった。子どもたちのコミュニケーション意識は健全だと言えよう。

しかしながら、39、6%の子どもは、「友達にうまくアドバイスができない」と回答している。この数値は決して低いものではない。では、39、6%の子どもたちはコミュニケーションにおいて問題を抱えていると見るべきなのだろうか。それについては、「アドバイスがうまくできない」理由を、子どもがどのように意識しているかという点を見る必要がある。「問12-1」にその点が明らかなのだが、それによると、ほとんどの子どもが、アドバイスがうまくできない理由を「いい考えがまとめられない」という内容面と「言い方に迷う」という技能面に見出し、自己反省している。さらに、そのような問題に対して、半数近くが「できれば変えたい（46、6%）」と考えているのだ。ここにも、コミュニケーションに対するまじめな取り組み意識が見られるのである。

問題は、「アドバイスがうまくできない」と回答した子どもの中で、7、7%が「めんどうだから」と答えていることである。このようなコミュニケーションに対して拒絶的な子どもを前向きな姿勢に変えるためには、コミュニケーションの必然性、必要感、あるいは場などを開いてやらなければならない。子どもの、閉ざされゆがめられたコミュニケーション意識の解放が検討されねばならない。

5. 考察

5-1. 現状と課題

双方向コミュニケーションへの願望

「問12 友達に相談されたとき、アドバイスがうまくできる」と回答した子どもが58、2%いた。この数値を多いと考えるかどうか、それは今日の子どもたちのコミュニケーションのとらえ方にかかるところだろう。「問3」で、81、5%の子どもたちが「なやみをうちあける相手」がいると回答した。また、「問4」では、76、8%の子どもが「自分と本当にわかりあえる人」がいると回答した。これらの数値から回答者のおよそ80%が、悩みをうち明け、わかり合える友達を持っていると感じている現状が明らかになる。それらと「アドバイスがうまくできる」と回答した者が58、2%であり、「アドバイスがうまくできない」ことを変えたいと思っている者が多いということを関連させてみると、子どもたちは、基本的には友達と安定したコミュニケーション関係を持っている、あるいは持ちたいと思っていると見ることができる。しかし、それにしても58、2%という数値は、どのようにとらえることができるのか。

「本当にわかりあえる」というのは感覚的なものだし、「なやみをうちあける」という行為は、その悩みを解決するための「アドバイス」を要求するものとは限らない。したがって、「問3、問

4」を参考として58、2%の意味を正確に読むことは難しい。しかしながら、これらの数値からは、互いに、悩みや相談事のような内容の話については、それを聞いてほしいという気持ちを持ち、また聞こうという気持ちも持っていることが明らかだ。そして、「問13」からは、「お互いに遠慮なく話し合いたい」(60、2%)と思っていることも明らかである。これらの結果からみると、子どもたちは、互いにその悩みを共有して解決し合うような友達関係を望んでいるのだが、現実は、「アドバイスがうまくできない」という実感を持つ友達関係しか持てない子どもがいるということではないだろうか。相手との信頼関係、自分の問題処理能力、相手にわかりやすく話すことができるという表現力の問題、それらが複合的に友達関係を望むところまで深められない障害となっていると考えられる。また、「問11」の「自分の話をわかってもらえないと思った」理由としてあげられた、「友達が聞きたいと思っていないと感じる」(34、7%)という数値は、上記のような「相手との信頼関係」「問題処理能力その他に関する自信のなさ」「表現力への自信のなさ」を裏付けるものとなっている。

「アドバイス」をめぐるコミュニケーションの問題

「友達に相談されたときアドバイスがうまくできない」という回答が38、5%あるということは、以下にあげたような問題を提示していると考えられる。

第一は、自分に対する自信のなさという問題である。これは、表現力の問題でもコミュニケーションの問題でもなく、回答者が自分自身に対して、人生経験のなさや人間としての未熟さを感じているということである。ドラマチックではない平凡な生活や親がかりの平穏な生活に対して、もの足りなさを感じているのかも知れない。あるいは、学校と塾と家庭という決まり切った生活に、生きることがもつはずのダイナミズムが失われていることを感じて、自分自身を卑小化しているのかも知れない。

第二は、コミュニケーションの問題である。悩み事や相談に関しては、聞く事はできるが、それに対するアドバイスは苦手だと感じている者が39、6%もいるということは、友達として、相談を受けてもそれにこたえられないと感じている者が半数近くいるということだ。なぜ、自分の考えを友達に自信を持って言えないのか。その理由を「その他」にあげられた言葉の中に見ることができる。

- ・その人にとっていいアドバイスかわからないから。
- ・そのアドバイスは結果がでたときしかいいとは言えないし。
- ・はたしてそれがアドバイスになっているのかわからない。
- ・まちがってるとやなことになるから。
- ・自分はいいアドバイスだと思っても、良し悪しを決めるのは相手だから。
- ・自分のアドバイスに自信が持てないから。
- ・無責任な事は言えない。
- ・人生経験があまりない。

これらの言葉には、相手を気遣い、傷つけまいとする配慮が強く見られる。おそらく、「アドバイスがうまくできない」と感じている理由もこのあたりにあるのであろう。友達と認め合うような関係にある者たちのうち、およそ半数近くの者が、相手の人生に積極的に関わることをしないようにしている。今回の調査からは、そこに、今の子どものコミュニケーションの現実があることがかなりはっきりしてきた。問題は、その内実だ一つには、相手を気遣い思いやっているため、一歩踏み出すことをしないでいるのだと思われるが、一つには、他人の人生に責任はとれないといって他の区別を持つことで、自分を守ろうとする無意識の自己防衛の意識が働いているともとれる。

第三は、表現力の問題である。これは、第二のコミュニケーションの問題と関連して考察していくことが必要である。なぜなら、本問の回答に見られる表現力に関するものは、人との関係におけるものに限られているからである。たとえ、親しい友達同士であっても、「上がり症」「口べた」など、基本的に話すことが苦手と感じている人や、「気持ちをうまく表現できない」とか「説得力のある話し方ができない」とか「効果的に話すことができない」など、相手に自分の気持ちや考えていることをよりよく伝える方法がわからない人などは、コミュニケーションがうまくいかない理由をそこに求める場合が多々ある。相手や話の内容に応じて、適切な「言い方」を選ぶことができるというのは、コミュニケーションにおける大事な表現の技能であるが、それは決して単純なものではない。

5 - 2 . 提言ー今後へ向けて

以上のような考察をふまえて、次のような提言をする。

人生経験の豊かさを

子どもには子どもの人生経験がある。人生経験の豊かさは、様々な状況や場面に応じて、人がどう生きることができるかを考える力になる。「友達へのアドバイスがうまくできる」ようになるためには、友達にアドバイスができるような 人間としての力 をもつことが第一である。それが、一人一人の子どもにとって人間関係の中でのアイデンティティーの確率につながるだろう。では、どのようにしたら 人間としての力 を持つための人生経験ができるのか。子どもの人生経験は、現実には、生きてきた時間や環境の限界から、大人のような豊かさは期待できない。そこで、実際には2つの方法が考えられる。1つは、学級を友達同士の豊かな交流の場とすることだ。いろいろな環境にいる友達と交流を深めることで、様々な生き方に出会うことができる。2つめは、直接的・間接的に子どもなりに体験の場を広げることだ。読書による体験の拡充もその一つである。特に、様々な人間像と出会うことができる伝記や小説を読む必要があるだろう。読書指導の充実は、コミュニケーションを充実させることにもつながって、子どもの人生経験の豊かさを生むことになるのだ。

共感し合う人間関係を

競争社会は、子どもたちに競い合う人間関係を生み出し、勝つことの重要さを身にしみるように教え込んだ。競争はあらゆる場面に広がっていて、友達と呼び合いながらも、相手は、心を許す相手であるよりは、常に競い合う敵となった。敵には、決して弱みは見せられない。そこで、自分を表現することに対して臆病になったのである。友達は、行動を共にしながら、冗談を言い合ったり、趣味の話をし合ったり、軽くつきあうために必要なものであって、自分の価値を知られてしまうようなつきあいはできない。そこで、半数近くの子どもたちが、友達の相談に対して、アドバイスがうまくできないと感じることになるのではないだろうか。

人が共に暮らすことで社会生活を成立させるという人間の生き方は、今や信頼の薄い人間関係によって、内部から崩壊を始めてしまうのではないだろ危機に瀕している。弱点や欠点を認め合い、いろいろな場面で共感を持つことができるような人間関係を生み出すことが、子どもたちに求められている緊急のものだ。子どもたちが、そのような人間関係を持つができるように、社会の価値観を経済優先から人間尊重へと変えていくことが、これも緊急に求められている。

6 . 反省と課題

アンケート調査の限界とも言えるが、設問の「友達」、「相談」、「アドバイス」など、それぞれどのような意味でとらえたかによって、回答に幅が生じるという問題がある。たとえば、「友達」は、自分との関係において、どの程度親密なものとしてとらえたかによって、回答に違いが出る。設問を、場や関係を具体的に設定した形で行う方がいいか、あまり限定せずに行う方がいいかは、今後の検討課題である。

設問がどのような目的でなされたものか、回答者に示す必要があるかどうかも、今後の検討課題である。たとえば、「問12」については、「あなたと友達との間で、相談とアドバイスとがどのようになされるかを問うことによって、あなたと友達の関係を明らかにすることが、この問い合わせの目的です」というような前置きを置くかどうかという問題である。

「問12」は、「アドバイスがうまくできない」と回答した39、6%の子どもを問題性があるとして、「問12-1」「問12-2」と追跡しているが、「うまくできる」と回答した58、2%についても、「なぜ、そう思うのか」のような設問をする必要があったのではないか。「うまくできる」という回答に、どのような根拠があるかを問えば、回答により信憑性が増すと思われる。

12 コミュニケーションのあり方に関する意識 どのように話したり聞いたりしたいか

分析担当 牛山 恵

1. 調査の意図

本問は、「まわりの人」という、子どもの周囲に身近にいる人々を話しの相手とし、その人たちと「どのように話したり聞いたりしたいか」という、言語を媒体としたコミュニケーションに対する期待あるいは願望を問うものである。コミュニケーションの相手として「まわりの人」を想定するということは、家族、教師、友達など、周囲にいる一般的で広い範囲の者が対象として浮かんでくる。しかしながら、この「問13」に先立つ「問8」の前に、「ここからは、授業以外で友達の話をするときにどうであるかを考えてください。」という条件が提示されている。この条件を記憶しているかどうか、それによってコミュニケーションの相手の想定が変化する可能性があるが、そのことで回答に大きな変化が生じるかどうかという点についてはあまり危惧する必要はない。それは、本問がコミュニケーションの現実を問うものではなく、全般的なコミュニケーションに対する期待あるいは願望を問うものだからである。具体的な相手を想定する必要はないといつてもよい。

本問が意味を持つは、設問に「話したり、聞いたりしたいか」という、話し手であり聞き手でもあるという双方向のコミュニケーションを提示しているにもかかわらず、選択肢に「ア自分が話して、相手が聞く」とか「エ 人と話はあまりしたくない」といった、双方向のコミュニケーションを否定するもの、もしくはコミュニケーションそのものを拒絶するものを設けているところにある。つまり、期待あるいは願望を問い合わせながら、あえてそれとは反対方向の志向示す子どもをも浮かび上がらせることができる設問・選択肢になっている。

回答に関しては、「その他」を含めて7項目の選択肢が設定されている。回答は1項目選択という条件がついているため、回答者の「コミュニケーションのあり方に関する意識」について、かなり明確にその傾向をみることができる。

2. 調査

2-1. 調査問題とその結果

13. あなたはまわりの人とどのように話したり、聞いたりしたいですか。1つ答えてください。

ア、言いたいことを自分が話して、相手が聞いてもらいたい	437人	7、9%
イ、相手のいろいろな話を、自分が聞きたい	444人	8、0%
ウ、お互いに遠慮なく話し合いしたい	3349人	60、2%
エ、人と話はあまりしたくない	88人	1、6%
オ、どのような形でもよい	389人	7、0%
カ、考えたことがない	344人	6、2%
キ、その他	124人	2、2%

2-2. 調査問題についての解説

この「問い合わせ」は、回答者に「まわりの人」と「どのような」「話し聞く」コミュニケーションを

持ちたいと思っているかということについて問うものである。選択肢としては、アからキまで設定してある。以下に、それぞれの選択肢を取り上げてみることにする。

「ア 言いたいことを自分が話して、相手が聞いてもらいたい」は、コミュニケーションのあり方として、自分が話し手となることを望むものである。話し手となることは、コミュニケーションに関して積極的な姿勢を持つということだが、「言いたいことを自分が話す」ということは、場合によっては、話題の選択などに関して自己中心的になることも考えられる。また、「相手が聞いてもらいたい」という願望を持つことも、場合によっては、相手に聞き役を強要することも考えられる。選択肢アが明らかにするのは、話をするということではコミュニケーションに積極的であるが、聞き手になることを望まず、一方的に話し手であろうとする自己中心的なコミュニケーション意識である。

「イ 相手のいろいろな話を、自分が聞きたい」は、コミュニケーションのあり方として、自分が聞き手となることを望むものである。聞き手となることを望むのは、コミュニケーションに関して消極的であるとするのは早計である。本項の場合、ただ漠然と聞き手になるということではない。話題として「相手のいろいろな話」が設定されていることから、相手を知ろうとするコミュニケーションの基本的な姿勢があらわれているともとれるからである。しかしながら、本項の選択に関して、人とコミュニケーションはとりたいが話し手となるのは苦手であるとか、自分が話すのは面倒だから聞き手の方がいいとかいった、コミュニケーションに対する消極的意識も読みとることができる。

「ウ お互いに遠慮なく話し合いたい」は、自分と相手とが、心から許し合って何でも自由に言い合えるという、コミュニケーションの理想的なあり方を求めるものである。「遠慮がない」のは、何を言っても言われても相手との関係が壊れることはないという、信頼のコミュニケーションが成立しているからである。

「エ 人と話はあまりしたくない」は、コミュニケーションの上でもっとも問題のある選択肢である。「どのように話したり聞いたりしたいか」という問い合わせの「どのように」に答えることなく、「話したり聞いたり」することそのものを「あまりしたくない」と拒絶している。コミュニケーションに対する期待や願望を持てないで、自分の殻に閉じこもっていたいという、孤独あるいは孤立を求める姿が浮かんでくる。

「オ どのような形でもよい」は、設問の「どのように話したり聞いたりしたいか」の「どのように」に答えるもので、形へのこだわりがないことを示す選択肢である。形へのこだわりがないということは、そこにコミュニケーションのあり方に関して、柔軟で開放的であるという意識を見ることができるが、一方では、関心のなさを示すことにもなる。

「カ 考えたことがない」は、コミュニケーションに関する無関心を示す選択肢である。これまで、コミュニケーションのあり方に無関心であったとしても、本問は選択肢を選択する回答法をとっているため、この場でより積極的な意識を示す選択肢を選択することも可能である。この選択肢の選択は、コミュニケーションに無関心であるという意識を顕在化することになる。

「キ その他」は、上記ア～カの選択肢にあてはまる項目がない者の記述による回答である。

以上、本問は、回答者がコミュニケーションにどのように関わろうとしているか、どのようなコミュニケーションを望んでいるのか、その意識を明らかにしようとするために設けられた設問である。

3. 調査結果の分析

この調査で明らかになったことは、以下のような点である。

「問13」は、話し合いのコミュニケーションのあり方に対する願望を聞いたものであるが、その根底にある意識を明らかにするために「問4『自分と本当にわかりあえる人はいない』と感じることがあるか」および「問10 あなたが正しいことをしていて、そのことについて『よくない』と友達から言われたらどのようにするか」という設問とのクロス集計を試みた。「問4」との相関は、子どもたちのコミュニケーションの現実との関係を明らかにしようとするものであり、「問10」との相関は、友達からの忠告をどう受け止めるかを明らかにしようとするものである。

3-1. 「問13」・「問4」・「問10」の相関

「問13 あなたはまわりの人とどのように話したり聞いたりしたいか」と「問4『自分と本当にわかりあえる人はいない』と感じることがあるか」とのクロス集計

問13 問4	ア自分が話す	イ自分が聞く	ウ話し合う	工話したくな い	オなんでもよ い	力考えていな い	クその他
アはい	6、7%	7、2%	56、9%	4、2%	8、0%	11、4%	5、6%
イいいえ	5、7%	7、9%	69、2%	0、8%	7、8%	21、5%	2、1%

「問13 あなたはまわりの人とどのように話したり聞いたりしたいか」と「「問10 あなたが正しいことをしていて、そのことについて『よくない』と友達から言われたらどのようにするか」」のクロス集計

- 1 「問13」で「ウ」を選択した子ども		3、349人						
		ア説明する	イ友達に聞く	ウ黙る	工合わせる	オ振り返る	力気にせず	キその他
a 親しい友		971 29%	1587 47%	56 1、6%	107 3%	290 9%	38 1、1%	28 0、8%
b 親しくない友		715 21%	1289 38%	251 7%	260 %	188 6%	279 8%	70 2、0%

B 「問13」で「工」を選択した子ども

88人

	ア	イ	ウ	工	オ	力	キ
問10 a	20 23%	26 30%	4 4、5%	6 6、8%	7 7、9%	5 5、6%	3 3、4%
b	8 9、0%	17 19%	13 15%	6 6、8%	6 6、8%	14 16%	6 6、8%

3-2. 分析

健全なコミュニケーション意識

「問13」の回答を数値の高い順に並べ替えると、下のようになる。

ウ、お互いに遠慮なく話し合いたい	3349人	60、2%
イ、相手のいろいろな話を、自分が聞きたい	444人	8、0%
ア、言いたいことを自分が話して、相手が聞いてもらいたい	437人	7、9%
オ、どのような形でもよい	389人	7、0%
力、考えたことがない	344人	6、2%
キ、その他	124人	2、2%
工、人と話はあまりしたくない	88人	1、6%

この結果から一目瞭然にわかるのは、「ウ お互いに遠慮なく話し合いたい」を選択した者が、60、2%と圧倒的に多いということである。逆に、もっとも少ないのは「工 人と話はあまりしたくない」で、上位の「ウ」「イ」「ア」はいずれも何らかのコミュニケーションを求めていることから、全体としては、コミュニケーションに関して健全な志向を持っていると言える。

一方的働きかけの選択

選択肢「ア」は、自分が話し手となって、相手に聞き役を望むものであるが、このような双方向と言うよりは一方的な働きかけを望む者が7、9%いる。これは、選択肢中、ウ、イに次いで3番目に高い数値である。これを選択した子どもは、小4がもっと多く、男子23、8%、女子12、2%である。もっとも少いのは高2で、男子3、2%、女子2、5%である。全体としては小学生が4、5、6年生とも10%を越えており、学年が低い方が自己中心的な傾向があると言える。また、注目すべきは、どの学年もすべて男子の割合の方が多いということだ。

「問4」とのクロスからは、「わかりあえる人はいない」と感じている子どもによる選択の方がやや多い。

【学年別・男女別集計 どのように話したり聞いたりしたいかー自分が話す】

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	全体
ア 自分が話す	男	23.8%	17.9%	11.8%	9.8%	5.9%	7.4%	11.7%	3.2%	5.3%	
	女	12.2%	8.7%	9.6%	3.4%	2.5%	3.9%	2.5%	2.5%	3.4%	
	計	18.4%	13.8%	10.6%	6.4%	4.3%	5.7%	5.6%	2.8%	4.1%	7.9%

受動的立場の選択

選択肢「イ」は、自分が聞き役になることを望むもので、これも双方向と言うよりは受け身の側に立つコミュニケーションのあり方である。しかしながら、上記の解説に示したように、「いろいろな話を聞きたい」と望むことは、決してコミュニケーションについて消極的というわけではない。「イ」を選択した者は8、0%で、小4の16、7%が高い数値を示しているが、他の学年は高3の5、0%から小5の9、7%まで、あまり顕著な学年差はない。

男女比については、いずれの学年についても、男子が女子を上回っていることが注目される。

「問4」とのクロスからは、「わかりあえる人はいる」と感じる子どもの方の選択がやや上回り、聞き役になるのは、自分をわかってもらえないというコミュニケーションに対する不信感が原因ではないことが明らかだ。

【学年別・男女別集計 どのように話したり聞いたりしたいかー自分が聞く】

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	全体
イ 自分が聞く	男	18.1%	11.8%	10.5%	11.2%	7.1%	8.7%	6.8%	11.5%	5.3%	
	女	15.1%	7.2%	7.2%	5.7%	3.9%	6.1%	4.7%	3.4%	4.8%	
	計	16.7%	9.7%	8.8%	8.3%	5.6%	7.4%	5.4%	7.0%	5.0%	8.%

双方向コミュニケーションの選択

「ウ」は、相手と自分との間に「遠慮」のない双方向のコミュニケーションを望むもので、両者が対等に自分の意志を伝え合うという、コミュニケーションのあり方としては理想的なものである。これを望む者は60、2%ともっと多く、中でも高2女子は78、8%に上っている。全般的に女子の方が高い数値を示し、もっとも少いのは、小4男子の36、3%で、高2女子の半分以下の数値となっている。

「問4」とのクロスからは、「ウ」を選択した子どもの、実に約7割が、自分と本当にわかりあえる人はいると思っていることが明らかになる。本当にわかりあえると感じることのできる人間関係への信頼感が、「遠慮なく話し合う」ことの選択を可能にするのだろう。

「ウ」に関しては、「問10」との相関を見てみることにする。

「問13」で「ウ」を選択した子どもは3、349人いた。その子どもたちが、「問10」ではどのような回答を示したか。

「a 親しい友達」に、正しいことをよくないと言わされた場合、「イ 友達になぜそのように言うか聞いてみる」を選択した子どもがもっと多く、次に多いのが「ア 自分のやったことは正し

いと説明する」であった。「互いに遠慮なく話し合いたい」という希望を持つ者が、「イ」は半数近く、「ア」は30%ほど、これら、積極的にコミュニケーションをとろうとする項を選択しているのは、双方向のコミュニケーションを望むだけでなく、現実にもそれを実現させようとしていることを明らかにする。この傾向は、「b あまり親しくない友達」の場合も同じである。

【学年別・男女別集計 どのように話したり聞いたりしたいかー話し合う】

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	全体
ウ 話し合う	男	36.3%	44.5%	52.7%	54.0%	56.5%	48.4%	58.6%	54.5%	52.2%	
	女	56.1%	66.6%	63.2%	72.1%	70.6%	72.3%	66.5%	78.8%	70.5%	
	計	45.5%	54.3%	58.2%	63.5%	63.1%	60.4%	63.8%	68.2%	64.1%	60.2%

コミュニケーションへの期待

「ア」(7、9%)・「イ」(8、0%)・「ウ」(60、2%)を合わせると、76、1%という高い率となる。「話す」と「聞く」ことで、人とコミュニケーションをはかりたいと考えている子どもが、8割近くいるということだ。

「ア」を選択した子どもは、自己中心的な面を持つと考えられるし、「イ」を選択した子どもは、受動的・消極的な面を否定できないが、コミュニケーションに関して、根本的には、拒絶的ではないということだ。コミュニケーションに関する子どもの期待や願望が健全であることが明らかである。

コミュニケーションへの消極的・拒絶的立場の選択

「エ」は、人の話し合いを望まないので、コミュニケーションに対して消極的あるいは拒絶的である。数値的には、わずかに1、6%の者がこれを選択することになるが、たとえ数パーセントであっても、コミュニケーションに対して消極的・拒絶的な子どもがいるということは問題である。

学年差は数値的には低いが、小6女子の3、8%、中3男子の3、9%が目に付く。

「問10」との相関では、「人とはあまり話したくない」を選択しているながら、双方向のコミュニケーションを望む子どもと同様に、「友達に聞く」がもっとも多い。しかしながら、「あまり親しくない友達」に対しては、「親しい友達」とは違う結果が出ている。「親しい友達」の場合、次に多いのが「説明する」で「ウ」の選択者と変わらないのだが、「エ」の選択者は、「力 気にしないようにする」を選び、ほぼ近い数で「ウ とりあえず友達の考えに合わせておく」を選んでいる。「人とはあまり話したくない」と思っている子どもたちは、「人に説明する」といったエネルギーの必要なコミュニケーションを望まず、波風の立たない人間関係にとどまるこでよいと考えていることがわかる。

【学年別・男女別集計 どのように話したり聞いたりしたいかー話したくない】

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	全体
エ 話したくない	男	1.3%	1.2%	1.0%	2.3%	2.7%	3.9%	2.5%	0.0%	0.9%	
	女	0.7%	1.0%	3.8%	0.5%	2.0%	0.4%	0.3%	0.0%	1.0%	
	計	1.0%	1.1%	2.4%	1.4%	2.4%	2.1%	1.0%	0.0%	0.9%	1.6%

また、「力」の選択は、「エ」のように明確な拒絶ではないが、コミュニケーションに関する消極性・無関心さを示すものである。学年別に見ると、小4が7、7%でもっとも高い数値であり、小学生がいずれも7、0%台となっている。もっとも低いのは高2の3、6%であり、小学生の半分以下である。この数値から見ると、「力 考えていない」の選択は、小学生がコミュニケーションに関して、あまり自覚的ではないことを示すものと言えよう。

【学年別・男女別集計 どのように話したり聞いたりしたいかー考えていない】

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	全体
力 考えてない	男	8.8%	9.1%	9.6%	6.3%	8.1%	9.5%	6.2%	5.1%	13.3%	
	女	6.5%	5.4%	5.5%	3.1%	3.1%	3.3%	5.0%	2.5%	2.9%	
	計	7.7%	7.4%	7.4%	4.7%	5.8%	6.4%	5.4%	3.6%	6.6%	6.2%

「問4」とのクロスからは、次のような点が明らかになる。まず、「自分と本当にわかりあえる人はいない」と感じている子どもが、「わかりあえる人はいる」と感じている子どもの5倍の割合で、「工 人と話したくない」を選択しているということだ。5倍というのは、他の項目には見られない差であり、この点から、「人と話したくない」と感じるのは、「自分とわかり合える人はいない」つまり、「人とはわかりあえない」という現実、そこから生まれる悲観的なコミュニケーション観によるものだ。

また、「力 考えていない」を選択した子どもで、「問4」では「自分とわかりあえる人はいる」と回答した者が「わかりあえる人はいない」と回答した者の2倍になっている。このことから、コミュニケーションのあり方について考えていないのは、単にコミュニケーションに対して無自覚なだけで、現実にコミュニケーションの問題があるわけではないと言えるだろう。

上記「工」と「力」の選択肢の他に、「オ どのような形でもよい」という選択肢がある。これは、「2 - 2」で前述したように、「話したり聞いたり」の形へのこだわりがないことを示す選択肢である。これを柔軟で開放的なコミュニケーション意識と見るか、コミュニケーションへの関心のなさと見るか、分かれるところである。この項目の選択でもっとも高い数値を示したのは、高2の男子14、1%、次いで高3の男子9、7%である。もっとも低いのが小4男子1、9%で、次いで小4女子2、9%である。「形へのこだわり」がないことは、コミュニケーションへの展望がないということでもあり、コミュニケーションに関して消極的であるという傾向を見ることができる。

【学年別・男女別集計 どのように話したり聞いたりしたいかーなんでもよい】

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	全体
オ なんでもよ い	男	1.9%	8.2%	8.9%	7.2%	8.8%	9.5%	6.2%	14.1%	9.7%	
	女	2.9%	4.4%	4.6%	4.4%	8.4%	5.0%	10.6%	5.4%	3.4%	
	計	2.3%	6.5%	6.7%	5.7%	8.6%	7.2%	9.1%	9.2%	5.6%	7.%

記述回答に見るコミュニケーションの2方向性

「キ その他」を選択した子どもに関しては、その内容について記述回答が求められている。全体から見ると2、2%という少ない割合ではあるが、記述された言葉の中にコミュニケーションに対する子どもの意識を明確に見ることができるものがある。

記述の言葉は、おおよそ2方向に分類できる。1方向は、数としては少なく4分の1程度だが、コミュニケーションをより深め充実させたいと願っているものである。選択肢「ウ お互いに遠慮なく話し合いしたい」と重なるものだが、あえてこれを選択せずに、自分の言葉で記述しようと意識したものである。たとえば、次のような記述回答がある。

- ・私を信らいして、色々な事をうちあけて、うちあけられたい。
- ・相手も何かを話して自分が聞いて、自分が何か話している時は聞いてほしい。
- ・悪いところは注意しながら、腹を割って話し合える仲。
- ・お互いの意見も尊重し、でも自分の意見はきちんと言える話し合い。
- ・考えを理解し合える人とズバズバと話したい。

また、もう一方は次のようなものである。

- ・遊びながら話したい。
- ・差し障りのない程度に話し、聞き、深入りせずに付き合う。
- ・ムカツクことがないようにイライラしない会話。
- ・かけでいいまくる。
- ・どうでもいい。

コミュニケーションを深め充実させたいと思っている方向と、適当に深入りしないで軽い人間関係を持ってみたいという方向である。

4. 共同討議

「同じクラスの人たちと話すこと（問2）」について、5%の子どもが「嫌い」もしくは「あまり好きでない」と回答した。「なやみをうちあける相手がない（問3）」と17、6%の子どもが回答した。「自分と本当に分かり合える人はいないと感じる（問4）」子どもは21、8%いた。「自分の話をわかってもらえない（問11）」と思ったことがある子どもは74、2%いて、その理由に34、7%の子どもが「友達が聞きたいと思っていないと感じる」を選んだ。そして、「まわりの人とどのように話したり聞いたりしたいか（問13）」と聞かれて、「人と話はあまりしたくない」と回答した子どもが1、6%いた。

以上のような回答を見ると、コミュニケーションの上で問題があると考えられる子どもの数は、予想以上に低く、むしろ健全なコミュニケーション意識を持っていることが、本調査で明らかになった。いじめ、自殺、家庭内暴力、社会的犯罪など、子どもの抱える問題の多くにコミュニケーションがうまくとれないでいる姿を見てきたわけだが、子どもの意識においては、健全なコミュニケーションが求められているのである。しかしながら、数値的には低くとも、コミュニケーションの上で問題を持つ子どもがいることは事実である。本調査では、ほとんどの設問に「その他」という記述回答欄が設けてあるが、そこに何か書きたいと考え、実際に言葉を書き付けるという意欲的な行動は、コミュニケーションに関して言わずにいられない問題を持っているからこそできたのである。

本調査は、子どものコミュニケーションの現実を明らかにするというより、子どもがコミュニケーションについてどのような意識を持っているかを明らかにするものである。子どものコミュニケーションの現実は、仲間はずれを作るとか、グループのリーダーの言いなりになるとか、グループ間で争うとか、親しくしていても平気で裏切るとか、誰も信じられない孤独であるとか、向かい合っても話をせずにゲームをしているとか、結果として不登校になったり自殺をしてしまったりと、そういう例は多いのではないだろうか。現に、授業や会議で、話し合いができるというのは現実に大きな問題となっている。つまり、子どもたちは、現実には、相手を認め合い信頼し合った関係の中で話したり聞いたりするという、双方向の理想的なコミュニケーションからは、離れたところにいるのではないだろうか。しかしながら、本調査で明らかになったように、子どもたちは、互いに認め合い、何でも話し合うことのできる確かな人間関係を築くことを願っているのではないか。問題は、そのような期待・願望をどのようにして実現するかということである。「遠慮なく」話し合うことのできる人間関係をいかにしたら築くことができるのか、その展望は開けているのだろうか。コミュニケーションをめぐる問題は、人間関係が多様になるほど、様々な取り組みを必要とすることだろう。

5. 考察

5 - 1 . 現状と課題

コミュニケーションに関する願望と現実

上記に明らかなように、双方向という点に問題はありながら、コミュニケーションを望む者は76、1%の高い数値である。この数値の高さは、コミュニケーションに対して意欲的・積極的な志向を持っていることを示している。しかしながら、その一方で、14、8%の者がコミュニケーションに対して、無関心、消極的、拒絶的であることが明らかになった。この数値と、「その他」に書かれた記述回答から、以下のような問題が見えてきた。その問題はまた、子どもたちのコミュニケーションの現実を示すものもある。

その1つは、人間関係の希薄さである。次のような記述回答がそれを示している。

- ・あそびながら話し合いたい
- ・おもしろい話がしたい
- ・ムカツクことがないようにイライラしない会話
- ・楽しく、おもしろく、ゆかいに
- ・差し障りのない程度に話し、聞き、深入りせずに楽しく付き合う。

他人と問題を共有しないで、関わり合いを浅くしておこうという志向である。淡泊な関係を求めるというよりは、相手のことに責任を持たないでいつでも解消できる関係の志向と言ってよいだろう。

もう1つは、人間関係を限定的にとらえているものである。

- ・仲がいい人とはしゃべりたいけど、どうでもいい人とはしゃべるのはどうでもいい。
- ・仲のよい人とは遠慮なく話し合いたいが、別に仲がよくない人とは話さなくてもよい。

気の合う人とだけ付き合うという志向である。

これらは、コミュニケーションの現実を変えていくことを必要とせず、人と関わることで自らを成長させていくということから自分自身を疎外している子どもたちの言葉である。少数であるとは言え、このようにコミュニケーションの上で問題を持つ子どもたちの意識をどのようにしたら変えることができるか、課題として残されている。

5 - 2 . 提言 - 今後へ向けて

以上のような考察をふまえて、次のような提言をする。

「問12」の項で、「人生経験の豊かさを」と「共感し合う人間関係を」という2点の提案を行った。この項では、それに加える形で、次の2点の提案を行う。

個としての自立を

子どもたちが友人関係で恐れることは、仲間はずれになることである。そのもっともひどい状況がいわゆる いじめ だが、明らかに いじめ と判断される前段階としても、口をきかない、無視をするといった仲間からの疎外が行われる。そうされることが恐ろしいために、子どもたちは、仲間内のリーダーに従い仲間と行動を共にする。自立した個として仲間と人間関係を結ぶのではなく、個を埋没させて群の一員となる。しかしながら、子どもたちは「互いに遠慮なく話し合うことができる」双方向のコミュニケーションを志向していること明らかになった。それこそが望ましい人間関係のあり方であり、それは個の自立なくしては成立しないのだ。そのような人間関係のモデルを、それぞれが自立した個を尊重し合う人間関係が大事なものであるということを、子どもたちに示し続けていくことが必要だ。

人権意識の育成を

コミュニケーションの基本は人権の尊重にある。互いに相手を尊重しあってはじめて健全なコミュニケーションが育てられる。家庭で、学校で、社会で、あらゆる場面で、子どもたちに、人権の意味を教え、人権を尊重する精神や態度を身につけさせなければならない。直接コミュニケーションと関わらないように見えても、「世界人権宣言」や「子どもの権利条約」など、人権の学習を進めることができ、コミュニケーション意識を育てることにもつながるのである。おもしろおかしく話すことがコミュニケーションだと考えたり、特定の人とだけ話せばいいと考えたり、「かげでいいまくる」「うっさい」「どうでもいい」（以上、記述回答より）などと考えていることの基底には、自分と周囲の人権に関する無自覚・無知が顕著にあらわれている。互いに人権を尊重し合う関係が望ましいコミュニケーションを成立させるのであり、望ましいコミュニケーションが人権尊重の人間関係を成立させるのだ。

調查資料

1 質問用紙

話すこと・聞くことに関するアンケート

実施日 月 日 学年 中・高 年 男・女

あなたは、友達とどのように話をしていますか。あなたの考えていることともっとも近いものの左の□のらんに をつけてください。ない場合は「その他」の□に をつけ()の部分にあなたの考えを書いてください。

1 あなたにきょうだいはいますか。

- ア はい【兄姉がいる()人】【弟妹がいる()人】
 イ いいえ

2 同じクラスの人たちと話すことについてどう思いますか。(a) (b)の中から1つずつ選んでください。

(a)

- ア 好き
 イ まあまあ好き
 ウ あまり好きではない
 エ 嫌い
 オ どちらとも言えない

(b)

- ア 得意(うまく話せる)
 イ まあまあ得意
 ウ あまり得意ではない
 エ 不得意(うまく話せない)
 オ どちらとも言えない

→ 2.1 それはどうしてですか。いくつ答えるてもかまいません。

- ア 自分の考えていることをわかってもらえないから
 イ 相手が何を言っているのかよくわからないから
 ウ 話をすることがめんどうだから
 エ 自分の考えや気持ちを伝えられないから
 オ その他()

3 なやみがあるとき、それをうちあけることのできる相手はいますか。

- ア はい
 イ いいえ

→ 3.1 下にあげた人のうち、話しやすいのはだれですか。いくつ答えるてもかまいません。きょうだいについては人数も書いてください。そのほかにもいる場合は、その他のところにどういう人か書いてください。

- ア 父
 イ 母
 ウ きょうだい
 エ 先生
 オ 男の友達
 カ 女の友達
 キ その他()

4 「自分と本当にわかりあえる人はいない」と感じることがありますか。

- ア はい
 イ いいえ

→ 4.1 それはどういうときですか。下に書いてください。

()

《ここからは、学校の授業中のことについて考えてください。》

- 5 先生に指名されて、(a)うれしいと思ったとき、(b)うれしくないと思ったときはありましたか。また、ある場合はそれぞれどのようなときだったか答えてください。いくつ答えてもかまいません。

(a)
 ア ある
 イ ない
 →(a)

- ア 得意教科の時間
 イ 自分の意見に自信があるとき
 ウ 言いたいのに自分からは言えないとき
 エ その他(に書く)
 ()

(b)
 ア ある
 イ ない
 →(b)

- ア 不得意教科の時間
 イ 自分の意見に自信がないとき
 ウ その他(に書く)
 ()

- 6 授業中に発言したくなることはありますか。

ア よくある
 イ たまにある
 ウ ほとんどない
 エ ない

→ 6.1 そのときに発言しましたか。

ア はい
 イ いいえ

→ 6.2 それはどうしてですか。いくつ答えてもかまいません。

- ア みんなの前で話すのは緊張するから
 イ あまり目立ちたくないから
 ウ みんなの前で間違えたくないから
 エ クラスの人からいろいろと言われるのがいやだから
 オ クラスの人と意見が違いそうだから
 カ めんどうだから
 キ その他()

- 7 あなたができるものに をつけてください。いくつ答えてもかまいません。

ア 声を出して読むことができる
 イ 自分の考えを話すことができる
 ウ 調べたことを報告することができます
 エ 大勢の人の前で発表することができます
 オ 友達の話をよく聞くことができる
 カ 友達と話し合って考えを深めることができます
 キ 聞いたことを人に伝えることができる
 ク 司会をすることができます

《ここからは、授業以外で友達と話をするときにどうであるかを考えてください。》

8 何か相談するとき、どのような手段を使うと相談しやすいですか。いくつ答えてもかまいません。

- ア 直接その友達と会って話す
- イ 家の電話で話す
- ウ 自分の携帯電話で話す
- エ 手紙を書く
- オ Eメールなどの文字通信を使う
- カ その他()

9 親しい友達がよくないことをしていたらどうしますか。1つ答えてください。

- ア 自分でその友達に「よくない」と言う
- イ だれかがその友達に言うのを待つ
- ウ 先生にそのことを言う
- エ 他の友達に相談してみる
- オ その他

→ 9.1 どうしてそのようにするのですか。いくつ答えてもかまいません。

- ア その友達と仲良くしてみたいから
- イ 先生や他の友達の方がいい考えを持っているから
- ウ その友達に言い返されるのがいやだから
- エ 自分の考えに自信がないから
- オ めんどうだから
- カ 一人では言いづらいから
- キ その他()

10 あなたが正しいことをしていて、そのことについて「よくない」と友達から言わされたらどのようにしますか。(a)親しい友達 (b)あまり親しくない友達の場合、それぞれ1つ答えてください。

(a)(b)

- ア 自分のやった(言った)ことは正しいと説明する
- イ 友達になぜそのように言うか聞いてみる
- ウ 自分のやった(言った)ことは正しいと思いながら、言わずに黙っている
- エ 自分のやった(言った)ことは正しいと思いながらも、とりあえず友達の考えに合わせておく
- オ 友達が正しいのではないかとふりかえってみる
- カ 気にしないようにする
- キ その他(a) (b)

→ 10.1 どうしてそのようにするのですか。いくつ答えてもかまいません。

(a)(b)

- ア その友達と仲良くしてみたいから
- イ 自分のやること(言うこと)にあまり自信が持てないから
- ウ その友達の方が強い立場にいるから
- エ めんどうだから

オ その他 (a)
 (b)

11 自分の話をわかってもらえないと思ったことはありますか。

ア はい
 イ いいえ

→11. 1 それはどうしてですか。いくつ答えるてもかまいません。

- | | |
|--|-----------------------------|
| | ア 友達が聞きたいと思っていないと感じるから |
| | イ 自分の考えがうまくまとまっていないから |
| | ウ 自分の話の中身が難しすぎて友達にはわかりにくいから |
| | エ 自分から話すのになれていないから |
| | オ 話すことが下手だと思っているから |
| | カ その他 () |

→11. 2 そのことをそのように感じますか。

- | | |
|--|-----------------|
| | ア それでよいと思う |
| | イ とりあえずそれでよいと思う |
| | ウ できれば変えたいと思う |
| | エ 変えたい |

12 友達に相談されたときアドバイスがうまくできますか。

ア はい
 イ いいえ

→12. 1 それはどうしてですか。いくつ答えるてもかまいません。

- | | |
|--|------------------------------------|
| | ア 友達の相談を聞くことがあまり得意ではないから |
| | イ 友達の相談を聞くことはできるが、いい考えをまとめられないから |
| | ウ 友達の相談を聞いて考えることはできるが、言い方に迷ってしまうから |
| | エ めんどうだから |
| | オ その他 () |

→12. 2 そのことをどのように感じますか。

- | | |
|--|---------------|
| | ア それでよいと思う |
| | イ 仕方がないと思う |
| | ウ できれば変えたいと思う |
| | エ 変えたい |

13 あなたはまわりの人とどのように話したり、聞いたりしたいですか。1つ答えてください。

- | | |
|--|-----------------------------|
| | ア 言いたいことを自分が話して、相手が聞いてもらいたい |
| | イ 相手のいろいろな話を、自分が聞きたい |
| | ウ お互いに遠慮なく話し合いたい |
| | エ 人と話はあまりしたくない |
| | オ どのような形でもよい |
| | カ 考えたことがない |
| | キ その他 () |

ご協力ありがとうございました

2 学年・男女別集計表(人数)

学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
男	160	485	313	348	407	539	162	156	113	2683
女	139	389	345	383	357	538	322	203	207	2883
計	299	874	658	731	764	1077	484	359	320	5566

(重複集計)は複数回答者が多いので、複数回答を含めた数

1 あなたにきょうだいはいますか。

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア はい	男	141	433	276	313	348	485	150	145	104	2395
	女	126	338	300	339	304	494	286	191	192	2570
	計	267	771	576	652	652	979	436	336	296	4965 89.2%
イ いいえ	男	19	52	37	28	58	53	8	10	9	274
	女	13	51	45	41	52	42	34	12	14	304
	計	32	103	82	69	110	95	42	22	23	578 10.4%

2 同じクラスの人たちと話すことについてどう思いますか。(a)(b)の中から1つずつ選んでください。(重複集計)

(a) 好き嫌い

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア 好き	男	82	256	159	203	224	274	72	63	42	1375
	女	89	255	227	277	242	377	193	139	128	1927
	計	171	511	386	480	466	651	265	202	170	3302 59.3%
イ まあまあ好き	男	63	166	116	109	130	181	59	66	44	934
	女	40	93	76	68	74	109	97	43	50	650
	計	103	259	192	177	204	290	156	109	94	1584 28.5%
ウ あまり好きではない	男	5	16	9	15	18	27	8	7	8	113
	女	3	13	13	21	21	16	10	5	10	112
	計	8	29	22	36	39	43	18	12	18	225 4.0%
工 嫌い	男	1	7	3	6	7	11	3	6	4	48
	女	1	2	1	2	3	5	3	2	4	23
	計	2	9	4	8	10	16	6	8	8	71 1.3%
オ どちらとも言えない	男	7	37	27	14	21	44	18	13	14	195
	女	6	25	27	13	19	31	16	13	13	163
	計	13	62	54	27	40	75	34	26	27	358 6.4%

(b) 得意不得意

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア 得意(うまく話せる)	男	40	109	66	65	73	95	23	20	12	503
	女	36	86	81	69	67	99	52	23	39	552
	計	76	195	147	134	140	194	75	43	51	1055 19.0%
イ まあまあ得意	男	84	260	160	183	215	230	75	61	45	1313
	女	72	213	171	206	180	271	141	99	78	1431
	計	156	473	331	389	395	501	216	160	123	2744 49.3%
ウ あまり得意ではない	男	21	56	43	46	56	101	25	42	26	416
	女	16	37	54	42	56	70	71	39	38	423
	計	37	93	97	88	112	171	96	81	64	839 15.1%
工 不得意(うまく話せない)	男	2	15	11	19	12	29	8	8	11	115
	女	3	9	5	14	11	17	11	12	9	91
	計	5	24	16	33	23	46	19	20	20	206 3.7%
オ どちらとも言えない	男	9	35	27	18	36	59	25	17	16	242
	女	10	40	30	35	35	59	35	24	27	295
	計	19	75	57	53	71	118	60	41	43	537 9.6%

2.1 それはどうしてですか。いくつ答てもかまいません。

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア 自分の考えていることをわかつてもらえないから	男	13	41	24	18	20	41	10	5	12	184
	女	8	26	19	28	18	36	13	5	14	167
	計	21	67	43	46	38	77	23	10	26	351 15.7%
イ 相手が何を言っているのかよくわからないから	男	7	25	14	8	13	29	7	6	8	117
	女	6	19	11	13	8	13	9	3	13	95
	計	13	44	25	21	21	42	16	9	21	212 9.5%
ウ 話をすることがめんどくだ	男	7	23	19	23	38	60	21	18	18	227
	女	2	7	14	5	20	22	31	12	20	133

から	計	9	30	33	28	58	82	52	30	38	360	16.1%
エ 自分の考え	男	9	37	21	30	25	62	13	10	13	220	
や気持ちを伝えられないから	女	11	43	35	32	35	47	34	30	25	292	
	計	20	80	56	62	60	109	47	40	38	512	22.9%
オ その他	男	7	27	19	27	35	64	21	23	21	244	
	女	6	30	42	42	48	61	67	40	35	371	
	計	13	57	61	69	83	125	88	63	56	615	27.5%

3 なやみがあるとき、それをうちあけることのできる相手はいますか。

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア はい	男	116	392	247	243	282	351	122	125	84	1962	
	女	123	355	306	339	308	485	273	194	193	2576	
	計	239	747	553	582	590	836	395	319	277	4538	81.5%
イ いいえ	男	43	89	61	98	121	183	38	29	28	690	
	女	16	33	39	38	46	49	45	9	13	288	
	計	59	122	100	136	167	232	83	38	41	978	17.6%

3.1 下にあげた人のうち、話しやすいのはだれですか。いくつ答えるてもかまいません。きょうだいについては人数も書いてください。そのほかにもいる場合は、その他のところにどういう人か書いてください。

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア 父	男	51	142	78	51	60	62	20	20	13	497	
	女	23	55	26	29	14	24	20	13	7	211	
	計	74	197	104	80	74	86	40	33	20	708	15.6%
イ 母	男	87	242	129	97	91	104	36	31	22	839	
	女	75	215	157	159	109	196	132	77	56	1176	
	計	162	457	286	256	200	300	168	108	78	2015	44.4%
ウ きょうだい	男	33	106	41	47	50	46	18	19	16	376	
	女	31	57	51	74	46	96	67	43	42	507	
	計	64	163	92	121	96	142	85	62	58	883	19.5%
エ 先生	男	20	51	26	22	23	37	10	5	12	206	
	女	11	37	16	20	13	19	14	5	4	139	
	計	31	88	42	42	36	56	24	10	16	345	7.6%
オ 男の友達	男	72	277	189	206	238	302	102	112	66	1564	
	女	2	23	20	35	38	58	53	36	43	308	
	計	74	300	209	241	276	360	155	148	109	1872	41.3%
カ 女の友達	男	6	13	9	23	29	40	26	34	21	201	
	女	93	302	263	310	285	430	253	184	178	2298	
	計	99	315	272	333	314	470	279	218	199	2499	55.1%
キ その他	男	3	29	12	11	19	23	10	10	7	124	
	女	10	21	26	23	23	35	28	18	26	210	
	計	13	50	38	34	42	58	38	28	33	334	7.4%

4 「自分と本当にわかりあえる人はいない」と感じことがありますか。

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア はい	男	17	43	31	54	80	136	38	37	29	465	
	女	14	56	69	85	114	141	148	69	54	750	
	計	31	99	100	139	194	277	186	106	83	1215	21.8%
イ いいえ	男	140	439	278	291	320	396	123	115	80	2182	
	女	124	331	270	294	237	391	163	134	149	2093	
	計	264	770	548	585	557	787	286	249	229	4275	76.8%

4.1 それはどういうときですか。下に書いてください。(省略)

《ここからは、学校の授業中のことについて考えてください。》

5 先生に指名されて、(a)うれしいと思ったとき、(b)うれしくないと思ったときはありましたか。また、ある場合はそれなどのようなときだったか答えてください。いくつ答えるてもかまいません。

(a) うれしいと思ったとき

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア ある	男	122	342	210	248	238	287	67	62	44	1620	
	女	121	297	220	239	206	309	208	110	96	1806	
	計	243	639	430	487	444	596	275	172	140	3426	61.6%
イ ない	男	34	132	97	95	162	243	92	92	68	1015	
	女	17	85	121	132	148	222	109	93	107	1034	
	計	51	217	218	227	310	465	201	185	175	2049	36.8%

調査資料

(a) どのようなとき (複数回答可)

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア 得意教科の時間	男	76	207	113	124	99	119	21	21	16	796
	女	71	168	103	116	79	118	41	26	32	754
	計	147	375	216	240	178	237	62	47	48	1550 45.2%
イ 自分の意見に自信があるとき	男	70	211	137	167	164	193	41	46	26	1055
	女	78	195	158	157	142	189	140	69	63	1191
	計	148	406	295	324	306	382	181	115	89	2246 65.6%
ウ 言いたいのに自分から言えないとき	男	14	24	24	32	42	64	9	11	8	228
	女	15	51	36	71	74	99	68	40	24	478
	計	29	75	60	103	116	163	77	51	32	706 20.6%
エ その他	男	1	9	6	11	9	19	8	3	5	71
	女	2	11	9	8	12	23	23	7	9	104
	計	3	20	15	19	21	42	31	10	14	175 5.1%

(b) うれしくない

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア ある	男	87	311	231	284	322	413	129	131	83	1991
	女	86	310	290	345	329	471	309	199	184	2523
	計	173	621	521	629	651	884	438	330	267	4514 81.1%
イ ない	男	57	153	76	58	76	121	30	23	25	619
	女	45	74	50	30	23	64	9	4	21	320
	計	102	227	126	88	99	185	39	27	46	939 16.9%

(b) どのようなとき (複数回答可)

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア 不得意教科の時間	男	41	116	111	108	128	158	56	64	35	817
	女	46	144	124	186	156	232	132	116	108	1244
	計	87	260	235	294	284	390	188	180	143	2061 45.7%
イ 自信がない	男	60	214	140	199	197	265	74	74	42	1265
	女	63	229	203	253	246	310	213	136	92	1745
	計	123	443	343	452	443	575	287	210	134	3010 66.7%
ウ その他	男	6	33	31	31	56	70	31	27	18	303
	女	6	41	56	47	67	86	82	41	40	466
	計	12	74	87	78	123	156	113	68	58	769 17.0%

6 授業中に発言したくなることはありますか。

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア よくある	男	49	112	62	68	82	81	10	17	10	491
	女	32	68	45	47	41	53	20	6	14	326
	計	81	180	107	115	123	134	30	23	24	817 14.7%
イ たまにある	男	67	251	147	186	171	220	57	46	32	1177
	女	67	215	192	176	152	206	143	61	59	1271
	計	134	466	339	362	323	426	200	107	91	2448 44.0%
ウ ほとんどない	男	33	82	77	71	116	146	64	62	48	699
	女	32	82	79	119	118	190	101	91	85	897
	計	65	164	156	190	234	336	165	153	133	1596 28.7%
エ ない	男	11	40	25	21	36	90	30	30	23	306
	女	8	22	29	38	46	88	54	45	48	378
	計	19	62	54	59	82	178	84	75	71	684 12.3%

6.1 発言したか。

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア はい	男	92	249	154	191	175	186	38	37	26	1148
	女	75	160	140	126	87	152	56	22	47	865
	計	167	409	294	317	262	338	94	59	73	2013 61.7%
イ いいえ	男	36	128	71	74	93	151	38	33	24	648
	女	34	132	105	110	117	133	122	57	39	849
	計	70	260	176	184	210	284	160	90	63	1497 45.8%

6.2 どうして。(複数回答可)

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	1,497
ア 緊張	男	20	42	22	25	33	49	11	10	5	217

する	女	10	58	36	50	47	54	39	18	18	330	
	計	30	100	58	75	80	103	50	28	23	547	36.5%
イ 目立 ちたくな い	男	10	35	23	19	25	41	14	10	5	182	
	女	8	33	39	37	39	42	44	16	17	275	
	計	18	68	62	56	64	83	58	26	22	457	30.5%
ウ 間違 えたくな い	男	19	54	29	29	33	50	6	4	5	229	
	女	19	68	46	61	58	59	39	13	8	371	
	計	38	122	75	90	91	109	45	17	13	600	40.1%
エ 言わ れるのが いや	男	9	41	25	13	31	30	5	3	3	160	
	女	20	57	34	38	37	33	20	9	9	257	
	計	29	98	59	51	68	63	25	12	12	417	27.9%
オ 人と 意見が違 う	男	6	47	22	17	23	20	5	2	4	146	
	女	13	49	37	34	29	28	11	6	8	215	
	計	19	96	59	51	52	48	16	8	12	361	24.1%
カ めん どう	男	9	23	15	25	28	58	13	22	7	200	
	女	2	11	23	31	27	42	48	24	20	228	
	計	11	34	38	56	55	100	61	46	27	428	28.6%
キ その 他	男	3	21	8	9	13	23	7	6	6	96	
	女	4	24	8	13	15	13	13	12	3	105	
	計	7	45	16	22	28	36	20	18	9	201	13.4%

7 できるもの。(複数回答可)

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア 声を 出す	男	124	375	262	281	309	404	111	117	75	2058	
	女	116	319	298	304	287	453	278	177	172	2404	
	計	240	694	560	585	596	857	389	294	247	4462	80.2%
イ 考え を話す	男	64	219	163	190	243	299	74	89	62	1403	
	女	64	153	188	187	180	300	186	118	110	1486	
	計	128	372	351	377	423	599	260	207	172	2889	51.9%
ウ 報告 する	男	73	227	153	187	221	281	72	80	47	1341	
	女	73	204	195	224	197	325	164	121	105	1608	
	計	146	431	348	411	418	606	236	201	152	2949	53.0%
エ 発表 する	男	64	205	149	149	155	212	47	60	42	1083	
	女	63	179	187	148	133	250	129	98	68	1255	
	計	127	384	336	297	288	462	176	158	110	2338	42.0%
オ 話を よく聞く	男	87	288	183	238	274	378	111	117	68	1744	
	女	92	274	265	302	289	440	230	164	170	2226	
	計	179	562	448	540	563	818	341	281	238	3970	71.3%
カ 考え を深める	男	65	195	130	172	209	296	86	95	54	1302	
	女	78	191	195	234	223	365	197	142	142	1767	
	計	143	386	325	406	432	661	283	237	196	3069	55.1%
キ 他人 に伝える	男	78	282	199	207	255	313	94	94	64	1586	
	女	86	276	257	253	253	392	202	138	132	1989	
	計	164	558	456	460	508	705	296	232	196	3575	64.2%
ク 司会 をする	男	58	158	113	105	118	155	27	30	31	795	
	女	68	161	161	128	103	181	94	48	36	980	
	計	126	319	274	233	221	336	121	78	67	1775	31.9%

《ここからは、授業以外で友達と話をするときにどうであるかを考えてください。》

8 相談するときの手段。(複数回答可)

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア 直接 話す	男	119	404	259	297	335	427	129	129	84	2183	
	女	114	325	284	323	293	461	270	185	184	2439	
	計	233	729	543	620	628	888	399	314	268	4622	83.0%
イ 電話 で話す	男	55	170	89	122	137	148	50	54	37	862	
	女	45	131	132	160	167	242	144	81	84	1186	
	計	100	301	221	282	304	390	194	135	121	2048	36.8%
ウ 携帯 電話	男	3	6	5	19	27	44	55	55	29	243	
	女	8	15	14	26	37	69	64	53	76	362	
	計	11	21	19	45	64	113	119	108	105	605	10.9%
エ 手紙 を書く	男	9	15	16	17	18	26	4	4	7	116	
	女	26	136	140	231	207	294	144	117	110	1405	
	計	35	151	156	248	225	320	148	121	117	1521	27.3%
オ Eメ	男	3	14	16	20	44	35	26	20	14	192	

調査資料

一 ルなど 力 その 他	女	8	18	31	34	54	75	83	51	27	381	
	計	11	32	47	54	98	110	109	71	41	573	10.3%
	男	3	15	10	14	13	40	6	7	11	119	
	女	5	25	22	7	5	15	12	1	1	93	

9 親しい友達がよくないことをしていたら。（重複集計）

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア 自分 で言う	男	108	308	189	226	249	339	87	107	76	1689	
	女	105	227	204	221	211	349	218	157	164	1856	
	計	213	535	393	447	460	688	305	264	240	3545	63.7%
イ 言う のを待つ	男	10	59	35	36	26	44	14	7	4	235	
	女	6	29	29	28	16	34	12	2	5	161	
	計	16	88	64	64	42	78	26	9	9	396	7.1%
ウ 先生 に言う	男	22	43	14	11	6	9	2	0	0	107	
	女	13	29	8	4	3	7	0	0	1	65	
	計	35	72	22	15	9	16	2	0	1	172	3.1%
エ 相談 してみる	男	15	53	32	41	36	43	20	15	8	263	
	女	15	85	86	120	96	101	62	41	37	643	
	計	30	138	118	161	132	144	82	56	45	906	16.3%
オ その 他	男	9	33	45	39	84	106	39	30	23	408	
	女	3	27	29	24	43	68	41	13	13	261	
	計	12	60	74	63	127	174	80	43	36	669	12.0%

9.1 どうして。（複数回答可）

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア 仲良 くしたい	男	29	102	55	51	66	75	23	17	12	430	
	女	21	91	77	107	74	94	47	28	26	565	
	計	50	193	132	158	140	169	70	45	38	995	46.4%
イ 相手 の考え方	男	13	42	17	25	17	17	3	7	3	144	
	女	6	39	14	32	27	24	11	12	9	174	
	計	19	81	31	57	44	41	14	19	12	318	14.8%
ウ 言い 返される	男	11	61	24	23	16	23	5	5	3	171	
	女	11	51	30	24	15	22	11	3	5	172	
	計	22	112	54	47	31	45	16	8	8	343	16.0%
エ 自信 がない	男	9	33	29	17	20	21	9	3	5	146	
	女	6	33	30	31	28	32	29	16	12	217	
	計	15	66	59	48	48	53	38	19	17	363	16.9%
オ めん どう	男	10	37	33	26	56	73	31	20	10	296	
	女	1	7	12	17	17	33	22	8	5	122	
	計	11	44	45	43	73	106	53	28	15	418	19.5%
カ 言い づらい	男	19	65	44	41	31	43	11	9	5	268	
	女	14	89	87	88	58	60	43	18	11	468	
	計	33	154	131	129	89	103	54	27	16	736	34.3%
キ その他	男	3	12	13	25	44	55	21	16	16	205	
	女	5	17	25	21	39	54	34	13	19	227	
	計	8	29	38	46	83	109	55	29	35	432	20.2%

10 あなたが正しいことをしていて、「よくない」言われたら。（重複集計）
(a) 親しい友達

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア 説明 する	男	57	207	101	124	151	199	57	53	40	989	
	女	43	150	108	103	111	167	69	53	50	854	
	計	100	357	209	227	262	366	126	106	90	1843	33.1%
イ 聞い てみる	男	63	167	129	160	183	239	79	84	53	1157	
	女	61	158	174	203	180	304	191	130	146	1547	
	計	124	325	303	363	363	543	270	214	199	2704	48.6%
ウ 黙っ ている	男	7	32	22	5	18	19	6	3	7	119	
	女	5	24	18	8	24	12	11	1	8	111	
	計	12	56	40	13	42	31	17	4	15	230	4.1%
エ 合わ せておく	男	8	35	28	24	26	37	7	5	4	174	
	女	12	36	26	26	14	21	12	7	3	157	

	計	20	71	54	50	40	58	19	12	7	331	5.9%
オ ふり かえる	男	15	61	44	44	37	61	14	15	13	304	
	女	22	55	57	62	62	74	49	31	26	438	
	計	37	116	101	106	99	135	63	46	39	742	13.3%
力 気に しない	男	9	24	21	8	16	24	12	6	4	124	
	女	7	8	13	11	9	16	7	2	6	79	
	計	16	32	34	19	25	40	19	8	10	203	3.6%
キ そ の他	男	0	5	4	6	14	23	6	9	7	74	
	女	0	2	2	2	9	6	9	3	5	38	
	計	0	7	6	8	23	29	15	12	12	112	2.0%

(b) 親しくない友達

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア 説明 する	男	45	141	86	94	113	133	42	42	28	724	
	女	48	112	89	72	66	101	34	24	39	585	
	計	93	253	175	166	179	234	76	66	67	1309	23.5%
イ 聞い てみる	男	62	194	122	141	134	198	56	61	40	1008	
	女	58	173	133	175	143	205	122	77	85	1171	
	計	120	367	255	316	277	403	178	138	125	2179	39.1%
ウ 黙つ ている	男	13	41	36	28	32	51	13	9	13	236	
	女	11	31	36	38	47	74	53	37	27	354	
	計	24	72	72	66	79	125	66	46	40	590	10.6%
エ 合わ せておく	男	10	28	24	26	36	45	21	18	11	219	
	女	14	28	38	45	50	72	58	28	29	362	
	計	24	56	62	71	86	117	79	46	40	581	10.4%
オ ふり かえる	男	12	34	17	32	30	46	9	7	9	196	
	女	8	36	30	43	42	53	23	23	14	272	
	計	20	70	47	75	72	99	32	30	23	468	8.4%
カ 気に しない	男	16	64	57	47	65	89	29	22	13	402	
	女	14	40	48	35	42	90	48	36	32	385	
	計	30	104	105	82	107	179	77	58	45	787	14.1%
キ その 他	男	0	13	12	14	26	41	8	17	7	138	
	女	0	3	12	6	12	12	8	5	5	63	
	計	0	16	24	20	38	53	16	22	12	201	3.6%

10.1 どうして。(複数回答可)

(a) 親しい友達

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア 仲良 くしたい	男	17	74	63	49	53	63	20	12	15	366	
	女	26	68	54	62	51	75	42	25	31	434	
	計	43	142	117	111	104	138	62	37	46	800	49.4%
イ 自信 が持てな い	男	18	36	28	21	23	34	8	5	7	180	
	女	7	38	39	42	31	35	27	26	8	253	
	計	25	74	67	63	54	69	35	31	15	433	26.8%
ウ 強い 立場	男	5	12	14	4	9	9	5	0	0	58	
	女	7	16	22	17	8	9	2	3	3	87	
	計	12	28	36	21	17	18	7	3	3	145	9.0%
エ めん どう	男	4	18	13	14	27	42	16	12	9	155	
	女	3	5	11	11	7	19	18	2	7	83	
	計	7	23	24	25	34	61	34	14	16	238	14.7%
オ その 他	男	0	2	10	9	19	30	3	10	4	87	
	女	2	4	10	16	24	22	31	12	12	133	
	計	2	6	20	25	43	52	34	22	16	220	13.6%

(b) 親しくない友達

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア 仲良 くしたい	男	15	26	21	24	18	26	16	8	6	160	
	女	11	35	31	40	28	56	29	18	12	260	
	計	26	61	52	64	46	82	45	26	18	420	16.0%
イ 自信 が持てな い	男	16	52	29	22	29	42	9	8	9	216	
	女	10	40	48	41	46	43	22	27	11	288	
	計	26	92	77	63	75	85	31	35	20	504	19.2%
ウ 強い 立場	男	7	28	17	11	12	10	2	4	0	91	
	女	12	29	24	29	21	23	14	5	2	159	
	計	19	57	41	42	43	53	24	21	12	440	15.6%

調査資料

	計	19	57	41	40	33	33	16	9	2	250	9.5%
エ めん どう	男	7	56	61	58	98	133	46	36	29	524	
	女	10	32	55	45	68	132	103	49	66	560	
	計	17	88	116	103	166	265	149	85	95	1084	41.3%
オ そ の 他	男	4	10	15	18	25	42	4	9	2	129	
	女	2	11	15	17	31	36	31	24	13	180	
	計	6	21	30	35	56	78	35	33	15	309	11.8%

11 自分の話をわかってもらえない。

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
ア はい	男	100	325	217	251	300	383	116	112	81	1885
	女	90	278	255	276	289	434	290	166	165	2243
	計	190	603	472	527	589	817	406	278	246	4128
											74.2%
イ い いえ	男	59	157	94	90	99	141	42	39	28	749
	女	48	109	88	100	63	103	30	35	37	613
	計	107	266	182	190	162	244	72	74	65	1362
											24.5%

11.1 どうして。（複数回答可）

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
ア 聞き たくない	男	40	123	78	76	81	108	28	32	22	588
	女	43	118	94	110	107	162	110	49	53	846
	計	83	241	172	186	188	270	138	81	75	1434
											34.7%
イ まど まつてい ない	男	47	175	117	152	184	198	61	55	40	1029
	女	42	145	134	168	182	245	157	99	106	1278
	計	89	320	251	320	366	443	218	154	146	2307
											55.9%
ウ 難し い	男	18	70	43	72	98	110	30	31	21	493
	女	17	53	58	70	60	93	47	36	24	458
	計	35	123	101	142	158	203	77	67	45	951
											23.0%
エ なれ ていない	男	13	47	35	27	46	63	18	11	16	276
	女	8	40	23	31	29	47	22	18	22	240
	計	21	87	58	58	75	110	40	29	38	516
											12.5%
オ 下手 だ	男	14	36	36	27	48	89	23	23	20	316
	女	14	44	57	51	56	83	71	44	41	461
	計	28	80	93	78	104	172	94	67	61	777
											18.8%
カ その 他	男	7	18	11	14	30	47	10	15	9	161
	女	5	36	20	23	31	52	43	27	21	258
	計	12	54	31	37	61	99	53	42	30	419
											10.2%

11.2 どのように感じるか。（重複集計）

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
ア よい	男	8	33	16	29	49	67	10	16	17	245
	女	2	13	20	17	25	48	27	18	15	185
	計	10	46	36	46	74	115	37	34	32	430
											10.4%
イ とり あ えず	男	24	80	58	56	79	85	32	33	15	462
	女	15	53	61	58	76	95	75	32	41	506
	計	39	133	119	114	155	180	107	65	56	968
											23.4%
ウ でき れ ば	男	45	150	99	116	112	171	55	48	32	828
	女	49	157	131	140	132	215	121	70	78	1093
	計	94	307	230	256	244	386	176	118	110	1921
											46.5%
エ 変え たい	男	18	53	43	45	61	70	20	15	15	340
	女	23	60	45	60	62	76	63	40	33	462
	計	41	113	88	105	123	146	83	55	48	802
											19.4%

12 アドバイスがうまくできるか。

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
ア は い	男	95	287	194	193	261	286	96	96	60	1568
	女	90	250	209	236	207	324	158	93	106	1673
	計	185	537	403	429	468	610	254	189	166	3241
											58.2%
イ い いえ	男	61	192	116	144	135	235	61	55	45	1044
	女	48	137	135	135	143	209	158	106	90	1161
	計	109	329	251	279	278	444	219	161	135	2205
											39.6%

12.1 どうして。（複数回答可）

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア 得意 でない	男	27	53	37	40	25	34	10	6	7	239	
	女	4	24	20	8	15	14	7	6	9	107	
	計	31	77	57	48	40	48	17	12	16	346	15.7%
イ まと めら れない	男	34	101	64	76	59	112	27	30	21	524	
	女	33	82	85	92	77	124	78	60	51	682	
	計	67	183	149	168	136	236	105	90	72	1206	54.7%
ウ 言い 方に 迷う	男	18	77	33	45	57	84	24	20	17	375	
	女	13	71	61	70	81	102	79	56	40	573	
	計	31	148	94	115	138	186	103	76	57	948	43.0%
エ めん どう	男	5	22	13	20	20	31	7	1	3	122	
	女	6	5	5	7	5	11	5	1	3	48	
	計	11	27	18	27	25	42	12	2	6	170	7.7%
オ その 他	男	1	9	3	8	23	36	6	14	9	109	
	女	7	11	12	9	27	19	32	17	15	149	
	計	8	20	15	17	50	55	38	31	24	258	11.7%

12. 2 どのように感じるか。(重複集計)

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア よい	男	15	21	9	18	18	40	7	7	8	143	
	女	5	8	10	6	5	14	18	10	7	83	
	計	20	29	19	24	23	54	25	17	15	226	10.2%
イ 仕方 が ない	男	19	61	46	44	43	54	20	10	10	307	
	女	10	25	35	26	30	34	25	13	13	211	
	計	29	86	81	70	73	88	45	23	23	518	23.5%
ウ でき れ ば	男	29	85	45	62	52	100	29	27	16	445	
	女	27	84	72	61	66	104	75	51	43	583	
	計	56	169	117	123	118	204	104	78	59	1028	46.6%
エ 変え たい	男	6	27	18	29	28	53	7	12	13	193	
	女	12	26	22	49	52	61	44	37	28	331	
	計	18	53	40	78	80	114	51	49	41	524	23.8%

13 どのように話したり、聞いたりしたい。

		小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	
ア 自分 が話す	男	38	87	37	34	24	40	19	5	6	290	
	女	17	34	33	13	9	21	8	5	7	147	
	計	55	121	70	47	33	61	27	10	13	437	7.9%
イ 自分 が聞く	男	29	57	33	39	29	47	11	18	6	269	
	女	21	28	25	22	14	33	15	7	10	175	
	計	50	85	58	61	43	80	26	25	16	444	8.0%
ウ 話し 合う	男	58	216	165	188	230	261	95	85	59	1357	
	女	78	259	218	276	252	389	214	160	146	1992	
	計	136	475	383	464	482	650	309	245	205	3349	60.2%
エ 話し たくない	男	2	6	3	8	11	21	4	0	1	56	
	女	1	4	13	2	7	2	1	0	2	32	
	計	3	10	16	10	18	23	5	0	3	88	1.6%
オ なん でもよ い	男	3	40	28	25	36	51	10	22	11	226	
	女	4	17	16	17	30	27	34	11	7	163	
	計	7	57	44	42	66	78	44	33	18	389	7.0%
カ 考え てない	男	14	44	30	22	33	51	10	8	15	227	
	女	9	21	19	12	11	18	16	5	6	117	
	計	23	65	49	34	44	69	26	13	21	344	6.2%
キ その他	男	1	6	4	5	9	17	4	4	6	56	
	女	3	9	3	8	6	13	17	3	6	68	
	計	4	15	7	13	15	30	21	7	12	124	2.2%

3 学年・男女別集計表(%)

話すこと・聞くことに関するアンケート

学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
男	160	485	313	348	407	539	162	156	113	2683
女	139	389	345	383	357	538	322	203	207	2883
計	299	874	658	731	764	1077	484	359	320	5566

(重複集計)は複数回答者が多いので、複数回答を含めた数

1 きょうだいがいるか。

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
ア はい	男	88.1%	89.3%	88.2%	89.9%	85.5%	90.0%	92.6%	92.9%	92.0%	89.3%
	女	90.6%	86.9%	87.0%	88.5%	85.2%	91.8%	88.8%	94.1%	92.8%	89.1%
	計	89.3%	88.2%	87.5%	89.2%	85.3%	90.9%	90.1%	93.6%	92.5%	89.2%
イ いいえ	男	11.9%	10.7%	11.8%	8.0%	14.3%	9.8%	4.9%	6.4%	8.0%	10.2%
	女	9.4%	13.1%	13.0%	10.7%	14.6%	7.8%	10.6%	5.9%	6.8%	10.5%
	計	10.7%	11.8%	12.5%	9.4%	14.4%	8.8%	8.7%	6.1%	7.2%	10.4%

2 同じクラスの人たちと話すことについて。

(a) 好き嫌い

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
ア 好き	男	51.3%	52.8%	50.8%	58.3%	55.0%	50.8%	44.4%	40.4%	37.2%	51.2%
	女	64.0%	65.6%	65.8%	72.3%	67.8%	70.1%	59.9%	68.5%	61.8%	66.8%
	計	57.2%	58.5%	58.7%	65.7%	61.0%	60.4%	54.8%	56.3%	53.1%	59.3%
イ まあまあ好き	男	39.4%	34.2%	37.1%	31.3%	31.9%	33.6%	36.4%	42.3%	38.9%	34.8%
	女	28.8%	23.9%	22.0%	17.8%	20.7%	20.3%	30.1%	21.2%	24.2%	22.5%
	計	34.4%	29.6%	29.2%	24.2%	26.7%	26.9%	32.2%	30.4%	29.4%	28.5%
ウ あまり好きでない	男	3.1%	3.3%	2.9%	4.3%	4.4%	5.0%	4.9%	4.5%	7.1%	4.2%
	女	2.2%	3.3%	3.8%	5.5%	5.9%	3.0%	3.1%	2.5%	4.8%	3.9%
	計	2.7%	3.3%	3.3%	4.9%	5.1%	4.0%	3.7%	3.3%	5.6%	4.0%
工 嫌い	男	0.6%	1.4%	1.0%	1.7%	1.7%	2.0%	1.9%	3.8%	3.5%	1.8%
	女	0.7%	0.5%	0.3%	0.5%	0.8%	0.9%	0.9%	1.0%	1.9%	0.8%
	計	0.7%	1.0%	0.6%	1.1%	1.3%	1.5%	1.2%	2.2%	2.5%	1.3%
才 言えない	男	4.4%	7.6%	8.6%	4.0%	5.2%	8.2%	11.1%	8.3%	12.4%	7.3%
	女	4.3%	6.4%	7.8%	3.4%	5.3%	5.8%	5.0%	6.4%	6.3%	5.7%
	計	4.3%	7.1%	8.2%	3.7%	5.2%	7.0%	7.0%	7.2%	8.4%	6.4%

(b) 得意不得意

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
ア 得意	男	25.0%	22.5%	21.1%	18.7%	17.9%	17.6%	14.2%	12.8%	10.6%	18.7%
	女	25.9%	22.1%	23.5%	18.0%	18.8%	18.4%	16.1%	11.3%	18.8%	19.1%
	計	25.4%	22.3%	22.3%	18.3%	18.3%	18.0%	15.5%	12.0%	15.9%	19.0%
イ まあまあ得意	男	52.5%	53.6%	51.1%	52.6%	52.8%	42.7%	46.3%	39.1%	39.8%	48.9%
	女	51.8%	54.8%	49.6%	53.8%	50.4%	50.4%	43.8%	48.8%	37.7%	49.6%
	計	52.2%	54.1%	50.3%	53.2%	51.7%	46.5%	44.6%	44.6%	38.4%	49.3%
ウ あまり得意でない	男	13.1%	11.5%	13.7%	13.2%	13.8%	18.7%	15.4%	26.9%	23.0%	15.5%
	女	11.5%	9.5%	15.7%	11.0%	15.7%	13.0%	22.0%	19.2%	18.4%	14.7%
	計	12.4%	10.6%	14.7%	12.0%	14.7%	15.9%	19.8%	22.6%	20.0%	15.1%
工 不得意	男	1.3%	3.1%	3.5%	5.5%	2.9%	5.4%	4.9%	5.1%	9.7%	4.3%
	女	2.2%	2.3%	1.4%	3.7%	3.1%	3.2%	3.4%	5.9%	4.3%	3.2%
	計	1.7%	2.7%	2.4%	4.5%	3.0%	4.3%	3.9%	5.6%	6.3%	3.7%
才 どちらも言えない	男	5.6%	7.2%	8.6%	5.2%	8.8%	10.9%	15.4%	10.9%	14.2%	9.0%
	女	7.2%	10.3%	8.7%	9.1%	9.8%	11.0%	10.9%	11.8%	13.0%	10.2%
	計	6.4%	8.6%	8.7%	7.3%	9.3%	11.0%	12.4%	11.4%	13.4%	9.6%

2.1 どうしてできないのか。(複数回答可)

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
ア わかってもらえない	男	8.1%	8.5%	7.7%	5.2%	4.9%	7.6%	6.2%	3.2%	10.6%	6.9%
	女	5.8%	6.7%	5.5%	7.3%	5.0%	6.7%	4.0%	2.5%	6.8%	5.8%
	計	7.0%	7.7%	6.5%	6.3%	5.0%	7.1%	4.8%	2.8%	8.1%	6.3%
イ よくわからなない	男	4.4%	5.2%	4.5%	2.3%	3.2%	5.4%	4.3%	3.8%	7.1%	4.4%
	女	4.3%	4.9%	3.2%	3.4%	2.2%	2.4%	2.8%	1.5%	6.3%	3.3%
	計	4.3%	5.0%	3.8%	2.9%	2.7%	3.9%	3.3%	2.5%	6.6%	3.8%
ウ めんどう	男	4.4%	4.7%	6.1%	6.6%	9.3%	11.1%	13.0%	11.5%	15.9%	8.5%
	女	1.4%	1.8%	4.1%	1.3%	5.6%	4.1%	9.6%	5.9%	9.7%	4.6%
	計	2.8%	3.2%	5.1%	4.4%	7.4%	8.1%	12.3%	10.0%	15.7%	8.5%

	計	3.0%	3.4%	5.0%	3.8%	7.6%	7.6%	10.7%	8.4%	11.9%	6.5%
工 伝え られない	男	5.6%	7.6%	6.7%	8.6%	6.1%	11.5%	8.0%	6.4%	11.5%	8.2%
	女	7.9%	11.1%	10.1%	8.4%	9.8%	8.7%	10.6%	14.8%	12.1%	10.1%
	計	6.7%	9.2%	8.5%	8.5%	7.9%	10.1%	9.7%	11.1%	11.9%	9.2%
オ その 他	男	4.4%	5.6%	6.1%	7.8%	8.6%	11.9%	13.0%	14.7%	18.6%	9.1%
	女	4.3%	7.7%	12.2%	11.0%	13.4%	11.3%	20.8%	19.7%	16.9%	12.9%
	計	4.3%	6.5%	9.3%	9.4%	10.9%	11.6%	18.2%	17.5%	17.5%	11.0%

3 なやみをうちあけることのできる相手がいるか。

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
ア はい	男	72.5%	80.8%	78.9%	69.8%	69.3%	65.1%	75.3%	80.1%	74.3%	73.1%
	女	88.5%	91.3%	88.7%	88.5%	86.3%	90.1%	84.8%	95.6%	93.2%	89.4%
	計	79.9%	85.5%	84.0%	79.6%	77.2%	77.6%	81.6%	88.9%	86.6%	81.5%
イ い え	男	26.9%	18.4%	19.5%	28.2%	29.7%	34.0%	23.5%	18.6%	24.8%	25.7%
	女	11.5%	8.5%	11.3%	9.9%	12.9%	9.1%	14.0%	4.4%	6.3%	10.0%
	計	19.7%	14.0%	15.2%	18.6%	21.9%	21.5%	17.1%	10.6%	12.8%	17.6%

3.1 だれか。(複数回答可) [3 ア 回答者]

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	分母
ア 父	男	44.0%	36.2%	31.6%	21.0%	21.3%	17.7%	16.4%	16.0%	15.5%	25.3%	1962
	女	18.7%	15.5%	8.5%	8.6%	4.5%	4.9%	7.3%	6.7%	3.6%	8.2%	2576
	計	31.0%	26.4%	18.8%	13.7%	12.5%	10.3%	10.1%	10.3%	7.2%	15.6%	4538
イ 母	男	75.0%	61.7%	52.2%	39.9%	32.3%	29.6%	29.5%	24.8%	26.2%	42.8%	1962
	女	61.0%	60.6%	51.3%	46.9%	35.4%	40.4%	48.4%	39.7%	29.0%	45.7%	2576
	計	67.8%	61.2%	51.7%	44.0%	33.9%	35.9%	42.5%	33.9%	28.2%	44.4%	4538
ウ きよ うだい	男	28.4%	27.0%	16.6%	19.3%	17.7%	13.1%	14.8%	15.2%	19.0%	19.2%	1962
	女	25.2%	16.1%	16.7%	21.8%	14.9%	19.8%	24.5%	22.2%	21.8%	19.7%	2576
	計	26.8%	21.8%	16.6%	20.8%	16.3%	17.0%	21.5%	19.4%	20.9%	19.5%	4538
エ 先生	男	17.2%	13.0%	10.5%	9.1%	8.2%	10.5%	8.2%	4.0%	14.3%	10.5%	1962
	女	8.9%	10.4%	5.2%	5.9%	4.2%	3.9%	5.1%	2.6%	2.1%	5.4%	2576
	計	13.0%	11.8%	7.6%	7.2%	6.1%	6.7%	6.1%	3.1%	5.8%	7.6%	4538
オ 男の 友達	男	62.1%	70.7%	76.5%	84.8%	84.4%	86.0%	83.6%	89.6%	78.6%	79.7%	1962
	女	1.6%	6.5%	6.5%	10.3%	12.3%	12.0%	19.4%	18.6%	22.3%	12.0%	2576
	計	31.0%	40.2%	37.8%	41.4%	46.8%	43.1%	39.2%	46.4%	39.4%	41.3%	4538
カ 女の 友達	男	5.2%	3.3%	3.6%	9.5%	10.3%	11.4%	21.3%	27.2%	25.0%	10.2%	1962
	女	75.6%	85.1%	85.9%	91.4%	92.5%	88.7%	92.7%	94.8%	92.2%	89.2%	2576
	計	41.4%	42.2%	49.2%	57.2%	53.2%	56.2%	70.6%	68.3%	71.8%	55.1%	4538
キ その 他	男	2.6%	7.4%	4.9%	4.5%	6.7%	6.6%	8.2%	8.0%	8.3%	6.3%	1962
	女	8.1%	5.9%	8.5%	6.8%	7.5%	7.2%	10.3%	9.3%	13.5%	8.2%	2576
	計	5.4%	6.7%	6.9%	5.8%	7.1%	6.9%	9.6%	8.8%	11.9%	7.4%	4538

4 「自分と本当にわかりあえる人はいない」と感じことがあるか。

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
ア はい	男	10.6%	8.9%	9.9%	15.5%	19.7%	25.2%	23.5%	23.7%	25.7%	17.3%
	女	10.1%	14.4%	20.0%	22.2%	31.9%	26.2%	46.0%	34.0%	26.1%	26.0%
	計	10.4%	11.3%	15.2%	19.0%	25.4%	25.7%	38.4%	29.5%	25.9%	21.8%
イ いい え	男	87.5%	90.5%	88.8%	83.6%	78.6%	73.5%	75.9%	73.7%	70.8%	81.3%
	女	89.2%	85.1%	78.3%	76.8%	66.4%	72.7%	50.6%	66.0%	72.0%	72.6%
	計	88.3%	88.1%	83.3%	80.0%	72.9%	73.1%	59.1%	69.4%	71.6%	76.8%

4.1 それはどういうときですか。(省略)

《ここからは、学校の授業中のことについて考えてください。》

5 先生に指名されたとき。

(a) うれしい

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
ア ある	男	76.3%	70.5%	67.1%	71.3%	58.5%	53.2%	41.4%	39.7%	38.9%	60.4%
	女	87.1%	76.3%	63.8%	62.4%	57.7%	57.4%	64.6%	54.2%	46.4%	62.6%
	計	81.3%	73.1%	65.3%	66.6%	58.1%	55.3%	56.8%	47.9%	43.8%	61.6%
イ ない	男	21.3%	27.2%	31.0%	27.3%	39.8%	45.1%	56.8%	59.0%	60.2%	37.8%
	女	12.2%	21.9%	35.1%	34.5%	41.5%	41.3%	33.9%	45.8%	51.7%	35.9%
	計	17.1%	24.8%	33.1%	31.1%	40.6%	43.2%	41.5%	51.5%	54.7%	36.8%

(a) どのようなとき(複数回答可) [5 (a) ア 回答者]

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	分母
ア 得意	男	62.3%	60.5%	53.8%	50.0%	41.6%	41.5%	31.3%	33.9%	36.4%	49.1%	1620

調査資料

教科	女	58.7%	56.6%	46.8%	48.5%	38.3%	38.2%	19.7%	23.6%	33.3%	41.7%	1806
	計	60.5%	58.7%	50.2%	49.3%	40.1%	39.8%	22.5%	27.3%	34.3%	45.2%	3426
イ 自信 がある	男	57.4%	61.7%	65.2%	67.3%	68.9%	67.2%	61.2%	74.2%	59.1%	65.1%	1620
	女	64.5%	65.7%	71.8%	65.7%	68.9%	61.2%	67.3%	62.7%	65.6%	65.9%	1806
	計	60.9%	63.5%	68.6%	66.5%	68.9%	64.1%	65.8%	66.9%	63.6%	65.6%	3426
ウ 自分 から言え ない	男	11.5%	7.0%	11.4%	12.9%	17.6%	22.3%	13.4%	17.7%	18.2%	14.1%	1620
	女	12.4%	17.2%	16.4%	29.7%	35.9%	32.0%	32.7%	36.4%	25.0%	26.5%	1806
	計	11.9%	11.7%	14.0%	21.1%	26.1%	27.3%	28.0%	29.7%	22.9%	20.6%	3426
エ その 他	男	0.8%	2.6%	2.9%	4.4%	3.8%	6.6%	11.9%	4.8%	11.4%	4.4%	1620
	女	1.7%	3.7%	4.1%	3.3%	5.8%	7.4%	11.1%	6.4%	9.4%	5.8%	1806
	計	1.2%	3.1%	3.5%	3.9%	4.7%	7.0%	11.3%	5.8%	10.0%	5.1%	3426

(b) うれしくない

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
ア ある	男	54.4%	64.1%	73.8%	81.6%	79.1%	76.6%	79.6%	84.0%	73.5%	74.2%
	女	61.9%	79.7%	84.1%	90.1%	92.2%	87.5%	96.0%	98.0%	88.9%	87.5%
	計	57.9%	71.1%	79.2%	86.0%	85.2%	82.1%	90.5%	91.9%	83.4%	81.1%
イ ない	男	35.6%	31.5%	24.3%	16.7%	18.7%	22.4%	18.5%	14.7%	22.1%	23.1%
	女	32.4%	19.0%	14.5%	7.8%	6.4%	11.9%	2.8%	2.0%	10.1%	11.1%
	計	34.1%	26.0%	19.1%	12.0%	13.0%	17.2%	8.1%	7.5%	14.4%	16.9%

(b) どのようなとき (複数回答可) [5 (b) ア 回答者]

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	分母
ア 不得 意教科	男	47.1%	37.3%	48.1%	38.0%	39.8%	38.3%	43.4%	48.9%	42.2%	41.0%	1991
	女	53.5%	46.5%	42.8%	53.9%	47.4%	49.3%	42.7%	58.3%	58.7%	49.3%	2523
	計	50.3%	41.9%	45.1%	46.7%	43.6%	44.1%	42.9%	54.5%	53.6%	45.7%	4514
イ 自信 がない	男	69.0%	68.8%	60.6%	70.1%	61.2%	64.2%	57.4%	56.5%	50.6%	63.5%	1991
	女	73.3%	73.9%	70.0%	73.3%	74.8%	65.8%	68.9%	68.3%	50.0%	69.2%	2523
	計	71.1%	71.3%	65.8%	71.9%	68.0%	65.0%	65.5%	63.6%	50.2%	66.7%	4514
ウ その 他	男	6.9%	10.6%	13.4%	10.9%	17.4%	16.9%	24.0%	20.6%	21.7%	15.2%	1991
	女	7.0%	13.2%	19.3%	13.6%	20.4%	18.3%	26.5%	20.6%	21.7%	18.5%	2523
	計	6.9%	11.9%	16.7%	12.4%	18.9%	17.6%	25.8%	20.6%	21.7%	17.0%	4514

6 発言したくなること。

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
ア よく ある	男	30.6%	23.1%	19.8%	19.5%	20.1%	15.0%	6.2%	10.9%	8.8%	18.3%
	女	23.0%	17.5%	13.0%	12.3%	11.5%	9.9%	6.2%	3.0%	6.8%	11.3%
	計	27.1%	20.6%	16.3%	15.7%	16.1%	12.4%	6.2%	6.4%	7.5%	14.7%
イ たま にある	男	41.9%	51.8%	47.0%	53.4%	42.0%	40.8%	35.2%	29.5%	28.3%	43.9%
	女	48.2%	55.3%	55.7%	46.0%	42.6%	38.3%	44.4%	30.0%	28.5%	44.1%
	計	44.8%	53.3%	51.5%	49.5%	42.3%	39.6%	41.3%	29.8%	28.4%	44.0%
ウ ほと んどない	男	20.6%	16.9%	24.6%	20.4%	28.5%	27.1%	39.5%	39.7%	42.5%	26.1%
	女	23.0%	21.1%	22.9%	31.1%	33.1%	35.3%	31.4%	44.8%	41.1%	31.1%
	計	21.7%	18.8%	23.7%	26.0%	30.6%	31.2%	34.1%	42.6%	41.6%	28.7%
エ ない	男	6.9%	8.2%	8.0%	6.0%	8.8%	16.7%	18.5%	19.2%	20.4%	11.4%
	女	5.8%	5.7%	8.4%	9.9%	12.9%	16.4%	16.8%	22.2%	23.2%	13.1%
	計	6.4%	7.1%	8.2%	8.1%	10.7%	16.5%	17.4%	20.9%	22.2%	12.3%

6.1 発言したか。 [6 ア + イ 回答者]

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	分母
ア はい	男	79.3%	68.6%	73.7%	75.2%	69.2%	61.8%	56.7%	58.7%	61.9%	68.8%	1668
	女	75.8%	56.5%	59.1%	56.5%	45.1%	58.7%	34.4%	32.8%	64.4%	54.2%	1597
	計	77.7%	63.3%	65.9%	66.5%	58.7%	60.4%	40.9%	45.4%	63.5%	61.7%	3265
イ いい え	男	31.0%	35.3%	34.0%	29.1%	36.8%	50.2%	56.7%	52.4%	57.1%	38.8%	1668
	女	34.3%	46.6%	44.3%	49.3%	60.6%	51.4%	74.8%	85.1%	53.4%	53.2%	1597
	計	32.6%	40.2%	39.5%	38.6%	47.1%	50.7%	69.6%	69.2%	54.8%	45.8%	3265

6.2 どうして。 (複数回答可) [6 . 1 イ 回答者]

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	分母
ア 繁張 する	男	55.6%	32.8%	31.0%	33.8%	35.5%	32.5%	28.9%	30.3%	20.8%	33.5%	648
	女	29.4%	43.9%	34.3%	45.5%	40.2%	40.6%	32.0%	31.6%	46.2%	38.9%	849
	計	42.9%	38.5%	33.0%	40.8%	38.1%	36.3%	31.3%	31.1%	36.5%	36.5%	1497
イ 目立 ちたくな い	男	27.8%	27.3%	32.4%	25.7%	26.9%	27.2%	36.8%	30.3%	20.8%	28.1%	648
	女	23.5%	25.0%	37.1%	33.6%	33.3%	31.6%	36.1%	28.1%	43.6%	32.4%	849
	計	25.7%	26.2%	35.2%	30.4%	30.5%	29.2%	36.3%	28.9%	34.9%	30.5%	1497
ウ 間違 えたくな い	男	52.8%	42.2%	40.8%	39.2%	35.5%	33.1%	15.8%	12.1%	20.8%	35.3%	648
	女	55.9%	51.5%	43.8%	55.5%	49.6%	44.4%	32.0%	22.8%	20.5%	43.7%	849
	計											

いい	計	54.3%	46.9%	42.6%	48.9%	43.3%	38.4%	28.1%	18.9%	20.6%	40.1%	1497
工 言わ れるのが いや	男	25.0%	32.0%	35.2%	17.6%	33.3%	19.9%	13.2%	9.1%	12.5%	24.7%	648
	女	58.8%	43.2%	32.4%	34.5%	31.6%	24.8%	16.4%	15.8%	23.1%	30.3%	849
	計	41.4%	37.7%	33.5%	27.7%	32.4%	22.2%	15.6%	13.3%	19.0%	27.9%	1497
才 人と 意見が違 う	男	16.7%	36.7%	31.0%	23.0%	24.7%	13.2%	13.2%	6.1%	16.7%	22.5%	648
	女	38.2%	37.1%	35.2%	30.9%	24.8%	21.1%	9.0%	10.5%	20.5%	25.3%	849
	計	27.1%	36.9%	33.5%	27.7%	24.8%	16.9%	10.0%	8.9%	19.0%	24.1%	1497
力 めん どう	男	25.0%	18.0%	21.1%	33.8%	30.1%	38.4%	34.2%	66.7%	29.2%	30.9%	648
	女	5.9%	8.3%	21.9%	28.2%	23.1%	31.6%	39.3%	42.1%	51.3%	26.9%	849
	計	15.7%	13.1%	21.6%	30.4%	26.2%	35.2%	38.1%	51.1%	42.9%	28.6%	1497
キ その 他	男	8.3%	16.4%	11.3%	12.2%	14.0%	15.2%	18.4%	18.2%	25.0%	14.8%	648
	女	11.8%	18.2%	7.6%	11.8%	12.8%	9.8%	10.7%	21.1%	7.7%	12.4%	849
	計	10.0%	17.3%	9.1%	12.0%	13.3%	12.7%	12.5%	20.0%	14.3%	13.4%	1497

7 できるもの。(複数回答可)

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
ア 声を 出す	男	77.5%	77.3%	83.7%	80.7%	75.9%	75.0%	68.5%	75.0%	66.4%	76.7%
	女	83.5%	82.0%	86.4%	79.4%	80.4%	84.2%	86.3%	87.2%	83.1%	83.4%
	計	80.3%	79.4%	85.1%	80.0%	78.0%	79.6%	80.4%	81.9%	77.2%	80.2%
イ 考え を話す	男	40.0%	45.2%	52.1%	54.6%	59.7%	55.5%	45.7%	57.1%	54.9%	52.3%
	女	46.0%	39.3%	54.5%	48.8%	50.4%	55.8%	57.8%	58.1%	53.1%	51.5%
	計	42.8%	42.6%	53.3%	51.6%	55.4%	55.6%	53.7%	57.7%	53.8%	51.9%
ウ 報告 する	男	45.6%	46.8%	48.9%	53.7%	54.3%	52.1%	44.4%	51.3%	41.6%	50.0%
	女	52.5%	52.4%	56.5%	58.5%	55.2%	60.4%	50.9%	59.6%	50.7%	55.8%
	計	48.8%	49.3%	52.9%	56.2%	54.7%	56.3%	48.8%	56.0%	47.5%	53.0%
エ 発表 する	男	40.0%	42.3%	47.6%	42.8%	38.1%	39.3%	29.0%	38.5%	37.2%	40.4%
	女	45.3%	46.0%	54.2%	38.6%	37.3%	46.5%	40.1%	48.3%	32.9%	43.5%
	計	42.5%	43.9%	51.1%	40.6%	37.7%	42.9%	36.4%	44.0%	34.4%	42.0%
オ 話を よく聞く	男	54.4%	59.4%	58.5%	68.4%	67.3%	70.1%	68.5%	75.0%	60.2%	65.0%
	女	66.2%	70.4%	76.8%	78.9%	81.0%	81.8%	71.4%	80.8%	82.1%	77.2%
	計	59.9%	64.3%	68.1%	73.9%	73.7%	76.0%	70.5%	78.3%	74.4%	71.3%
カ 考え を深める	男	40.6%	40.2%	41.5%	49.4%	51.4%	54.9%	53.1%	60.9%	47.8%	48.5%
	女	56.1%	49.1%	56.5%	61.1%	62.5%	67.8%	61.2%	70.0%	68.6%	61.3%
	計	47.8%	44.2%	49.4%	55.5%	56.5%	61.4%	58.5%	66.0%	61.3%	55.1%
キ 他人 に伝える	男	48.8%	58.1%	63.6%	59.5%	62.7%	58.1%	58.0%	60.3%	56.6%	59.1%
	女	61.9%	71.0%	74.5%	66.1%	70.9%	72.9%	62.7%	68.0%	63.8%	69.0%
	計	54.8%	63.8%	69.3%	62.9%	66.5%	65.5%	61.2%	64.6%	61.3%	64.2%
ク 司会 をする	男	36.3%	32.6%	36.1%	30.2%	29.0%	28.8%	16.7%	19.2%	27.4%	29.6%
	女	48.9%	41.4%	46.7%	33.4%	28.9%	33.6%	29.2%	23.6%	17.4%	34.0%
	計	42.1%	36.5%	41.6%	31.9%	28.9%	31.2%	25.0%	21.7%	20.9%	31.9%

《ここからは、授業以外で友達と話をするときにどうであるかを考えてください。》

8 相談するときの手段。(複数回答可)

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
ア 直接 話す	男	74.4%	83.3%	82.7%	85.3%	82.3%	79.2%	79.6%	82.7%	74.3%	81.4%
	女	82.0%	83.5%	82.3%	84.3%	82.1%	85.7%	83.9%	91.1%	88.9%	84.6%
	計	77.9%	83.4%	82.5%	84.8%	82.2%	82.5%	82.4%	87.5%	83.8%	83.0%
イ 電話 で話す	男	34.4%	35.1%	28.4%	35.1%	33.7%	27.5%	30.9%	34.6%	32.7%	32.1%
	女	32.4%	33.7%	38.3%	41.8%	46.8%	45.0%	44.7%	39.9%	40.6%	41.1%
	計	33.4%	34.4%	33.6%	38.6%	39.8%	36.2%	40.1%	37.6%	37.8%	36.8%
ウ 携帯 電話	男	1.9%	1.2%	1.6%	5.5%	6.6%	8.2%	34.0%	35.3%	25.7%	9.1%
	女	5.8%	3.9%	4.1%	6.8%	10.4%	12.8%	19.9%	26.1%	36.7%	12.6%
	計	3.7%	2.4%	2.9%	6.2%	8.4%	10.5%	24.6%	30.1%	32.8%	10.9%
エ 手紙 を書く	男	5.6%	3.1%	5.1%	4.9%	4.4%	4.8%	2.5%	2.6%	6.2%	4.3%
	女	18.7%	35.0%	40.6%	60.3%	58.0%	54.6%	44.7%	57.6%	53.1%	48.7%
	計	11.7%	17.3%	23.7%	33.9%	29.5%	29.7%	30.6%	33.7%	36.6%	27.3%
オ メ ールなど	男	1.9%	2.9%	5.1%	5.7%	10.8%	6.5%	16.0%	12.8%	12.4%	7.2%
	女	5.8%	4.6%	9.0%	8.9%	15.1%	13.9%	25.8%	25.1%	13.0%	13.2%
	計	3.7%	3.7%	7.1%	7.4%	12.8%	10.2%	22.5%	19.8%	12.8%	10.3%
カ その 他	男	1.9%	3.1%	3.2%	4.0%	3.2%	7.4%	3.7%	4.5%	9.7%	4.4%
	女	3.6%	6.4%	6.4%	1.8%	1.4%	2.8%	3.7%	0.5%	0.5%	3.2%
	計	2.7%	4.6%	4.9%	2.9%	2.4%	5.1%	3.7%	2.2%	3.8%	3.8%

9 親しい友達がよくないことをしていたら。

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
ア 自分	男	67.5%	63.5%	60.4%	64.9%	61.2%	62.9%	53.7%	68.6%	67.3%	63.0%

調査資料

で言う	女	75.5%	58.4%	59.1%	57.7%	59.1%	64.9%	67.7%	77.3%	79.2%	64.4%
	計	71.2%	61.2%	59.7%	61.1%	60.2%	63.9%	63.0%	73.5%	75.0%	63.7%
イ 言う のを待つ	男	6.3%	12.2%	11.2%	10.3%	6.4%	8.2%	8.6%	4.5%	3.5%	8.8%
	女	4.3%	7.5%	8.4%	7.3%	4.5%	6.3%	3.7%	1.0%	2.4%	5.6%
	計	5.4%	10.1%	9.7%	8.8%	5.5%	7.2%	5.4%	2.5%	2.8%	7.1%
ウ 先生 に言う	男	13.8%	8.9%	4.5%	3.2%	1.5%	1.7%	1.2%	0.0%	0.0%	4.0%
	女	9.4%	7.5%	2.3%	1.0%	0.8%	1.3%	0.0%	0.0%	0.5%	2.3%
	計	11.7%	8.2%	3.3%	2.1%	1.2%	1.5%	0.4%	0.0%	0.3%	3.1%
エ 相談 してみる	男	9.4%	10.9%	10.2%	11.8%	8.8%	8.0%	12.3%	9.6%	7.1%	9.8%
	女	10.8%	21.9%	24.9%	31.3%	26.9%	18.8%	19.3%	20.2%	17.9%	22.3%
	計	10.0%	15.8%	17.9%	22.0%	17.3%	13.4%	16.9%	15.6%	14.1%	16.3%
オ その 他	男	5.6%	6.8%	14.4%	11.2%	20.6%	19.7%	24.1%	19.2%	20.4%	15.2%
	女	2.2%	6.9%	8.4%	6.3%	12.0%	12.6%	12.7%	6.4%	6.3%	9.1%
	計	4.0%	6.9%	11.2%	8.6%	16.6%	16.2%	16.5%	12.0%	11.3%	12.0%

9.1 どうして。(複数回答可) [9 イ + ウ + エ + オ 回答者]

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	分母
ア 仲良 くしたい	男	51.8%	54.3%	43.7%	40.2%	43.4%	37.1%	30.7%	32.7%	34.3%	42.4%	1013
	女	56.8%	53.5%	50.7%	60.8%	46.8%	44.8%	40.9%	50.0%	46.4%	50.0%	1130
	計	53.8%	53.9%	47.5%	52.1%	45.2%	41.0%	36.8%	41.7%	41.8%	46.4%	2143
イ 相手 の考え	男	23.2%	22.3%	13.5%	19.7%	11.2%	8.4%	4.0%	13.5%	8.6%	14.2%	1013
	女	16.2%	22.9%	9.2%	18.2%	17.1%	11.4%	9.6%	21.4%	16.1%	15.4%	1130
	計	20.4%	22.6%	11.2%	18.8%	14.2%	10.0%	7.4%	17.6%	13.2%	14.8%	2143
ウ 言い 返される	男	19.6%	32.4%	19.0%	18.1%	10.5%	11.4%	6.7%	9.6%	8.6%	16.9%	1013
	女	29.7%	30.0%	19.7%	13.6%	9.5%	10.5%	9.6%	5.4%	8.9%	15.2%	1130
	計	23.7%	31.3%	19.4%	15.5%	10.0%	10.9%	8.4%	7.4%	8.8%	16.0%	2143
エ 自信 がない	男	16.1%	17.6%	23.0%	13.4%	13.2%	10.4%	12.0%	5.8%	14.3%	14.4%	1013
	女	16.2%	19.4%	19.7%	17.6%	17.7%	15.2%	25.2%	28.6%	21.4%	19.2%	1130
	計	16.1%	18.4%	21.2%	15.8%	15.5%	12.9%	20.0%	17.6%	18.7%	16.9%	2143
オ めん どう	男	17.9%	19.7%	26.2%	20.5%	36.8%	36.1%	41.3%	38.5%	28.6%	29.2%	1013
	女	2.7%	4.1%	7.9%	9.7%	10.8%	15.7%	19.1%	14.3%	8.9%	10.8%	1130
	計	11.8%	12.3%	16.2%	14.2%	23.5%	25.7%	27.9%	25.9%	16.5%	19.5%	2143
カ 言い づらい	男	33.9%	34.6%	34.9%	32.3%	20.4%	21.3%	14.7%	17.3%	14.3%	26.5%	1013
	女	37.8%	52.4%	57.2%	50.0%	36.7%	28.6%	37.4%	32.1%	19.6%	41.4%	1130
	計	35.5%	43.0%	47.1%	42.6%	28.7%	25.0%	28.4%	25.0%	17.6%	34.3%	2143
キ その 他	男	5.4%	6.4%	10.3%	19.7%	28.9%	27.2%	28.0%	30.8%	45.7%	20.2%	1013
	女	13.5%	10.0%	16.4%	11.9%	24.7%	25.7%	29.6%	23.2%	33.9%	20.1%	1130
	計	8.6%	8.1%	13.7%	15.2%	26.8%	26.5%	28.9%	26.9%	38.5%	20.2%	2143

10 あなたが正しいことをしていて、「よくない」言われたら。

(a) 親しい友達

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
ア 説明 する	男	35.6%	42.7%	32.3%	35.6%	37.1%	36.9%	35.2%	34.0%	35.4%	36.9%
	女	30.9%	38.6%	31.3%	26.9%	31.1%	31.0%	21.4%	26.1%	24.2%	29.6%
	計	33.4%	40.8%	31.8%	31.1%	34.3%	34.0%	26.0%	29.5%	28.1%	33.1%
イ 聞い てみる	男	39.4%	34.4%	41.2%	46.0%	45.0%	44.3%	48.8%	53.8%	46.9%	43.1%
	女	43.9%	40.6%	50.4%	53.0%	50.4%	56.5%	59.3%	64.0%	70.5%	53.7%
	計	41.5%	37.2%	46.0%	49.7%	47.5%	50.4%	55.8%	59.6%	62.2%	48.6%
ウ 黙っ ている	男	4.4%	6.6%	7.0%	1.4%	4.4%	3.5%	3.7%	1.9%	6.2%	4.4%
	女	3.6%	6.2%	5.2%	2.1%	6.7%	2.2%	3.4%	0.5%	3.9%	3.9%
	計	4.0%	6.4%	6.1%	1.8%	5.5%	2.9%	3.5%	1.1%	4.7%	4.1%
エ 合わ せておく	男	5.0%	7.2%	8.9%	6.9%	6.4%	6.9%	4.3%	3.2%	3.5%	6.5%
	女	8.6%	9.3%	7.5%	6.8%	3.9%	3.9%	3.7%	3.4%	1.4%	5.4%
	計	6.7%	8.1%	8.2%	6.8%	5.2%	5.4%	3.9%	3.3%	2.2%	5.9%
オ ふり かえる	男	9.4%	12.6%	14.1%	12.6%	9.1%	11.3%	8.6%	9.6%	11.5%	11.3%
	女	15.8%	14.1%	16.5%	16.2%	17.4%	13.8%	15.2%	15.3%	12.6%	15.2%
	計	12.4%	13.3%	15.3%	14.5%	13.0%	12.5%	13.0%	12.8%	12.2%	13.3%
カ 気に しない	男	5.6%	4.9%	6.7%	2.3%	3.9%	4.5%	7.4%	3.8%	3.5%	4.6%
	女	5.0%	2.1%	3.8%	2.9%	2.5%	3.0%	2.2%	1.0%	2.9%	2.7%
	計	5.4%	3.7%	5.2%	2.6%	3.3%	3.7%	3.9%	2.2%	3.1%	3.6%
キ その 他	男	0.0%	1.0%	1.3%	1.7%	3.4%	4.3%	3.7%	5.8%	6.2%	2.8%
	女	0.0%	0.5%	0.6%	0.5%	2.5%	1.1%	2.8%	1.5%	2.4%	1.3%
	計	0.0%	0.8%	0.9%	1.1%	3.0%	2.7%	3.1%	3.3%	3.8%	2.0%

(b) 親しくない友達

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
ア 説明	男	28.1%	29.1%	27.5%	27.0%	27.8%	24.7%	25.9%	26.9%	24.8%	27.0%

する	女	34.5%	28.8%	25.8%	18.8%	18.5%	18.8%	10.6%	11.8%	18.8%	20.3%
	計	31.1%	28.9%	26.6%	22.7%	23.4%	21.7%	15.7%	18.4%	20.9%	23.5%
イ 聞いてみる	男	38.8%	40.0%	39.0%	40.5%	32.9%	36.7%	34.6%	39.1%	35.4%	37.6%
	女	41.7%	44.5%	38.6%	45.7%	40.1%	38.1%	37.9%	37.9%	41.1%	40.6%
	計	40.1%	42.0%	38.8%	43.2%	36.3%	37.4%	36.8%	38.4%	39.1%	39.1%
ウ 黙つてている	男	8.1%	8.5%	11.5%	8.0%	7.9%	9.5%	8.0%	5.8%	11.5%	8.8%
	女	7.9%	8.0%	10.4%	9.9%	13.2%	13.8%	16.5%	18.2%	13.0%	12.3%
	計	8.0%	8.2%	10.9%	9.0%	10.3%	11.6%	13.6%	12.8%	12.5%	10.6%
エ 合わせておく	男	6.3%	5.8%	7.7%	7.5%	8.8%	8.3%	13.0%	11.5%	9.7%	8.2%
	女	10.1%	7.2%	11.0%	11.7%	14.0%	13.4%	18.0%	13.8%	14.0%	12.6%
	計	8.0%	6.4%	9.4%	9.7%	11.3%	10.9%	16.3%	12.8%	12.5%	10.4%
オ ふりかえる	男	7.5%	7.0%	5.4%	9.2%	7.4%	8.5%	5.6%	4.5%	8.0%	7.3%
	女	5.8%	9.3%	8.7%	11.2%	11.8%	9.9%	7.1%	11.3%	6.8%	9.4%
	計	6.7%	8.0%	7.1%	10.3%	9.4%	9.2%	6.6%	8.4%	7.2%	8.4%
カ 気にしない	男	10.0%	13.2%	18.2%	13.5%	16.0%	16.5%	17.9%	14.1%	11.5%	15.0%
	女	10.1%	10.3%	13.9%	9.1%	11.8%	16.7%	14.9%	17.7%	15.5%	13.4%
	計	10.0%	11.9%	16.0%	11.2%	14.0%	16.6%	15.9%	16.2%	14.1%	14.1%
キ その他	男	0.0%	2.7%	3.8%	4.0%	6.4%	7.6%	4.9%	10.9%	6.2%	5.1%
	女	0.0%	0.8%	3.5%	1.6%	3.4%	2.2%	2.5%	2.5%	2.4%	2.2%
	計	0.0%	1.8%	3.6%	2.7%	5.0%	4.9%	3.3%	6.1%	3.8%	3.6%

10.1 どうして。(複数回答可)

(a) 親しい友達 [10 (a) ウ + エ + オ + カ + キ 回答者]

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	分母
ア 仲良くしたい	男	43.6%	47.1%	52.9%	56.3%	47.7%	38.4%	44.4%	31.6%	42.9%	46.0%	795
	女	56.5%	54.4%	46.6%	56.9%	43.2%	58.1%	47.7%	56.8%	64.6%	52.7%	823
	計	50.6%	50.4%	49.8%	56.6%	45.4%	47.1%	46.6%	45.1%	55.4%	49.4%	1618
イ 自信が持てない	男	46.2%	22.9%	23.5%	24.1%	20.7%	20.7%	17.8%	13.2%	20.0%	22.6%	795
	女	15.2%	30.4%	33.6%	38.5%	26.3%	27.1%	30.7%	59.1%	16.7%	30.7%	823
	計	29.4%	26.2%	28.5%	32.1%	23.6%	23.5%	26.3%	37.8%	18.1%	26.8%	1618
ウ 強い立場	男	12.8%	7.6%	11.8%	4.6%	8.1%	5.5%	11.1%	0.0%	0.0%	7.3%	795
	女	15.2%	12.8%	19.0%	15.6%	6.8%	7.0%	2.3%	6.8%	6.3%	10.6%	823
	計	14.1%	9.9%	15.3%	10.7%	7.4%	6.1%	5.3%	3.7%	3.6%	9.0%	1618
エ めんどう	男	10.3%	11.5%	10.9%	16.1%	24.3%	25.6%	35.6%	31.6%	25.7%	19.5%	795
	女	6.5%	4.0%	9.5%	10.1%	5.9%	14.7%	20.5%	4.5%	14.6%	10.1%	823
	計	8.2%	8.2%	10.2%	12.8%	14.8%	20.8%	25.6%	17.1%	19.3%	14.7%	1618
オ その他	男	0.0%	1.3%	8.4%	10.3%	17.1%	18.3%	6.7%	26.3%	11.4%	10.9%	795
	女	4.3%	3.2%	8.6%	14.7%	20.3%	17.1%	35.2%	27.3%	25.0%	16.2%	823
	計	2.4%	2.1%	8.5%	12.8%	18.8%	17.7%	25.6%	26.8%	19.3%	13.6%	1618

(b) 親しくない友達 [10 (b) ウ + エ + オ + カ + キ 回答者]

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	分母
ア 仲良くしたい	男	29.4%	14.4%	14.4%	16.3%	9.5%	9.6%	20.0%	11.0%	11.3%	13.4%	1191
	女	23.4%	25.4%	18.9%	24.0%	14.5%	18.6%	15.3%	14.0%	11.2%	18.1%	1436
	計	26.5%	19.2%	16.8%	20.4%	12.0%	14.3%	16.7%	12.9%	11.3%	16.0%	2627
イ 自信が持てない	男	31.4%	28.9%	19.9%	15.0%	15.3%	15.4%	11.3%	11.0%	17.0%	18.1%	1191
	女	21.3%	29.0%	29.3%	24.6%	23.8%	14.3%	11.6%	20.9%	10.3%	20.1%	1436
	計	26.5%	28.9%	24.8%	20.1%	19.6%	14.8%	11.5%	17.3%	12.5%	19.2%	2627
ウ 強い立場	男	13.7%	15.6%	11.6%	7.5%	6.3%	3.7%	2.5%	5.5%	0.0%	7.6%	1191
	女	25.5%	21.0%	14.6%	17.4%	10.9%	7.6%	7.4%	3.9%	1.9%	11.1%	1436
	計	19.4%	17.9%	13.2%	12.7%	8.6%	5.8%	5.9%	4.5%	1.3%	9.5%	2627
エ めんどう	男	13.7%	31.1%	41.8%	39.5%	51.9%	48.9%	57.5%	49.3%	54.7%	44.0%	1191
	女	21.3%	23.2%	33.5%	26.9%	35.2%	43.9%	54.2%	38.0%	61.7%	39.0%	1436
	計	17.3%	27.7%	37.4%	32.8%	43.5%	46.2%	55.2%	42.1%	59.4%	41.3%	2627
オ その他	男	7.8%	5.6%	10.3%	12.2%	13.2%	15.4%	5.0%	12.3%	3.8%	10.8%	1191
	女	4.3%	8.0%	9.1%	10.2%	16.1%	12.0%	16.3%	18.6%	12.1%	12.5%	1436
	計	6.1%	6.6%	9.7%	11.1%	14.7%	13.6%	13.0%	16.3%	9.4%	11.8%	2627

11 自分の話をわかってもらえない。

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
ア はい	男	62.5%	67.0%	69.3%	72.1%	73.7%	71.1%	71.6%	71.8%	71.7%	70.3%
	女	64.7%	71.5%	73.9%	72.1%	81.0%	80.7%	90.1%	81.8%	79.7%	77.8%
	計	63.5%	69.0%	71.7%	72.1%	77.1%	75.9%	83.9%	77.4%	76.9%	74.2%
イ いいえ	男	36.9%	32.4%	30.0%	25.9%	24.3%	26.2%	25.9%	25.0%	24.8%	27.9%
	女	34.5%	28.0%	25.5%	26.1%	17.6%	19.1%	9.3%	17.2%	17.9%	21.3%
	計	35.8%	30.4%	27.7%	26.0%	21.2%	22.7%	14.9%	20.6%	20.3%	24.5%

調査資料

11. 1 どうして。(複数回答可) [11 ア 回答者]

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	分母
ア 聞き たくない	男	40.0%	37.8%	35.9%	30.3%	27.0%	28.2%	24.1%	28.6%	27.2%	31.2%	1885
	女	47.8%	42.4%	36.9%	39.9%	37.0%	37.3%	37.9%	29.5%	32.1%	37.7%	2243
	計	43.7%	40.0%	36.4%	35.3%	31.9%	33.0%	34.0%	29.1%	30.5%	34.7%	4128
イ まと まってい ない	男	47.0%	53.8%	53.9%	60.6%	61.3%	51.7%	52.6%	49.1%	49.4%	54.6%	1885
	女	46.7%	52.2%	52.5%	60.9%	63.0%	56.5%	54.1%	59.6%	64.2%	57.0%	2243
	計	46.8%	53.1%	53.2%	60.7%	62.1%	54.2%	53.7%	55.4%	59.3%	55.9%	4128
ウ 難し い	男	18.0%	21.5%	19.8%	28.7%	32.7%	28.7%	25.9%	27.7%	25.9%	26.2%	1885
	女	18.9%	19.1%	22.7%	25.4%	20.8%	21.4%	16.2%	21.7%	14.5%	20.4%	2243
	計	18.4%	20.4%	21.4%	26.9%	26.8%	24.8%	19.0%	24.1%	18.3%	23.0%	4128
エ なれ ていない	男	13.0%	14.5%	16.1%	10.8%	15.3%	16.4%	15.5%	9.8%	19.8%	14.6%	1885
	女	8.9%	14.4%	9.0%	11.2%	10.0%	10.8%	7.6%	10.8%	13.3%	10.7%	2243
	計	11.1%	14.4%	12.3%	11.0%	12.7%	13.5%	9.9%	10.4%	15.4%	12.5%	4128
オ 下手 だ	男	14.0%	11.1%	16.6%	10.8%	16.0%	23.2%	19.8%	20.5%	24.7%	16.8%	1885
	女	15.6%	15.8%	22.4%	18.5%	19.4%	19.1%	24.5%	26.5%	24.8%	20.6%	2243
	計	14.7%	13.3%	19.7%	14.8%	17.7%	21.1%	23.2%	24.1%	24.8%	18.8%	4128
カ その 他	男	7.0%	5.5%	5.1%	5.6%	10.0%	12.3%	8.6%	13.4%	11.1%	8.5%	1885
	女	5.6%	12.9%	7.8%	8.3%	10.7%	12.0%	14.8%	16.3%	12.7%	11.5%	2243
	計	6.3%	9.0%	6.6%	7.0%	10.4%	12.1%	13.1%	15.1%	12.2%	10.2%	4128

11. 2 どのように感じるか。[11 ア 回答者]

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	分母
ア よい	男	8.0%	10.2%	7.4%	11.6%	16.3%	17.5%	8.6%	14.3%	21.0%	13.0%	1885
	女	2.2%	4.7%	7.8%	6.2%	8.7%	11.1%	9.3%	10.8%	9.1%	8.2%	2243
	計	5.3%	7.6%	7.6%	8.7%	12.6%	14.1%	9.1%	12.2%	13.0%	10.4%	4128
イ とり あえず	男	24.0%	24.6%	26.7%	22.3%	26.3%	22.2%	27.6%	29.5%	18.5%	24.5%	1885
	女	16.7%	19.1%	23.9%	21.0%	26.3%	21.9%	25.9%	19.3%	24.8%	22.6%	2243
	計	20.5%	22.1%	25.2%	21.6%	26.3%	22.0%	26.4%	23.4%	22.8%	23.4%	4128
ウ でき れば	男	45.0%	46.2%	45.6%	46.2%	37.3%	44.6%	47.4%	42.9%	39.5%	43.9%	1885
	女	54.4%	56.5%	51.4%	50.7%	45.7%	49.5%	41.7%	42.2%	47.3%	48.7%	2243
	計	49.5%	50.9%	48.7%	48.6%	41.4%	47.2%	43.3%	42.4%	44.7%	46.5%	4128
エ 変え たい	男	18.0%	16.3%	19.8%	17.9%	20.3%	18.3%	17.2%	13.4%	18.5%	18.0%	1885
	女	25.6%	21.6%	17.6%	21.7%	21.5%	17.5%	21.7%	24.1%	20.0%	20.6%	2243
	計	21.6%	18.7%	18.6%	19.9%	20.9%	17.9%	20.4%	19.8%	19.5%	19.4%	4128

12 アドバイスがうまくできるか。

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	分母
ア はい	男	59.4%	59.2%	62.0%	55.5%	64.1%	53.1%	59.3%	61.5%	53.1%	58.4%	1885
	女	64.7%	64.3%	60.6%	61.6%	58.0%	60.2%	49.1%	45.8%	51.2%	58.0%	2243
	計	61.9%	61.4%	61.2%	58.7%	61.3%	56.6%	52.5%	52.6%	51.9%	58.2%	4128
イ いい え	男	38.1%	39.6%	37.1%	41.4%	33.2%	43.6%	37.7%	35.3%	39.8%	38.9%	1885
	女	34.5%	35.2%	39.1%	35.2%	40.1%	38.8%	49.1%	52.2%	43.5%	40.3%	2243
	計	36.5%	37.6%	38.1%	38.2%	36.4%	41.2%	45.2%	44.8%	42.2%	39.6%	4128

12. 1 どうして。(複数回答可) [12 イ 回答者]

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	分母
ア 得意 でない	男	44.3%	27.6%	31.9%	27.8%	18.5%	14.5%	16.4%	10.9%	15.6%	22.9%	1044
	女	8.3%	17.5%	14.8%	5.9%	10.5%	6.7%	4.4%	5.7%	10.0%	9.2%	1161
	計	28.4%	23.4%	22.7%	17.2%	14.4%	10.8%	7.8%	7.5%	11.9%	15.7%	2205
イ まと められな い	男	55.7%	52.6%	55.2%	52.8%	43.7%	47.7%	44.3%	54.5%	46.7%	50.2%	1044
	女	68.8%	59.9%	63.0%	68.1%	53.8%	59.3%	49.4%	56.6%	56.7%	58.7%	1161
	計	61.5%	55.6%	59.4%	60.2%	48.9%	53.2%	47.9%	55.9%	53.3%	54.7%	2205
ウ 言い 方に迷う	男	29.5%	40.1%	28.4%	31.3%	42.2%	35.7%	39.3%	36.4%	37.8%	35.9%	1044
	女	27.1%	51.8%	45.2%	51.9%	56.6%	48.8%	50.0%	52.8%	44.4%	49.4%	1161
	計	28.4%	45.0%	37.5%	41.2%	49.6%	41.9%	47.0%	47.2%	42.2%	43.0%	2205
エ めん どう	男	8.2%	11.5%	11.2%	13.9%	14.8%	13.2%	11.5%	1.8%	6.7%	11.7%	1044
	女	12.5%	3.6%	3.7%	5.2%	3.5%	5.3%	3.2%	0.9%	3.3%	4.1%	1161
	計	10.1%	8.2%	7.2%	9.7%	9.0%	9.5%	5.5%	1.2%	4.4%	7.7%	2205
オ その 他	男	1.6%	4.7%	2.6%	5.6%	17.0%	15.3%	9.8%	25.5%	20.0%	10.4%	1044
	女	14.6%	8.0%	8.9%	6.7%	18.9%	9.1%	20.3%	16.0%	16.7%	12.8%	1161
	計	7.3%	6.1%	6.0%	6.1%	18.0%	12.4%	17.4%	19.3%	17.8%	11.7%	2205

12. 2 どのように感じるか。[12 イ 回答者]

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計	分母
ア よい	男	24.6%	10.9%	7.8%	12.5%	13.3%	17.0%	11.5%	12.7%	17.8%	13.7%	1044
	女	10.4%	5.8%	7.4%	4.4%	3.5%	6.7%	11.4%	9.4%	7.8%	7.1%	1161

	計	18.3%	8.8%	7.6%	8.6%	8.3%	12.2%	11.4%	10.6%	11.1%	10.2%	2205
イ 仕方 がない	男	31.1%	31.8%	39.7%	30.6%	31.9%	23.0%	32.8%	18.2%	22.2%	29.4%	1044
	女	20.8%	18.2%	25.9%	19.3%	21.0%	16.3%	15.8%	12.3%	14.4%	18.2%	1161
	計	26.6%	26.1%	32.3%	25.1%	26.3%	19.8%	20.5%	14.3%	17.0%	23.5%	2205
ウ でき れば	男	47.5%	44.3%	38.8%	43.1%	38.5%	42.6%	47.5%	49.1%	35.6%	42.6%	1044
	女	56.3%	61.3%	53.3%	45.2%	46.2%	49.8%	47.5%	48.1%	47.8%	50.2%	1161
	計	51.4%	51.4%	46.6%	44.1%	42.4%	45.9%	47.5%	48.4%	43.7%	46.6%	2205
エ 変え たい	男	9.8%	14.1%	15.5%	20.1%	20.7%	22.6%	11.5%	21.8%	28.9%	18.5%	1044
	女	25.0%	19.0%	16.3%	36.3%	36.4%	29.2%	27.8%	34.9%	31.1%	28.5%	1161
	計	16.5%	16.1%	15.9%	28.0%	28.8%	25.7%	23.3%	30.4%	30.4%	23.8%	2205

13 どのように話したり、聞いたりしたい。

	学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
ア 自分 が話す	男	23.8%	17.9%	11.8%	9.8%	5.9%	7.4%	11.7%	3.2%	5.3%	10.8%
	女	12.2%	8.7%	9.6%	3.4%	2.5%	3.9%	2.5%	2.5%	3.4%	5.1%
	計	18.4%	13.8%	10.6%	6.4%	4.3%	5.7%	5.6%	2.8%	4.1%	7.9%
イ 自分 が聞く	男	18.1%	11.8%	10.5%	11.2%	7.1%	8.7%	6.8%	11.5%	5.3%	10.0%
	女	15.1%	7.2%	7.2%	5.7%	3.9%	6.1%	4.7%	3.4%	4.8%	6.1%
	計	16.7%	9.7%	8.8%	8.3%	5.6%	7.4%	5.4%	7.0%	5.0%	8.0%
ウ 話し 合う	男	36.3%	44.5%	52.7%	54.0%	56.5%	48.4%	58.6%	54.5%	52.2%	50.6%
	女	56.1%	66.6%	63.2%	72.1%	70.6%	72.3%	66.5%	78.8%	70.5%	69.1%
	計	45.5%	54.3%	58.2%	63.5%	63.1%	60.4%	63.8%	68.2%	64.1%	60.2%
エ 話し たくない	男	1.3%	1.2%	1.0%	2.3%	2.7%	3.9%	2.5%	0.0%	0.9%	2.1%
	女	0.7%	1.0%	3.8%	0.5%	2.0%	0.4%	0.3%	0.0%	1.0%	1.1%
	計	1.0%	1.1%	2.4%	1.4%	2.4%	2.1%	1.0%	0.0%	0.9%	1.6%
オ なん でもよい	男	1.9%	8.2%	8.9%	7.2%	8.8%	9.5%	6.2%	14.1%	9.7%	8.4%
	女	2.9%	4.4%	4.6%	4.4%	8.4%	5.0%	10.6%	5.4%	3.4%	5.7%
	計	2.3%	6.5%	6.7%	5.7%	8.6%	7.2%	9.1%	9.2%	5.6%	7.0%
カ 考え てない	男	8.8%	9.1%	9.6%	6.3%	8.1%	9.5%	6.2%	5.1%	13.3%	8.5%
	女	6.5%	5.4%	5.5%	3.1%	3.1%	3.3%	5.0%	2.5%	2.9%	4.1%
	計	7.7%	7.4%	7.4%	4.7%	5.8%	6.4%	5.4%	3.6%	6.6%	6.2%
キ その 他	男	0.6%	1.2%	1.3%	1.4%	2.2%	3.2%	2.5%	2.6%	5.3%	2.1%
	女	2.2%	2.3%	0.9%	2.1%	1.7%	2.4%	5.3%	1.5%	2.9%	2.4%
	計	1.3%	1.7%	1.1%	1.8%	2.0%	2.8%	4.3%	1.9%	3.8%	2.2%

平成11年度～平成12年度 科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書

課題番号 11680281

小学生・中学生・高校生のコミュニケーション能力の実態とその育成のための授業開発

発行日 平成13年3月26日

平成13年5月25日 修正第1版

発行者 田近 淳一（早稲田大学教育学部教授）

所在地 〒169-8050

東京都新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学教育学部

田近 淳一 研究室内

03-5286-1562直通

03-3203-4141代表

印 刷 早稲田大学生活協同組合